

コマンド ライン リファレンス ガイド

Arcserve® Backup

18.0

法律上の注意

組み込みのヘルプシステムおよび電子的に配布される資料も含めたこのドキュメント(以下「本書」)はお客様への情報提供のみを目的としたもので、Arcserveにより随時、変更または撤回されることがあります。

Arcserveの事前の書面による承諾を受けずに本書の全部または一部を複製、譲渡、変更、開示、修正、複製することはできません。本書はArcserveが知的財産権を有する機密情報であり、ユーザは(i)本書に関連するArcserveソフトウェアの使用について、Arcserveとユーザとの間で別途締結される契約により許可された以外の目的、または(ii)ユーザとArcserveとの間で別途締結された守秘義務により許可された以外の目的で本書を開示したり、本書を使用することはできません。

上記にかかわらず、本書で取り上げているソフトウェア製品(複数の場合あり)のライセンスを受けたユーザは、そのソフトウェアに関して社内で使用する場合に限り本書の合理的な範囲内の部数のコピーを作成できます。ただしArcserveのすべての著作権表示およびその説明を各コピーに添付することを条件とします。

本書を印刷するかまたはコピーを作成する上記の権利は、当該ソフトウェアのライセンスが完全に有効となっている期間内に限定されます。いかなる理由であれ、そのライセンスが終了した場合には、ユーザはArcserveに本書の全部または一部を複製したコピーをArcserveに返却したか、または破棄したことを文書で証明する責任を負います。

準拠法により認められる限り、Arcserveは本書を現状有姿のまま提供し、商品性、お客様の使用目的に対する適合性、他者の権利に対する不侵害についての黙示の保証を含むいかなる保証もしません。また、本システムの使用に起因して、逸失利益、投資損失、業務の中断、営業権の喪失、情報の損失等、いかなる損害(直接損害か間接損害かを問いません)が発生しても、Arcserveはお客様または第三者に対し責任を負いません。Arcserveがかかる損害の発生の可能性について事前に明示に通告されていた場合も同様とします。

本書に記載されたソフトウェア製品は、該当するライセンス契約書に従い使用されるものであり、当該ライセンス契約書はこの通知の条件によっていかなる変更も行われません。

本書の制作者はArcserveです。

「制限された権利」のもとでの提供: アメリカ合衆国政府が使用、複製、開示する場合は、FAR Sections 12.212, 52.227-14 及び 52.227-19(c)(1) 及び (2)、及び、DFARS Section 252.227-7014(b)(3) または、これらの後継の条項に規定される該当する制限に従うものとします。

© 2018 Arcserve(その関連会社および子会社を含む)。All rights reserved. サードパーティの商標または著作権は各所有者の財産です。

Arcserve 製品リファレンス

このマニュアルが参照している Arcserve 製品は以下のとおりです。

- Arcserve® Backup
- Arcserve® Unified Data Protection
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Windows
- Arcserve® Unified Data Protection Agent for Linux
- Arcserve® Replication および High Availability

Arcserve Backup マニュアル

Arcserve Backupドキュメントには、すべてのメジャー リリースおよびサービス パックについての特 定のガイドとリリースノートが含まれています。ドキュメントにアクセスするには、以 下 のリンクをクリックします。

- [Arcserve Backup r18 リリース ノート](#)
- [Arcserve Backup r18 マニュアル選 択 メニュー](#)

Arcserve サポート への問い合わせ

Arcserve サポート チームは、技術的な問題の解決に役立つ豊富なリソースを提供します。重要な製品情報に簡単にアクセスできます。

[テクニカル サポート への問い合わせ](#)

Arcserve のサポート：

- Arcserve サポートの専門家が社内で共有しているのと同じ情報ライブラリに直接アクセスできます。このサイトから、弊社のナレッジ ベース(KB)ドキュメントにアクセスできます。ここから、重要な問題やよくあるトラブルについて、製品関連 KB 技術情報を簡単に検索し、検証済みのソリューションを見つけることができます。
- 弊社のライブ チャット リンクを使用して、Arcserve サポート チームとすぐにリアルタイムで会話を始めることができます。ライブ チャットでは、製品にアクセスしたまま、懸念事項や質問に対する回答を即座に得ることができます。
- Arcserve グローバル ユーザ コミュニティに参加して、質疑応答、ヒントの共有、ベスト プラクティスに関する議論、他のユーザとの会話を行うことができます。
- サポート チケットを開くことができます。オンラインでサポート チケットを開くと、質問の対象製品を専門とする担当者から直接、コールバックを受けられます。
- また、使用している Arcserve 製品に適したその他の有用なリソースにアクセスできます。

コンテンツ

第1章: 概要	13
コマンド ライン オプションおよび引数	14
コマンド ライン構文の文字	15
ジョブスケジューラウィザード - コマンド ページ	17
第2章: authsetup - 認証セットアップコマンド	21
authsetup - 構文	22
authsetup - 使用法	23
authsetup - 例	24
第3章: bab - Arcserve Backup サービスコマンド	25
bab - 構文	26
bab - 使用法	27
bab - 例	30
第4章: ca_auth - 認証コマンド	31
ca_auth - 構文	33
ca_auth - 使用法	34
ca_auth - その他のオプション	35
ca_auth - ユーザ引数	36
ca_auth - 役割引数	39
ca_auth - 同等引数	41
ca_auth - 例	43
第5章: ca_backup - バックアップ マネージャコマンド	45
ca_backup - 構文	46
ca_backup - 使用法	47
ca_backup - その他のオプション	48
グローバルジョブ オプション	50
ca_backup バックアップ メディア オプション	51
ca_backup 検証オプション	55
ca_backup ファイルの再試行/共有オプション	56
ca_backup 操作オプション	58
ca_backup のジョブ実行前/後の処理オプション	62
ca_backup ログオプション	64
ca_backup メディアのエクスポート オプション	65
ca_backup 詳細オプション	66

ca_backup の VSS オプション	72
ca_backup - グローバルフィルタ オプション	74
ca_backup - ソース引数	77
ca_backup - ノード オプション	80
ca_backup - ボリューム設定オプション	82
ca_backup - データベース オプション	84
ca_backup - Oracle データベース オプション	86
ca_backup - Oracle RMAN データベース オプション	88
ca_backup - Exchange DOC レベル データベース オプション	94
Exchange DB レベル データベース オプション	97
ca_backup - SQL Server データベース オプション	98
ca_backup - Sybase エージェント データベース オプション	102
ca_backup - Informix エージェント データベース オプション	104
ca_backup - VSS エージェント データベース オプション	105
ca_backup - Lotus エージェント データベース オプション	108
ca_backup - デスティネーション引数	109
ca_backup - スケジュール引数	111
ca_backup - ジョブ実行引数	120
ca_backup のステージングオプション	121
ca_backup - ディスクステージングオプション	122
ca_backup - テープステージングオプション	130
ca_backup - リターンコード	136
ca_backup - 例	137
第6章: ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド	141
ca_dbmgr - 構文	142
ca_dbmgr - 使用法	143
ca_dbmgr - その他のオプション	144
ca_dbmgr - 表示オプション	145
ca_dbmgr - メディアプール管理オプション	147
ca_dbmgr - データベース管理オプション	149
ca_dbmgr - メンテナンス オプション	150
ca_dbmgr - マイグレーション ステータス オプション	152
ca_dbmgr - 例	153
第7章: ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド	155
ca_devmgr - 構文	156

ca_devmgr - 使用法	157
ca_devmgr - その他 のコマンド	158
ca_devmgr - 一 般的なコマンド	159
テープドライブ コマンド	161
ca_devmgr - テープ ライブラリ コマンド	164
ca_devmgr - FSD のコマンド	169
ca_devmgr - クラウド のコマンド	180
ca_devmgr - 例	184
第 8 章 : ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド	187
ca_jobsecmgr - 構 文	188
ca_jobsecmgr - 使用法	189
ca_jobsecmgr - サーバ 引 数	190
ca_jobsecmgr - 現 在 のセキュリティ オプション	191
ca_jobsecmgr - 新しいセキュリティ オプション	192
ca_jobsecmgr - 例	193
第 9 章 : ca_log - ログ コマンド	195
ca_log - 構 文	196
ca_log - 使用法	197
ca_log - その他 オプション	198
ca_log - ログ名 操 作 オプション	199
ca_log - 表 示 オプション	200
ca_log - パー ジ オプション	203
ca_log - 例	204
第 10 章 : ca_merge - マージ マネージャ コマンド	205
ca_merge - 構 文	206
ca_merge - 使用法	207
ca_merge - その他 のオプション	208
ca_merge - ソース 引 数	210
ca_merge - ジョブ 実行 引 数	212
ca_merge - マージ オプション	214
ca_merge - リターン コード	219
ca_merge - 例	220
第 11 章 : ca_mmo - メディア管理 マネージャ コマンド	223
ca_mmo - 構 文	224
ca_mmo - オプション	225

ca_mmo - 例	228
第 12章: ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド	229
ca_qmgr - 構文	230
ca_qmgr - 使用法	231
ca_qmgr - その他のオプション	232
ca_qmgr - ジョブ キュー コマンド	234
ca_qmgr - ジョブ 固有 のコマンド	236
ca_qmgr - ジョブ スクリプト コマンド	240
ca_qmgr - 例	242
第 13章: ca_recoverdb - データベース回復コマンド	243
ca_recoverdb - 構文	245
ca_recoverdb - オプション	246
ca_recoverdb - 例	248
第 14章: ca_restore - リストア マネージャ コマンド	249
ca_restore - 構文	250
ca_restore - 使用法	251
ca_restore - その他のオプション	252
ca_restore - グローバルジョブ オプション	254
ca_restore リストア メディア オプション	255
ca_restore のデスティネーション オプション	256
ca_restore 操作 オプション	258
ca_restore のジョブ実行前/後の処理オプション	260
ca_restore ログ オプション	262
ca_restore - グローバルフィルタ オプション	263
ca_restore - ソース引数	266
ca_restore - デスティネーション引数	268
ca_restore - データベース オプション	270
ca_restore - Oracle データベース オプション	276
ca_restore - Oracle RMAN データベース オプション	278
ca_restore - Exchange Exchange DOC レベル データベース オプション	284
ca_restore - Exchange DB レベル データベース オプション	286
ca_restore - SQL SQL Server データベース オプション	288
ca_restore - Sybase エージェント データベース オプション	293
ca_restore - Informix エージェント データベース オプション	294
ca_restore - VSS エージェント データベース オプション	295

ca_restore - Lotus エージェント データベース オプション	296
ca_restore - ジョブ実行 引数	297
ca_restore - 情報 引数	299
ca_restore - リターンコード	301
ca_restore - 例	302
第 15章: ca_scan - スキャン マネージャ コマンド	303
ca_scan - 構文	304
ca_scan - 使用法	305
ca_scan - その他のオプション	306
ca_scan - ソース 引数	308
ca_scan - ジョブ実行 引数	310
ca_scan - スキャン オプション	312
ca_scan - パスワード 復号化 リスト オプション	313
ca_scan - ログ オプション	314
ca_scan - ジョブ実行 前/後の処理 オプション	315
ca_scan - 終了コード オプション	316
ca_scan - メディア オプション	317
ca_scan - 各種 スキャン オプション	318
ca_scan - ジョブ ステータス オプション	319
ca_scan - リターンコード	320
ca_scan コマンド の例	321
第 16章: ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド	323
ca_vcbpopulatedb - 構文	324
ca_vcbpopulatedb - 使用法	325
ca_vcbpopulatedb 設定 ファイル の作成	328
ca_vcbpopulatedb - ユーティリティ リターンコード	329
ca_vcbpopulatedb - 例	330
第 17章: ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティ コマンド	331
ca_msvmpopulatedb - 構文	332
ca_msvmpopulatedb - 使用法	333
ca_msvmpopulatedb - ユーティリティ リターンコード	335
ca_msvmpopulatedb - 例	336
第 18章: cabatch - バッチ コマンド	337
cabatch - ジョブ の送信	340

cabatch - ジョブの削除	343
cabatch - ジョブの修正	344
cabatch - 例	345
第 19章: careports - レポート ライタ コマンド	347
careports - 構文	348
careports - オプション	349
careports - 例	351
第 20章: caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド	353
caadvreports - 構文	354
caadvreports - レポート	355
caadvreports - オプション	359
caadvreports - 例	362
第 21章: pfc - プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド	363
pfc - 構文	364
pfc - 使用法	365
pfc - プレフライト チェック	366
pfc - 例	370
第 22章: tapecomp - テープ比較 ユーティリティ	371
tapecomp - 構文	372
tapecomp - オプション	373
tapecomp - 例	375
第 23章: tapecopy - テープコピー ツール コマンド	377
tapecopy - 構文	379
tapecopy - 使用法	380
tapecopy - データベース照会オプション	381
tapecopy - デスティネーション引数	385
tapecopy - ソース引数	390
tapecopy - 例	393
第 24章: その他のユーティリティ コマンド	397
ARCserveCfg.exe - サーバ再設定ユーティリティ	398
ARCserveCfg.exe - 構文	400
ARCserveCfg.exe - 使用方法	401
ARCserveCfg.exe - 例	402
ARCserveCfg.exe - トラブルシューティング	403
DumpDB ユーティリティ	408

IsSafe.bat ユーティリティ	412
Mergecat ユーティリティ	413
MergeOLF ユーティリティ	414
第25章: 用語集	415
山型カッコ	416
引数	417
省略記号	418
斜体	419
オプション	420
パイプ	421
角カッコ	422

第1章: 概要

コマンド ライン インターフェイス(CLI) とは、キーボードからの入力またはスクリプトによって、テキストのコマンド行(一連の文字) をサブミットすることでコンピュータとやりとりする方式の1 つです。その最も簡単な形態は、コンピュータがプロンプトを表示し、ユーザがキーボードを使用してコマンドを入力し、キーボードのキー(通常は Enter キー) を押してコマンドの入力を終了すると、コンピュータがそのコマンドを実行するというものです。

Arcserve Backup のコマンド ライン ユーティリティでは、コマンド プロンプトを使用して、Arcserve Backup サーバで実行できるすべての処理を直接制御できます。Arcserve Backup のコマンド ライン ユーティリティは、さまざまな Arcserve Backup マネージャから実行可能なほとんどすべての処理にアクセスするもう1 つの方法です。コマンド ライン インターフェイスには、他のプログラムから自動的に実行できるバッチファイルを作成できるという利点もあります。

このコマンド ライン インターフェイス機能を使用するには、サーバに完全な Arcserve Backup システムをインストールして、CA ARCserve Home Directory 変数を設定する必要があります。

コマンド ラインを使用する代替の方法として、ジョブ スケジューラを使用すると、コマンド ラインで入力できる任意のコマンドをサブミットできます。ジョブ スケジューラを使用する利点は以下のとおりです。

- ジョブがアクティビティ ログに記録されます。
- 繰り返しジョブをサブミットできます。

重要: コマンド ライン インターフェイス(CLI) を使用する際には、必ず正しい構文を使用してください。CLI オプションと同じタイトルを持つファイル名 やデータベース名の使用は避けてください。CLI は、「- filesystem」または「- database」などの、CLI オプションと同じタイトルを持つ特殊なファイルまたはデータベースのバックアップをサポートしません。たとえば、「- database」というタイトルのファイルをバックアップする場合、- database は、Arcserve Backup 用の CLI グローバル オプションでもあるので、ジョブが失敗します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

コマンド ライン オプションおよび引数	14
コマンド ライン構文の文字	15
ジョブ スケジューラ ウィザード - コマンド ページ	17

コマンド ライン オプションおよび引数

コマンド ラインでは、オプションおよび引数を使用して特定の命令を提供することで、たとえば、プログラムの実行などの動作をコンピュータに指示します。

- 引数(コマンド ライン引数とも呼ばれる)は、コマンドへの入力値として使用するためにコマンドに提供される、ファイル名または他のデータのことです。引数は、コマンドへの命令および結果の送信先を指示する情報の集まりです。
- オプションとは、コマンドの動作を変更する性質を持つ引数のことです。オプション(フラグまたはスイッチとも呼ばれる)は、コマンドの動作を、既定の方法で変更する、1文字または単語のことです。オプションの前には、ハイフンまたはマイナス記号(-)が付きます。

いくつかのコマンド ライン オプションを、引数ファイルとよばれるファイルにまとめることができます。

コマンド ライン構文の文字

コマンド ラインの構文の中では、ある種の文字および形式が特定の重要性および意味を持つことがあります。本書中のコマンド ラインの構文では、以下の文字形式を使用します。

角括弧 []

角括弧 ([]) は、囲まれたエレメント (パラメータ、値、または情報) がオプションであることを示します。1 つ以上のアイテムを選択したり、非選択にできます。コマンド ラインの中に角括弧自体を入力しないでください。

例: [global options]、[source arguments]、[destination arguments]

山型括弧 <>

山型括弧 (<>) は、囲まれたエレメント (パラメータ、値、または情報) が入力必須であることを示します。山型括弧の中のテキストを適切な情報に置き換える必要があります。コマンド ラインの中に山型括弧自体を入力しないでください。

例: -f <filename>、-printer <printer name>、-repeat <months> <days> <hours> <minutes>、date access <mm/dd/yyyy>

省略記号 ...

3 つのピリオド (...) の省略記号は、「～など」という意味で、先行するエレメント (パラメータ、値、または情報) がコマンド ライン内で数回繰り返されることを示します。

例: -jobid <job id1, job id2, job id3,...>、[-exitcode <exit code 1>,<exit code2>,<exit code3> ...]

パイプ |

パイプ記号 (垂直の線) は、「または」を意味し、エレメント内の選択を示します。2 つの引数がパイプ記号で区切られている場合は、区切りの左側のエレメントか右側のエレメントを選択できます。コマンドを使用する際に両方のエレメントを一度に使用することはできません。角括弧の中では、選択はオプションです。山型括弧の中では、少なくとも 1 つを選択する必要があります。

例: -ca_backup [-custom|-rotation|-gfsrotation]、-excludeday <Sun|Mon|Tue|Wed|Thu|Fri|Sat>、-runjob <start|stop>

斜体

斜体のテキストは、適切な値を入力する必要がある情報を示します。これは、値によって置き換えられるオプションまたはパラメータです。

例： `-sessionpassword session password`、`-f <filename>`、`-printer <printer name>`

注： UNIX および Linux プラットフォームで使用されるユーザ名、パスワード、およびファイル名を含むコマンド ラインの構文は、大文字小文字を区別します。たとえば、`commandline`、`CommandLine`、および `COMMANDLINE` はすべて異なります。

ジョブ スケジューラ ウィザード - コマンド ページ

ジョブ スケジューラ ウィザードは、コマンド ラインで実行可能なジョブを簡単にスケジュールおよびサブミットできる Arcserve Backup ユーティリティです。Arcserve Backup のコマンド ラインでは、Arcserve Backup サーバで実行可能なほぼすべての操作を直接制御できます。コマンド プロンプトにジョブ スケジュールコマンドを入力する代わりに、ジョブ スケジューラ ウィザードを使用できます。

ジョブ スケジューラ ウィザードのヘルプ

- [実行するコマンド] フィールドにコマンドを入力した場合、[ヘルプ] をクリックすると、指定されたコマンドに対応するパラメータを参照できます。
- [実行するコマンド] フィールドに特定のコマンドを入力せずに [ヘルプ] をクリックした場合、コマンドライン ユーティリティの以下のリストが表示されます。このリストで各コマンドをクリックすると、対応するパラメータが参照できます。

コマンド	説明
authsetup	認証セットアップコマンド(authsetup) を使用して、プライマリサーバ上の Arcserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、これを使用して caroot のパスワードの設定、Arcserve Backup ドメインのすべてのプライマリサーバおよびメンバサーバ上のオペレーティングシステム ユーザに対する同等の権限の作成、Arcserve Backup ドメイン内のすべてのプライマリサーバおよびメンバサーバ上の Arcserve Backup システム アカウント ユーザに対する同等の権限の作成を行うこともできます。
bab	bab コマンドは、Arcserve Backup サービスを制御します。bab 管理ユーティリティを使用して、バックエンド サービスのロード/アンロード、現在のステータスおよび設定の表示、バックエンド サービスの再設定、およびサービスの実行の有無の表示が可能です。
caadvreports	詳細レポート ジェネレータコマンド(caadvreports) は、さまざまなレポートを生成できるユーティリティです。これにより、現在のデータ保護ステータスの概要を知ることができます。
ca_auth	caroot と同等の権限でログインする場合、この認証コマンド(ca_auth) を使用して、新しいユーザの作成、既存ユーザの削除、ユーザのパスワードの変更、他のユーザの同等権限の確立および削除を行うことができます。
ca_backup	バックアップ マネージャコマンド(ca_backup) を使用して、バックアップジョブを Arcserve Backup キューにサブミットし、関連するオプション、フィルタ、GFS ローテーション、およびローテーションジョブをすべて設定できます。
cabatch	バッチコマンド(cabatch) を使用して、外部スクリプト ファイルを使用して、ジョブをローカルまたはリモートの Arcserve Backup ジョブ

	キューにサブミットしたり、ジョブ キューからジョブを削除したり、ジョブ キューに含まれる全ジョブの実行日時を変更したりできます。
ca_dbmgr	データベース マネージャコマンド(ca_dbmgr) を使用して、データベースのメンテナンスを実行できます。これには、メディアプールの設定なども含まれます。このコマンドにより、データベース情報を照会し、データベースオプションを設定することができます。
ca_devmgr	デバイス マネージャコマンド(ca_devmgr) を使用して、Arcserve Backup でさまざまなデバイス管理コマンドを実行できます。このコマンドにより、ストレージ デバイスの制御、ドライブまたはチェンジャ内のメディアのフォーマットおよび消去が可能です。
ca_jobsecmgr	ジョブ セキュリティ マネージャコマンド(ca_jobsecmgr) を使用して、ジョブ キュー内のすべてのジョブに対して、ユーザ名またはパスワードの一括変更を行うことができます。
ca_log	ログコマンド(ca_log) を使用して、Arcserve Backup ログを表示、ページ、クリア、および管理することができます。ca_log により、アクティビティログおよびジョブログを表示できます。
ca_merge	マージ マネージャコマンド(ca_merge) を使用して、マージ ジョブを作成し、ジョブ キューにサブミットすることができます。バックアップメディアからデータベース情報をArcserve Backupデータベースにマージできます。
ca_mmo	メディア管理 マネージャコマンド(ca_mmo) を使用して、ポールの処理とレポートを制御およびモニタできます。
ca_msvmpopulatedb	Arcserve Hyper-V 環境設定ツールユーティリティコマンド(ca_msvmpopulatedb) は、Hyper-V システム上の仮想マシン(VM) に関する情報を Arcserve Backup データベースに提供するデータ収集ツールです。
ca_qmgr	キュー マネージャコマンド(ca_qmgr) を使用して、Arcserve Backup ジョブ キューにサブミットされたジョブをモニタおよび制御できます。これらのジョブ管理コマンドは、情報を取得したり、ジョブキューの中のジョブを操作したりするのに使用します。
ca_recoverdb	データベース回復コマンド(ca_recoverdb) は、Arcserve Backup データベースが失われた場合に回復するための自己プロテクト機能です。
CAreports	レポート ライタ コマンド(CAreports) を使用して、[Arcserve Backup レポート ライタ ユーティリティ]ダイアログボックスにアクセスし、カスタマイズされた(事前定義済みおよびユーザ作成) レポートを作成できます。
ca_restore	リストア マネージャコマンド(ca_restore) を使用して、リストア ジョブを作成して Arcserve Backup ジョブ キューにサブミットし、関連するすべてのオプションを設定することができます。ca_restore コマンドのオプションおよびスイッチを使用することにより、グローバルオ

	プシジョンとフィルタの設定およびリストアジョブのソースとデスティネーションの選択が可能になります。またリストアジョブをすぐに実行するためのサブミットしたり、スケジュールされた時刻に実行されるようにサブミットしたりできます。
ca_scan	スキャン マネージャコマンド(ca_scan) を使用して、スキャン ジョブを作成し、ジョブ キューにサブミット することができます。
ca_vcbpopulatedb	VMware VCB ユーティリティ コマンド(ca_vcbpopulatedb) は、バックアップ環境内の VMware ベースの VM に関する情報を Arcserve Backup データベースに提供 するデータ収集ツールです。
DumpDB	DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードを Arcserve Backup データベースにインポートまたはデータベースからエクスポートするために使用します。DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードのみをダンプし、セッションに関する他の情報はエクスポートしません。
IsSafe	IsSafe.bat ユーティリティを使用して、アクティブな Arcserve Backup プロセスがないか OS をチェックし、システムを安全にシャットダウンできるかどうかを判断 することができます。
mergecat	マージ カタログ ユーティリティ(Mergecat.exe) を使用して、Arcserve Backup\temp ディレクトリに残っているすべての .cat ファイルに対して手動でマージを行うことができます。
mergeOLF	MergeOLF ユーティリティを使用して、ライセンスを 1 つの Arcserve システムから別の Arcserve システムに移動 できます。
pfc	プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド(pfc) を使用して、Arcserve Backup サーバおよびエージェントに対してバイタルチェックを実行し、バックアップジョブの失敗の原因となる可能性のある条件を検出 できます。
tapecomp	テープ比較コマンド(tapecomp) を使用して、メディアとメディアを比較 することができます。このユーティリティは、Arcserve Backup で生成されたメディアでのみ使用 でき、Arcserve Backup ホームディレクトリで使用する 必要があります。
tapecopy	テープコピー コマンド(tapecopy) を使用して、データを 1 つのメディアから別のメディアに素早くコピー することができます。これらのメディアは同様の種類である必要はありません。

第2章: authsetup - 認証セットアップコマンド

認証セットアップコマンド (authsetup) を使用すると、プライマリサーバの Arcserve Backup 認証データベースを初期化できます。また、これを使用して caroot のパスワードの設定、Arcserve Backup ドメインのすべてのプライマリサーバおよびメンバサーバ上のオペレーティングシステムユーザに対する同等の権限の作成、Arcserve Backup ドメイン内のすべてのプライマリサーバおよびメンバサーバ上の Arcserve Backup システムアカウントユーザに対する同等の権限の作成を行うこともできます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

authsetup - 構文	22
authsetup - 使用法	23
authsetup - 例	24

authsetup - 構文

authsetup のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

authsetup

-p <new password>

-s

-d

詳細情報:

[authsetup - 認証 セットアップ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

authsetup - 使用法

authsetup コマンドには、Arcserve Backup 認証 データベースをセットアップする際に実行するアクションを定義するのに使用されるオプションが含まれます。

authsetup コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-p <password>

「caroot」のパスワードを指定します。これは必須オプションです。空のパスワードを設定するには、「authsetup -p ""」と指定します。

-s

このユーティリティのサイレント モードです。内部の処理が失敗したときに、メッセージ ボックスによる通知を表示したくない場合は、このオプションを使用します。

-d

authsetup を使用するたびにデバッグ ログを作成する場合は、このオプションを使用します。

詳細情報:

[authsetup - 認証 セットアップ コマンド](#)

[authsetup - 例](#)

authsetup - 例

authsetup コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、caroot パスワードを新しいパスワードである「root」にリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。

```
authsetup -p "root"
```

- 以下のコマンドは、caroot パスワードを空のパスワードにリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。

```
authsetup -p ""
```

- 以下のコマンドは、caroot パスワードを新しいパスワードである「root」にリセットし、ログインしているユーザ用に同等の権限を再作成します。また、サイレントモードおよびデバッグを有効にします。

```
authsetup -p "root" -s -d
```

詳細情報:

[authsetup - 認証セットアップコマンド](#)

第3章: bab - Arcserve Backup サービスコマンド

bab コマンドは、Arcserve Backup サービスを制御します。bab 管理ユーティリティを使用して、バックエンド サービスのロード/アンロード、現在のステータスおよび設定の表示、バックエンド サービスの再設定、およびサービスの実行の有無の表示が可能です。

bab コマンドは、Arcserve Service Controller サービスへのフロントエンドとして機能し、バックエンド サービスをロードするには Arcserve Service Controller サービスが実行されている必要があります。

Arcserve Backup バックエンド サービスの完全なセットには、5 つのサービスが含まれています。

- Arcserve Service Controller サービス
- Arcserve Domain Server サービス
- Arcserve Database Engine サービス
- Arcserve Tape Engine サービス
- Arcserve Job Engine サービス

注: Arcserve Backup サーバをクラスタ対応に設定すると、すべての重要な Arcserve ベース関連のサービス(エージェント関連のサービスではない) が適切なクラスタ サービス(MSCS または NEC CLUSTERPRO) によってモニタされます。Arcserve ベース関連のサービスが失敗するか、またはシャットダウンする必要がある場合は、クラスタ サービスは自動的にその再起動を行い、それに失敗するとフェールオーバーをトリガします。このサービスを実行するには、Arcserve サービスを停止する必要があります。ただし、クラスタ対応の環境では、まずはクラスタ サービスを手動で停止して、サービスのモニタが続行されないようにし、自動再起動またはフェールオーバーが実行されないようにする必要があります。クラスタ サービスによって HA サービス モニタリングを停止する手順については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

bab - 構文	26
bab - 使用法	27
bab - 例	30

bab - 構文

bab のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
bab [-cahost <hostname>]
-load [procid | "all"]
-unload [-force] [-quiet] [procid | "all"]
-show [-v] [procid | "all"]
-showcfg [-v] [procid | "all"]
-reconfig [procid | "all"]
-status [procid | "all"]
-removehost hostname
-getprimary
-getdomainservers
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[bab - Arcserve バックアップ サービス コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

bab - 使用法

bab コマンドには、Arcserve Backup サービスを制御する際に実行するアクションを定義するために使用されるオプションが含まれます。

bab コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注：-cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

usage

bab 基本コマンドのリストを表示します。

-ロード

Arcserve Backup デーモンを起動します。

指定したサービスまたはすべてのサービスをロードします。デフォルトでは、すべてのサービスがロードされます。

-unload [-force] [-quiet]

Arcserve Backup デーモンを停止します。

指定したサービスをアンロードします。指定しない場合、3つのサービス (cadbd サービス、camediad サービス、および caqd サービス) がアンロードされます。デフォルトでは、これらの3つのサービスがアンロードされます。

-force

-force を指定すると、ジョブが待機中であっても強制的にアンロードされます。

-quiet

-quiet オプションを指定すると、メッセージが表示されなくなります。

-show [-v]

Arcserve Backup デーモンのステータスを表示します。

指定したサービスまたはすべてのサービスの設定および現在のステータスを表示します。デフォルトでは、すべてのサービスが表示されます。

-v

ステータスおよび環境設定オプションの出力の冗長性を増大させます。
-v オプションを使用すると、デーモンのステータスが詳細に表示されます。

-v オプションは、-show コマンドとともに使用すると、サービス名、バイナリのロケーション、状態、登録ステータス、および「kill」タイプを表示します。kill タイプは、特定のサービスが「インモータル」(-force スイッチで停止する必要あり)、または「通常」(必要に応じて停止可能)のいずれかであることを示します。

-showcfg [-v]

特定のArcserve Backupサービス、またはすべてのArcserve Backupサービスの現在のステータスと、サービスの設定方法を表示します。

バックエンド サービスのステータスおよびそれらの "kill" タイプ (インモータルまたは通常) を表示します。

「通常」とラベルされたサービスは、必要に応じて停止できます。「インモータル」とラベルされたサービスは、停止が強制され、すべての「通常」サービスがアンロードされない限り、停止できません。

-v

ステータスおよび環境設定オプションの出力の冗長性を増大させます。
-v オプションを使用すると、デーモンのステータスが詳細に表示されます。

-v オプションは、-showcfg とともに使用すると、サービス名、バイナリのロケーション、ホスト名、RPC プログラム番号、RPC プログラムバージョン番号、プロセス ID (PID)、トランスポート プロトコル、ファミリ、状態、登録ステータス、および「kill」タイプを表示します。kill タイプは、特定のサービスが「インモータル」(-force スイッチで停止する必要あり)、または「通常」(必要に応じて停止可能)のいずれかであることを示します。

-reconfig

1 つ以上の特定の Arcserve Backup サービスを停止し、環境設定ファイルを再読み込みし、その新しいファイルの設定を使用してサービスを再起動します。

このコマンドを実行すると、バックエンド サービスが作成され、指定されている場合、caserved が環境設定ファイルを再読み込みし、検出した変更があればそれを有効化します。

-status

サービスのステータスを簡潔に表示します。

-removehost

Arcserve Backup 環境からホストを削除します。

注: <hostname> は有効なホスト名で、プライマリサーバ内に存在する必要があります。

-getprimary

現在のドメインまたは指定したホストがあるドメインに含まれるプライマリサーバの名前を返します。(ホストサーバとして) 任意のドメインメンバの名前を指定し、プライマリサーバ名を取得できます。

デフォルトでは、-cahost が指定されていない場合、ローカルマシンのプライマリサーバが検索されます。-cahost が指定されている場合、ホスト名を持つプライマリサーバを検索します。

-getdomainservers

現在のドメインまたは指定したホストがあるドメインに含まれるすべてのサーバのリストを返します。任意のドメインメンバの名前をホストサーバとして提供できます。

デフォルトでは、-cahost が指定されていない場合、ローカルマシンのドメインに含まれるすべてのメンバサーバが検索されます。-cahost が指定されている場合、ホスト名のドメインに含まれるすべてのメンバサーバが検索されます。

詳細情報:

[bab - Arcserve バックアップ サービス コマンド](#)

[bab - 例](#)

bab - 例

bab コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、最も簡単なサービスステータスを表示します。
bab -status
- 以下のコマンドは、ジョブエンジンの環境設定および現在のステータスの詳細を表示します。
bab -show -v caqd
- 以下のコマンドは、テープエンジンの現在のステータスおよび設定方法を表示します。
bab -showcfg comediad
- 以下のコマンドは、データベースエンジンを開始します。
bab -load cadbd
- 以下のコマンドは、ジョブが待機中の場合にドメインおよび認証サービスを停止します。
bab -unload cadiscovd -force
- 以下のコマンドは、現在のドメインに含まれるプライマリサーバの名前を表示します。
bab -getprimary

詳細情報:

[bab - Arcserve バックアップ サービス コマンド](#)

第4章: ca_auth - 認証コマンド

caroot と同等の権限でログインする場合、この認証コマンド (ca_auth) を使用して、新しいユーザの作成、既存ユーザの削除、ユーザのパスワードの変更、他のユーザの同等権限の確立および削除を行うことができます。caroot 以外のユーザと同等の権限でログインした場合、ca_auth を使用すると、自身のパスワードを変更したり、有効にしたりすることができます。

注: Arcserve Backupユーザと同等の権限を持たないでログインした場合、ca_auth を使用するには、同等の権限を与えられる必要があります。

caroot

Arcserve Backupには、機能をすべて制御できるルートレベルのシステム管理者 (rootユーザ) プロファイルが用意されています。Arcserve Backupこのプロファイルは、「caroot」ユーザプロファイルと呼ばれ、Arcserve Backupの初回インストール中に設定されます。

caroot プロファイルのパスワードは、インストール時に設定するか、ca_auth または Arcserve Backup のホームディレクトリにある AuthSetup.exe を使用して後で設定または変更できます。セキュリティのために、このアカウントにはパスワードを設定することをお勧めします。

注: Arcserve Backupユーザプロファイルは、マネージャおよびバックアップ関連の機能に対するアクセス権のみを制御します。オペレーティングシステムへのログインに必要なセキュリティと混同しないように注意してください。

caroot と同等の権限

Arcserve Backupでは、caroot と同等な権限を持つユーザを作成できます。caroot の同等ユーザは、すべての Arcserve Backup 機能の完全なアクセス権を持っており、ca_backup や ca_restore など、コマンドラインユーティリティを使用できます。ホスト上の任意の Windows ユーザに caroot と同じアクセス権を付与できます。caroot と同等の権限をユーザに与えるには、caroot の同等ユーザとしてログインするか、caroot のパスワードを知っている必要があります。

ca_backup、ca_restore、ca_qmgr などのコマンドラインユーティリティをリモートの Arcserve Backup サーバと組み合わせて使用すると、ユーザは Arcserve Backup にログインせずにそれらのコマンドを実行して、バックアップジョブやリストアジョブをサブミットしたり、モニタすることができます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_auth - 構文	33
ca_auth - 使用法	34
ca_auth - その他のオプション	35
ca_auth - ユーザ引数	36

ca auth - 役割引数	39
ca auth - 同等引数	41
ca auth - 例	43

ca_auth - 構文

ca_auth のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_auth [-cahost <hostname>]

-user [user arguments]

-equiv [equivalence arguments]

-role [role arguments]

-f <filename>

-help

-examples

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[コマンドライン構文の文字](#)

ca_auth - 使用法

ca_auth コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ユーザの引数
- 役割引数
- 同等引数

詳細情報：

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[ca_auth - その他のオプション](#)

[ca_auth - ユーザ引数](#)

[ca_auth - 役割引数](#)

[ca_auth - 例](#)

ca_auth - その他のオプション

ca_auth コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup が認証プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_auth コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注：-cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-usage

基本的な ca_auth コマンドのリストを表示します。

-help

ca_auth ヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_auth の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

詳細情報：

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[ca_auth - 例](#)

ca_auth - ユーザ引数

Arcserve Backup を使用するには Arcserve Backup アカウントが必要です。Arcserve Backup には、機能をすべて制御できるルートレベルのシステム管理者 (root ユーザ) プロファイルが用意されています。Arcserve Backup このプロファイルは、「caroot」ユーザ プロファイルと呼ばれ、Arcserve Backup の初回インストール中に設定されます。

caroot ユーザには管理者権限があり、インストール時にプログラムによって作成されます。caroot プロファイルのパスワードは、インストール中に設定できます。あるいは、ca_auth または AuthSetup.exe (Arcserve Backup のホーム ディレクトリ内) を使用して後で設定/変更することもできます。セキュリティのために、このアカウントにはパスワードを設定することをお勧めします。

注: ca_auth.exe コマンドでは、caroot などの Arcserve Backup 固有のユーザのみをサポートし、「domain\user」や「hostname\Administrator」などの Windows ユーザはサポートしません。

注: Arcserve Backup caroot ユーザ プロファイルは、GUI やバックアップ関連機能に対するアクセスを管理するものです。オペレーティング システムのログインに必要なセキュリティと混同しないでください。

ca_auth コマンドには、以下のユーザ引数が含まれます。

ca_auth [-cahost host] -user

add username [passwd] [-assignrole [rolelist]]

delete username

chgpasswd username [passwd]

chgrole username [rolelist]

validate username [password]

group username

getall

add username [passwd] [-assignrole [rolelist]]

username および指定されたパスワードを、Arcserve Backup ユーザとして追加します。

注: ユーザ名に「\」を含めることはできません。

-assignrole [rolelist]

ca_auth によって新しいユーザを追加する場合、ユーザ プロファイルを作成するために新しいユーザに役割を割り当てる必要があります。ユーザ プロファイルは、ユーザと割り当てられた役割および割り当てられた役割に対する関連権限のリンクの組み合わせです。

現在利用可能な役割は、以下のとおりです。

- 1) Backup Operator
- 2) Restore Operator
- 3) Device Operator
- 4) Tape Operator
- 5) Security Administrator
- 6) Report Operator
- 7) Monitor Operator
- 8) Arcserve Administrator
- 9) Ownership Checking Exemption Privilege

-assignrole スイッチを含める場合も、以下のようにプロンプトが表示されます。

このユーザの役割を割り当ててください。

各役割には、対応する数字が割り当てられています。役割を新規ユーザに割り当てるには、-assignrole スイッチの後に役割の数字を入力します。複数の役割を追加するには、各ロールをカンマで区切る必要があります。

例：

- ◆ Security Administrator の役割を新規ユーザに割り当てるには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_auth [-cahost host] -user add username [passwd] -assignrole 5
```

- ◆ 複数の役割を新規ユーザに割り当てるには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_auth [-cahost host] -user add username [passwd] -assignrole  
1,2,3,4,5
```

注：ユーザプロファイルおよびロールの定義の詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

delete username

username を認証データベースから削除します。

chgpasswd username [passwd]

指定された *username* のパスワードを変更します。

chgrole username [rolelist]

既存の Arcserve Backup ユーザに割り当てられた役割を変更します。

validate username [passwd]

指定されたユーザ名とパスワードの組み合わせが存在し、有効で、Arcserve Backupドメインへのログインに使用できることを確認します。

group *username*

指定されたユーザが属するユーザグループの名前を提供します。

getall

Arcserve Backup 認証サービスにより確認されているすべてのユーザを一覧表示します。

詳細情報:

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[ca_auth - 例](#)

ca_auth - 役割引数

各 ユーザには、ユーザ プロファイルを作成するために少なくとも1つの役割を割り当てる必要があります。役割にはそれぞれ対応する権限のリストがあります。ユーザ プロファイルは、ユーザと割り当てられた役割および割り当てられた役割に対する関連権限のリンクの組み合わせです。

- 権限は Arcserve Backup 内の指定された操作を実行する権利です。たとえば、メディアのフォーマット、バックアップ ジョブやリストア ジョブのサブミット、ジョブ ステータスのモニタ、レポートの作成のための権限があります。
- 役割は権限の組み合わせです。
- ユーザには1つ以上の役割を割り当てることができます。
- 役割については、誰にも割り当てないことも、任意の数のユーザに割り当てることもできます
- 権限については、1つまたは複数の役割の中に含めることができます。

注：ユーザ プロファイルの詳細については、「管理者ガイド」を参照してください。

現在利用できる役割と、それに対応する役割の説明および役割のIDのリストを表示するには、以下のコマンドを入力する必要があります。

```
ca_auth -role getall
```

-role

役割引数を表示します。これによって、新規ユーザの追加または既存ユーザの役割の変更で利用できる役割 ID を簡単に検索できます。

getall

Arcserve Backup 認証 サービスで確認済みのすべての役割のリストを表示します。

現在利用可能な役割は、以下のとおりです。

- 1) Backup Operator
- 2) Restore Operator
- 3) Device Operator
- 4) Tape Operator
- 5) Security Administrator
- 6) Report Operator
- 7) Monitor Operator
- 8) Arcserve Administrator

9) Ownership Checking Exemption Privilege

詳細情報:

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[ca_auth - 例](#)

ca_auth - 同等引数

caroot のパスワードがわかっている場合、同等の権限管理オプションを使用すると、*caroot* と同等の権限を持つユーザを作成できます。指定されたホスト上のユーザを *caroot* と同等のユーザとして設定すると、このユーザとして認証データベース全体にアクセスでき、Arcserve Backup 機能のすべてに完全にアクセスできます。

Arcserve Backup コマンドラインユーティリティを使用するには、ご使用のシステムアカウントに *caroot* と同等の権限を作成する必要があります。*caroot* と同等の権限は、ユーザのログイン名と Arcserve Backup ユーザデータベースとのマッピングを確立します。これにより、ユーザは、Arcserve Backup コマンドラインユーティリティを使用できます。ホスト上の任意の Windows ユーザに *caroot* と同じアクセス権を付与できます。*caroot* と同等の権限をユーザに与えるには、*caroot* の同等ユーザとしてログインするか、*caroot* のパスワードを知っている必要があります。

ca_backup、*ca_restore*、*ca_qmgr* などのコマンドラインユーティリティをリモートの Arcserve Backup サーバと組み合わせて使用すると、ユーザは Arcserve Backup にログインせずにそれらのコマンドを実行して、バックアップジョブやリストアジョブをサブミットしたり、モニタすることができます。

ca_auth コマンドには、以下の同等用の引数が含まれます。

ca_auth [-cahost host] -equiv

```
add ntuser hostName ARCserveBackupUser [caroot_username] [caroot_password]
getequiv [ntuser hostName]
delete ntuser hostName [caroot_username] [caroot_password]
whoami
```

add ntuser hostName ARCserveUser [caroot_username] [caroot_password]

caroot と同等の権限をホスト上の指定されたユーザに付与します。

getequiv [ntuser hostName]

このコマンドを実行するホスト上の指定されたユーザ用の同等の権限をすべて表示します。

delete ntuser hostName [caroot_username password]

ホスト上の UNIX ユーザの同等の権限を削除します。現在のユーザが *caroot* と同等でない場合、管理者のアカウント向けの認証情報（たとえば、*caroot* のユーザ名およびパスワード）が必要です。

whoami

ログインする際に使用した、ローカルマシン上のユーザ名を表示します。

注：読み取り権限を持つユーザは、そのユーザが所有していないオブジェクトの読み取り権限を他のユーザに付与することはできません。

詳細情報:

[ca_auth - 認証コマンド](#)

[ca_auth - 例](#)

ca_auth - 例

ca_auth コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、caroot ユーザのパスワードを変更します。
`ca_auth -user chgpaswd caroot [passwd]`
- 以下のコマンドは、ユーザを追加します。
`ca_auth -user add username [passwd]`
- 以下のコマンドは、ユーザを削除します。
`ca_auth -user delete username`
- 以下のコマンドは、ユーザおよび関連するパスワードを検証します。
`ca_auth -user validate username [password]`
- 以下のコマンドは、ユーザ(管理者)およびパスワード(caroot)を追加します。
`ca_auth -user add administrator caroot`
注: 非エコーモードで管理者のパスワード入力を求められます。
- 以下のコマンドは、すべての Arcserve Backup ユーザのリストを表示できます。
`ca_auth -user getall`
- 以下のコマンドは、Arcserve Backup Domain Server である DOMAIN に対して caroot と同等の権限を持つ Windows ユーザ(管理者)を追加します。ユーザ名はcaroot、パスワードはccbです。
`ca_auth -equiv add administrator DOMAIN caroot ccb`
- 以下のコマンドは、現在の Arcserve Backup ユーザを表示します。
`ca_auth -equiv whoami`

ca_auth 同等の例

- 以下のコマンドは、同等アカウントを設定します。
`ca_auth -equiv add ntuser hostName ARCserveUser [caroot username] [caroot password]`
たとえば、マシン dev02-vir2 の管理者に同等アカウントを追加する場合：
`ca_auth -equiv add Administrator dev02-vir2 'caroot' 'caroot password'`
- 以下のコマンドは、ログインする際に使用したユーザの同等アカウントを表示します。
`ca_auth -equiv getequiv`

- 以下のコマンドは、特定のホストマシン上のユーザの同等アカウントを表示します。

```
ca_auth -equiv getequiv [ntuser hostName]
```

- 以下のコマンドは、ユーザの同等の権限を削除します。

```
ca_auth -equiv delete ntuser hostName [caroot username] [caroot password]
```

- 以下のコマンドは、ログインする際に使用した、ローカルマシン上のユーザ名を表示します。

```
ca_auth -equiv whoami
```

- あるマシン上でコマンドラインインターフェースを使用して他のマシンを管理する場合、同等の権限を追加する必要があります。

同等の権限を追加するには、以下の手順に従います。

1. <Machine A> からコマンドラインインターフェースを開きます。
2. 以下のコマンドを入力します。

```
ca_auth -cahost <hostnameB> -equiv add <domainnameA\NT user  
(administrator)> <hostnameA> caroot caroot <passwordofcaroot>
```

詳細情報:

[ca_auth - 認証コマンド](#)

第5章: ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド

バックアップ マネージャ コマンド (ca_backup) は、バックアップ マネージャ へのコマンド ライン インターフェースです。バックアップ マネージャ の GUI から実行可能な機能はすべてコマンド ラインからも実行できます。このコマンドを使用して、バックアップ ジョブを Arcserve Backup キューにサブミットし、関連するオプション、フィルタリング、GFS ローテーション、およびローテーション ジョブをすべて設定します。

重要: コマンド ライン インターフェース (CLI) を使用する際には、必ず正しい構文を使用してください。CLI オプションと同じタイトルを持つファイル名 やデータベース名の使用は避けてください。CLI は、「- filesystem」または「- database」などの、CLI オプションと同じタイトルを持つ特殊なファイルまたはデータベースのバックアップをサポートしません。たとえば、「- database」というタイトルのファイルをバックアップする場合、- database は、Arcserve Backup 用の CLI グローバル オプションでもあるので、ジョブが失敗します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_backup - 構文	46
ca_backup - 使用法	47
ca_backup - その他のオプション	48
グローバル ジョブ オプション	50
ca_backup - グローバル フィルタ オプション	74
ca_backup - ソース引数	77
ca_backup - ノード オプション	80
ca_backup - ボリューム設定オプション	82
ca_backup - データベース オプション	84
ca_backup - デスティネーション引数	109
ca_backup - スケジュール引数	111
ca_backup - ジョブ実行引数	120
ca_backup のステージング オプション	121
ca_backup - リターン コード	136
ca_backup - 例	137

ca_backup - 構文

ca_backup のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_backup [-cahost <hostname>]  
[グローバルオプション]  
[global filters]  
-source [source arguments]  
[destination arguments]  
[schedule arguments]  
[run job arguments]
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_backup - 使用法

ca_backup コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- バックアップ オプション
- フィルタ引数
- ソース引数
- デスティネーション引数
- スケジュール引数
- ジョブ実行引数
- ディスクステージング オプション
- リターンコード

バックアップ処理を構築するには、ca_backup 構文で指定した順序に従って、オプションを 1 カテゴリごとに設定する必要があります。

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャコマンド](#)

[ca_backup - その他のオプション](#)

ca_backup - グローバル フィルタ オプション

ca_backup - ソース引数

ca_backup - デスティネーション引数

ca_backup - スケジュール引数

ca_backup - ディスクステージング オプション

ca_backup - リターンコード

ca_backup - その他のオプション

ca_backup コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がバックアップ プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_backup コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

ca_backup

[-cahost <hostname>] -list

[-f <filename>]

[-clearconn]

[-waitForJobStatus [<polling interval(secs)>]]

[-help]

[-examples]

[-usage]

[allusage]

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注： [-cahost <hostname>] スwitchはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スwitchで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-list

バックアップジョブで使用できるすべてのグループ名と対応するメディアのリストを表示します。

-f <filename>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]

このオプションが指定された場合、ca_backup コマンドはジョブが終了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示す[リターンコード](#)を受けて終了します。

<polling interval> 値は、ca_backup ユーティリティがキューサービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度(秒)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は60秒です。

注: これは、Unicenter NSM Scheduling(旧名 TNG)で役立ちます。

-help

ca_backupのヘルプトピックを開きます。

-examples

ヘルプトピックとca_backupの使用例を開きます。

-usage

ca_backupの基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべてのca_backupコマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

グローバルジョブ オプション

ca_backup グローバルオプションを使用すると、ジョブ全体に適用される各種オプションを指定することができます。

ca_backup コマンドでは、以下のグローバルオプションが提供されます。

- [バックアップ メディア オプション](#)
- [検証オプション](#)
- [ファイルの再試行/共有オプション](#)
- [操作オプション](#)
- [実行前/後オプション](#)
- [ログ オプション](#)
- [メディア エクスポート オプション](#)
- [詳細オプション](#)
- [VSS オプション](#)

ca_backup バックアップ メディア オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバルバックアップ メディア オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-firsttapeopt <owritesameblank|owritesameblankany>]
[-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>]
[-spantapeopt <owritesameblank|owritesameblankany>]
[-spantapetimeout <minutes<1-9999>>]
[-sessionpassword <session password>[-savepassword [-remindafter n]]]
[-encryption <encryption key> [-atagent]-atserverduringbackup|-atserverduringmigration][-savepassword [-remindafter n]]]
[-compression [-atagent]-atserver]]
[-mediabyname]
```

-firsttapeopt <owritesameblank| owritesameblankany>

バックアップ ジョブで最初に使用されるメディアに対するメディア オプションを指定します。デフォルトでは、同名のメディアに上書き(メディアへ追加)を設定します。「ブランク」メディアと「任意の」メディアは異なります。「任意の」メディアは、ジョブで指定されたメディア名とは別の名前のフォーマット済みメディアを示します。

メディア選択の検索順序は、左から右です。owritesameblankany オプションが指定されている場合、Arcserve Backup によってジョブと同じ名前のメディアが最初に検索されます。該当するメディアが見つかり、使用可能である場合、そのメディアは同名でフォーマットされ、バックアップに使用されます。見つからない場合、Arcserve Backup によって使用するブランクメディアが検索されます。使用できる「ブランク」メディアがない場合、Arcserve Backup は「任意の」使用可能なメディアを検索し、バックアップ用にフォーマットして使用します。

注：-rotation スケジュール引数が含まれる場合、指定されたローテーションルールがこれらのオプションよりも優先されます。

-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>

使用可能なメディアが実際にバックアップジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。デフォルトでは、この値は5分です。ここで設定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトになり失敗します。

-spantapeopt <owritesameblank| owritesameblankany>

バックアップジョブで使用されるスパンメディアに対するメディアオプションを指定します。複数のメディアが必要なジョブに対して指定するオプションで、最

初以降のメディアに対する上書きルールを指定します。ジョブが別のメディアに継続して実行される場合は、Arcserve Backupが使用するメディアを指定する必要があります。

メディア選択の検索順序は、左から右です。デフォルトでは、[上書き - 同名メディア、ブランクメディアのみ]に設定されます。テープスパンの実行中にデフォルトが指定されている場合、Arcserve Backupによって同じ名前で元のテープよりも高いシーケンス番号のメディアが検索されます。該当する使用可能なテープが発見された場合、そのメディアがフォーマットされ、次のテープとして使用されます。見つからない場合、Arcserve Backupによって使用するブランクメディアが検索されます。

注： -rotation スケジュール引数が含まれる場合、指定されたローテーションルールがこれらのオプションよりも優先されます。

-spantapetimeout <minutes<1-9999>>

使用可能なスパンメディアが実際にバックアップジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。デフォルトでは、この値は無制限になっています。そのため、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

-sessionpassword <session password>[-savepassword [-remindafter n]]

メディアにバックアップされた各セッションにパスワードを適用します。これらのセッションのいずれかからデータをリストアするには、このパスワードの入力が必要となります。

-savepassword

バックアップジョブの実行時にセッションパスワードを Arcserve Backup データベースに保存するように指定します。このスイッチを含めなかった場合、セッションパスワードは Arcserve Backup データベースに保存されません。

-remindafter n

セッションパスワードを保存する日数を指定します。指定した日数が経過すると、パスワードの変更を促すリマインダメッセージがアクティビティログに記録されます。指定できる範囲は 0 ～ 9999 日です。

注： セッションパスワードの Arcserve Backup データベースへのインポートおよびエクスポートの詳細については、「[DumpDB ユーティリティ](#)」を参照してください。

-encryption <encryption key> [-atagent | -atserverduringbackup | -atserverduringmigration] [-savepassword [-remindafter n]]

バックアップ前にファイルを暗号化します。暗号化されたファイルをリストアするには、暗号化パスワードを入力する必要があります。

この引数を使用してバックアップされたセッションをリストアするには、`ca_restore` `-tapesessionpw` 引数を使用してリストアジョブを実行する必要があります。

注：デデュプリケーション デバイスの場合は、`[-atagent|-atserverduringbackup|-atserverduringmigration]` スイッチを含めることはできません。

- ◆ `-atagent` を選択すると、エージェント側で暗号化が行われます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ `-atserverduringbackup` を選択すると、バックアッププロセス中にサーバ側で暗号化が行われます。
- ◆ `-atserverduringmigration` を選択すると、マイグレーション中にサーバ側で暗号化が行われます。

-savepassword

バックアップジョブの実行時に暗号化パスワードを Arcserve Backup データベースに保存するように指定します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-remindafter n

暗号化パスワードを保存する日数を指定します。指定した日数が経過すると、パスワードの変更を促すリマインダメッセージがアクティビティログに記録されます。指定できる範囲は 0 ～ 9999 日です。

注：セッションパスワードの Arcserve Backup データベースへのインポートおよびエクスポートの詳細については、「[DumpDB ユーティリティ](#)」を参照してください。

-compression [-atagent|-atserver]

バックアップの前にファイルを圧縮します。

注：デデュプリケーション デバイスの場合は、`[-atagent|-atserver]` スイッチを含めることはできません。

- ◆ `-atagent` を選択すると、エージェント側で圧縮が行われます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ `-atserver` を選択すると、サーバ側で圧縮が行われます。

-mediabyname

Arcserve Backup では、メディアの ID またはシーケンス番号に関係なく、指定した名前を持つメディアに書き込みます。このオプションは、特定のメディアで上

書きジョブを繰り返し実行し、そのジョブについて毎回同じメディアが使用されるようにする場合に役立ちます。

- ◆ このオプションを含めると、指定した名前を持つメディアが、メディアのその他の識別情報に関係なく、Arcserve Backup によって検索されて使用されます。
- ◆ このオプションを含めないと、2 回目のバックアップジョブを実行したときに、一部の識別情報が変更されているために、Arcserve Backup が以前のテープを使用できない場合があります。

注：テープライブラリで 2 つ以上のメディアの名前が同じ場合、Arcserve Backup では、指定した名前と一致するデバイスグループの最初のメディアを使用します。したがって、1 回のみの上書きの場合は、このオプションを使用しないでください。

詳細情報：

[ca_backup - 例](#)

ca_backup 検証オプション

ca_backup コマンドには、以下のその他のグローバルオプションが含まれます。

ca_backup [-scan | -compare]

-scan

バックアップ メディアをスキャンして各ファイルのヘッダをチェックし、バックアップの整合性を検証します。ヘッダが読み取り可能な場合、データは信頼できるものとみなされます。

-compare

バックアップ メディアからデータ ブロックを読み出し、その内容をソース マシン上のソース ファイルと 1 バイトずつ比較して、バックアップの整合性を検証します。

注：[メディアとディスクの比較]オプションは、データベース エージェントやアプリケーション エージェントではサポートされていません。

詳細情報：

[ca_backup - 例](#)

ca_backup ファイルの再試行/共有オプション

ca_backup コマンドには、以下のファイルの再試行/共有のグローバルオプションが含まれます。

```
ca_backup
[-retry <off|now[later]||later[now]>]
[-retrycount <count<1-9999>>]
[-retryinterval <seconds<1-9999>>]
[-accessmethod <denynoneifdenywritefails | lockifdenywritefails | denywrite |
denynone>]
```

-retry <off|now[later]||later[now]>

最初のバックアップに失敗したオープン ファイルのバックアップを再試行する場合に指定します。

-retrycount <count<1-9999>>

再試行回数を指定します。

-retryinterval <seconds<1-9999>>

再試行の間隔を秒単位で指定します。

-accessmethod <denynoneifdenywritefails | lockifdenywritefails | denywrite | denynone>

ファイル共有オプションは以下のとおりです。

denynoneifdenywritefails

Arcserve Backup は、ファイルを「書き込み禁止」モードにしようとしています。ファイルがすでにオープンされているために書き込み禁止モードにできない場合は、「非禁止」モードになります。これはデフォルトの設定です。

lockifdenywritefails

Arcserve Backup は、ファイルを「書き込み禁止」モードにしようとしています。ファイルがすでに開かれていてこれが不可能な場合は、ファイルは完全にロックされ、ユーザが開くまたは書き込むことができなくなります。このオプションを使用すると、ファイルの最新バージョンが確実にバックアップされます。

denywrite

Arcserve Backup がファイルをオープンしている間に、他のプロセスがそのファイルに書き込めないようにします。Arcserve Backup より前にほかのプロセスによってファイルがオープンされている場合、Arcserve Backup はファイルをバックアップしません(ただし、いずれかのオープン ファイルの再試行オプションを選択している場合を除く)。

denynone

最初にファイルを開いたのが Arcserve Backup であっても別のプロセスであっても、別のプロセスからファイルの読み取りや書き込みをすることができます。このオプションでは、実際にバックアップされるファイルが最新バージョンとなるとは限りませんが、ユーザが作業中のファイルは常に最新バージョンとなります。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup 操作オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバル操作オプションが含まれます。

ca_backup

[-backupasdb]

[-backupcatalog]

[-backupjobqueue]

[-noestimation]

[-createcrc]

[-deletefiles]

[-preserveaccesstime]

[-eject]-noeject]

[-partialdbupdate]-nodbupdate]

[-disableResetArchiveBitForDedupe]

-backupasdb

Arcserve Backup データベースをバックアップデータの最後に追加します。

-backupcatalog

カタログファイルをバックアップデータの最後に追加します。

-backupjobqueue

ジョブスクリプトをバックアップデータの最後に追加します。

-noestimation

ファイルサイズの推定を無効にします。デフォルトでは、各ファイルをメディアにバックアップする前に、Arcserve Backup によりジョブ完了に要する時間の予測が行われます。この機能を省略して、Arcserve Backup がバックアップをすぐに開始できるようにする場合は、このオプションを選択します。

-createcrc

CRC 値を計算してバックアップメディアに保存します。Arcserve Backup で CRC 値を自動的に計算し、バックアップジョブの実行中にその値をバックアップメディアに保存する場合は、このオプションを選択します。CRC 値は、バックアップジョブの終了直後のスキャン処理で使用することができます(-scan のグローバル検証オプションを含んでいる場合)。または、別のスキャンジョブの一部としても使用できます。

-deletefiles

ファイルのバックアップが完了した後に、そのファイルをハードディスクから削除します。メディアへのバックアップ後、ソースマシンからソースファイルを削除する場合に、このオプションを選択します。このオプションでは、保護されていない指

定フォルダのファイルのみが削除されます。空のフォルダ自体は削除されません。

このオプションはディスクのグルーミングを実行するために使用します。たとえば、バックアップジョブにフィルタを設定して、ある一定の期間アクセスのなかったファイルをバックアップした場合、その後このオプションを使用してこれらのファイルをソースディスクから削除できます。

注:

- ◆ Windows マシンの場合、保護されているシステムファイルおよび他のフィルタによってバックアップから除外されているファイルは削除されません。リモートバックアップジョブ、64ビットオペレーティングシステムローカルバックアップジョブ、または Windows Server 2008 ローカルバックアップでは、Windows Client Agent がファイルをバックアップします。バックアップ後に、このオプションは指定の保護されていないフォルダのファイルのみを削除します。空のフォルダ自体は削除されません。ただし、ブートファイルは保護されていないので削除できます。
- ◆ UNIX/Linux および Mac マシンの場合、バックアップされるすべてのファイルが削除されますが、例外は /bin、/etc、および /lib などの保護されているディレクトリ内のファイルです。保護されるディレクトリを追加指定するには、クライアントエージェントマシンの groom.cntl ファイルに追加します。

-preserveaccesstime

ファイルアクセス時刻を保存します(Windows ファイルシステムのみ)。このオプションは、Arcserve Backup に前回バックアップが行われた時のアクセス時刻を保存させます。

ファイルのアクセス時刻は、ファイルがアクセス(読み取りまたは書き込み)されると常にオペレーティングシステムにより自動的に更新されます。ただし、フルバックアップの実行後は、すべてのバックアップされたファイルのアクセス時刻も更新されます。そのため、ファイルが実際にアクセス(バックアップ以外)されたのかどうかを追跡したい場合は、元のアクセス時刻を保存する必要があります。

- ◆ このオプションを含めないと、バックアップされるすべてのファイルの前回のファイルアクセス時刻がバックアップ完了時の新しい値に更新されます。これはデフォルトの設定です。
- ◆ このオプションを含めると、Arcserve Backup によって、バックアップされるすべてのファイルの前回のファイルアクセス時刻が、バックアップが実行される前の現在の時刻で保存されます。

-eject

ジョブの終了後、ドライブからメディアをイジェクトします。このオプションを使用すると、他のジョブによってメディアの情報に上書きされるのを防ぐことができます。このオプションは、ライブラリの環境設定で選択した設定より優先されます。

-noeject

ジョブの終了後、ドライブからメディアをイジェクトしません。このオプションは、ライブラリの環境設定で選択した設定より優先されます。

-partialdbupdate

ジョブおよびセッション情報のみを Arcserve Backup データベースに記録します。このオプションを選択すると、ジョブとセッションの情報のみがデータベースに記録されます。この方法を選択することをお勧めします。

注：Windows でこのオプションを選択すると、詳細情報はデータベースにマージされません。カタログ データベースを有効にしてこのオプションを選択すると、カタログ ファイルは CATALOG.DB フォルダに格納されます。カタログ データベースを有効にしていない場合は、カタログ ファイルはマージ後に削除されます。

-nodbupdate

データベースに記録しません。このジョブに関する情報をいっさいデータベースに記録しません。また、Arcserve Backup データベースをバックアップの対象としている場合や、ディスク容量が残り少なくなった場合も、このオプションを選択します。

データベース表示を使用してデータベースをリストアする前に、あらかじめ [メディアのマージ] 操作をサブミットする必要があります。

-disableResetArchiveBitForDedupe

コマンドで指定したすべてのファイルに対して、アーカイブビットのリセットを無効にします。このスイッチを省略すると、デフォルトでアーカイブビットがリセットされます。

重要：このスイッチは慎重に使用してください。アーカイブビットは、特定のファイルに「変更済み」マークを付けるものです。最適化を設定してデデュプリケーション ジョブを実行する場合、デデュプリケーションが実際に実行されるのは、前回のバックアップ以降に「変更済み」マークが付いたファイルのみです。バックアップ ジョブの完了後は、ファイルのアーカイブビットをリセットする必要があります。アーカイブビットがリセットされないと、ファイルが「変更済み」と自動的に見なされるため、実際は変更されていない場合でも、その後のバックアップ ジョブで最適化に含まれてしまいます。

アーカイブビットのリセットを無効にする必要があるのは、最適化ジョブでカスタム デデュプリケーションによってバックアップするファイルが、GFS ジョブなどのほか

のバックアップジョブによってもバックアップされるような状況です。このような状況では、最初のジョブの後にアーカイブビットをクリアすると、GFS ジョブに影響を与えます。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup のジョブ実行前/後の処理オプション

ca_backup コマンドには、以下の実行前/後のグローバル処理オプションが含まれます。

ca_backup

[-preexec <command>]

[-exitcode <exit code(>=0)>] [-skip_delay|-skip_job] [-skip_post]

[-preexectimeout <minutes(0-32767)>]

[-postexec <command>]

[-skippostfail]

[-skippostincmp]

[-skippostcmp]

[-prepostuser <user name>]

[-prepostpassword <user password>]

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注：このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-exitcode <exit code(>=0)>[-skip_delay|-skip_job] [-skip_post]

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。skip_delay スイッチ、skip_job スイッチ、および skip_post スイッチと共に使用します。

-skip_delay

指定された終了コードを受け取ると同時に、バックアップジョブを実行します。

-skip_job

指定された終了コードを受け取った場合に、バックアップジョブを完全にスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、ジョブの終了後に実行されるコマンドをスキップします。

-skippostfail

ジョブが失敗した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostincmp

ジョブが未完了の場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostcmp

ジョブが完了した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-preexectimeout <minutes(0-32767)>

バックアップジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。指定する時間範囲は、0 ～ 32767 分です。

デフォルト：0 分

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注：このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-prepostuser <username>

このバックアップジョブをサブミットしているユーザの名前を指定します。

-prepostpassword <user password>

バックアップジョブをサブミットするユーザのパスワードを指定します。

詳細情報：

[ca_backup - 例](#)

ca_backup ログオプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバルログオプションが含まれます。

ca_backup

`[-logfile <allactivity | summary [consolidate] | disabled | errorsonly>]`

`-logfile <allactivity | summary [consolidate] | disabled | errorsonly>`

バックアップジョブ実行時のアクティビティを、ジョブログに記録します。従属オプションから1つを指定し、記録される情報を制御する必要があります。

allactivity

ジョブ実行中に発生したすべてのアクティビティを記録します。

summary

ソース、デスティネーション、セッション番号、合計、およびエラーなどのサマリ情報のみを記録します。

consolidate

子ジョブログをマスタジョブに統合します。このオプションは、サマリオプションを使用する場合にのみ使用できます。

disabled

ログが無効になり、ジョブに関する情報を記録しません。

errorsonly

ジョブの実行中に発生したエラーのみ記録します。

デフォルト: 統合なしのサマリです。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup メディアのエクスポート オプション

ca_backup コマンドには、以下のグローバルメディア エクスポート オプションが含まれます。

ca_backup

[-export <all|duplicate>]

-export

バックアップ ジョブの最後にメディアをエクスポートできます。これにより、メディアをライブラリから移動したり、安全なオフサイトの保管場所へ移動したりできるようになります。ジョブで検証が行われる場合、エクスポートは検証後に行われます。このオプションを含めないと、バックアップ ジョブの最後にメディア エクスポートは行われません。

all

Arcserve Backupは、関連のバックアップのテープをすべてエクスポートします。ジョブが複数のテープにまたがっている場合、このジョブで使用されているすべてのテープがエクスポートされます。RAID テープ セットが対象の場合、このジョブのすべてのテープがエクスポートされます。Arcserve Backup は、次のテープをメール スロットに移動できるよう、メール スロットが空であるかどうか数回確認を行います。全テープをエクスポートするメール スロットがない場合、エクスポートできないテープは元のホーム スロットへ戻されます。オペレータがメール スロットからテープを取り出していない場合、Arcserve Backup がその情報をアクティビティ ログに書き込みます。

duplicate

RAID1 をサポートするオプションです。Arcserve Backup は、RAID 1 関連のバックアップのメディアをエクスポートします。ジョブが複数のメディアにまたがっている場合、このジョブで使用されているすべてのメディアがエクスポートされます。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup 詳細オプション

ca_backup コマンドには、以下の詳細グローバルオプションが含まれます。

ca_backup

[-skipdirandvol | -traversedirandvol]

[-bkmountpt]

[-preserve_hardlink]

[-dr_partialnodeinfo]

[-dr_includefiltered]

[-sql_norotation]

[-sql_nopartialupdate]

-skipdirandvol

ディレクトリジャンクションとボリューム マウント ポイントをスキップするように指定します。このオプションを含めた場合、バックアップ ジョブでは、ディレクトリジャンクションが参照するディレクトリ、およびボリューム マウント ポイントが参照しているボリュームがバックアップされません。そのため、リストア時には、参照先のディレクトリやボリュームに格納されているファイルやディレクトリはリストアできません。

-traversedirandvol

ディレクトリジャンクションとボリューム マウント ポイントをトラバースするように指定します。このオプションを含めると、バックアップ ジョブは指定されたディレクトリまたはボリュームをトラバースしてバックアップすることができます。このセッションのリストア時には、参照先のボリュームやディレクトリに格納されているファイルやディレクトリをリストアできます。このオプションを含めない場合、バックアップ ジョブでは、ボリューム マウント ポイントが参照するボリュームまたはディレクトリジャンクションが参照するディレクトリがバックアップされません。そのため、リストア時には、参照先のボリュームやディレクトリに格納されているファイルやディレクトリはリストアできません。

-bkmountpt

マウント ポイントがマウントされたボリュームの一部としてマウント ポイントをバックアップします。このオプションを含めると、ボリューム マウント ポイントによって参照されているボリュームは、ボリューム マウント ポイントと同じセッションの一部としてバックアップされます。このオプションを含めない場合、ボリューム マウント ポイントが参照するボリュームを、別のセッションとしてバックアップできます。

注 -

:

このオプションは、Windows

X-P

および

Windows

2003

のオ

ペ
レ-
ー
テ-
ィ
ン
グ

シ
ス
テ
ム
上
で
の
み
サ
ポ-
ー
ト
さ
れ
て
い
ま
す-
。

-preserve_hardlink

このオプションでは、ハードリンクはバックアップされますが、参照されているファイルはバックアップされません。このオプションを含めない場合、ハードリンクで参照されたファイルはバックアップされます。

注-
:

こ
の
オ
プ

シ-
ヨ
ン
は-
、
W-
i-
n-
d-
o-
w-
s

X-
P

お
よ
び

W-
i-
n-
d-
o-
w-
s

2-
0-
0-
3

の
オ
ペ
レ-
ー

ティング

システム上でのみサポートされています。

-dr_partialnodeinfo

一部が選択されたノードの惨事復旧情報を生成します。惨事復旧情報は、通常はマシンのフルバックアップを実行する際に生成されます。ただし、マシンのフルバックアップを頻繁に実行できない環境 (SAN共有ディスク環境など) でも、惨事復旧情報を最新の情報に更新する必要がある特殊なケースもあります。このオプションを含めることで、マシンにあるすべての情報をバックアップすることなく、マシンの惨事復旧情報を作成または更新できます。

-dr_includefiltered

リストアセッション情報の生成時にフィルタされたセッションを含めます。惨事復旧情報を生成する場合は、Arcserve Backup サーバでは、惨事復旧情報の生成時に、フィルタされていないマシン関連の最新バックアップセッションのみが追跡されます。デフォルトの場合、フィルタを使用してマシンをバックアップすると、フィルタされたバックアップセッションは、システムの復旧時に、惨事復旧処理に使用されません。このオプションを含めると、デフォルトの動作が変更さ

れ、システムの復旧時に、フィルタされたバックアップセッションを惨事復旧処理に使用することができます。

このオプションはデフォルトでは含まれません。このオプションを含めると、ジョブ単位でオプションが適用されます。ジョブに複数のマシンのバックアップが含まれている場合、これらのオプションはすべてのマシンに適用されます。

重要: 特に、システムボリュームの場合、このオプションを含めることは非常に危険です。システムファイルが失われ、完全には復旧できなくなる可能性があります。

-sql_norotation

差分または増分バックアップ方式を Microsoft SQL Server データベースに適用しません。Arcserve Backup で Microsoft SQL Server データベースのバックアップに対して差分バックアップまたは増分バックアップの方式を適用しないようにするには、このオプションを含めます。

-sql_nopartialupdate

データベースのフルバックアップが見つからない場合、Microsoft SQL Server 部分バックアップをデータベースのフルバックアップに自動的にアップグレードしません。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup の VSS オプション

ca_backup コマンドには、以下のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) オプションが含まれており、ファイルシステムのバックアップ中にファイルが処理される頻度を指定できます。

ca_backup

[-vss_usevss [revertoff]]

[-vss_exclinclsoff]

[-vss_exclexclsoff]

[-vss_onfail]

-vss_usevss

Arcserve Backup に、オープンファイルのバックアップの処理に VSS を使用するように指定します。

このスイッチが含まれない場合、VSS サポートは使用されず、Arcserve Backup Agent for Open Files (利用可能な場合) が、オープンファイルを処理するのに使用されます。Arcserve Backup Agent for Open Files が使用不可能で、-vss スwitchが含まれない場合は、従来のバックアップが実行されます。ただし、バックアップできないオープンファイルがある場合は、バックアップは完了しません。

revertoff

このオプションを選択すると、VSS バックアップの作成に失敗した場合に、Arcserve Backup が従来のバックアップを実行するように設定できます。Arcserve Backup Agent for Open Files が利用可能な場合、このスイッチが含まれ、VSS バックアップが失敗すると、それによりオープンファイルが処理されません。

このスイッチが含まれずに VSS バックアップが失敗した場合、バックアップジョブも失敗します。

接尾辞「off」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_exclinclsoff

ライタに組み込まれたファイルを、ファイルシステムバックアップから除外するように指定します。これにより、ライタのコンポーネントに属するファイルが従来のファイルシステムバックアップによってバックアップされるのを回避できます。

このスイッチを含めることにより、以下の利点があります。

- ◆ VSS によってすでにバックアップされているファイルのバックアップを回避できます。
- ◆ 従来のバックアップから一部のファイルが除外されるため、従来のバックアップで処理されるファイル数が減り、処理時間を短縮できます。
- ◆ グループとして処理する必要のあるファイルに関する問題が発生しないので、バックアップの成功率が向上します。

接尾辞「off」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_exclexclsoff

ライタで除外されたファイルを、ファイルシステム バックアップから除外するように指定します。これにより、コンポーネントによるバックアップから除去されたファイルが、従来のファイルシステム バックアップによってバックアップされないようにできます。

接尾辞「off」は、このオプションがデフォルトではオンですが、ユーザがこの接尾辞を含めると、オプションがオフに設定されることを示します。

-vss_onfail

コンポーネント ファイルがライタのバックアップに失敗すると、バックアップを中止するように指定します。これにより、コンポーネントのバックアップのいずれかが失敗した場合は、ライタのバックアップをキャンセルします。コンポーネントのバックアップは、そのコンポーネントに含まれるファイルが1つでも正常にバックアップされなかった場合に失敗します。

このスイッチを含めると、バックアップの整合性が保たれ、ライタに関連付けられているコンポーネントの数に関係なく、ライタに関連付けられているすべてのファイルがバックアップされてはじめてバックアップが成功したとみなされます。

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - グローバルフィルタ オプション

フィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをバックアップジョブから除外したり組み込んだりできます。フィルタを使用することで、目的のファイルを絞り込むことができます。フィルタには、ジョブ全体に適用されるグローバルフィルタ、特定のノードに適用されるノードレベルフィルタ、または特定のファイルシステムに適用されるボリュームレベルフィルタがあります。適用されるフィルタのレベルは、ca_backup コマンド内での -filter スイッチの位置によって決定されます。

重要: フィルタを誤って使用すると、データがバックアップされない可能性があります。フィルタを指定または適用する場合は注意してください。

ca_backup コマンドには、以下のフィルタオプションが含まれます。

ca_backup [-filter

[<include|exclude> <file|dir> <pattern>]]

[<include|exclude> [<attribute> [hidden] [readonly] [system] [archive]]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <onorbefore|onorafter <mm/dd/yy [yy]>>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <within <count> days|months|years>>]]

[<include|exclude> [<size> <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>]]

[<include|exclude> [<size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>]]

include

結果には、フィルタの条件を満たすファイルのみが含まれます。たとえば、ローカルハードディスクドライブ全体のバックアップを選択して、\SYSTEM ディレクトリ内のファイルを組み込むようフィルタを設定した場合を考えてみます。この場合、\SYSTEM ディレクトリ内のファイルのみが Arcserve Backup によってバックアップされます。それ以外のディレクトリにあるファイルはバックアップされません。

exclude

除外は常に組み込みに優先します。たとえば、フィルタを追加して、拡張子が .exe のファイルを組み込み、さらにもう 1 つフィルタを追加して、\SYSTEM ディレクトリを対象から除外するよう設定すると、\SYSTEM ディレクトリに保存されている拡張子 .exe のファイルは、すべて除外されます。

file|dir <pattern>

指定したパターンに基づいて、ファイルまたはディレクトリを組み込むか除外するかを指定します。

注：ディレクトリを組み込むパターンフィルタを選択して、絶対パスを指定しない場合、ユーザが指定した条件に一致しないすべての空のディレクトリがバックアップされます。リストア時に空のディレクトリが作成されることを防ぐには、リストアジョブを作成するときにグローバルリストアオプションの「空のディレクトリを作成する」を無効にします。

attribute [hidden] [readonly] [system] [archive]

指定したファイル属性を持つファイルを組み込むか、または除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <onorbefore|-onorafter <mm/dd/yy[yy]>>

指定した日付以前/以後に更新、変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>

指定した2つの日付の間に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <within <count> days|months|years>

指定された日数、月数、または年数以内に最後に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>

指定されたサイズ「に等しい」、「より大きい」、「より小さい」ファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>

指定されたサイズの範囲内にあるファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

注：グローバルフィルタオプションでは、以下のような条件があります。

- UNIX サーバの場合、Arcserve Backup は「create」コマンドをファイルの変更日を指定しているものと自動的に解釈します。
- 更新時刻は、状態変更時刻とは異なります。修正時間は、ファイルの内容が変わったことを意味します。状態変更時刻とは、ファイルのプロパティまたは属性が変更(権限や所有者情報の変更など)された時刻のことであり、内容が変更された時刻ではありません。

- ファイルシステムによっては状態変更日やアクセス日が記録されないため、これらのグローバルフィルタがジョブに使用できない場合があります。
- Arcserve Backup では、包含および除外フィルタリングにワイルドカード文字アスタリスク「*」とクエスチョンマーク「?」を使用できます。アスタリスクのワイルドカードは、任意の数の文字と一致するように指示します。疑問符のワイルドカードは、任意の文字と一致するように指示します。

例:

- 拡張子「tmp」を持つすべてのファイルを組み込む/除外するには、以下を実行します。
-filter include/exclude file *.tmp
- パターン「a01???」に一致するすべてのディレクトリを組み込む/除外するには、以下を実行します。
-filter include/exclude dir a01???

詳細情報:

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ソース引数

ca_backup ソース引数によって、バックアップを行うパスまたはロケーションを指定できます。

ca_backup コマンドは、以下のソース引数を提供します。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -filesystem <filesystem>
[<relative directory>] [-inputfile <filename>] [volume options]
```

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] [-fsfile <filename>]
```

host type: unix|nt|nwagent|ntagent|w95agent|mac

Windows での使用法は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]<hosttype>] [node options] -filesystem
<filesystem> | <folder path> [-filelist <file list>] [volume options]
```

UNIX での使用法は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]<hosttype>] [node options] -filesystem
<filesystem> [<relative directory>] [-filelist <file list>] [volume options]
```

Raw デバイス特有のバックアップ(UNIXのみ)は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -raw <raw device> [volume
options]
```

VSS 特有のバックアップは以下のとおりです。

```
ca_backup -source [-vss <vsswriter path> [-vsswriter [-transport [retainshadowcopy]]]
-excludeincludedinthis] [-erroroncefail]] [-method <full|incr|diff|copy|log>]
```

データベースバックアップ(UNIXのみ)は以下のとおりです。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>]] [node options] -database <dbase type>
<dbase name|SQL server> [<tablespaces>] [dbase options]
```

-source [<hostname>[<hostIP>]]

バックアップするソースマシンを指定します。hostname の指定がない場合、デフォルトのマシンがローカルマシンになります。このスイッチは、ca_backup コマンド内で複数回指定できます。バックアップするソースマシンごとに必ず指定してください。他のスイッチを指定せずに -source スイッチを使用すると、デフォルトではソースマシン全体がバックアップされます。

注： -source にはマシンのホスト名のみを指定できます。このホスト名には、使用しているネットワークで解決できるものを指定する必要があります。

-filesystem <filesystem name> <relative directory> <folder path>

バックアップするファイルシステムまたはフォルダを指定します。オプションで、そのファイルシステムに含まれるディレクトリも指定できます。このスイッチは、ca_

backup コマンド内で複数回指定できます。バックアップするファイルシステムごとに必ず指定してください。

注: Windows NT では、名前に空白文字が含まれるフォルダやファイルをバックアップする場合に、名前を引用符で囲む必要があります。

-filelist <file list>

バックアップするファイルを個別に指定します。-filesystemスイッチと共に使用します。

-inputfile <filename>

バックアップするファイルのリストを含むファイル名を渡すために使用します。このスイッチを -filelist <file list> の代わりとして使用できます。また、-source および -filesystem オプションと共に使用することもできます。

-fsfile <filename>

バックアップするファイルシステムのリストを含む外部テキストファイルからの入力を指定します。以下の情報を定義することで、バックアップの詳細レベルを指定できます。

- ◆ バックアップするファイルシステム
- ◆ バックアップするファイルシステムの関連ディレクトリ
- ◆ ターゲットのファイルシステム内で使用するファイルを指定する-filelistオプションとファイル名
- ◆ 別の外部ファイルからファイルを追加する-inputfile オプションとファイル名

以下の構文を使用して実行します。

```
[filesystem name] [relative_dir][-filelist <file1><file2>][-inputfile <filename>]
```

-raw <raw device>

バックアップする raw デバイスを指定します。

注: この引数は、UNIXおよびLinuxプラットフォームのみに適用されます。

-username <user name>

バックアップするソースマシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、ソースマシンにログインするために使用されます。

-password <password>

ソースマシンへのログインに使用されるユーザのパスワードを指定します。

注: リリース r16 以降、バックアップジョブは自動的に ASDB から直接ユーザ認証情報を取得します。その結果、この password パラメータを指定する必要はなくなります。

ca_backup コマンド ライン ユーティリティは、バックアップ ソースをさらに識別し検索するために、以下のオプションもサポートします。

- ノード オプション
- ボリューム設定オプション
- データベース オプション

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - ノード オプション](#)

[ca_backup - ボリューム設定オプション](#)

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ノード オプション

バックアップするホスト(ノード)を選択する際に、ノードレベルのオプションおよび適用されるフィルタを設定し、ノードレベルの情報を表示できます。

ca_backup コマンドには、以下のノード オプションが含まれます。

ca_backup

[-username <username>]

[-password <password>]

[-noestimation]

[-filter <node filters>]

(UNIX および Linux のみ)

[-traversesymmlink]

[-traversenfs]

[-resetaccesstime <on|off>]

[-acrossfs]

-username <user name>

バックアップするソース マシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、ソース マシンにログインするために使用されます。

注: ca_backup を使用する場合、バックアップ ソースに関係なく、-username を指定する必要があります。バックアップ ジョブが起動したら、コマンドラインで提供されたユーザ名とパスワードは、Arcserve Backup データベースから取得した認証情報で上書きすることができます。データベース内の認証情報が期限切れである場合、ジョブは失敗します。ジョブが失敗するのを防ぐには、caroot として GUI にログインし、ソース ノード用の新しいユーザ名およびパスワードを提供します。

-password <password>

ソース マシンへのログインに使用されるユーザのパスワードを指定します。

注: ca_backup を使用する場合、バックアップ ソースに関係なく、-password を指定する必要があります。バックアップ ジョブが起動したら、コマンドラインで提供されたユーザ名とパスワードは、Arcserve Backup データベースから取得した認証情報で上書きすることができます。データベース内の認証情報が期限切れである場合、ジョブは失敗します。ジョブが失敗するのを防ぐには、caroot として GUI にログインし、ソース ノード用の新しいユーザ名およびパスワードを提供します。

-noestimation

バックアップの前に行われるファイルサイズの推定を無効にします。

-filter <node filters>

ノード レベルで(特定のノードへ) フィルタを適用します。適用されるフィルタのレベルは、ca_backup コマンド内での -filter スイッチの位置によって決定されます。

-traversesymlink

バックアップ中にシンボリックリンクをトラバースし、リンクそのものだけでなく、リンクがポイントする実際のファイルをバックアップします。

注：このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-traversenfs

マウントされている NFS ファイルシステムをバックアップ中にトラバースします。デフォルトでは、マウントされているファイルシステムは、バックアップ中にスキップされます

注：このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-resetaccesstime <on|off>

Arcserve Backup がバックアップ実行のためにファイルにアクセスした際に変更されるファイルアクセス時刻をリセットするかどうかを指定します。

注：このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

-acrossfs

バックアップ中にファイルシステムをトラバースします。

注：このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

詳細情報：

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - ソース引数](#)

[ca_backup - ボリューム設定オプション](#)

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ボリューム設定オプション

バックアップするボリューム オブジェクトを選択 する際に、ボリュームレベルのオプションおよび適用されるフィルタを設定し、ボリューム関連の情報を表示 できます。

ca_backup コマンドには、以下 のボリューム設定 オプションが含まれます。

ca_backup

[-volscan | -volcompare]

[-volgroomdisable]

[-volsessionpw <session password>]

[-volencryption <encryption key>]

[-volcompression]

[-filter <volume filters>]

(UNIX のみ)

[-priority <priority level>]

-volscan

ファイルシステム(ボリューム) のバックアップの整合性を検証します。バックアップメディアをスキャンして各ファイルのヘッダをチェックします。ヘッダが読み取り可能な場合、データは信頼できるものとみなされます。

-volcompare

ファイルシステム(ボリューム) のバックアップの整合性を検証します。バックアップメディアからデータブロックを読み出し、その内容をソースマシン上のソースファイルと1バイトずつ比較します。

-volsessionpw <session password>

ファイルシステム(ボリューム) のバックアップを含むテープのセッションにセッションパスワードを適用します。

このオプションを使用してバックアップされたセッションをリストアするには、ca_restore -tapesessionpwオプションを使用してリストアジョブを実行する必要があります。

-volencryption <encryption key>

バックアップ前にファイルを暗号化します。このセッションに含まれる暗号化されたファイルをリストアするには、パスワードを入力する必要があります。

-volcompression

このファイルシステム(ボリューム) のみ、ファイルを圧縮してからバックアップを実行します。

-filter <volume filters>

ボリュームレベルで(特定 のファイルシステムに) フィルタを適用します。適用されるフィルタのレベルは、ca_backup コマンド内での -filter スイッチの位置によって決定されます。

-priority <priority level>

ジョブに含まれるノード/ボリュームにバックアップの優先順位を割り当てます。優先順位の範囲は 1(最高) ～ 255(最低) です。

注：このオプションは、UNIX および Linux にのみ適用されます。

詳細情報：

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - ソース引数](#)

[ca_backup - ノード オプション](#)

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - データベース オプション

バックアップするデータベース オブジェクトを選択する際に、一部のデータベース固有のオプションが適用されるように設定し、データベース関連の情報を表示できます。

注： Arcserve Backup は、すべてのデータベース エージェントに対しては、単一のコマンドによる複数のデータベース/アプリケーション インスタンスのバックアップをサポートしていません。複数のコマンドを使用してインスタンスごとにバックアップする必要があります。

ca_backup コマンドには、以下のデータベース オプションが含まれます。

ca_backup

[-dbusername <database username>]

[-dbpassword <database password>]

-database <database type> [database name]

-dbusername <database username>

バックアップするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名を指定します。

-dbpassword <database password>

バックアップするデータベースにログインするためのデータベース ユーザのパスワードを指定します。

-database <database type> [database name]

バックアップされるデータベースのタイプと名前を指定します。

サポートされている有効なデータベース タイプは、以下になります。

- ◆ SQL Server (SQL)
- ◆ Exchange DOC Level (EXCHANGEDOC)
- ◆ Exchange DB Level (EXCHANGEDB)
- ◆ Sybase (SYBASE)
- ◆ Informix (INFORMIX)
- ◆ Oracle (ORACLE)
- ◆ Oracle RMAN (ORACLERMAN)
- ◆ Lotus (LOTUS)

例：

-database SQL

-database EXCHANGEDOC

- database EXCHANGEDB
- database SYBASE
- database INFORMIX
- database ORACLE
- database ORACLERMAN
- database LOTUS

詳細情報:

[ca_backup - Oracle データベース オプション](#)

[ca_backup - Oracle RMAN データベース オプション](#)

[ca_backup - Exchange DOC レベル データベース オプション](#)

[ca_backup - Exchange DB レベル データベース オプション](#)

[ca_backup - SQLServer エージェント オプション](#)

[ca_backup - Sybase エージェント データベース オプション](#)

[ca_backup - Informix エージェント データベース オプション](#)

[ca_backup - VSS エージェント データベース オプション](#)

[ca_backup - Lotus エージェント データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Oracle データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Oracle データベース オプションが含まれます。

[`-oracle_sid <Oracle SID>`]
[`-oracle_offline`](UNIX Oracle エージェントのみ)
[`-oracle_purgelog`](UNIX Oracle エージェントのみ)
[`-oracle_timefinder`](UNIX Oracle エージェントのみ)

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド `ca_backup allusage` を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注：Arcserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、Arcserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-oracle_sid <Oracle SID>

バックアップする Oracle データベースの Oracle SID(システム識別子) を指定します。

-oracle_offline

Oracle データベースをオフライン モードでバックアップするように指定します(データベースのフルバックアップのみサポート) 。

-oracle_purgelog

ログのバックアップ後にログをパージします。

-oracle_timefinder

データベースのバックアップに Symmetrix の Timefinder オプションを使用するかどうかを指定します。このオプションでは、データベースのミラー イメージが一時的に作成され、そのミラー イメージをエージェントがバックアップします。

例：

ca_backup の ORACLE データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、単一の表領域 tbs1 をバックアップします。
`ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE <instance name> "tbs1" [dbase options]`
- 以下のコマンドは、複数の表領域 tbs1、tbs2、および tbs3 をバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> "tbs1" "tbs2" "tbs3" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、表領域の単一のファイルをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> -table SYSAUX "|u01|app|oracle|product|10.1.0|db_
1|oradata|dborcl|sysaux01.dbf" -dbusername system -dbpassword manager -
username root -password caworld
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> "CONTROL FILE" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、アーカイブ ログをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> "ARCHIVE LOG" [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルおよびアーカイブ ログをバックアップします。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> "CONTROL FILE" "ARCHIVE LOG" -dbusername system -
dbpassword system -username root -password caworld
```

- 以下のコマンドは、データベースのフルバックアップを行います。データベースに5つの表領域 (tbs1、tbs2、tbs3、tbs4、tbs5) があり、フルデータベースバックアップを行うと仮定します。これらすべての表領域、アーカイブ ログ、および制御ファイルをバックアップする場合を考えます。

```
ca_backup -source [<hostname>[<hostIP>][<hosttype>]] -database ORACLE
<instance name> "tbs1" "tbs2" "tbs3" "tbs4" "tbs5" "CONTROL FILE" "ARCHIVE
LOG" [dbase options]
```

詳細情報:

[ca_backup - データベースオプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Oracle RMAN データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Oracle RMAN データベース オプションが含まれます。

-use_rmancat

[-rman_catdbname <rman_catdbname>]

[-rman_catuser <rman_catuser>]

[-rman_catpassword <rman_catpassword>]

-bkincremental

[-rman_incrementallevel <bkincremental> [-cumulative]

[-bkrecoveryarea]

[-oracle_offline]

[-oracle_purgeolog]

[-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>]

[-rman_archlogsel

al_all | al_pattern -rman_alpattern <rman_alpattern> |

al_time [-rman_alfromtime <rman_alfromtime>] [rman_aluntiltime <rman_aluntiltime>] |

al_scn [-rman_alfromscn <rman_alfromscn>] [-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>] |

al_logseq [-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>] [rman_aluntillogseq <rman_aluntillogseq>]

[-rman_althread <rm_althread>]]

[-rman_bakpieceprefix <rman_bakpieceprefix>]

[-rman_bakpiecesuffix <rman_bakpiecesuffix>]

[-rman_bakpiecesize <rman_bakpiecesize>]

[-rman_baksetsize <rman_baksetsize>]

[-rman_blocksize <rman_blocksize>]

[-rman_readrate <rman_readrate>]

[-rman_maxopenfile <rman_maxopenfile>]

[-rman_numcopies <rman_numcopies>]

[-rman_numfilesperbakset <rman_numfilesperbakset>]

[-rman_baktag <rman_baktag>]

[-rman_script <rman_script>]

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注：Arcserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、Arcserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-use_rmancat

カタログを使用します(推奨)。操作にRMANカタログを使用するかどうかを指定します。常にRMANカタログを使用することをお勧めします。カタログを使用しない場合、RMANはデータベース制御ファイルを使用するためです。この制御ファイルが失われると、RMANがデータベースをリストアできなくなります。

デフォルト: オン

-rman_catdbname <rman_catdbname>

このスイッチはリカバリカタログデータベースでOracle RMAN ca_backup ジョブを実行しようとした場合にのみ、カタログデータベース名を含めるために使用されます。

デフォルト: 空白

-rman_catuser <rman_catuser>

RMANカタログを所有するOracleユーザの名前。

-rman_catpassword <rman_catpassword>

RMANカタログを所有するユーザのパスワード。

-bkincremental

これは、フルバックアップオプションの代わりに選択できる値です。以下に説明されている増分レベルオプションと累積オプションに応じて、最後に行われたバックアップ以降にバックアップされていないデータブロックのみを送るように、RMANに指示します。このオプションはバックアップマネージャ内でラジオボタンによって表され、デフォルトで選択されていません。当然ながら、増分バックアップをフルバックアップと一緒に選択することはできません。バックアップされるOracleオブジェクトが制御ファイルやアーカイブログである場合は、このオプションを使用できません。

-rman_incrementallevel <bkincremental>

このオプションを使用すると、実行される増分バックアップのレベルを指定できます。RMANは、指定されたレベル以下の最後の増分バックアップ以降に変更されたデータブロックのみをバックアップします。このフィールドに入力できる値は、Oracle 8、8i、および9iの場合で0～4です。Oracle 10gでは、レベルは0と1のみに限定されます。ユーザがこのフィールドにデータを入力できるのは、増分バックアップオプションが選択されている場合だけです。

デフォルト: 0(フルバックアップ)

-cumulative

このオプションは、レベルn-1以下で行われた最後の増分バックアップ以降に使用されたデータブロックを送るように指定します。このオプションは、バックアップマネージャ内でチェックボックスによって表されます。

デフォルト: オフ

-bkrecoveryarea

このスイッチを使用すると、バックアップされるオブジェクトのリストに Oracle リカバリ領域を含めることができます。Oracle 10g 以降にのみ適用されます。

デフォルト: オフ

-oracle_offline

Oracle データベースをバックアップする場合にのみ使用します。オフラインモードで Oracle データベースをバックアップします。表領域はバックアップしません。

-oracle_purgeolog

Oracle データベースをバックアップする場合にのみ使用します。ログのバックアップ後にログをパージします。

-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>

このオプションを使用すると、バックアップ操作を実行するために RMAN によって割り当てられるチャンネルの数を指定できます。RMAN は同時に複数のジョブ (各チャンネルにつき1つ) をサブミットします。

デフォルト: 1 チャンネル

-rman_archlogsel

バックアップ マネージャ GUI の [ソース] パネルに「アーカイブ ログ」オブジェクトが含まれている場合は、このパネルの「アーカイブ ログの選択」セクションでバックアップするアーカイブ ログを選択できます。選択内容はラジオボタンオプションによって示されます。[すべて] は、すべてのアーカイブ ログをバックアップします。

デフォルト: すべて

-rman_alpattern <rman_alpattern>

アーカイブ ログをその名前に基づいて選択するための文字列パターン。

-rman_alfromtime <rman_alfromtime>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログをその作成時刻に基づいて選択できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻下限を指定します。この時刻以降に作成されたアーカイブ ログのみがバックアップされます。

-rman_aluntiltime <rman_aluntiltime>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログをその作成時刻に基づいて選択できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択する際の時刻上限を指定します。この時刻以前に作成されたアーカイブ ログのみがバックアップされます。

-rman_alfromscn <rman_alfromscn>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログの範囲を時刻ではなくSCN(システム変更番号) によって指定できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択 する際のSCN下限を示します。このフィールドは、「SCN 上限」フィールドが空白でない場合に空白にできます。

-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>

このオプションを使用すると、バックアップされるアーカイブ ログの範囲を時刻ではなくSCN(システム変更番号) によって指定できます。このフィールドは、アーカイブ ログを選択 する際のSCN上限を指定します。このフィールドは、ユーザが「SCN下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択 できます。このフィールドは、バックアップするアーカイブ ログを決定するための最小のログ シーケンス番号に対応します。このフィールドは、[ログシーケンスの終了] オプション(-rman_aluntillogseq) に値が入力されている場合のみ空白にできます。

-rman_aluntillogseq <rman_aluntillogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選択 できます。このフィールドには、選択 するアーカイブ ログのシーケンス番号の上限を指定します。このフィールドへの値の入力は、ユーザが「ログ シーケンス下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_althread <rman_althread>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログを生成したOracleサーバを識別するスレッド番号を指定できます。このパラメータは、以下で説明されている「時刻ベース」オプション、「SCNベース」オプション、または「ログ シーケンスベース」オプションと組み合わせて使用されます。このオプションは、「すべて」オプションまたは「パターン ベース」オプションが使用されている場合は無視されます。

デフォルト: 1

注: この値は OPS(Oracle Parallel Server、Oracle 8 と 8i の場合) または RAC(Real Application Cluster、Oracle 9i と 10g の場合) でのみ使用され、それ以外の場合、スレッド番号は常に 1 です。

-rman_bakpieceprefix <rman_bakpieceprefix>

バックアップ ピース フォーマットのエントリの左部分 (または接頭辞) 。

-rman_bakpiecesuffix <rman_bakpiecesuffix>

バックアップピースフォーマットのエントリの右部分(または接尾辞)。

-rman_bakpiecesize <rman_bakpiecesize>

このオプションを使用すると、RMANによって生成されるバックアップピースのサイズを制限できます。このオプションを設定すると、バックアップされるデータブロックが単一のバックアップピースに収まらない場合に、RMANはすべてのデータを格納するために必要なだけの数のバックアップピースを生成します。デフォルトで、フィールドは空白になります。つまりRMANは、通常は1つのバックアップコマンド(1つのチャネルにつき)からのデータを単一のバックアップピースに入れます。

デフォルト: 空白

-rman_baksetsize <rman_baksetsize>

このオプションを使用すると、バックアップセットに格納するデータ量を制限できます。このコマンドは、バックアップセットが保有できる最大サイズ(単位はKB)を指定します。

デフォルト: 空白

-rman_blocksize <rman_blocksize>

このオプションを使用すると、バックアップの実行時にRMANがOracleエージェントに送るデータブロックのサイズを指定できます。このフィールドは、デフォルトで空白になります。値を入力した場合、ユーザはこのバックアップからリストアするときに同じブロックサイズを入力する必要があります。さもないとRMANは、バックアップでのブロックサイズとリストアでのブロックサイズが一致していないことを示すエラーメッセージを生成します。その場合、バックアップ時に使用された値がエラーメッセージに表示されます。値が入力されない場合、RMANはOracle 8または8iでは64 KBを使用し、Oracle 9iでは256 KBを使用します。

このパラメータはOracle 10gでは廃止されました。

デフォルト: 空白

-rman_readrate <rman_readrate>

これはパフォーマンス調整オプションです。このオプションを使用すると、競合を回避するために、RMANがハードディスクからデータを読み取る速度を遅くできます。デフォルトでは空白になりますが、このオプションを設定する場合、その値はRMANがディスクからデータを読み取るために1秒あたりに使用できるバッファの最大数を表します。バッファのサイズはDB_BLOCKSIZE * DB_FILE_DIRECT_IO_COUNT値に対応します。これは、Oracleデータベース構成に定義されているパラメータです。

デフォルト: 空白

-rman_maxopenfile <rman_maxopenfile>

このオプションを使用すると、RMANが同時に開くファイルの総数を制限できます。このコマンドにより、「開いているファイルが多すぎる」エラーの可能性を減らすことができます。フィールドを空白にすると、RMANはデフォルト値を使用します。

デフォルト: 8 ファイル(Oracle 10g 用)

デフォルト: 32 ファイル(Oracle 8、8i、および 9i 用)

-rman_numcopies <rman_numcopies>

このオプションを使用すると、RMANによってバックアップピースのコピーがいくつ生成されるかを指定できます。このパラメータに使用できる値は1～4です。

Oracle 8.0はこのパラメータをサポートしていません。

デフォルト: 1 コピー

-rman_numfilesperbakset <rman_numfilesperbakset>

このオプションを使用すると、RMANがバックアップセットあたりに格納するファイル(バックアップピース)の数を制限できます。指定されていない場合、RMANは、入力ファイル数をチャンネル数で割った値と64のうちの小さい方を使用します。

デフォルト: 空白

-rman_baktag <rman_baktag>

このオプションを使用すると、「タグ」と呼ばれるバックアップ識別子を入力できます。その後、このタグを使用して、リストア操作中にOracleオブジェクトのどのバージョンをRMANで使用するかを指定できます。

-rman_script <rman_script>

このオプションを使用すると、RMANスクリプトのパスを入力できます。このフィールドに値を入力すると、OracleエージェントはユーザがGUIに入力したその他すべてのオプションを無視します。スクリプトはそのままRMANに渡され、Oracleエージェントは通常どおりバックアップ操作を実行します。

詳細情報:

[ca_backup - データベースオプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Exchange DOC レベル データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Exchange DOC レベル データベース オプションが含まれます。

注：このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。
Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

ca_backup

[-exsis_glosch | [-exsis_full | -exsis_diff | -exsis_incr | -exsis_timebased
[onorafter|onorbefore date <mm/dd/yy> | days <daysprior>] [expurge]]]

[-exsisfilter mailbox <Pattern List>]

[-exsisfilter folder <Pattern List> [-defaultfolder <[Calendar][Contacts][DeletedItems]
[Drafts][Inbox][Journal][Notes][OutBox][SentItems][Tasks]>]]

[-exsisfilter attachment <Pattern List> [-attsizeexclude <size>]]

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exsis_glosch

グローバル スケジュールされたバックアップ方式を使用するように指定します。

-exsis_full

フル バックアップを実行するように指定します(メールボックス全体をバックアップ)。

-exsis_diff

差分 バックアップを実行するように指定します(最後のフルバックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

-exsis_incr

増分 バックアップを実行するように指定します(最後のバックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

-exsis_timebased

時間単位のバックアップを実行するように指定します。

従属オプションを選択して、時間単位のバックアップをスケジュールできます。

[onorafter|onorbefore date <mm/dd/yyyy>]

指定した日付に基づいて時間単位のバックアップを実行するように指定します。このオプションは、特定の日時よりも前または後のすべてのドキュメントをバックアップします。

[days <daysprior>]

ジョブ実行までの日数に基づいて時間単位のバックアップを実行するように指定します。このオプションは、ジョブ実行までの日数に基づいてすべてのドキュメントをバックアップし、この日数にはジョブの実行日までの残存日数が表示され、この値が毎日変化します。

expurge

バックアップ後にドキュメントをパージするように指定します。ドキュメントは、バックアップ後に自動的に削除されます。これは、Exchange Server の廃棄処理に便利です。たとえば、このオプションを使用すると、3 年を過ぎたドキュメントをバックアップおよび削除することができます。したがって、Exchange Server のサイズが抑えられます。

重要: このオプションは、バックアップされたすべてのドキュメントが削除されるので、慎重に使用する必要があります。

-exsisfilter mailbox <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外するメールボックスの名前、またはエージェントがそのメールボックスを除外するのに使用する基準(パターンリスト)に基づくように指定します。

-exsisfilter folder <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外するフォルダの名前、またはエージェントがそのフォルダを除外するのに使用する基準(パターンリスト)に基づくように指定します。

-defaultfolder

適用されたフィルタからデフォルトフォルダを除外するように指定します。デフォルトフォルダを除外する場合は、除外するフォルダタイプを少なくとも 1 つ指定する必要がありますが、複数指定してもかまいません。

デフォルトフォルダオプションには以下のものが含まれます。

- ◆ Calendar
- ◆ Contacts
- ◆ DeletedItems
- ◆ Drafts
- ◆ Inbox

- ◆ Journal
- ◆ Notes
- ◆ OutBox
- ◆ SentItems
- ◆ タスク

-exsisfilter attachment <Pattern List>

適用されるフィルタが、除外する添付ファイルの名前、またはエージェントがその添付ファイルを除外するのに使用する基準(パターンリスト)に基づくように指定します。

-attsizeexclude <size>

指定したサイズよりも大きな添付ファイルを除外するように指定します。

詳細情報:

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

Exchange DB レベル データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Exchange DB レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

ca_backup [-exdb_glosch | [-exdb_full | -exdb_copy | -exdb_incr | -exdb_diff]

注: ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exdb_glosch

グローバル スケジュールされたバックアップ方式を使用するように指定します。

-exdb_full

フル バックアップを実行するように指定します(メールボックス全体をバックアップ)。

-exdb_copy

フルバックアップを実行し、ログ ファイルをパージしないように指定します。

-exdb_incr

増分 バックアップを実行するように指定します(最後のバックアップ以降に変更された部分のみをバックアップ)。

-exdb_diff

差分 バックアップを実行するように指定します(最後のフル バックアップから変更された部分のみをバックアップ)。

詳細情報:

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - SQL Server データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の SQL Server 特有のオプションが含まれます。

```
ca_backup -source [<hostname>]
[ノード オプション]
<-database SQL <instance name>>
[[<dbase name>] [dbase options]]
[-sql_np]
[dbaccess options]
```

注： ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_np

リモート プロトコルとして「名前付きパイプ」を指定します。名前付きパイプによって、関連のないプロセスが互いに通信できるようになります。この名前付きパイプは、オペレーティング システムおよび他のプログラムが、プロセス間通信および単一のマシン内部またはネットワークにわたって情報を交換するための手段として使用する名前付きパイプと同様の仕組みを持っています。

dbase オプション

検出された SQL Server エージェントのタイプ向けに利用可能な特定のデータベース オプションを提供します。

dbaccess オプション

検出された SQL Server エージェントのタイプで利用可能な特定のデータベース アクセス オプションを提供します。

詳細情報：

[ca_backup - SQLServer エージェント オプション](#)

[ca_backup - データベース オプション](#)

ca_backup - SQLServer エージェント オプション

ca_backup コマンドには、以下の SQLServer エージェント オプションが含まれます。

ca_backup

```
[-sql_full | -sql_diff | -sql_log <trunc|no_trunc|no_recovery>]  
[-sql_log_afterdata <trunc|no_trunc|no_recovery>][-sql_partial]  
[-sql_filegroup <filegroupname> [-sql_file <filename1>]...[-sql_file<filenamen>]]...  
[-sql_dbcc [sql_before [continue]] [sql_after] [physical_only] [no_indexes]]  
[-sql_checksum]
```

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_full

SQLServer のフル バックアップを実行するように指定します。

-sql_diff

SQLServer の差分 バックアップを実行するように指定します。

-sql_log

トランザクション ログのバックアップを実行するように指定します。

trunc

トランザクション ログのバックアップ後、それらを切り捨てるように指定します。このオプションは、トランザクション ログから非アクティブなエントリのすべてを削除します。トランザクション ログを切り捨てないと、サイズが大きくなる可能性があります。

no_trunc

トランザクション ログのバックアップ後、それらを切り捨てないように指定します。このオプションは、トランザクション ログから非アクティブなエントリを削除しません。

no_recovery

ログの末尾をバックアップし、データベースはロード状態にするように指定します。

ログの末尾とは、ログの最も古い内容のことです。

-sql_log_afterdata

データベースの後にトランザクション ログをバックアップするように指定します。

-sql_partial

部分バックアップを実行するように指定します。

-sql_filegroup <filegroupname>

バックアップされる、セッション内のファイルグループを指定します。

-sql_file <filename>

バックアップされる、セッション内のファイルを指定します。

-sql_dbcc

データベースの整合性チェック(DBCC) を実行するように指定します。

sql_before [continue]

データベースのバックアップ前に、DBCC を実行するように指定します。

DBCC が失敗してもバックアップを続行するように指定することもできます。

sql_after

データベースのバックアップ後に、DBCC を実行するように指定します。

physical_only

データベース内のすべてのオブジェクトの構造上の整合性をチェックするために、データベースの物理的な整合性のみをチェックするように指定します。

no_indexes

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、データベースの整合性をチェックするように指定します。

-sql_checksum

バックアップ時に SQL Server が生成するチェックサムを含めるように指定します。

例:

ca_backup の SQL Server データベースコマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、データベース全体をバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_full
- 以下のコマンドは、データベースの差分をバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_diff
- 以下のコマンドは、ファイルまたはファイルグループのデータベースをバックアップします。
-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_filegroup [-sql_file <filename>...]
- 以下のコマンドは、データベースのログをバックアップします。

-database SQL <instance name> <dbase name> -sql_log[trunc|no_trunc|no_recovery]

詳細情報:

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Sybase エージェント データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Sybase データベース オプションが含まれます。

ca_backup [-sybase_database|-sybase_transactionlog trunc|-sybase_transactionlog no_trunc]

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sybase_database

Sybase データベースのデータをバックアップするように指定します。

-sybase_transactionlog trunc

バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てるように指定します。

トランザクション ログのサイズを減らすために、バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てることもできます。エージェントがトランザクション ログを切り捨てなしでバックアップした場合、前回バックアップされたログから現時点のログまでがバックアップされます。バックアップには、ログ ファイルのアクティブな部分と非アクティブな部分の両方が含まれます。バックアップ時にログの切り捨てを選択すると、エージェントはログの非アクティブな部分を削除し、最も古いオープントランザクションを含んだログのアクティブな部分の始めまでログを切り捨てます。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-sybase_transactionlog no_trunc

バックアップ時にトランザクション ログを切り捨てないように指定します。

例：

ca_backup の SYBASE データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、データベース データをバックアップします。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_database
- 以下のコマンドは、バックアップ中のトランザクション ログを切り捨てます。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_transactionlog trunc
- バックアップ中のトランザクション ログを切り捨てないようにするには、以下のコマンドを使用します。
-database SYBASE <instance> <database> -sybase_transactionlog no_trunc

詳細情報：

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Informix エージェント データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Informix データベース オプションが含まれます。

ca_backup

[-ifmx_level <level (0-2)>]

[-ifmx_currentLog | -ifmx_salvageLogs]

注： ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-ifmx_level <level (0-2)>

実行されるバックアップのレベルを指定します。

- ◆ レベル 0 - フル バックアップ
- ◆ レベル 1 - 最後にレベル 0 のバックアップ以降の変更をバックアップ
- ◆ レベル 2 - 最後にレベル 1 のバックアップ以降の変更をバックアップ

デフォルトでは、エージェントはレベル 0 のバックアップを実行します。

-ifmx_currentLog

現在のアクティブな論理ログ、およびバックアップされなかった他の論理ログ全体をバックアップするように指定します。

-ifmx_salvageLogs

ディスク上にある論理ログをすべてバックアップするように指定します。

例：

ca_backup の Informix データベース コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、dbspace をバックアップします。
-database INFORMIX <instance name> <dbspace name> -ifmx_level <0-2>
- 以下のコマンドは、論理ログ(現在のログを含む)をバックアップします。
-database INFORMIX <instance name> #LOGFILE# -ifmx_currentLog
- 以下のコマンドは、サルベージ ログをバックアップします。
-database INFORMIX <instance name> #LOGFILE# -ifmx_salvageLogs

詳細情報：

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - VSS エージェント データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の VSS(Volume Shadow Copy Service) エージェント データベース オプションが含まれます。

ca_backup -vss <vss_path>

[-vss_writer

[-transport [retainshadowcopy]]

[-excludedefinitedinthis]

[-excludedefexcludedbythis]

[-erroronceffail]

[-method <FULL|INCR|DIFF|COPY|LOG>]]

-vss <vss_path>

ライターレベルで設定したバックアップ オプションは、現在選択しているライタのみに反映され、これらは VSS バックアップのどのグローバル オプションよりも優先されるように指定します。バックアップするファイルシステムのパスの場所を入力する必要があります。

-vss_writer

ライター オプションを使用するように指定します。選択したライターが提供するオプションを、VSS バックアップ プロセスが使用できるようになり、その他のバックアップ オプションが有効になります。

-transport [retainshadowcopy]

トランスポートابل スナップショットを使用するように指定します。ボリューム全体のトランスポートابل VSS バックアップ コピーを作成します。このシャドウコピーは LUN 全体のミラーリングですが、データは LUN の特定のボリュームでリストア可能です。転送可能なシャドウコピーを作成すると、同じシステム内の他のサーバにシャドウコピーをインポートできるため、より柔軟にクリティカルなアプリケーションやファイルをバックアップおよびリストアできるようになります。その後、転送したシャドウコピー ボリュームを追加テープ バックアップやデータ マイニング、ソフトウェア開発のテストなどの他の用途に使用できます。

デフォルトでは、シャドウコピーはバックアップが完了すると削除されます。バックアップ後もシャドウコピーを保持するには、「retainshadowcopy」従属オプションも含める必要があります。

注：このオプションを含めた場合、使用可能なバックアップ方式はフルバックアップのみです。

retainshadowcopy

バックアップ後もシャドウコピーを保持するように指定します。このオプションを含めると、バックアップ後に Arcserve Backup によってシャドウコピー ボリューム

ムが削除されないように指定します。シャドウコピー ボリュームは転送可能なので、バックアップ後も保持することによって、ボリュームを別の用途で他のシステムにインポートすることができます。

-excludeincludedinthis

このライタに組み込まれたファイルをすべてのファイルシステム バックアップから除外するように指定します。このオプションを選択すると、ライタのコンポーネントに属するファイルが従来のファイルシステム バックアップによってバックアップされるのを回避できます。このオプションには以下の利点があります。

- ◆ VSS によってすでにバックアップされているファイルのバックアップを回避できます。
- ◆ 従来のバックアップからファイルを除外すると、処理するファイル数が減り、従来のバックアップの処理時間を短縮できます。
- ◆ グループとして処理するファイル(データベースアプリケーションに関連付けられたファイルなど)に関する問題が発生しないので、バックアップの成功率が向上します。従来のバックアップには、ファイルをまとめて処理するメカニズムはありません。

注: このオプションは、[トランスポートابل スナップショットを使用する]オプションが含まれる場合は使用できません。

-excludeexcludedbythis

このライタで特に除外されたファイルをファイルシステム バックアップから除外するように指定します。このオプションを含めると、バックアップすべきではないアプリケーション関連ファイル(Windows のページ ファイルなど)を、ファイルシステム バックアップから除外できます。各ライタは、関連付けられているアプリケーションにこのようなファイルが存在するかどうかを認識しています。このオプションを選択すると、Arcserve Backup が従来のバックアップを実行する際に、この情報を利用できます。

注: このオプションは、[トランスポートابل スナップショットを使用する]オプションが含まれる場合は使用できません。

-erroronceffail

このライタで1つ以上のコンポーネント ファイルのバックアップに失敗した場合、全体のライタ バックアップを中止するように指定します。このオプションを含めると、コンポーネントのいずれかのバックアップが失敗した場合、選択したライタのバックアップをキャンセルします。コンポーネントに含まれる1つ以上のファイルを正常にバックアップできない場合、そのコンポーネントのバックアップは失敗します。

このオプションを含めると、ライタに関連付けられているコンポーネントの数に関係なく、ライタに関連付けられているすべてのファイルがバックアップされて初めてバックアップが成功したとみなされるようになります。

注：このオプションは、[トランスポートابل スナップショットを使用する]オプションが含まれる場合は使用できません。

-method <FULL|INCR|DIFF|COPY|LOG>

選択したライタのバックアップで使用するバックアップ方式を指定します。

フル

データの最終変更日時に関係なく、選択したライタに関連付けられているすべてのファイルのフルバックアップを実行するように指定します。-transport スナップショット オプションが選択されている場合は、これが唯一利用可能なバックアップ方式です。

INCR

前回のフルバックアップまたは増分バックアップ以後に変更があったファイルのみの増分バックアップを実行するように指定します。各バックアップ後に、バックアップファイルはマークされ、変更されない限りは次の増分バックアップジョブでバックアップされないようになります。この方法を使用したバックアップジョブの処理には通常より時間がかかりません。

DIFF

前回のフルバックアップ以後に変更があったファイルのみ差分バックアップを実行するように指定します。差分バックアップジョブは、バックアップ済みのファイルをマークしないため、前回の差分ジョブでバックアップされたファイルが再度バックアップされます。この方法を使用したバックアップジョブの処理には通常より時間がかかります。

コピー

ライタに含まれるすべてのファイルをバックアップしますが、ファイルはバックアップ済みとはマークされないように指定します。このオプションを選択すると、既存の増分バックアップまたは差分バックアップを壊さずにデータのフルバックアップを作成できます。

LOG

選択したライタに関連付けられているログファイルのみをバックアップするように指定します。

詳細情報：

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - Lotus エージェント データベース オプション

ca_backup コマンドには、以下の Lotus エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_backup -source [<hostname> [<hostIP>]] [node options]
-database LOTUS <LotusInstance_HostName> [<Lotus_DBFileName>]
[-lotusfilter <include|exclude> <file|dir <pattern>>]
[dbase options]
```

注：ca_backup データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_backup allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

LotusInstance_HostName

Lotus Domino がインストールされているホスト名を指定します。

Lotus_DBFileName

バックアップされる Lotus データベースのファイル名を指定します。

-lotusfilter <include|exclude> <file|dir <pattern>>

バックアップジョブに適用されるフィルタを指定します。これらのフィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをバックアップジョブから除外したり組み込んだりできます。

詳細情報：

[ca_backup - データベース オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - デスティネーション引数

バックアップ デスティネーションとは、選択されたバックアップ ファイルのバックアップ先となる場所です。バックアップするオブジェクトを選択したら、バックアップ ジョブに使用するデスティネーションおよびデスティネーション引数を選択する必要があります。

ca_backup コマンドには、以下のデスティネーション引数が含まれます。

ca_backup

[-group <groupname>]

[-tape <tape name>]

[-mediapool <pool name>]

[-multiplextape [<num of steams (1-32)>]-muxChunkSize <size in MB (1-16)>]

[-multistream [<max streams (1-32)>]

[-dddpurgedata [<full|diff|incr> <weeks> <days> <hours> <minutes>]]

-group <groupname>

バックアップ ジョブで使用するメディア グループを指定します。

-tape <tape name>

バックアップ ジョブで使用するメディアの名前を指定します。

-mediapool <pool name>

バックアップ ジョブで使用するメディア プールを指定します。

注：ターゲット グループがデデュプリケーション グループであるか、またはステージング グループがデデュプリケーション グループである場合は、-mediapool スイッチを含めることはできません。

-multiplextape [<num of steams (1-32)>]

マルチプレキシング オプションを適用してバックアップ ジョブをサブミットするように指定します。

マルチプレキシングとは、複数のソースから取得されたデータが、同じメディアに同時に書き込まれるプロセスのことです。複数のソースが指定されたジョブを、マルチプレキシング オプションを有効にした状態でサブミットした場合、このジョブは複数の子ジョブに分割されます(各ソースにつき1つの子ジョブ)。これらの子ジョブにより、データが同じメディアに同時に書き込まれます。

マルチプレキシング機能を使用する場合は、同一のテープに同時に書き込み可能な最大ストリーム数を選択することができます。デフォルトのストリーム数は4であり、サポートされている範囲は1～32です。

-muxChunkSize <size in mB (1-16)>

マルチプレキシングのチャンクサイズを設定するように指定します。このチャンクサイズ値により、別のセッションがマルチプレキシングされるまで1回のセッションで連続して書き込まれるデータの量が決定されます。この値が大きいほど、一部のドライブではリストアが高速になりますが、バックアップ時に使用されるメモリサイズが増大します。

デフォルトの値は1 MBで、サポートされている範囲は1 ~ 16 MBです。

-multistream [<max streams(1-32)>]

マルチストリーミングオプションを適用してバックアップジョブをサブミットするように指定します。

マルチストリーミングでは、システムで利用可能なすべてのテープデバイスを使用して、単一のバックアップジョブを複数のジョブに分割できます。その結果、順番に処理したときと比較して、バックアップ全体のスループットが向上します。

マルチストリーミングを使用すると、テープに同時に書き込み可能な最大ストリーム数を選択できます。デフォルトのストリーム数は4であり、サポートされている範囲は1 ~ 32です。

-dddpurgedata [<full|diff|incr> <weeks> <days> <hours> <minutes>]

指定したバックアップ方式(フル、差分、または増分)に対するデデュープリケーションデバイスのページポリシーを、ステージングしないジョブで使用するデデュープリケーションデバイスに追加するように指定します。

<weeks> <days> <hours> <minutes>

デバイスのページを開始するまでの時間(週、日、時間、分)を指定します。

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - スケジュール引数

ca_backup コマンドは、バックアップ ジョブ用のスケジュール方式を指定する手段を提供します。選択した方式によって、バックアップを実行する日時、特定の日付に実行されるバックアップのタイプ、およびバックアップ メディアのローテーションが決まります。選択可能な3つのスケジュール方法には、カスタムスケジュール、ローテーション スケジュール、および GFS ローテーション スケジュールがあります。

以下の ca_backup スケジュール引数では、「incr」は増分バックアップを示し、「diff」は差分バックアップを示します。

注: ca_backup コマンドがサブミットしたジョブが、スケジュールされた時刻よりも1時間遅れで実行される場合、夏時間 (DST) の開始日における変更が原因の可能性もあります。これを避けるには、Microsoft の夏時間用のパッチをインストールしてオペレーティングシステムを更新する必要があります。詳細については、「Microsoft Daylight Saving Time Help and Support Center」を参照してください。

ca_backup コマンドには、以下のスケジュール引数が含まれます。

カスタムスケジュール

ca_backup コマンドには、以下のフィルタ オプションが含まれます。

```
ca_backup [-custom
-repeat <months> <days> <hours> <minutes>]
-excludeday <Sun|Mon|Tue|Wed|Thu|Fri|Sat>*]
-method <incr|diff|full-clear|full-keep>]
-retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
<count>]]
-worm]

-custom
```

バックアップ ジョブのスケジュールタイプをカスタムスケジュールとして指定します。デフォルトでは、バックアップ ジョブに使用されるスケジュールタイプは、このカスタムスケジュールです。

-repeat <months> <days> <hours> <minutes>

-custom と共に使用します。バックアップ ジョブの繰り返し間隔を指定します。デフォルトでは、繰り返しの間隔はなく、ジョブは1度だけ実行されます。繰り返し間隔を指定すると、ジョブはここで指定された分/時間/日/月ごとに実行されます。このコマンドの構文では、月、日、時間、および分の各フィールドに値を指定する必要があります。

例: 繰り返しジョブを26時間ごと(1日に2時間を足す)に実行するようにスケジュールするには、「ca_backup -custom -repeat 0 1 2 0」と入力します。

-excludeday <Sun|Mon|Tue|Wed| Thu|Fri|Sat>

-custom と共に使用し、指定された日に繰り返しバックアップ ジョブを実行しないようにします。

-method <incr|diff|full-clear|full-keep>

カスタム スケジュールのバックアップ ジョブ方式を指定します。

incr

増分バックアップを実行するように指定します。

最後のフルバックアップまたは増分バックアップの実行後にアーカイブビットが設定されたファイルのみをバックアップします。各バックアップ後に、アーカイブビットは次の増分バックアップジョブ中にバックアップされないよう再設定されます。

diff

差分バックアップを実行するように指定します。

最後のフルバックアップの実行後にアーカイブビットが設定されたファイルのみをバックアップします。差分バックアップジョブはファイルのアーカイブビットをクリアしないので、前回の差分ジョブにおいてバックアップされたファイルも再びバックアップされます。このバックアップ方式を使用した場合、増分バックアップよりもバックアップの処理に多くの時間がかかります。しかし、マシンをリストアするために必要なメディアの数が少なくすむため、サーバやワークステーションをリストアするにはこちらの方が適しています。

full-clear

ジョブが繰り返されるたびにフルバックアップが実行され、アーカイブビットがクリアされるように指定します。

full-keep

ジョブが繰り返されるたびにフルバックアップが実行され、アーカイブビットが維持されるように指定します。

-retention <days>

作成されたメディアプールに対するメディアの保存期間を日単位で指定します。

-retrymissed_at <hh:mm:ss>

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は [未完了] となります。

-retrymissed_after <minutes>

他のソースファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔(分)で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティ ログに記録し、ジョブの結果は [未完了] となります。

-retrymissed_maxtimes <count>

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。

-worm

WORM(Write Once Read Many) オプションを使用して、すべてのカスタムスケジュール ルールに対してメディア データ保護を適用します。このオプションを有効化すると、Arcserve Backup はバックアップ セッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。

重要: Arcserve Backupでは、マルチプレクシング バックアップ ジョブに対する WORMメディアの使用はサポートされません。このため、デスティネーション オプションとして -multiplextape スイッチを含める場合は、-worm スケジュール オプションが無効化されます。

注:

- バックアップ ジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、Arcserve Backup は WORM メディアを必要とします。
 - 空の WORM メディアが利用できず、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、Arcserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップ ジョブを完了させます。
 - WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、Arcserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップ ジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、Arcserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

ローテーション スケジュール

ca_backup コマンドには、以下のローテーション スケジュール オプションが含まれます。

```
ca_backup [-rotation
-mediapool <mediapool name>]
-jobunit <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <media name>[ds]]
-saveset <no.of tapes>]
```

-retention <days>
 -retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
 <count>]]
 -exception <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <mm/dd/yy[yy]>
 -method <incr|diff|full>
 -worm]

-rotation

バックアップ ジョブのスケジュール タイプをローテーション スケジュールとして指定します。

-mediapool <mediapool name>

バックアップ ジョブに使用するメディア プールを指定します。このスイッチは -rotation または -custom と共に使用する必要があります。

- ◆ このスイッチを -rotation と共に使用すると、入力するメディア プール名 が新たに作成され、このローテーション ジョブに関連付けられます。
- ◆ このスイッチを -custom と共に使用する場合は、すでに存在するメディア プール名を入力する必要があります。

注: ターゲット グループがデデュプリケーション グループであるか、またはステージンググループがデデュプリケーション グループである場合は、-mediapool スwitchを含めることはできません。

-jobunit <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <media name> [ds]

各ジョブ単位は、日曜日 から土曜日 までのローテーション スキーマの曜日を表します。同じローテーション スケジュール内で差分 バックアップと増分 バックアップを併用できないなど、一定の制約はありますが、各曜日をカスタマイズすることができます。-jobunit スwitchは、最初が日曜日、次は月曜日、以下、順次各曜日に関連付けられます。1 週間の各曜日分のスイッチはユーザが指定します。つまり、7 つの -jobunit スwitchが必要になります。デフォルトでは、-jobunit スwitchで表されていない曜日は、すべてオフ日に設定され、その日のバックアップは行われません。-jobunit スwitchを指定せず、週 5 日の増分バックアップと金曜日のフルバックアップを組み合わせるデフォルトのローテーション スケジュールを設定することもできます。このスケジュールは、フロントエンドのバックアップ マネージャに表示されるものと同じです。

ds

ローテーション ジョブまたは GFS ローテーション ジョブの日次バックアップのステージングを有効化します。

ca_backup -diskstage コマンドによって開始されたローテーション ジョブでは、ディスク ステージング機能を有効にするには、各ジョブ単位にパラメータ

「ds」を含む必要があります。「ds」パラメータを含めないと、バックアップセッションのデータはステージング デバイスに送信されません。

例えば、「my_jobs」を毎週月曜日に実行するフルディスクステージングバックアップジョブをスケジュールするには、以下のコマンドを使用します。

```
-jobunit off -jobunit full overwrite my_job ds -jobunit off -jobunit off -jobunit off -jobunit off
-jobunit off
```

注：各ジョブ単位は、日曜日から土曜日までのローテーションスキーマの曜日を表します。

-saveaset <number of tapes>

-rotation と共に使用します。作成されたメディアプールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-retention <days>

作成されたメディアプールに対するメディアの保存期間を日単位で指定します。

-retrymissed_at <hh:mm:ss>

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は [未完了] となります。

-retrymissed_after <minutes>

他のソースファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔(分)で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は [未完了] となります。

-retrymissed_maxtimes <count>

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。

回数オプションに利用可能な範囲は、1 から 12 回です。

-exception <full|diff|incr|off> <append|overwrite> <mm/dd/yy[yy]>

通常のローテーションスケジュールにおいて例外となる条件を指定します。祝日やその他の事情で、特定の日バックアップジョブに通常と異なる動作をさせる必要がある場合に便利な機能です。

-method <incr|diff|full>

スケジュールバックアップジョブの方式を指定します。

incr

スケジュール増分バックアップを実行するように指定します。

diff

スケジュール差分バックアップを実行するように指定します。

full

スケジュールフルバックアップを実行するように指定します。

-worm

WORM(Write Once Read Many) オプションを使用して、すべてのローテーションスケジュールルールに対してメディアデータ保護を適用します。このオプションを有効化すると、Arcserve Backup はバックアップセッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。

重要: Arcserve Backupでは、マルチプレクシングバックアップジョブに対するWORMメディアの使用はサポートされません。このため、デスティネーションオプションとして -multiplextape スイッチを含める場合は、-worm スケジュールオプションが無効化されます。

注:

- バックアップジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、Arcserve Backup は WORM メディアを必要とします。
 - 空の WORM メディアが利用できず、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、Arcserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップジョブを完了させます。
 - WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、Arcserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、Arcserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

GFSローテーション スケジュール

ca_backup コマンドには、以下の GFS ローテーション スケジュール オプションが含まれます。

ca_backup [-gfsrotation

-mpoolprefix <mediapool prefix>]

-jobunit <full|diff|incr|off>[ds]]

-preservedaily <no.of tapes>]

-preserveweekly <no.of tapes>]

-preservemonthly <no.of tapes>
 -retrymissed_at <hh:mm:ss>|-retrymissed_after <minutes> [-retrymissed_maxtimes
 <count>]]
 -exception <full|diff|incr|off> <mm/dd/yy[yy]>
 -method <incr|diff|full>
 -worm [daily] [weekly] [monthly]]

-gfsrotation

バックアップ ジョブのスケジュールタイプとして、GFS(Grandfather、Father、Son) ローテーション スケジュールを指定します。

-mpoolprefix <mediapool prefix>

-gfsrotation と共に使用します。GFS ローテーション ジョブで作成されて、そのスケジュールに関連付けられる3種類のメディアプール(日単位、週単位、月単位)を指定するためのプレフィックスとして使用されます。

例: プレフィックスが「GFSJOB1」の場合は、次の3つのプールが作成されます。
 GFSJOB1_DLY、GFSJOB1_WLY、GFSJOB1_MLY。

注: ターゲットグループがデデュプリケーショングループであるか、またはステージンググループがデデュプリケーショングループである場合は、-mpoolprefix スイッチを含めることはできません。

-jobunit <full|diff|incr|off>

ローテーション スケジュールの指定の場合と同じです。ただし、GFS ローテーションの場合、引数は選択された日に行われるバックアップのタイプを指定するものに限定されます。

-preservedaily <no.of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、日単位のメディアプールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-preserveweekly <no.of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、週単位のメディアプールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-preservemonthly <no.of tapes>

-gfsrotation と共に使用して、月単位のメディアプールの保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

-retrymissed_at <hh:mm:ss>

指定された時間に失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティログに記録し、ジョブの結果は「未完了」となります。

-retrymissed_after <minutes>

他のソースファイルのバックアップがすべて終了した後で、指定した間隔(分)で失敗したターゲットのバックアップまたはコピーを行います。ファイルがそれでも使用できない場合、Arcserve Backup はその情報をアクティビティ ログに記録し、ジョブの結果は [未完了] となります。

-retrymissed_maxtimes <count>

ファイルのバックアップまたはコピーを再試行する回数を指定します。

回数オプションに利用可能な範囲は、1 から 12 回です。

-exception <full|diff|incr|off> <mm/dd/yy[yy]>

ローテーション スケジュールの指定の場合と同じです。ただし、GFS ローテーションの場合、引数は除外日に行われるバックアップのタイプを指定するものに限定されます。

-method <incr|diff|full>

スケジュール GFS ローテーション バックアップ ジョブの方式を指定します。

incr

スケジュール増分バックアップを実行するように指定します。

diff

スケジュール差分バックアップを実行するように指定します。

full

スケジュールフルバックアップを実行するように指定します。

-worm [daily] [weekly] [monthly]

WORM(Write Once Read Many) オプションを使用して、すべての GFS ローテーション スケジュール ルールに対してメディア データ保護を適用します。このオプションを有効化すると、Arcserve Backup はバックアップ セッションをメディア上の既存のデータの最後に追加します。これは、WORM メディアを上書きまたは消去できないためです。このオプションを有効にすると、WORM メディアオプションを日次、週次、月次の GFS ローテーション ジョブに適用することも指定できます。

重要: Arcserve Backupでは、マルチプレクシング バックアップ ジョブに対する WORMメディアの使用はサポートされません。このため、デスティネーション オプションとして -multiplextape スイッチを含める場合は、-worm スケジュールオプションが無効化されます。

注:

- バックアップ ジョブがテープにスパンされ、メディアが WORM メディアである場合は、ジョブを完了するためには、Arcserve Backup は WORM メディアを必要とし

ます。

- 空の WORM メディアが利用できず、空の DLT WORM 対応メディアが利用できる場合、Arcserve Backup は、自動的に空の DLT メディアを DLT WORM メディアに変換し、バックアップジョブを完了させます。
- WORM メディアが WORM ジョブの続行に利用できない場合でも、Arcserve Backup は、空でないメディアを WORM メディアに変換することはありません。
- [WORM メディアを使用]を指定したバックアップジョブを実行しているときに、利用できる WORM メディアがない場合は、Arcserve Backup はジョブの実行のために空の WORM 対応メディアを WORM メディアに変換する場合があります。

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ジョブ実行引数

ca_backup コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してバックアップジョブにジョブ実行の方法を指定できます。ca_backup のジョブ実行オプションを使用すると、バックアップジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、バックアップを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュールされた時刻に開始されるようにするため、メンバーサーバのシステム時刻を、対応するプライマリサーバのシステム時刻に同期する必要があります。Windows Time Service を使用して、ドメイン内のすべての Arcserve サーバ上の時刻を同期します。ca_backup コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_backup  
[-at <hh:mm>]  
[-on <mm/dd/yy[yy]>]  
[-hold | -runjobnow]  
[-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

バックアップジョブの実行時刻を指定します。

注: Arcserve Backup ジョブのすべてのスケジュール時刻は、サーバがあるタイムゾーンに基づいています。Arcserve Backup エージェントマシンが Arcserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

バックアップジョブの実行日を指定します。

-hold

バックアップジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow

バックアップジョブを即座にサブミットし、実行します。

-description <description string>

ジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符 (") で囲む必要があります。

ca_backup のステージング オプション

ca_backup ステージング コマンドは、ステージング領域へデータをバックアップし、そのデータを最終的なデスティネーション(通常はテープ)へマイグレート(またはコピー)する方法を2つ提供します。

- -diskstage コマンドは、ディスクをステージング領域として使用し、一般的に Backup to Disk to Tape または B2D2T オプションと呼ばれます。
- -tapestage コマンドは、テープライブラリまたは仮想テープライブラリをステージング領域として使用し、一般的に Backup to Tape to Tape または B2T2T オプションと呼ばれます。

それぞれのステージング コマンドには、バックアッププロセス時に Arcserve Backup の動作を制御する特定のオプションが含まれています。

詳細情報:

[ca_backup - ディスク ステージング オプション](#)

[ca_backup - テープ ステージング オプション](#)

ca_backup - ディスク ステージング オプション

ca_backup -diskstage コマンドは、ディスク(ステージング領域) にデータをバックアップし、その後、選択したポリシー オプションに基づいて、最終的なデスティネーション (テープ、ディスクなど) にマイグレート(コピー) したり、指定時間を経過したデータをステージング領域からパージしたりできます。必要に応じて、ステージング領域から直接データをリストアすることもできます。

注: は、次のエラー状態がある場合に、ステージング バックアップ ジョブを実行しません。Arcserve Backup

- GROUP NAME が「*」、NULL、または有効なグループ名でもステージンググループではない場合は、Arcserve Backup が有効なディスク ステージング GROUP NAME を提供するように要求します。
- 有効なライセンスがなく、最大 2 つのストリームを超える入力を試みた場合。
- コピー ポリシーと -DONOTCOPY が指定された場合。
- マルチストリーミングまたはマルチプレキシングがディスク ステージング ジョブで指定されている場合。Arcserve Backup は、ディスク ステージング バックアップ ジョブでは、マルチストリーミングのみをサポートします。
- 最終のデスティネーション デバイスグループが、ディスク ステージング デバイスグループである場合。

ca_backup -diskstage コマンドは、以下のような形式です。

```
ca_backup -diskstage  
[その他のオプション]  
[Full Backup Policy]  
[Incremental/Differential Backup Policy]
```

詳細情報:

ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド

ca_backup - ディスク ステージングのその他のオプション

ca_backup - ディスク ステージング フル バックアップ オプション

ca_backup - ディスク ステージング増分/差分 バックアップ オプション

ca_backup - 例

ca_backup - ディスク ステージングのその他のオプション

ca_backup -diskstage コマンドには、Arcserve Backup がディスク ステージング バックアップ ジョブ中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_backup -diskstage コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

ca_backup -diskstage <groupname>

[-maxstreams <Max # Streams(1-32)>]

[-chunksize <size in MB(1-16)>]

[-purgefailedsessions]

[-purgecancelledsessions]

[-makeupjobtotape]

[-createDMJMakeupJobOnHold]

[-leaveCatalogsOnDisk]

[-consolidate]

[-consolidate_mediaprefix <media prefix>]

[-consolidate_mediapoolprefix <mediapool prefix>]

[-consolidate_copymethod <append|overwrite>]]

-diskstage <groupname>

ステージング機能を使用するバックアップ ジョブとディスク ステージング デバイスグループの名前を指定します。

-maxStreams <Max # Streams(1-32)>

ステージング デバイスに対してバックアップ ジョブを実行する際に Arcserve Backup が使用するストリームの数を指定します。

デフォルトのストリーム数は 4 であり、サポートされている範囲は 1 ～ 32 です。

-chunksize <size in MB(1-16)>

ステージング バックアップ中、Arcserve Backup がデータを小さいチャンク(サブジョブ)に分割して、ディスクに書き込むように指示します。各チャンクの最大サイズまたはデータ量(MB 単位)を指定する必要があります。

デフォルトのチャンクサイズは 1 MB で、1 ～ 16 MB の範囲がサポートされています。

-purgefailedsessions

ディスクへのバックアップ(ステージング)中にセッションが失敗した場合、Arcserve Backup は、すぐにこのセッションを削除対象(ディスクからパージされる)としてマークするように指示されます。これにより、ディスク領域を可能な限り早く回収できます。

-purgecancelledsessions

ディスクへのバックアップ(ステージング)中にセッションがキャンセルされた場合、Arcserve Backup は、すぐにこのセッションを削除対象(ディスクからパージされる)としてマークするように指示されます。これにより、ディスク領域を可能な限り早く回収できます。

-makeupjobtotape

ディスクへのバックアップ(ステージング)処理中に、ディスクに空領域がないためエラーが発生すると、メイクアップジョブが作成され、メイクアップジョブの実行時に、バックアップが最終的なデスティネーションメディア(テープ)に直接書き込まれます。これにより、ディスクが一杯であってもバックアップに成功する可能性が高くなります。

-createdmymakeupjobonhold

データマイグレーションジョブ(DMJ)中に、メディアまたはテープドライブにエラーが発生した場合、ホールド状態のメイクアップジョブが自動的に作成されます。その結果、tapecopyジョブを作成する必要はありません。ドライブやメディアのエラーを修正した後、メイクアップジョブのステータスを「ホールド」から「レディ」に変更するだけで、マイグレーション処理(ディスクからテープへ)を実行できます。

-leaveCatalogsOnDisk

Arcserve Backup に、カタログファイルをディスク上に残すように指示します。このオプションは、CATALOG.DB ディレクトリ内のステージングデバイス上にカタログファイルを保存するために使用します。

-migrationpassword <password>

マイグレーションパスワードを設定し、Arcserve Backup がマイグレーション(コピー)プロセス中にデータを暗号化するように指示します。マイグレーションを安全に行うには、パスワードを指定する必要があります。

注: ジョブのバックアッププロセス中にデータが暗号化された場合は、Arcserve Backup はジョブのマイグレーションプロセスでデータを再度暗号化しようとはしません。

-consolidate

マイグレーション(コピー)プロセス中に、異なるバックアップジョブからのデータを、1つのテープに統合します。これにより、データがコピーされる際にテープの使用領域を最適化できます。

従属パラメータスイッチを指定して、データ統合を制御できます。統合されるデータについては、これらのパラメータのうち少なくとも1つを選択する必要がありますが、データ統合をさらに制御するために複数のパラメータを選択することができます。ただし、パラメータを複数含める場合は、指定されたこれらのパラ

メータすべてが、統合されるジョブに対して満たされる必要があります。従属パラメータを1つも含まない場合は、データが統合されることはありません。

さらに、複数のジョブ間でデータを同じテープに統合するには、バックアップジョブが同じマシン上で実行される必要があります。

注: -DO NOT COPY が含まれる場合、このオプションを使用できません。

[-consolidate_mediaprefix <media prefix>]

マイグレーションに使用する、指定したメディアプレフィックスに基づいてデータを統合します。これにより、Arcserve Backup がマイグレーションプロセス中に、統合を行うのに選択できるメディアグループ(プレフィックスに基づく)を指定できます。メディアプレフィックスのすべてが、指定したメディア接頭辞と異なる場合は、これらのジョブのデータは統合されません。

[-consolidate_mediapoolprefix <mediapool prefix>]

マイグレーションに使用する、指定したメディアプールに基づいてデータを統合します。これにより、Arcserve Backup がマイグレーションプロセス中に、統合を行うのに選択できるメディアグループ(メディアプールプレフィックスに基づく)を指定できます。メディアプールプレフィックスのすべてが、指定したメディアプールプレフィックスと異なる場合は、これらのジョブのデータは統合されません。

[-consolidate_copymethod <append|overwrite>]

Arcserve Backup が統合されたデータをデスティネーションテープへ追加するか、デスティネーションテープを上書きするかを指定します。

追加を指定すると、統合されたデータは、バックアップサイクルの初日にフォーマットされた既存のテープに追加されます。

上書きを指定すると、毎日新しいテープがフォーマットされ、統合されたデータは、そのテープに追加されます。毎日大量のデータをバックアップする場合は、この方式が推奨されます。

上書き方式を指定することの利点は、毎日新しいテープが使用され、以前のテープをオフサイトに搬送できるという点です。

統合方式を指定しない場合、追加方式がデフォルトで選択されます。

詳細情報:

[ca_backup - ディスクステージングオプション](#)

[ca_backup - ディスクステージングフルバックアップオプション](#)

[ca_backup - ディスクステージング増分/差分バックアップオプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ディスク ステージングフルバックアップ オプション

ca_backup -diskstage コマンドには、Arcserve Backup がディスク ステージングフルバックアップ ジョブ中に使用するオプションおよびパラメータを定義するのに使用されるポリシーが含まれます。

ca_backup コマンドには、以下のフルバックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -diskstage [-fullbackup  
[-DONOTCOPY]  
[-enablesnaplock]  
[-copyDataToDestination  
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss> [afterjobends]]]]  
[-purgeData  
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss>]]]]
```

-fullbackup

ステージング バックアップ ジョブがフルバックアップで構成されるように指定します。

-DONOTCOPY

ディスク ステージングによってデータをステージング デバイスにバックアップしますが、保持期間経過後も、最終的なデスティネーションにメディアをコピーしません。

-enablesnaplock

バックアップ ジョブで Arcserve Backup が SnapLock 保護を使用するように指定します。

-copyDataToDestination

```
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss> afterjobends]]
```

最終的なデスティネーションへのコピー操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends、-aftersessionends では、使用する保持期間を入力する必要があります。

-purgeData

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss>]]

ディスクからのデータのパージ操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends では、パージ操作を開始する前に、経過する必要のある期間を入力する必要があります。

詳細情報:

[ca_backup - ディスク ステージング オプション](#)

[ca_backup - ディスク ステージングのその他のオプション](#)

[ca_backup - ディスク ステージング増分/差分 バックアップ オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - ディスク ステージング増分/差分バックアップオプション

ca_backup -diskstage コマンドには、Arcserve Backup が増分または差分バックアップ ディスク ステージング ジョブ中に使用するオプションおよびパラメータを定義するのに使用されるポリシーが含まれます。

ca_backup -diskstage コマンドには、以下の増分/差分バックアップ ポリシーが含まれます。

```
ca_backup -diskstage [-incdiffbackup  
[-DONOTCOPY]  
[-enablesnaplock]  
[-copyDataToDestination  
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss> [afterjobends]]]]  
[-purgeData  
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss>]]]]
```

-incdiffbackup

ステージング バックアップ ジョブが増分バックアップまたは差分バックアップのいずれかで構成されるように指定します。

-DONOTCOPY

ディスク ステージングによってデータをステージング デバイスにバックアップしますが、保持期間経過後も、最終的なデスティネーションにメディアをコピーしません。

-enablesnaplock

バックアップ ジョブで Arcserve Backup が SnapLock 保護を使用するように指定します。

-copyDataToDestination

```
[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[aftersessionends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |  
[at <hh:mm:ss> afterjobends]]
```

最終的なデスティネーションへのコピー操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends、-aftersessionends では、使用する保持期間を入力する必要があります。

-purgeData

[afterjobstarts <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[afterjobends <weeks> <days> <hours> <minutes>] |

[at <hh:mm:ss>]]

ディスクからのデータのパージ操作の開始時期を指定します。

-afterjobstarts、-afterjobends では、パージ操作を開始する前に、経過する必要のある期間を入力する必要があります。

詳細情報:

[ca_backup - ディスク ステージング オプション](#)

[ca_backup - ディスク ステージングのその他のオプション](#)

[ca_backup - ディスク ステージング フル バックアップ オプション](#)

[ca_backup - 例](#)

ca_backup - テープ ステージング オプション

ca_backup -tapestage コマンドを使用すると、データをステージング領域(テープライブラリまたは仮想テープライブラリ) にバックアップし、その後、データを選択したポリシー オプションに基づいて最終的なデスティネーション(異なるテープライブラリ) にマイグレート(コピー) できます。Backup to Tape to Tape(B2T2T) を使用すると、バックアップ処理の完了後、指定された期間が経過した後にデータを異なるテープにコピーできるポリシーベースのジョブをサブミットできます。

ca_backup -tapestage コマンドは、以下のような形式です。

ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>

[-tapestage_media <medianame>]

[-tapestage_mediapool <poolname>]

[-tapestage_enablemus -tapestage_maxstreams <maximum # of streams(1-32)>]

[-tapestage_enablemux -tapestage_chunksize <size in MB(1-16)>]

[-fullbackup [Full Backup Policy]]-incdiffbackup [IncDiff Backup Policy]] [Miscellaneous Options]

-tapestage <-tapestage_group <groupname>>

バックアップジョブがテープステージング機能を使用すること、およびテープステージンググループの名前を指定します。

-tapestage_media <medianame>

ジョブ用のバックアップステージとして使用されるメディア名を指定します。

-tapestage_mediapool <poolname>

ジョブ用のバックアップステージに使用されるメディアプールを指定します。

-tapestage_enablemus

マルチストリーミングを有効化し、ステージンググループ内のファイルシステムデバイスへの同時バックアップ処理を可能にするように指定します。マルチストリーミングが有効化されると、単一のバックアップジョブがすべてのテープデバイスを使用して複数のジョブに分割されます。

-tapestage_maxstreams <maximum # of streams(1-32)>

ステージンググループ内の FSD への書き込み時に、ジョブで使用が許可されるデータストリームの最大数を指定します。使用可能な最大数は 1 ～ 32 ストリームです。

たとえば、ストリームの最大数が 4 に指定されている場合、このステージングジョブはどの時点においても、同時に FSD に書き込みを行う子ジョブを 5 以上持つことはできない、ということになります。

-tapestage_enablemux

マルチプレキシングを有効化し、データを複数のソースから同じメディアに同時に書き込めるように指定します。複数のソースが指定されたジョブを、マルチプレキシングオプションを有効にした状態でサブミットした場合、このジョブは複数の子ジョブに分割されます(各ソースにつき1つの子ジョブ)。これらの子ジョブにより、データが同じメディアに同時に書き込まれます。

-tapestage_chunksize <size in MB(1-16)>

一度の書き込み処理で、ステージングデバイスに書き込まれるデータの最大量 (MB) を指定します。このチャンクサイズ値により、別のセッションがマルチプレキシングされるまで1回のセッションで連続して書き込まれるデータの量が決定されます。

この値が大きいほど、一部のドライブではリストアが高速になりますが、バックアップ時に使用されるメモリサイズが増大します。使用可能なチャンクサイズは1～16 MBです。大部分のドライブについては、デフォルト値を1 MBに設定することをお勧めします。

-fullbackup [Full Backup Policy] | -incdiffbackup [IncDiff Backup Policy]

フルバックアップまたは増分/差分バックアップのいずれかに、バックアップジョブのポリシーを設定するよう指定します。続いて、対応するバックアップポリシーを指定できます。

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

[ca_backup - テープ ステージングのフル バックアップ ポリシー](#)

[ca_backup - テープ ステージング増分/差分 バックアップ ポリシー](#)

[ca_backup - テープ ステージングのその他のオプション](#)

ca_backup - テープ ステージングのフル バックアップ ポリシー

ca_backup -tapestage コマンドには、Arcserve Backup がフル バックアップ ジョブでデータを処理する方法を制御するために使用されるバックアップ ポリシーが含まれます。

ca_backup -tapestage コマンドには、以下のフル バックアップ ポリシーが含まれます。

ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>

[-donotmigrate]]

[-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>[-migmonthdataonly]]

-donotmigrate

ステージングの場所から最終的なデスティネーション メディアにバックアップ データをコピーしないことを指定します。

-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>

バックアップ処理が終了してからマイグレーション処理が開始されるまでに経過する必要がある期間を、週数、日数、時間数、分数で指定します。

-migmonthdataonly

月単位の GFS バックアップ データのみをマイグレートすることを指定します。このスイッチを含めると、Arcserve Backup は月単位のフル バックアップを最終デスティネーション メディアにマイグレートします。Arcserve Backup は週単位のフル バックアップおよび最初のフル バックアップを GFS ローテーションにマイグレートしません。

注：GFS ローテーションが指定されると、Arcserve Backup では、GFS ローテーション ジョブの最終週の週単位 バックアップを月単位のバックアップとみなします。

詳細情報：

[ca_backup - テープ ステージング オプション](#)

[ca_backup - テープ ステージング増分/差分 バックアップ ポリシー](#)

[ca_backup - テープ ステージングのその他のオプション](#)

テープ ステージング増分/差分バックアップ ポリシー

ca_backup -tapestage コマンドには、Arcserve Backup が増分/差分バックアップジョブでデータを処理する方法を制御する際に使用されるバックアップポリシーが含まれます。

ca_backup -tapestage コマンドには、以下の増分/差分バックアップポリシーが含まれます。

ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>

[-donotmigrate]]

[-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>]

-donotmigrate

ステージングの場所から最終的なデスティネーションメディアにバックアップデータをコピーしないことを指定します。

-afterjobends <-weeks|-days|-hours|-minutes <count> ...>

バックアップ処理が終了してからマイグレーション処理が開始されるまでに経過する必要がある期間を、週数、日数、時間数、分数で指定します。

詳細情報:

[ca_backup - テープ ステージング オプション](#)

[ca_backup - テープ ステージングのフルバックアップポリシー](#)

[ca_backup - テープ ステージングのその他のオプション](#)

ca_backup - テープ ステージングのその他のオプション

ca_backup -tapestage コマンドには、基本ポリシーおよびパラメータを定義するためのその他のオプションが含まれます。基本ポリシーとパラメータは、Arcserve Backup によりステージング バックアップ ジョブの実行中に使用されます。

ca_backup -tapestage コマンドには、以下のその他のオプションが含まれています。

ca_backup -tapestage <-tapestage_group <groupname>>

[-createdmjmakeupjobonhold]

[-rescheduleiffail <on <minutes>|off>]

[-consolidate

[-consolidate_mediaprefix <prefix>]

[-consolidate_mediapool <poolname>]

[-consolidate_mediagroup <groupname>]

[-consolidate_copymethod <append|overwrite>]

-createdmjmakeupjobonhold

データマイグレーションジョブに失敗した場合、ホールド状態のメイクアップジョブを作成するように指定します。データマイグレーション(テープへのコピー)ジョブに失敗した場合に、Arcserve Backup がホールド状態のメイクアップジョブを作成するよう指定するには、このオプションを含めます。

テープへのコピー中にメディアまたはテープドライブのエラーが発生した場合、データマイグレーションジョブは失敗する場合があります。このオプションを含めると [ホールド] 状態のメイクアップジョブを作成できます。そのジョブは、テープデバイスまたはメディアのエラーの修正後に [レディ] 状態に変更できます。エラー条件がある場合、このオプションによって、テープコピージョブを作成する必要性を最小限にします。

-rescheduleiffail <on <minutes>| off>

ソースグループまたはテープが利用できないために、データマイグレーションジョブが実行できない場合は、そのジョブ用にメイクアップジョブをスケジュールするように指定します。ソースグループまたはテープが利用できない場合に Arcserve Backup にメイクアップジョブをスケジュールさせるには、このオプションを含めます。

さまざまな理由から、ソースを利用できない場合があります。たとえば、ジョブのバックアップフェーズが終了していない、テープライブラリまたは仮想テープライブラリにハードウェアの問題が発生している場合などです。

メイクアップが再スケジュールされるまでに経過する必要がある時間(分単位)を指定できます。

デフォルトでは、このオプションはオンです。

-consolidate

マイグレーション プロセス中にバックアップ データを統合するように指定します。
複数のジョブ間でデータを同じテープに統合するには、バックアップ ジョブが同じマシン上で実行される必要があります。

-consolidate_mediaprefix <prefix>

統合するすべてのジョブに対してメディア プレフィックスを指定します。

-consolidate_mediapool <poolname>

統合するメディア プールの名前を指定します。

-consolidate_mediagroup <groupname>

統合するメディア グループの名前を指定します。

-consolidate_copymethod <append|overwrite>

統合処理に使用するコピー方法(追加または上書き)を指定します。指定する方法は、統合するすべてのジョブで同一である必要があります。

注: 平日のスケジュールに [追加] オプションを指定すると、Arcserve Backup は、GFS バックアップ サイクルの初日にフォーマットされたテープへ日次バックアップ データを追加します。平日のスケジュールに [上書き] オプションを指定すると、Arcserve Backup は新しいテープを日単位でフォーマットし、別のジョブからのデータをそのテープに統合します。

詳細情報:

[ca_backup - テープ ステージング オプション](#)

[ca_backup - テープ ステージング増分/差分バックアップ ポリシー](#)

ca_backup - リターンコード

ca_backup コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

-waitForJobStatus オプションが指定されていない場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
(allusage、-usage、または -list などのように、ジョブをサブミットしないコマンド向け)
- **N**(正の整数) - コマンドが正常にジョブをサブミットしました。
(ジョブをサブミットするコマンド向け。実際の戻り値はジョブ番号)
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

-waitForJobStatus オプションが指定されている場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - ジョブは正常に終了しました。
- **1** - ジョブは失敗しました。
- **2** - ジョブは完了していません。
- **3** - ジョブはキャンセルされました。
- **4** - ジョブのステータスが不明です。

注: -waitForjobstatus を allusage、-usage、または -list などのスイッチと合わせると、-waitForjobstatus スイッチは無視され、-waitForjobstatus なしのリターンコードのルールが有効になります。

詳細情報:

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

ca_backup - 例

例: ca_backup

ca_backupコマンドの構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\DIR1 -filesystem D:\DIR2 -username
Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\DIR1 -filelist File1.TXT -filelist File2.TXT -
filelist FILE3.TXT -Group GROUP1 -tape TAPE1 -username Administrator -password
abc
```

- 以下の構文を使用して、リモートのArcserve Backupサーバにバックアップジョブをサブミットできます。

```
ca_backup -cahost machine1 -source machine1 -filesystem D:\DIR1 -username
Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、Arcserve Backup Client Agent for Windowsでバックアップジョブをサブミットし、リモートクライアントマシンのデータをバックアップできます。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\Folder1 -Filesystem D:\Folder2 -filelist
file.TXT -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem "C:\Program Files\Back me up dir" (パス
にスペースが含まれる場合は""で囲む) -tape TAPE1 -runjobnow -username
Administrator -password abc
```

例: ca_backup -filter

ca_backup -filterを使った構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup [-filter include|exclude file|dir <pattern>] -username Administrator -
password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\DIR -filter include file "*.doc" -username
Administrator -password abc
```

```
ca_backup [-filter include|exclude date modify|create|access onorbefore|onorafter
<mm/dd/yyyy>] -username Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\DELL -filter exclude dir khan -username
Administrator -password abc
```

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\DELL -filter exclude file ltrhd.doc -
username Administrator -password abc
```

例: ca_backup -on -at

ca_backup -on -atを使用した構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\DIR -filter include file "*.doc" -at 12:50 -on
08/08/2002 -username Administrator -password abc
```

例: ca_backup セッション パスワード キー

ca_backup -sessionpassword を使用した構文例は以下のとおりです。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\DIR -username Administrator -password abc
```

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 2 -dest C:\DIR -sessionpassword xyz -username Administrator -password abcC:\
```

例: ca_backup ローテーション ジョブ

ca_backupのローテーション ジョブ オプションを使用した構文例は以下のとおりです。

- 以下の例は、"testingpool" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。2010 年 12 月 12 日に例外となる条件が指定されています。この日、固有のローテーション スキーマはフルで、バックアップを追加します。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\DIR1 -mediapool testingpool -exception full append 12/12/2010 -username Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"GFSpoolJob" というジョブ詳細で gfs ローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。この gfs ローテーション ジョブでは、GFSpool_DLY、GFSpool_WLY、GFSpool_MLY3 という 3 つのプールが作成されます。ローテーション スキーマは、日曜日はフル、月曜日から金曜日は増分です。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem D:\DIR2 -username Administrator -password abc -gfsrotation -mpoolprefix GFSpool -jobunit full -jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -jobunit incr -description GFSpoolJob
```

- 以下の例は、"pool" というジョブ詳細で gfs ローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。この gfs ローテーション ジョブでは、machine1_DLY、machine1_WLY、machine1_MLY という 3 つのプールが作成されます。ローテーション スキーマは、日曜日から水曜日と土曜日はフル、木曜日と金曜日は増分です。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\dell -gfsrotation -mpoolprefix machine1 -jobunit full -jobunit full -jobunit full -jobunit full -jobunit incr -jobunit incr -jobunit full -description pool -username Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"khan" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマは以下のとおりです。

注: 以下の例では、アスタリスク記号 * は、いずれのテープも使用できることを示します。

- 日曜日: この日はバックアップを行いません
- 月曜日: 増分バックアップを実行し、メディアを追加します

- 火曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 水曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 木曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 金曜日：フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 土曜日：この日はバックアップを行いません

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\ca_lic -rotation -mediapool khan
-jobunit off -jobunit incr append * -jobunit incr append * -jobunit incr append *
-jobunit incr append * -jobunit full overwrite * -jobunit off -username
Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"hello" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマを下に示します。

- 日曜日：この日はバックアップを行いません
- 月曜日：フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 火曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 水曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 木曜日：増分バックアップを実行し、メディアを追加します
- 金曜日：フルバックアップを実行し、メディアを上書きします
- 土曜日：この日はバックアップを行いません

```
ca_backup -source machine1 -filesystem c:\temp -rotation -mediapool hello -
jobunit off overwrite -jobunit full overwrite -jobunit incr append -jobunit incr
append -jobunit incr append -jobunit full overwrite -jobunit off -username
Administrator -password abc
```

- 以下の例は、"khan" メディアプールにローテーション ジョブをサブミットする ca_backup コマンド構文を示しています。ローテーション スキーマは、標準のローテーション スケジュールを使用します。

```
ca_backup -source machine1 -filesystem C:\ca_lic -rotation -mediapool khan -
username Administrator -password abc
```

例：デデュプリケーション デバイスへの ca_backup

ジョブ完了の4週間、3日、2時間、1分後のフルバックアップに対するパージポリシーをデデュプリケーション デバイスに設定する ca_backup コマンド構文の例は以下のとおりです。

```
ca_backup -cahost hostname -source -filesystem c:\temp -group Dedupegroup -
dddpurgedata full 4 3 2 1 -username administrator -password caworld
```

詳細情報：

[ca_backup - バックアップ マネージャ コマンド](#)

第6章: ca_dbmgr - データベース マネージャコマンド

データベース マネージャコマンド (ca_dbmgr) は、データベース マネージャおよびメディアプール マネージャで使用するコマンド ライン インターフェースです。このコマンドを使用すると、メディアプールの設定を含む、データベースの管理が可能になります。このコマンドを使用して、データベース情報を照会し、データベース オプションを設定することができます。この強力なユーティリティを使用すると、バックアップ イベントに応じて他のプログラムと簡単に連携することができます。データベース マネージャおよびメディアプール マネージャから実行可能な機能は、すべてコマンド ラインでも実行できます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_dbmgr - 構文	142
ca_dbmgr - 使用法	143
ca_dbmgr - その他のオプション	144
ca_dbmgr - 表示オプション	145
ca_dbmgr - メディアプール管理オプション	147
ca_dbmgr - データベース管理オプション	149
ca_dbmgr - メンテナンスオプション	150
ca_dbmgr - マイグレーション ステータスオプション	152
ca_dbmgr - 例	153

ca_dbmgr - 構文

ca_dbmgr のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_dbmgr [-cahost <hostname>]
-show [display options]
-tape delete <tapeID[:seqNo]>
-mediapool [media pool management options]
[database management options]
-prune on|off|set <count> day(s) <hh:mm>
-maintenance
-migrationstatus <job description> [migration status options]
-help
-examples
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

注： コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のよう環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

```
C:\Documents and Settings\cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1
```

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、ca_log の出力をリダイレクトする必要があります。

```
C:\>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt
```

詳細情報：

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_dbmgr - 使用法

ca_dbmgr コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- 表示オプション
- メディアプール管理オプション
- データベース管理オプション
- メンテナンスオプション
- マイグレーションステータスオプション

詳細情報:

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - その他のオプション](#)

[ca_dbmgr - 表示オプション](#)

[ca_dbmgr - メディアプール管理オプション](#)

[ca_dbmgr - データベース管理オプション](#)

[ca_dbmgr - メンテナンスオプション](#)

[ca_dbmgr - マイグレーションステータスオプション](#)

ca_dbmgr - その他のオプション

ca_dbmgr コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がデータベース管理プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_dbmgr コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注：-cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-usage

基本 ca_dbmgr コマンドのリストを表示します。

-help

ca_dbmgr ヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_dbmgr の使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

詳細情報：

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - 表示オプション

ca_dbmgr 表示オプションを使用すると、Arcserve Backup で処理されるジョブ、使用するメディア、バックアップしたデータ、セッション情報、ディスク使用率、およびクライアント情報などを表示できます。

ca_dbmgr コマンドには、以下の表示オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>] -show
prune
summary
jobs | jobsessions <jobID>
[-completed]
[-cancelled]
[-failed]
[-incomplete]
[-last <no_of> days | weeks | months]
tapes | tapesessions <tapeID [:seqNo]>
pools | poolmedia <poolName>
scratchmedia | savemedia
```

注: コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のよう環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

```
C:\Documents and Settings\cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1
```

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、ca_log の出力をリダイレクトする必要があります。

```
C:\>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt
```

prune

廃棄処理の状態および設定を表示します。

summary

データベースサイズと制限、廃棄およびパーティションの状態、スペース情報、およびデータベース情報を表示します。

jobs -completed | -cancelled | -failed | -incomplete

指定したジョブの状態およびその他の情報を表示します。

jobs | jobsessions <jobID>

```
[-completed]
[-cancelled]
[-failed]
[-incomplete]
```

[-last <no_of> days| weeks| months]

特定のタイプのすべてのジョブまたは指定したジョブ ID に含まれるすべてのセッションに関する情報を表示します。

たとえば、「-completed」と入力すると、完了したジョブがすべて表示されます。

また、たとえば [-last 2 weeks] のように、時間制限を入力することもできます。

パラメータなしでコマンドを入力すると、データベース内のジョブすべてに関する情報が表示されます。

tapes | tapesessions <tapeID[:seqNo]>

指定したテープまたはテープ セッションに関する情報を表示します。

pools | poolmedia <poolName>

指定したプールまたはプールメディアに関する情報を表示します。

scratchmedia

メディアプールの再利用セット内に現在あるすべてのメディアに関する情報を表示します。この情報には、テープ名、シリアル番号、テープ ID、シーケンス番号、フォーマット日、有効期限、およびメディアが属しているメディアプールが含まれます。

savemedia

メディアプールの保存セット内に現在あるすべてのメディアに関する情報を表示します。この情報には、テープ名、シリアル番号、テープ ID、シーケンス番号、フォーマット日、有効期限、およびメディアが属しているメディアプールが含まれます。

詳細情報:

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - メディア プール管理オプション

ca_dbmgr メディア プール管理 オプションを使用すると、メディアの論理グループ(メディアプール)を管理、作成、および保守できるので、バックアップの識別が簡単になります。

ca_dbmgr コマンドには、以下のメディア プール管理 オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>] -mediapool
add <poolName> <saveTapes>
[-b <baseSerial>]
[-i <serialIncr>]
[-m <maxSerial>]
[-retention <retentionDays>]
modify <poolName>
[-save <saveTapes>]
[-retention <retentionDays>]
delete [-f] <poolName> [tapeID[:seqNo]]
move <tapeID[:seqNo]> <fromPoolName> <toPoolName> SCRATCH|SAVE
```

add <poolName> <saveTapes>

[-b <baseSerial>]

[-i <serialIncr>]

[-m <maxSerial>]

[-retention <retentionDays>]

新しいメディア プールを作成します。メディア プールの名前と、保存セットに保存するメディア数の最小値を指定します。

必要に応じて、シリアル番号情報と保存期間も指定できます。

modify <poolName>

[-save <saveTapes>]

[-retention <retentionDays>]

指定したメディア プールの保存セットに保管するメディアの最小数と保存期間を変更できます。

delete [-f] <poolName> [tapeID[:seqNo]]

指定したテープを、指定したメディア プールから削除します。

テープを指定せずにメディア プールの名前を入力すると、メディア プール全体が削除されます。

非対話モードで削除を実行するには、-f スイッチを使用します。

move <tapeID[:seqNo]> <fromPoolName> <toPoolName> SCRATCH|SAVE

テープをメディアプール間で移動します。再利用セットから保存セットへの移動、またはその逆の移動も可能です。*fromPoolName* 値または *toPoolName* 値のいずれかにデフォルト値を使用して、プール以外の設定を使用することができます。

たとえば、プール値が割り当てられていないテープを移動するには、*fromPoolName* 値のデフォルト値を使用します。このコマンドには、メディアプールマネージャのユーザインターフェースの「メディアの移動」と同じ機能もあります。

詳細情報:

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - データベース管理オプション

ca_dbmgr データベース管理オプションを使用すると、データベース情報の照会およびデータベースオプションの設定ができます。

ca_dbmgr コマンドには、以下のデータベース管理オプションが含まれます。

ca_dbmgr [-cahost <host>]

-tape delete <tapeID[:seqNo]

-prune on | off | set <count> days | months | year(s) <hh:mm>

-tape delete <tapeID[:seqNo]

データベースから指定したテープを削除します。

-prune on | off | set <count> day(s) <hh:mm>

データベースの廃棄のオン/オフを設定します。

経過した日数および廃棄期間の開始時間を指定します。廃棄処理中は、指定した日数よりも古いすべての詳細レコードは、毎日指定時刻にデータベースから削除されます。

たとえば、7 日より古いデータの廃棄を毎日午後 5 時に行われるようにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_dbmgr -prune set 7 days 17:00
```

注：廃棄処理では、指定した日数を経過した詳細レコードが削除されますが、ジョブレコードおよびセッションレコードは保持されます。

詳細情報：

[ca_dbmgr - データベースマネージャコマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - メンテナンス オプション

ca_dbmgr メンテナンス オプションを使用すると、データベースを効率的な状態で管理できるサイズになるように調整 および保守 できます。これらのメンテナンス タスクを定期的 に実施 することで、Arcserve Backup データベースの全体的 なパフォーマンスを向上 させることができます。

メンテナンス タスクの結果 は、SQLMaint.log と呼ばれる特別なメンテナンス ログに保存 されます。このログは、Arcserve Backup の LOG ディレクトリにあります。

ca_dbmgr コマンドには、以下 のメンテナンス オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>]
-maintenance
[UpdateStatistics]
[ReBuildIndex]
[CheckIntegrity]
[ReduceDBSize]
```

UpdateStatistics

データベース内のすべてのテーブルおよびインデックスに関する統計を更新 します。

SQL Server では、テーブルおよびインデックス内のデータの分布に関する統計を収集し、これらの統計を使用して、照会プロセスにおいてどのインデックスを使用するかを決定 します。統計が古い場合は、SQL Server は照会を実行する際にどのインデックスを使用するかを適切に評価 できない可能性があり、その結果、インデックスをスキャンする代わりに、時間のかかるテーブル全体のスキャンを選択 してしまう場合があります。インデックスを効果的に使用するには、最新の統計を持つことが重要 です。

推奨: 毎日

ReBuildIndex

データベース内のすべてのインデックスを再構築し、データが断片化しないように します。

データを変更 する操作 (挿入、更新、削除) を実行 すると、テーブルの断片化が発生 する可能性があります。このデータ変更 がインデックスに影響 を与えると、インデックスの断片化も発生 する可能性があり、インデックス内の情報が、データベース内部に散らばってしまう場合があります。断片化したデータによって、照会プロセス時に SQL Server による不必要なデータの読み込みが発生 し、パフォーマンスが低速、非効率 になってしまう場合があります。断片化が進むにつれて、インデックスの効率が劣化 します。インデックスを定期的 に

再構築することで、断片化がなくなり、ディスク領域を再利用し、データベース照会時の全体的なパフォーマンスが向上します。

推奨：毎週

CheckIntegrity

Arcserve Backup データベース内のすべてのオブジェクトの整合性をチェックします。

データベースは、ハードウェア障害、突然の電源遮断、オペレーティングシステム障害、またはオペレータの不適切な動作などのような異常事態によって、壊れてしまう可能性があります。Arcserve Backup データベース内のすべてのオブジェクトの割り当て、構造、および論理的な整合性を定期的にチェックすることが重要です。定期的にデータベースの整合性チェックを実施すると、最後に実施された整合性チェック以来、データベース内部で変更された部分が検出され、レポートされます。ご使用のデータベースのサイズに応じて、このタスクには時間がかかる場合があります。

推奨：毎週

ReduceDBSize

Arcserve Backup データベース内のデータおよびログファイルのサイズを小さくし、オペレーティングシステムへ領域を解放します。

時間が経つにつれて、ログファイルおよびデータファイルが急速に非常に大きくなり、データベースの効率を低減してしまう可能性があります。データベースのサイズを制御すると、パフォーマンスが向上し、より多くのユーザがデータベースにアクセスできるようになります。

ReduceDBSize を実行する場合、データベースの各ファイルに残す空き領域の割合と共に、圧縮するデータベースの名前を入力する必要があります。たとえば、100 MB のデータベースファイルのうち 60 MB を使用している場合、圧縮の割合を 25 % に指定できます。これにより SQL Server は、ファイルを 80 MB のサイズに圧縮し、20 MB の空き領域ができます。

推奨：必要に応じて

詳細情報：

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - マイグレーション ステータス オプション

ca_dbmgr マイグレーション ステータス オプションを使用すると、指定したジョブをチェックしてマイグレーション プロセスが正常に完了したかどうかを判断できます。

ca_dbmgr コマンドには、以下のマイグレーション ステータス オプションが含まれます。

```
ca_dbmgr [-cahost <host>]
-migrationstatus <job description>
[-lastjobbeforestarttime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>] |
[-lastjobbeforeendtime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>]
```

-migrationstatus <job description>

指定したジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。このコマンドは、ジョブをサブミットする際に、固有のジョブ詳細を割り当てた場合にのみ、ステータスを適切に返します。

このチェックで使用するリターン コードは、以下のとおりです。

- ◆ 1 - マイグレーションは失敗しました。
- ◆ 2 - マイグレーションは完了しました。
- ◆ 3 - マイグレーションは実行中です。
- ◆ 4 - マイグレーションは必要ありません。
- ◆ 5 - マイグレーション ステータスの取得に失敗しました。

-lastjobbeforestarttime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>

指定した日時に開始した最後のジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。これは、同じ日に複数回開始されたジョブに対して有効です。

-lastjobbeforeendtime <mm/dd/yyyy hh:mm:ss>

指定した日時に終了した最後のジョブのマイグレーション ステータスをチェックできます。これは、同じ日に複数回開始されたジョブに対して有効です。

詳細情報:

[ca_dbmgr - データベース マネージャ コマンド](#)

[ca_dbmgr - 例](#)

ca_dbmgr - 例

ca_dbmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、Arcserve Backup データベースの廃棄設定を表示します (DB 廃棄時間、セッションが削除されてからの日数)。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show prune
```

- 以下のコマンドは、Arcserve Backup データベース サマリを表示します(合計占有領域、DB サイズ、DB ジョブ/テープ/メディアレコード カウント、など)。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show summary
```

- 以下のコマンドは、指定したジョブ ID の詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobs 8
```

- 以下のコマンドは、「完了」のステータスを持つ、最近 8 日間のジョブすべてを表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobs -completed -last 8 days
```

- 以下のコマンドは、指定したジョブ ID のすべてのセッションの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show jobsessions 8
```

- 以下のコマンドは、データベースに記録されているすべてのテープの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show tapes
```

- 以下のコマンドは、指定したテープ上のすべてのセッションの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show tapesessions AB3C
```

- 以下のコマンドは、すべてのメディアプールの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show pools
```

- 以下のコマンドは、指定したメディアプールの詳細を表示します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -show poolmedia POOL1
```

例: ca_dbmgr メディアプール 管理オプション

- 以下のコマンドは、指定したパラメータで新しいメディアプールを追加します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool add POOL1 0 -b 1200000 -i 1000 -m 1299999 -retention 100
```

- 以下のコマンドは、保存セット内のメディアの数および保存日数(99日間)を指定した設定でメディアプールを変更します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool modify POOL1 -save 0 -retention 99
```

- 以下のコマンドは、指定したメディア(AB3C) をメディア プール TMPPPOOL から削除します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool delete -f TMPOOL AB3C
```

- 以下のコマンドは、指定したメディア(AB3C) をメディア プール「POOL1」からメディア プール「POOL2」の保存セットへ移動します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -mediapool move AB3C POOL1 POOL2 SAVE
```

例: ca_dbmgr データベース管理オプション

- 以下のコマンドは、ID AB3C:1 のメディアレコードを削除します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -tape delete AB3C:1
```

- 以下のコマンドは、データベース廃棄設定のジョブ実行時刻を 23:59 に変更し、20 日を過ぎたすべてのレコードを廃棄します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -prune set 20 days 23:59
```

例: ca_dbmgr データベースメンテナンスオプション

以下のコマンドを使用して、インデックスを再構築します。

```
ca_dbmgr -cahost machine1 -maintenance RebuildIndex
```

詳細情報:

[ca_dbmgr - データベースマネージャコマンド](#)

第7章: ca_devmgr - デバイス マネージャコマンド

デバイス マネージャコマンド(ca_devmgr) を使用すると、デバイス マネージャと連携することなく、Arcserve Backup でさまざまなデバイス管理コマンドを実行できます。このツールを使用して、情報を収集したり、テープ デバイスやライブラリ デバイスを操作したりできます。このコマンドを使用することで、ストレージ デバイスを制御でき、デバイスまたはチェンジャ内のメディアをフォーマットまたは消去することができます。デバイス マネージャで実行可能なすべての機能を、コマンド ラインから実行することができます。

ca_devmgr を使用するには、Arcserve Backup が実行中で、認証 サービスに認証を受ける必要があります。権限が与えられてない場合は、ca_auth ユーティリティを実行して、権限を取得します。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_devmgr - 構文	156
ca_devmgr - 使用法	157
ca_devmgr - その他のコマンド	158
ca_devmgr - 一般的なコマンド	159
テープドライブコマンド	161
ca_devmgr - テープライブラリコマンド	164
ca_devmgr - FSD のコマンド	169
ca_devmgr - クラウドのコマンド	180
ca_devmgr - 例	184

ca_devmgr - 構文

ca_devmgr のコマンド ラインの構文は、以下 のような形式 です。

```
ca_devmgr [-cahost <hostname>]  
[その他のオプション]  
[general command options]  
[tape drive command options]  
[tape library command options]  
[FSD command options]
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上 で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリ サーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリ サーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリ サーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ) へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール) 」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカル マシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_devmgr - 使用法

ca_devmgr コマンドには、以下のオプションが含まれます。

- その他のオプション
- 一般的なオプション
- テープドライブ オプション
- テープライブラリ オプション
- FSD オプション

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[ca_devmgr - その他のコマンド](#)

[ca_devmgr - 一般的なコマンド](#)

[ca_devmgr - FSD のコマンド](#)

ca_devmgr - その他のコマンド

ca_devmgr コマンドには、関連するすべてのコマンドを表示したり、Arcserve Backup がデバイス管理プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義したりするのに使用されるその他のコマンドが含まれます。その他のコマンドは、テープドライブまたはテープライブラリとは連携しませんが、Arcserve Backup とは連携します。

ca_devmgr コマンドには、以下のその他のコマンドが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注：-cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-usage

基本的なca_devmgrコマンドのリストを表示します。

allusage

すべての ca_devmgr コマンドおよびそれらのスイッチのリストを表示します。

-help

ca_devmgrヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_devmgrの使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

詳細情報：

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

ca_devmgr - 一般的なコマンド

共通コマンドは、システムにテープドライブまたはテープライブラリのいずれが接続されている場合に使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

-v <-adapterinfo...>|<-deviceinfo...>|<-groupinfo...>|<-mediainfo...>

-adapterinfo

-groupinfo [-alldomain]

-deviceinfo <adapter #> <scsi ID> <lun>|<groupname>|<-all>|<-alldomain>

-mediainfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

-setdebug <none|summary|detail|detail+>

-v

adapterinfo、deviceinfo、groupinfo、mediainfo の各コマンドでのみ使用されます。-v スイッチを使用した場合の主な違いは、これらの4つのコマンドについて追加の情報が出力されることです。-v スイッチは、単なる verbose コマンドではありません。

- adapterinfo

システムに接続されているすべての SCSI アダプタを順に調査し、アダプタ名、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、および接続されているテープデバイスやライブラリのファームウェアを出力します。

-groupinfo

Arcserve Backup で設定されているすべてのデバイスグループについて、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、ファームウェア、ステータス情報(テープライブラリのみ)を出力します。

-deviceinfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

任意のテープドライブまたはテープライブラリについて、デバイスの種類、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、ファームウェア、ステータス、およびデバイス共有情報(テープライブラリのみ)を出力します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-mediainfo <adapter #> <scsi ID> <lun>

任意のテープデバイスについて、テープ名、テープ ID、シーケンス番号、シリアル番号、および有効期限を出力します。テープライブラリの場合は、上記と同じ情報以外に、スロット番号、テープがロードされているかどうか、およびテープが書き込み保護されているかどうかが表示されます。また、テープライブラリについては、各スロットが表示されます。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-setdebug <none/summary/detail/detail+>

Arcserve Backup\Log フォルダの中に生成され、保存される TAPE.LOG ファイルに表示されるデバッグ情報のレベルを制御します。

none

情報は記録されません。

summary

不要な情報を除外し、重要なメッセージだけをログに記録することにより、テープログのサイズを小さくします。

これはデフォルトの設定です。

detail

接続したバックアップ デバイスに Arcserve Backup が送信したすべてのコマンドを記録しますが、読み取り/書き込みコマンドおよびテスト装置レディ コマンドは除外されます。カスタマ サポートがバックアップやリストアの問題を解決する際に使用するテープ エンジン特有の情報も記録されます。

detail+

接続したバックアップ デバイスに Arcserve Backup が送信したすべてのコマンドを記録します。読み取り/書き込みコマンドおよびテスト装置レディ コマンドも含まれます。カスタマ サポートがバックアップやリストアの問題を解決する際に使用するテープ エンジン特有の情報も記録されます。

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

テープドライブ コマンド

以下のテープドライブ コマンドは、テープドライブだけに使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]

[MEDIAPPOOL <mediapool name>]

-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>

-eject [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-eject_ex <changer_Adapter> <changer_scsiID> <changer_Lun> <drive_Adapter>

<drive_scsiID> <drive_Lun>

-retension [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]

[MEDIAPPOOL <mediapool name>]

テープドライブ内のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]

テープドライブ内のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- ◆ q - クイック消去 (メディアラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ qz - クイック消去プラス (メディアラベルとシリアル番号を消去)
- ◆ qw - クイック消去と WORM への変換 (メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- ◆ l - ロング消去 (メディア上のすべてのデータを消去)

重要: ロング消去では、テープの最初から最後までメディア全体が消去されるため、完了までに長時間かかる可能性があります。

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス(FSD またはテープ デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、複数のサーバ間で共有できます。

同じデバイスに同時にバックアップ データを書き込むのは、1 つのサーバのみであることを確認してください。複数のサーバが同時にデバイスにアクセスすると、バックアップが失敗し、データが失われる可能性があります。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス(FSD またはテープ デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のバックアップ ジョブをサブミットできません。

デバイスへのバックアップ処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。これにより、FSD では、複数のサーバが不注意からデバイスへ同時にアクセスしないようになります。デバイスがオフラインに設定される際に、バックアップ ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

-compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>

テープドライブでの圧縮を有効にしたり無効にしたりします。

このコマンドを使用するには、テープ デバイスで圧縮がサポートされ、ドライブに何も記録されていないテープが装備されている必要があります。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびオン/オフのフラグを指定する必要があります。

-eject [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

テープドライブ内にあるテープをイジェクトします。

このコマンドを使用するには、テープドライブでイジェクト コマンドがサポートされている必要があります。アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

-eject_ex <changer_Adapter> <changer_scsiID> <changer_Lun> <drive_Adapter> <drive_scsiID> <drive_Lun>

指定したドライブからテープをイジェクトし、指定されたチェンジャのスロットに移動します。

-retension [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

テープドライブ内のテープのリテンションを行います。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

ca_devmgr - テープライブラリコマンド

以下のテープライブラリコマンドは、テープライブラリだけに使用できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> [<slot #> [q|qz|qw|l] ...]

または

-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT_RANGE <slot range>
[q|qz|qw|l]

-chformat <changer adapter#> <changer scsi ID> <changer lun>
SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]] MEDIAPOOL
[<mediapool name>] SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]]
MEDIAPOOL [<mediapool name>] ...]

-load <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive
scsi ID> <drive lun> <slot #>

-unload <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive
scsi ID> <drive lun>

-mount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg.slot> <end slot>
[q|l]

-dismount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg.slot> <end slot>

-ieinfo <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>

-import <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

-export <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

-clean <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive
scsi ID> <drive lun>

-importall <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>

-lockcas <DeviceNo> <Mode>

-lockcas_ex <AdapterNo> <scsiID> <Lun> <Mode>

-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> [<slot #> [q|qz|qw|l] ...]

**-cherase <adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT_RANGE <slot range>
[q|qz|qw|l]**

テープライブラリ内の1つ、あるいは複数のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、チェンジャのSCSI ID、チェンジャのLUN、およびスロット番号は省略できません。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- ◆ **q** - クイック消去 (メディアラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ **qz** - クイック消去 プラス (メディアラベルとシリアル番号を消去)
- ◆ **qw** - クイック消去と WORM への変換 (メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- ◆ **l** - ロング消去 (メディア上のすべてのデータを消去)

また、「ca_devmgr -cherase [groupname] slot # [q|qz|qw|l] [,slot # [q|qz|qw|l] ,...]」と入力して、グループ名とスロット番号だけを使用してテープを消去することも可能です。

注：例に示されている「,」はスイッチではありません。ここでは単に複数のスロットを消去する方法を示す目的で表記されています。

```
-chformat <changer adapter#> <changer scsi ID> <changer lun> SLOT <slot#>
<tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]] MEDIAPOOL [<mediapool
name>] SLOT <slot#><tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]]
MEDIAPOOL [<mediapool name>] ...]
```

テープライブラリ内の 1 つ、または複数のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

このコマンドでは、チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、SCSI LUN、およびグループ名を指定する必要があります。スロット番号を指定する箇所では、各スロット番号の前に「SLOT」を付けます。また、フォーマットするテープの場所を示すスロット番号と、テープ名を指定する必要があります。有効期限 (mm/dd/yyyy) は省略可能です。

デフォルトの有効期限を表す def スイッチは有効期限と同時に指定することはできません。(有効期限とデフォルトの有効期限の間の「|」は、いずれか一方を選択する必要があることを示します。) シリアル番号はオプションです。一番最後の 3 つの「.」は、スロット番号をさらに指定することができるという意味です。

または、ca_devmgr -chformat [SLOT <slot#> <tape name> [<mm/dd/yy[yy]>|def [<serial no.>]] と入力することもできます。

このチェンジャフォーマットでは、スロット番号およびテープ名を使用できます。有効期限とシリアル番号は省略可能ですが、残りは必ず指定する必要があります。

ります。スロット番号を指定する箇所では、各スロット番号の前に「SLOT」を付けます。

**-load <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #>
<drive scsi ID> <drive lun> <slot #>**

指定されたスロットからテープドライブへテープをロードします。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN、さらにドライブのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびスロット番号を指定する必要があります。

**-unload <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #>
<drive scsi ID> <drive lun>**

テープドライブからテープをアンロードして、指定したスロットに戻します。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN およびスロット数は省略できません。

-mount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg.slot> <end slot> [q|l]

テープライブラリ全体のインベントリを実行します。

テープライブラリにバーコードリーダが装備されていない場合、Arcserve Backup によってすべてのテープがテープドライブに挿入され読み取られます。テープライブラリにバーコードリーダがある場合は、データベースから情報を取得するか、それとも Arcserve Backup ですべてのテープの読み込みを行うかを指定できます。チェンジャのアダプタ番号と SCSI ID、LUN、開始スロット、および終了スロットは省略できません。

開始スロットと終了スロットには、現在マウント中のグループと合致していさえすれば、任意のスロット番号を指定できます。ただし、終了スロット番号は開始スロット番号より大きい番号であることが必要です。q(クイックマウント)または l(ロングマウント)は省略可能です。バーコードリーダ付きのテープライブラリには、クイックマウントがデフォルトになります。

テープライブラリにバーコードリーダがあれば、Arcserve Backup データベースから情報を取得します。ロングマウントでは、Arcserve Backup によって各テープがテープドライブに強制的に挿入されて、情報が読み取られます。テープライブラリにバーコードリーダがなければ q スイッチは機能せず、各テープはテープドライブに挿入されて読み込まれます。

-dismount <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <beg.slot> <end slot>

オプションで指定された範囲内にある指定されたグループ内のスロットをマウント解除し、すべてのスロットの名前を「マウント解除されたスロット」に変更します。

Arcserve Backup が再開されるか、マウント解除されたグループに対して mount コマンドが実行されるまで、マウント解除されたスロットに対してその他のコマンドを発行することはできません。チェンジャのアダプタ番号と SCSI ID、LUN、開始スロット、および終了スロットは省略できません。

-ieinfo <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>

ライブラリのインポート/エクスポート スロットの情報を表示します。スロットがフルかどうかを示され、スロットがフルの場合は、スロットに入っているテープのバーコード番号が表示されます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-import <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

テープをテープライブラリのインポート/エクスポート スロットから取り出し、デスティネーション スロットに挿入します。

テープライブラリにバーコード リーダがあれば、テープの情報がデータベースから取得されます。ドライブデバイスではテープを読み取られません。

しかし、テープライブラリにバーコード リーダがない場合は、テープがドライブに挿入されて読み取られます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびスロット番号は省略できません。省略できるスイッチは、2 番目以降の slot # ... のみです。これは、複数のインポート/エクスポート スロットを持つテープライブラリ用のスイッチです。このスイッチを使用すると、同時に複数のテープをインポートできます。テープライブラリにインポート/エクスポート スロットが 1 つしかない場合、1 度にインポートできるテープは 1 つだけです。

-export <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <slot #> [<slot #> ...]

テープをテープライブラリのスロットからインポート/エクスポート スロットへと移します。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN およびスロット数は省略できません。slot #... は、複数のテープをエクスポートする場合に使用します。このオプションはテープライブラリにインポート/エクスポート スロットが複数ある場合にのみ指定できます。

-clean <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun> <drive adapter #> <drive scsi ID> <drive lun>

テープライブラリにクリーニング テープが入っている場合は、そのクリーニング テープを指定のドライブに挿入し、そのテープドライブをクリーニングします。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープドライブのアダプタ番号、SCSI ID およびテープドライブの LUN が必要となります。

-importall <changer adapter #> <changer scsi ID> <changer lun>

ライブラリのメールスロットで見つかった各テープを、ライブラリで最初に使用可能なストレージスロットに手動でインポートします。この引数を使用すると、ca_devmgr はバーコードに基づいてメディアのインベントリを実行しません。

この引数は、テープを特定のストレージスロットに移動させずに、メールスロットからインポートする場合に使用します。

メールスロットのすべてのテープに対応するライブラリスロットが存在しない場合は、空のライブラリスロットがなくなると、「テープをすべてインポートするのに十分な空スロットがありません」というメッセージが表示されます。

チェンジャのアダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-lockcas <DeviceNo> <Mode>

DeviceNo はチェンジャデバイスの番号で、Mode=0 の場合はデバイスのロックが解除されており、Mode=1 の場合はデバイスがロックされています。

-lockcas_ex <AdapterNo> <scsiID> <Lun> <Mode>

AdapterNo は、チェンジャデバイスが接続されているボード番号で、その他のパラメータは文字通りの内容を示します。

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイスマネージャコマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

ca_devmgr - FSD のコマンド

以下 のファイルシステム デバイス(FSD) コマンドは、FSD だけに使用 できます。

ca_devmgr [-cahost <host>]

-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]

-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<セッション番号 .>]

または

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>

<session range> は <start session no.>-<end session no.> またはすべてのセッションを意味する「all」にすることができます。

-query <adapter #> <scsi ID> <lun> [-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions <session no.> [<セッション番号 .>]

または

-query <adapter #> <scsi ID> <lun> [-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions all

-regenerate [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<tape ID> <mm/dd/yy[yy]>]

-createfsd <FSD Description> <FSD Name> <FSD Path> [<Domain Name> <User> <Password>]

-removefsd <FSD Path>

-setstaging <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>] [-mthreshold <Max Threshold/Purge to Threshold <"xx/xx%"|"xx/xx">]] [-snaplock <Enable Snaplock <0|1>>] [-pausemig <Pause Migration <0|1>>] [-chunksize <Chunk Size>]]

-cleanstaging <Group Name>

-getstaging <Group Name>

-queryfsd <FSD Path> [-group]

-creatededupefsd <FSD Description><FSD Name><Data Path><Index Path> [<Domain Name> <User><Password>] [-GrpName <Group Name>]

-removededupefsd <Group Name>

-configdedupefsd <Group Name> [-FSDDsp<FSD Description>] [-FSDName <FSD Name>] [-DataPath <Data Path>] [-IndexPath <IndexPath>]

-setdedupegrpproperties <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>] [-mthreshold <Max Threshold <"xx%"|"xx">] [-pausemig <Pause Migration <0|1>>] [-optimization <Allow Optimization <0|1>>]]

-getdedupegrpproperties <Group Name>

-startreclaim

-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]

テープドライブ内のテープをフォーマットします。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディアをフォーマットします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、テープの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]

テープドライブ内のテープを消去します。

-force オプションと共に使用すると、指定したメディアが保存セットまたは再利用セットのいずれに含まれるかにかかわらず、指定したメディア内のすべてのデータを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- ◆ q - クイック消去(メディアラベルを消去) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ qz - クイック消去 プラス(メディアラベルとシリアル番号を消去)
- ◆ qw - クイック消去と WORM への変換(メディアおよびテープドライブが WORM テクノロジをサポートしている場合) ハードウェアが WORM テクノロジをサポートしていない場合、消去の操作は失敗します。
- ◆ l - ロング消去(メディア上のすべてのデータを消去)

重要: ロング消去では、テープの最初から最後までメディア全体が消去されるため、完了までに長時間かかる可能性があります。

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス(FSD またはテープ デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、複数のサーバ間で共有できます。

同じデバイスに同時にバックアップ データを書き込むのは、1 つのサーバのみであることを確認してください。複数のサーバが同時にデバイスにアクセスすると、バックアップが失敗し、データが失われる可能性があります。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス(FSD またはテープ デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のバックアップ ジョブをサブミットできません。

デバイスへのバックアップ処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。これにより、FSD では、複数のサーバが不注意からデバイスへ同時にアクセスしないようになります。デバイスがオフラインに設定される際に、バックアップ ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例：アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD/テープ デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<セッション番号.>]

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>

指定したセッションまたはセッション グループをパージします。このコマンドを使用して、FSD からデータを削除します。

- ◆ セッションの 1 つが SnapLock で保護されている場合、そのセッション向けには警告が記録され、パージ プロセスは、指定した残りのセッションに対して行われません。
- ◆ セッションがマイグレートされる予定で、まだマイグレートされていない場合、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージ プロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

セッションがマイグレートされたかどうかにかかわらず、-force オプションを指定してセッションをパージできます。

- ◆ セッションがアクティブであると、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージ プロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

単一セッションまたは複数セッションのパージを、セッション番号(単一またはグループ)、範囲、またはすべて、の 3 つの方法の中から指定できます。

-sessions <session no.> [<セッション番号.>]

-sessions <session range>

注：<session range> は <start session no.>-<end session no.> またはすべてのセッションを意味する「all」にすることができます。

ページするセッション番号 (またはセッション番号のグループ)、セッション番号の範囲、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションをページするように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

-sessions 1

- セッションのグループをページするように指定するには、以下の構文形式を使用して、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定する必要があります。

-sessions 1 2 5 7 8

- セッションの範囲をページするように指定するには、以下の構文形式を使用して、開始セッション番号と終了セッション番号をダッシュで接続して指定する必要があります。

-sessions 3-5

- すべてのセッションをページするように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

-sessions all

-query <adapter #> <scsi ID> <lun> <-all|-copied|-uncopied|-purgable|-snaplocked|-failed> -sessions

指定したセッションを照会します。このコマンドを使用して、現在アクティブなユーザセッションをサーバに照会します。すべてのアクティブなセッション、または指定したタイプに一致するセッションだけに関する情報をリクエストできます。

-query コマンドは、以下の情報を提供します。

- ◆ すべてのコピー済みセッションおよびコピー済みでないセッション
- ◆ SnapLock で保護されたすべてのセッション
- ◆ 各セッションの保存期間
- ◆ ページ可能なすべてのセッション

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN は省略できません。

-copied

すべてのコピー済みセッションのリストを表示します。

-uncopied

コピーされなかったすべてのセッションのリストを表示します。

-purgable

ページ可能なすべてのセッションのリストを表示します。

-snaplocked

SnapLock 保護が有効になっているすべてのセッションのリスト、および、各セッションの保存期間を表示します。

-failed

失敗したすべてのセッションのリストを表示します。

-sessions <list of space separated sessions | all>

照会するセッション番号、セッション番号のグループ、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

-sessions 1

- セッションのグループを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用して、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定する必要があります。

-sessions 1 2 3

- すべてのセッションを照会するように指定するには、以下の構文形式を使用する必要があります。

-sessions all

-regenerate [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<tape ID> <mm/dd/yy [yy]>]

誤ってテープヘッダを削除してしまった場合に、ファイルシステムデバイスで使
用します。ファイルシステムデバイスに対し、指定したテープ名 (<tape name>)
でテープヘッダを再度作成またはリビルドできます。新しいテープヘッダを作成
した後は、ファイルシステムデバイス上のセッションをすべて Arcserve Backup
データベースにマージすることで、point-and-select リストア機能 (リストアポイン
トを選択できる機能) を使用できます。

オリジナルのテープ名 (<tapename>) とそのテープ ID (<tapeID>) がわかっている
場合、これらを再使用することで、Arcserve Backup データベースはセッションレ
コードを再度マージしなくてもボリュームに再接続できます (テープ名とテープ ID
は、Arcserve Backup データベースにある元のテープレコードで確認できます)。

<mm/dd/yyyy> パラメータを使用して、デフォルトの有効期限とは異なる日付
をテープの有効期限に指定できます。

-createfsd

実行時にテープエンジンを停止することなく、FSD を動的に作成するように指
定します。Arcserve Backup は、作成するデバイスがデバイスリスト システムに

すでに存在しないかをチェックし、存在しない場合は、それをデバイスリストへ追加します。

注: ca_devmgr では、Arcserve Backup グループの環境設定 GUI が開いていると -createfsd は失敗します。

FSD Description

作成される FSD の説明を指定します。

FSD Name

作成される FSD の識別名を指定します。

FSD path

作成される FSD の物理パスを指定します。

ドメイン名

作成される リモート FSD へアクセスするためのドメインを指定します。

ユーザ

作成される リモート FSD へアクセスするためのユーザ名を指定します。

パスワード

作成される リモート FSD へアクセスするためのユーザ パスワードを指定します。

-removefsd <FSD Path>

実行時にテープ エンジンを停止することなく、Arcserve Backup から FSD を動的に削除するように指定します。

-setstaging <Group Name>

FSD グループをステージング グループとして設定するように指定します。

-mstreams <Max Stream>

ステージング グループ内の FSD に送信される同時データ ストリームの最大数を指定します。

使用できるオプションは、1 または 2 ストリームで、デフォルトは 1 ストリームです。

-mthreshold <Max Threshold/Purge to Threshold <"xx/xx%" | "xx/xx">>

FSD の最大容量しきい値、およびパージしきい値を指定します。

FSD 上の使用済みスペースの量が、指定した最大しきい値を超える場合は、最も古いマイグレート終了済みセッションからの順番でデータが FSD からパージされます。「パージしきい値」は最小しきい値であり、Arcserve Backup

がページを中断する場合の FSD 上の使用済み容量を指定することができます。

最大しきい値およびページしきい値は、絶対値 (MB 単位) またはボリューム容量 (%) で表すことができます。

デフォルトの最大しきい値は 80% です。

デフォルトのページしきい値は 60% です。

最大しきい値を 80% に設定し、ページしきい値を 60% に設定する例を、次に示します。

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mthreshold "80/60"
```

しきい値を 1 つのみ指定した場合、自動的に表されるのは最大しきい値の方であり、ページしきい値は無効になります。(ページしきい値の設定は、最大しきい値に常に依存します。)

最大しきい値を 80% に設定し、ページしきい値を無効にする例を次に示します。

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mthreshold "80"
```

Notes:

- 最大しきい値に指定する値は、ページしきい値よりも常に大きくなければなりません。
- しきい値をパーセント単位で設定する場合、最大しきい値には 100% 未満の値を指定し、ページしきい値は 0% を超える値になります。(ページしきい値が 0% の場合、自動ページが無効になります。)
- しきい値を絶対値として設定する場合、最大しきい値には 1 MB を超える値を指定する必要があります。目標ページしきい値は 0 を超える値になります。(値が 0 の場合、ページが無効になります。)

-snaplock <Enable Snaplock <0|1>>

SnapLock 保護の有効/無効を指定します。SnapLock 保護を有効にしてデータをバックアップすると、指定された保存期間を過ぎるまで、バックアップされたデータのページまたは上書きができません。これにより、FSD 上のデータをどのユーザも削除できなくなります。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、SnapLock は無効です。

-pausemig <Pause Migration <0|1>>

FSD から、最終的なデスティネーション メディアへのデータのマイグレーションを停止するように指定します。このオプションにより、最終的なデスティネーション メディアのメンテナンスがスケジュールされている場合、またはハードウェアに問題がある場合、FSD へのバックアップは継続しますが、FSD から最終的なデスティネーションへのマイグレーションを停止することができます。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、データ マイグレーション停止オプションは無効です。

-chunksize <Chunk Size>

一度の書き込み処理で、ステージング デバイスに書き込まれるデータの最大量 (KB) を指定します。

デフォルトでは、ステージングのチャンク サイズは 512 KB です。

-cleanstaging <Group Name>

ローカル/リモート サーバから FSD ステージング グループの属性をクリーニング (削除) するように指定します。

-getstaging <Group Name>

ローカル/リモート サーバからステージング グループの属性を取得するように指定します。

-queryfsd <FSD Path> [-group]

デフォルトで FSD のアダプタ番号、SCSI ID、および LUN を照会するか、スイッチ「-group」をによって FSD グループを照会するかを指定します。これは主に自動化スクリプトで使用されます。

**-creatededupefsd <FSD Description><FSD Name><Data Path><Index Path>
[<Domain Name> <User><Password>] [-GrpName <Group Name>]**

Arcserve Backup にデデュプリケーション デバイスの新規作成を指示します。FSD の説明、FSD 名、データパス、およびインデックスパスを指定する必要があります。グループ名はオプションです。必要な場合は、有効なグループ名を指定します。指定しない場合、新しいデバイスはデフォルトのデデュプリケーション グループに追加されます。

FSD Description

作成するデデュプリケーション デバイスの説明を入力します。

FSD Name

作成するデデュプリケーション デバイスの識別名を指定します。

Data Path

デデュプリケーション データを保存する物理パスを指定します。

Index Path

インデックス ファイルおよびリファレンス ファイルのデータを保存する物理パスを指定します。このパスは、データパスとは異なるボリューム上である必要があります。誤ってデータパスと同じパスを指定した場合、別のパスを指定するよう促すプロンプトが表示されます。

ドメイン名

作成するリモート デデュプリケーション デバイスへアクセスするためのドメインを指定します。

ユーザ

作成するリモート デデュプリケーションへアクセスするためのユーザ名を指定します。

パスワード

作成するリモート デデュプリケーションへアクセスするためのユーザ パスワードを指定します。

-GrpName

新しいデデュプリケーション デバイス グループを作成します。

Group Name

-GrpName によって作成した新しいデデュプリケーション デバイス グループの名前を指定します。グループ名はオプションです。グループ名を指定しない場合、Arcserve Backup はデデュプリケーション デバイスを新しいデフォルト グループに追加します。

-removededupefsd <Group Name>

Arcserve Backup に、グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの削除を指示します。

<Group Name>

削除するデデュプリケーション デバイスを含んでいるグループ名を指定します。

-configdedupefsd <Group Name> [-FSDDsp<FSD Description>][-FSDName <FSD Name>] [-DataPath <Data Path>] [-IndexPath <IndexPath>]

Arcserve Backup に既存のデデュプリケーション デバイスの変更を指示します。FSD の説明、FSD 名、データパス、およびインデックスパスの新しい値を指定します。

-FSDDsp <FSD Description>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの新しい説明を入力します。

-FSDname <FSD Name>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスの新しい識別名を入力します。

-DataPath <Data Path>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスが、デデュプリケーション データの保存時に使用する新しいデータパスを入力します。

-IndexPath <Index Path>

グループ名で指定したデデュプリケーション デバイスが、デデュプリケーション 処理に関連付けたインデックス ファイルおよびリファレンス ファイルの保存時に使用する新しいインデックスパスを入力します。

注：データパスとインデックスパスは、デデュプリケーション デバイスのメディアがブランクである場合にのみ変更できます。

-setdedupegrpproperties <Group Name> [[-mstreams <Max Stream>][-mthreshold <Max Threshold <"xx%"|"xx">][-pausemig <Pause Migration <0|1>]][-optimization <Allow Optimization <0|1>]]

Arcserve Backup に、<Group Name> で指定したデバイスのデデュプリケーション グループ プロパティを設定するように指示します。

-mstreams <Max Stream>

デデュプリケーション デバイスに送信する同時データストリームの最大数を指定します。

デフォルト値は 1 です。

-mthreshold <Max Threshold <"xx%"|"xx">>

デデュプリケーション デバイスの容量の最大しきい値を指定します。このしきい値は、デバイス容量のパーセントとして、または絶対値 (MB) として指定します。

デフォルト値は 80 % です。

-pausemig <Pause Migration <0|1>>

デデュプリケーション デバイスから、最終的なデスティネーション メディアへのデータのマイグレーションを停止するように指定します。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、データマイグレーション停止オプションは無効です。

-optimization <Allow Optimization <0|1>>

デデュプリケーション処理の最適化を有効または無効にします。最適化を有効にしてデータのデデュプリケーションを実行すると、ファイル全体ではなくファイルのヘッダデータのみを確認します。

0 = 無効

1 = 有効

デフォルトでは、最適化は無効になっています。

-getdedupegrpproperties <Group Name>

Arcserve Backup に、<Group Name> で指定したグループのプロパティ設定を取得するように指示します。

-startreclaim

ページポリシーを満たすデータ デデュプリケーション デバイス上に存在するセッションをページします。この引数を使用すると、デバイス上のディスク容量を即座に解放できます。

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

ca_devmgr - クラウドのコマンド

以下 のコマンドは、クラウド デバイスに適用されます。

```
ca_devmgr [-cahost <host>]
-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
[MEDIAPOOL <mediapool name>]
-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]
-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]
-compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>
-listcloudconnectionname
-listcloudfolder <cloud connection name>
-createclouddevice <device name> <device description> <cloud connection name>
<cloud folder> [<password>]
-removeclouddevice <cloud connection name> <cloud folder>
-setcloudgrpproperties <Group Name> -mstreams <Max Stream>
-getcloudgrpproperties <groupname>
-testthroughput <cloud connection name>[<Total Data Size(MB)> <Chunk Size(KB)>
<Thread Number>]
-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<セッション番号.>]
または
-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>
<session range> は <start session no.>-<end session no.> またはすべてのセッションを意味する「all」にすることができます。
```

-adapterinfo

システムに接続されているすべてのアダプタを順に調査し、アダプタ名、アダプタ番号、SCSI ID、ベンダ ID、プロダクト ID、および接続されているテープ デバイスやクラウド デバイスのファームウェアを出力します。

```
-format [<adapter #> <scsi ID> <lun> <tape name>] [<mm/dd/yyyy> <serial no.>]
[MEDIAPOOL <mediapool name>]
```

クラウド デバイスをフォーマットします。

クラウド ベース デバイスはメディア プールに割り当てることができないので、シリアル番号 およびメディア プール オプションは無効になります。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびクラウド ベース デバイスの新しい名前を指定する必要があります。日付とシリアル番号は省略可能です。

```
-erase [<adapter #> <scsi ID> <lun>] [q|qz|qw|l]
```

クラウド ベース デバイスを消去します。

アダプタ番号、SCSI ID、および LUN オプションを指定する必要があります。

表示されるオプションは以下のとおりです。

- ◆ **q** - クイック消去 (ラベルを破棄) デフォルトでは、このオプションが選択されています。
- ◆ **qz** - クイック消去 プラス (ラベルとシリアル番号を破棄)

-online [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス (FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイス) をオンライン ステータスに設定します。デバイスをオンラインに設定すると、マイグレーション ジョブに使用できます。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイスを使用しており、それをオンライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -online 0 0 1
```

-offline [<adapter #> <scsi ID> <lun>]

指定されたデバイス (FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイス) をオフライン ステータスに設定します。オフラインに設定すると、デバイスに他のマイグレーション ジョブをサブミットできません。

デバイスへのマイグレーション処理がすでに実行中の場合は、ジョブが完了するまでデバイス ステータスをオフラインに変更できません。クラウド ベース デバイスの場合、この動作により、複数のサーバがデバイスに同時にアクセスするのを防ぎます。デバイスがオフラインに設定される際に、マイグレーション ジョブがデバイスにアクセスしようとする、ジョブが失敗します。

例: アダプタ番号、SCSI ID、および LUN が 0、0、1 の FSD、テープ、またはクラウド ベース デバイスを使用しており、それをオフライン ステータスにするには、以下のコマンドを入力します。

```
ca_devmgr -offline 0 0 1
```

-compression [<adapter #> <scsi ID> <lun>] <on|off>

クラウド ベース デバイスでの圧縮を有効にしたり無効にしたりします。

アダプタ番号、SCSI ID、LUN、およびオン/オフのフラグを指定する必要があります。

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session no.> [<セッション番号.>]

-purge <adapter #> <scsi ID> <lun> -sessions <session range>

指定したセッションまたはセッション グループをパージします。このコマンドを使用して、クラウド ベース デバイスからデータを削除します。

- ◆ セッションがアクティブであると、警告が記録され、そのセッションはパージされず、パージ プロセスは、指定した残りのセッションに対して行われます。

単一セッションまたは複数セッションのページを、セッション番号(単一またはグループ)、範囲、またはすべて、の3つの方法の中から指定できます。

-sessions <session no.> [<セッション番号.>]

-sessions <session range>

注: <session range> は <start session no.>-<end session no.> またはすべてのセッションを意味する「all」にすることができます。

ページするセッション番号(またはセッション番号のグループ)、セッション番号の範囲、またはすべてのセッション番号を指定します。

- 単一セッションをページするように指定するには、以下の構文を使用する必要があります。

-sessions 1

- ページする一群のセッションを指定するには、スペースによって区切られたセッション番号のリストを指定します。例:

-sessions 1 2 5 7 8

- ページするセッションの範囲を指定するには、開始セッション番号と終了セッション番号をハイフンでつないで指定する必要があります。例:

-sessions 3-5

- すべてのセッションをページするように指定するには、以下の構文を使用します。

-sessions all

-listcloudconnectionname

デフォルトでは、このコマンドを使用すると、既存のすべてのクラウド接続に関する基本情報をリスト形式でコンソールにエクスポートできます。また、出力を.txt または.csv ファイルにリダイレクトすることもできます。

-listcloudfolder

指定されたクラウド接続に関連付けられているクラウド アカウントの下にあるすべてのクラウド ベース デバイスに関する基本情報をエクスポートします。

このオプションには以下の引数があります。

-listcloudfolder <cloud connection name>

-createclouddevice

新しいクラウド フォルダまたは既存のクラウド フォルダを参照する1つのクラウド ベース デバイスを作成します。クラウド フォルダにパスワード保護を設定する場合は、検証用の正しいパスワードを入力する必要があります。パスワードを

入力しないと、クラウドフォルダにリンクさせる1つのクラウドベースデバイスを作成できません。

このオプションには以下の引数があります。

```
-createclouddevice <Device Name> <Device Description> <Cloud Connection Name> <Cloud Folder> [<Password> <Password Confirmation>]
```

-removeclouddevice

Arcserve Backup からクラウドベースデバイスを削除します。

このオプションには以下の引数があります。

```
-removeclouddevice <Cloud Connection Name> <Cloud Folder>
```

-setcloudgrpproperties

<Group Name> で指定したデバイスのクラウドグループプロパティを設定し、クラウドベースデバイスに送信する同時データストリームの最大数を指定します。

デフォルト値は4です。

このオプションには以下の引数があります。

```
-setcloudgrpproperties <Group Name> -maxstream <Max Streams>
```

-getcloudgrpproperties

Arcserve Backup に、<Group Name> で指定したグループのプロパティ設定を取得するように指示します。

このオプションには以下の引数があります。

```
-getcloudgrpproperties <Group Name>
```

-testthroughput

特定のクラウド接続のスループットをデフォルトの引数を使ってテストし、クラウド接続用のマイグレーションジョブとして同様の結果を取得します。

テスト用のデフォルト値は、データサイズ合計が16 MB、チャンクサイズが1024 KB、およびスレッド番号が4です。

このオプションには以下の引数があります。

```
-testthroughput <cloud connection name>
```

詳細情報:

[ca_devmgr - デバイスマネージャコマンド](#)

[ca_devmgr - 例](#)

ca_devmgr - 例

ca_devmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、アダプタ情報を SCSI ID およびアダプタ番号付きで表示します。

```
ca_devmgr -adapterinfo
```

- 以下のコマンドは、指定したアダプタおよび SCSI 番号のテープ情報(名前およびシリアル番号)を表示できます。

```
ca_devmgr -mediainfo 3 4
```

- FSD グループをステージンググループとして指定し、次のように設定するには、下記のコマンドを使用します。

- 最大ストリーム数を 2 に設定
- しきい値を 80%(最大) および 60%(最小) に設定
- チャンクサイズを 512MB に設定

```
ca_devmgr -setstaging group0 -mstreams 2 -mthreshold "80/60%" -  
chunksize 512
```

- DDD1 という新しいデデュプリケーション デバイスを作成し、DDDDGrp1 というグループに割り当てるには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_devmgr -creatededupefsd DedupeDeviceSalesData DDD1 c:\data d:\index -  
GrpName DDDGrp1
```

- DDGrp0 というグループに割り当てた DDD0 という既存のデデュプリケーション デバイスのデータおよびインデックスパスを変更するには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_devmgr -configdedupefsd DDGrp0 -FSDName DDD0 -DataPath c:\dataFiles -  
Index d:\refFiles\
```

- DDGrp9 というグループに次のようなデデュプリケーション グループ プロパティを設定するには、以下のコマンドを使用します。

- 最大データストリーム数を 2 に設定
- 最大しきい値を 90% に設定
- マイグレーションの一時停止を有効に設定
- 最適化を有効に設定

```
ca_devmgr -setdedupegrpproperties DDDGrp9 -mstreams 2 -mthreshold  
"90%" -pausemig 1 -optimization 1
```

詳細情報:

ca_devmgr - デバイス マネージャ コマンド

第8章: ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド

ユーザ名 または パスワード が 変 更 さ れ た 場 合 は、ジョブ キュー内 のすべてのジョブにその変 更 を反 映 さ せ る 必 要 があ り ま す。ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド (ca_jobsecmgr) を使 用 す る と、ジョブ キュー内 のすべてのジョブに對して、ユーザ名 または パスワード の一 括 変 更 を行 う こ と が で き ま す。この変 更 は、特 定 の Arcserve Backup サーバに對して、または現 在 の Arcserve Backup ドメイン内 のすべての Arcserve Backup サーバに對して実 行 で き ま す。

注: Arcserve Backup ca_jobsecmgr を実 行 す る に は、ユーザと同 等 の権 限 が必 要 で す。ほとんどの場 合、Arcserve Backup システム アカウ ント 向 け にユーザが定 義 し た パスワード を使 用 で き ま す。同 等 の権 限 を割 り 当 て る に は、[ca_auth](#) を使 用 し ま す。

このセクションには、以 下 のトピックが含 ま れ ま す。

ca_jobsecmgr - 構 文	188
ca_jobsecmgr - 使 用 法	189
ca_jobsecmgr - サーバ引 数	190
ca_jobsecmgr - 現 在 のセキュリティ オプシ ョ ン	191
ca_jobsecmgr - 新 し いセキュリティ オプシ ョ ン	192
ca_jobsecmgr - 例	193

ca_jobsecmgr - 構文

ca_devmgr のコマンド ラインの構文は、以下 のような形式 です。

ca_jobsecmgr

[server arguments]

<current security>

<new security>

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文 の文字](#)

ca_jobsecmgr - 使用法

ca_jobsecmgr コマンドは、以下のオプションおよび引数を含みます。

- サーバ引数
- 現在のセキュリティ
- 新しいセキュリティ

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

[ca_jobsecmgr - サーバ引数](#)

[ca_jobsecmgr - 現在のセキュリティ オプション](#)

[ca_jobsecmgr - 新しいセキュリティ オプション](#)

ca_jobsecmgr - サーバ引数

ca_jobsecmgr コマンドは、変更 (ユーザ名 およびパスワード) を特定の Arcserve Backup サーバまたは現在の Arcserve Backup ドメインのすべての Arcserve Backup サーバに適用するかどうかを指定する方法を提供します。

ca_jobsecmgr コマンドには、以下のサーバ引数が含まれます。

注: 1 回の ca_jobsecmgr コマンドで利用できるのは、以下の引数のうち 1 つのみです。

-s

特定の Arcserve Backup サーバ上のユーザ名またはパスワードを変更します。

-d

Arcserve Backup ドメインの全サーバ上のユーザ名またはパスワードを変更します。

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

[ca_jobsecmgr - 例](#)

ca_jobsecmgr - 現在のセキュリティ オプション

いずれかのサーバ引数を指定した場合は、ジョブの現在のセキュリティ クレデンシャルを指定する必要があります。

ca_jobsecmgr コマンドには、以下の現在のセキュリティ オプションが含まれます。

ca_jobsecmgr

-u

-p

-u

この引数は、ジョブ キュー内のジョブに使用されている、現在のソース ノードのユーザ名を指定します。

ドメイン ユーザを指定するには、以下の形式を使用します。

<ドメイン>\<ユーザ名>

-p

この引数を使用して、ジョブ キュー内のジョブに使用されている、現在のソース ノードのパスワードを指定します。

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

[ca_jobsecmgr - 例](#)

ca_jobsecmgr - 新しいセキュリティ オプション

現在のユーザ名 およびパスワードを指定すると、ジョブに適用する新しいセキュリティ認証情報を提供できます。新しいセキュリティ オプションを使用して、新しいパスワード およびオプションで新しいユーザ名を指定できます。

ca_jobsecmgr コマンドには、以下の新しいセキュリティ オプションが含まれます。

ca_jobsecmgr

-np

-nu

-np

このオプションを使用して、ソース ノード ユーザがジョブ キュー内のジョブに対して使用する新しいパスワードを指定します。

-nu

オプション.このオプションは、キュー内のジョブに対して使用される新しいソース ノード ユーザ名を指定します。

ドメイン ユーザを指定するには、以下の形式を使用します。

ドメイン\ユーザ

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

[ca_jobsecmgr - 例](#)

ca_jobsecmgr - 例

ca_jobsecmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 特定の Arcserve Backup サーバ上のユーザ名とパスワードを変更するには、以下の構文を使用します。

```
ca_jobsecmgr -s mahcine1 -u administrator -p xyz -nu administrator2 -np xyz2
```

- Arcserve Backup ドメインのすべてのサーバ上のユーザ名とパスワードを変更するには、以下の構文を使用します。

```
ca_jobsecmgr -d -u administrator -p xyz -nu administrator2 -np xyz2
```

詳細情報:

[ca_jobsecmgr - ジョブ セキュリティ マネージャ コマンド](#)

第9章: ca_log - ログコマンド

ログコマンド (ca_log) は、Arcserve Backup ログを表示、ページ、クリア、および管理することができるユーティリティです。ca_log を使用すると、アクティビティログとジョブログを表示することができます。また、これらはいずれもジョブステータスマネージャからも利用することができます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_log - 構文	196
ca_log - 使用法	197
ca_log - その他オプション	198
ca_log - ログ名操作オプション	199
ca_log - 表示オプション	200
ca_log - ページオプション	203
ca_log - 例	204

ca_log - 構文

ca_log のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_log [-cahost <hostname>] [-entiredomain]

-参照

-view <_logname> [view options]

-purge <_logname> [purge options][[-yes]

-clear <_logname>[-yes]

-help

-examples

注：「Arcserve Manager (コンソール) 」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカル マシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_log - ログ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_log - 使用法

ca_log コマンドには、以下のオプションが含まれます。

- その他のオプション
- ログ名 操作オプション
- 表示オプション
- パージ オプション

詳細情報:

[ca_log - ログ コマンド](#)

[ca_log - その他 オプション](#)

[ca_log - ログ名 操作オプション](#)

[ca_log - 表示オプション](#)

[ca_log - パージ オプション](#)

ca_log - その他オプション

ca_devmgr コマンドには、関連するすべてのオプションを表示し、Arcserve Backup がログ生成プロセスで使用する基本のポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_log コマンドには、以下のその他のオプションが含まれています。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

スイッチは、フィルタです。ドメイン内の特定のマシンで操作を実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。このスイッチを指定しないと、すべての操作はドメイン全体に対して実行されます。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-entiredomain

デフォルトの検索範囲のローカルホストの代わりに、検索範囲をドメイン内のログにのみ制限します。-entiredomain が指定されない場合、ca_log コマンドは、検索を指定されたホストに対するすべてのログに拡張します。

-usage

基本の ca_log コマンドのリストを表示します。

-help

ca_log ヘルプトピックが表示されます。

-examples

ca_log の使用例を含むヘルプが表示されます。

詳細情報：

[ca_log - ログコマンド](#)

[ca_log - 例](#)

ca_log - ログ名 操作オプション

ログ ファイルの操 作 および表 示 に使 用 できるオプションには数 種 類 あります。

ca_log コマンドには、以 下 のログ名 操 作オプションが含まれます。

ca_log [-cahost <hostname>] [-entiredomain]

-clear <_logname>[-yes]

-参照

-clear <_logname> [-yes]

指 定されたログ名を持つすべてのログをデータベースから削除します。

注：このオプションにより、データベース内のすべての情報が失われます。

-参照

特定のホスト上の表示できるすべてのログ ファイルを一覧表示します。

ドメイン全体のログ名すべてを一覧表示します。このスイッチが -cahost に含まれている場合、特定のホストのすべてのログ名が一覧表示されます。

詳細情報：

[ca_log - ログ コマンド](#)

[ca_log - 例](#)

ca_log - 表示オプション

ログの表示に使用できるオプションには数種類あります。

ca_log コマンドには、以下のログ表示オプションが含まれます。

ca_log [-cahost <hostname>][-entiredomain]

-view <_logname>[<view options>]

-jobID <ID>

-groupbyjob

-before <mm/dd/yyyy>

-after <mm/dd/yyyy>

-monitor

-sev

注: コマンド出力で Unicode 文字が正しく表示されるようにするには、最初に、以下のよう環境変数「ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL」に 1 の値を設定してから、コマンドを実行する必要があります。

C:\Documents and Settings\cb>set ARCSERVE_UNICODE_DISPLAY_CMDL=1

また、これらの Unicode 文字を正しく表示するには、以下のように環境変数を設定した後で、ca_log の出力をリダイレクトする必要があります。

C:\>ca_log -view activity.log >UNICODE_log.txt

logname

1 つまたは複数の表示オプションに従って、ログ名で指定されたログを表示します。

-jobID <ID>

アクティビティ ログ向けのジョブ ID またはジョブ リスト ID で指定されたログを表示します。

例:

- ◆ ca_log -view activity.log -jobID 5
- ◆ ca_log -view activity.log -jobID 1,2,3(カンマで区切る)

-groupbyjob

表示されるファイル名がアクティビティ ログの場合のみ利用できます。ca_log -view コマンドがまずジョブ ID でグループ化されたログを表示し、次にジョブ ID を持たないジョブのログを表示するように指定します。ジョブ ログは、他のログの前にまずマスタ ジョブとその子ジョブ ログをグループ化します。

このスイッチを含めないと、アクティビティ ログは時系列で表示されます。

このスイッチを含めると、アクティビティ ログはジョブごとに表示され、グループ化されます。

たとえば、出力は以下 のようになります。

- ◆ アクティビティ ログ内 のジョブ 1 のログ
- ◆ アクティビティ ログ内 のジョブ 2 のログ ...
- ◆ アクティビティ ログ内 のジョブ n のログ
- ◆ アクティビティ ログ内 のジョブ ID を持たないログ

-before <mm/dd/yyyy>

指定したログ名を持つ、日付 mm/dd/yyyy より前のエントリをすべて表示します。

注： -before オプションと -after オプションを共に使用して、ある期間のログを表示できます。

-after <mm/dd/yyyy>

指定したログ名を持つ、日付 mm/dd/yyyy より後のエントリをすべて表示します。

注： -before オプションと -after オプションを共に使用して、ある期間のログを表示できます。

-monitor

指定したログ名を持つログを表示し、開いた状態を無期限に維持します。このログ名は、ログに追加エントリが記録されるとリアルタイムで更新されます。

指定した最後のログの表示後に ca_log コマンドが終了しないようにして、ログが利用可能になったときに、ログファイルから追加ログの読み取りと表示を続行します。

-sev

指定したログ名を持つエントリごとにその重要度レベルを表示します。重要度レベルは、日付カラムの後に表示されます。重要度レベルは以下のとおりです。

I - 情報

W - 警告

E - エラー

注： -sev オプションは、-jobID、before、および -after オプションと共に使用できます。

詳細情報：

[ca_log - ログ コマンド](#)

[ca_log - 例](#)

ca_log - パージ オプション

ca_log パージ オプションを使用して、時間を基準としてログの最も古い部分を削除します。-purge は、一時的なオンデマンドのコマンドで、コマンドを発行する際に開始されます。

ca_log コマンドには、以下のログ ファイル パージ オプションが含まれます。

ca_log [-cahost <hostname>][[-entiredomain]

-purge <_logname>

-olderthan num <day[s] | week[s] | months[s] | year{s}>

logname

-olderthan パージ オプションで指定した時間基準に従って、指定したログ名を持つログをパージします。

-olderthan num <day[s] | week[s] | months[s] | year[s]>

指定した日数、週数、月数、または年数よりも古いログをパージします。時間基準に基づいて、指定したログ名を持つ情報がデータベースからパージされます。

注： 指定する日数は 1 ～ 365 の間です。

パージの期間を指定する際には、適切に「day」、「week」、「month」、または「year」の単語を付ける必要があります。例：

```
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 day
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 week
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 month
ca_log -purge <log name> -olderthan 3 year
```

詳細情報：

[ca_log - ログ コマンド](#)

[ca_log - 例](#)

ca_log - 例

ca_backup コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、ドメイン全体のアクティビティログを表示します。
`ca_log -entiredomain -view Activity.log`
- 以下のコマンドは、指定したホストのアクティビティログを表示します。
`ca_log -cahost hostname -view Activity.log`
- 以下のコマンドは、メンバーサーバのアクティビティログを表示します。
`ca_log -cahost <member server> -view Activity.log`
- 以下のコマンドは、まずマスタジョブとそれに対応する子ジョブのログごと、次にその他のアクティビティログごとにグループ化して、ドメイン全体のアクティビティログを表示します。
`ca_log -entiredomain -view Activity.log -groupbyjob`
- 以下のコマンドは、指定したジョブのアクティビティログを表示します。ジョブがマスタジョブの場合、出力されるログには、マスタジョブのログだけでなく、それに対応する子ジョブのログも含まれます。
`ca_log -view jobXXX.log`
- 以下のコマンドは、ドメイン全体からアクティビティログをクリアします。
`ca_log -entiredomain -clear Activity.log`
- 以下のコマンドは、指定したホストからアクティビティログをクリアします。
`ca_log -cahost hostname -clear Activity.log`
- 以下のコマンドは、指定したホスト上で、4日よりも経過したアクティビティログのすべてのエントリをパージします。
`ca_log -cahost hostname -purge Activity.log -olderthan 4 days`
- 以下のコマンドは、1日を経過したジョブ8のログのすべてのエントリをパージします。
`ca_log -purge Job8.log -olderthan 1 day`

詳細情報:

[ca_log - ログコマンド](#)

第10章: ca_merge - マージ マネージャコマンド

マージ マネージャコマンド (ca_merge) は、Arcserve Backup マージ マネージャのコマンド ライン インターフェースです。このコマンドは、マージ ジョブを作成してジョブキューにサブミットするときに使用します。バックアップ メディアからデータベース情報をArcserve Backupデータベースにマージできます。マージ マネージャから実行可能な機能はすべてコマンド ラインでも実行できます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_merge - 構文	206
ca_merge - 使用法	207
ca_merge - その他のオプション	208
ca_merge - ソース引数	210
ca_merge - ジョブ実行引数	212
ca_merge - マージ オプション	214
ca_merge - リターン コード	219
ca_merge - 例	220

ca_merge - 構文

ca_merge のコマンド ラインの構文 は、以下 のような形式 です。

```
ca_merge  
[-cahost <hostname>]  
<source args>  
<run job args>  
<options>
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上 で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバ サーバまたはプライマリ サーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリ サーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリ サーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ) へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール) 」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカル マシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_merge - マージ マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_merge - 使用法

ca_merge コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ソース引数
- ジョブ実行引数
- マージ オプション
- ジョブ ステータスのリターンコード

詳細情報:

[ca_merge - マージ マネージャ コマンド](#)

[ca_merge - その他のオプション](#)

[ca_merge - ソース引数](#)

[ca_merge - ジョブ実行引数](#)

[ca_merge - マージ オプション](#)

[ca_merge - 例](#)

ca_merge - その他のオプション

ca_merge コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がマージ プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_merge コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注：-cahost をコマンドに含める場合、その処理をホストするシステム(ローカルまたはリモート)のホスト名も指定する必要があります。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-f <filename>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

usage

基本コマンドのリストを表示します。

-help

ca_mergeヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_mergeの使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

詳細情報：

[ca_merge - マージ マネージャ コマンド](#)

[ca_merge - リターン コード](#)

[ca_merge - 例](#)

ca_merge - ソース引数

ca_merge コマンド ソース引数を使用すると、マージするデータを指定できます。これらの引数を使用して、マージ処理に使用するグループ、テープ、およびセッションを指定できます。

ca_merge コマンドには、以下のソース引数が含まれます。

ca_merge

[*-group* <group name> *-tape* <tape name> [<tape ID>]]

[*-tape* <tape name> [<tape ID>]]

WINDOWS での使用法は以下のとおりです。

[*-currenttapeseq*][*-allsessions*]*-session* [<session #>|<session range>]]

UNIX での使用法は以下のとおりです。

[*-currenttapeseq*][*-allsessions*]*-session* <session range>]

***-group* <group name> *-tape* <tape name> [<tape ID>]**

マージジョブで使用するテープグループ名を指定します。

-group を含める場合は、*-tape* 情報も含める必要があります。

***-tape* <tape name> [<tape ID>]**

マージジョブで使用するテープを指定します。テープ ID は省略可能です。

テープ ID は、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-currenttapeseq

マージジョブに現在のテープシーケンスを使用するよう指定します。

-allsessions

マージジョブのためにテープのすべてのセッションをマージするように指定します。

注：すべてのセッションおよびテープセット スパンを複数のシーケンスにマージする場合、この操作が正常終了するにはシーケンス番号 1 のテープが存在する必要があります。

***-session* [<session #> |<session range>]**

テープの単一のセッションをマージするのか、または複数のセッションをマージするのかを指定します。複数セッションをマージするには、セッション範囲を指定します。

例：

「MYTAPE」というテープのセッション 27 をマージするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_merge -tape MYTAPE -session 27
```

「MYTAPE」というテープのセッション 9 ～ 24 をマージするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_merge -tape MYTAPE -session 9-24
```

詳細情報:

[ca_merge - マージ マネージャコマンド](#)

[ca_merge - リターンコード](#)

[ca_merge - 例](#)

ca_merge - ジョブ実行引数

ca_merge コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してマージ ジョブにジョブ実行の方法を指定できます。ca_merge のジョブ実行オプションを使用すると、マージ ジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択する方法によって、マージ ジョブがいつ実行されるかが決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュールされた時刻に開始されるようにするため、メンバーサーバのシステム時刻を、対応するプライマリサーバのシステム時刻に同期する必要があります。Windows Time Service を使用して、ドメイン内のすべての Arcserve サーバ上の時刻を同期します。

ca_merge コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_merge
[-at <hh:mm>]
[-on <mm/dd/yy[yy]>]
[-hold | -runjobnow]
[-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

マージ ジョブの実行時刻を指定します。

注: Arcserve Backup ジョブのすべてのスケジュール時刻は、サーバがあるタイムゾーンに基づいています。Arcserve Backup エージェント マシンが Arcserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

マージ ジョブの実行日を指定します。

-hold

マージ ジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow との併用はできません。

-runjobnow

マージ ジョブを即座にサブミットし、実行します。

-hold との併用はできません。

-description <description string>

マージ ジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符 ("") で囲む必要があります。

詳細情報:

[ca_merge - マージ マネージャコマンド](#)

[ca_merge - リターンコード](#)

[ca_merge - 例](#)

ca_merge - マージ オプション

ca_merge コマンドを使用すると、ジョブ全体に適用されるさまざまなマージ オプションを指定できます。

ca_merge コマンドには、以下のマージ オプションが含まれます。

ca_merge
[データベースの操作オプション](UNIX ホスト用)
[復号化パスワード リスト オプション]
[ログオプション](UNIX でのみ使用)
[ジョブ実行前/後の処理オプション]
[終了コード オプション]
[メディアオプション]
[その他のマージ オプション]
[ジョブ ステータス オプション]

データベースの操作オプション

注：このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

ca_merge コマンドには、以下のデータベース オプションが含まれます。

ca_merge

[-partialdbupdate]

-partialdbupdate

ジョブおよびセッション情報のみを Arcserve Backup データベースに記録します。

復号化パスワード リスト オプション

ca_merge コマンドには、以下の復号化パスワード リスト オプションが含まれます。

ca_merge

[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [password 8>]

[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]

セッションが暗号化されている場合に使用される、復号化パスワードのリストが提供されます。マージ ジョブに異なるパスワードを持つ複数のセッションが含まれる場合、Arcserve Backup はセッションごとに停止して、パスワードを要求しません。代わりに、指定した復号化パスワードは組み合わせリストとしてパッケージ化され、暗号化された各セッションがマージされるたびに、このリストが自動的にチェックされます。

必要なパスワードが復号化パスワード リストに含まれていた場合、ジョブは、さらにユーザ入力を求めることなく続行されます。必要なセッションパスワードが復号化リストに含まれていなかった場合は、その暗号化セッションの続行を

許可する前に、セッション パスワードを入力するようメッセージが表示されます。

復号化 パスワード リストには、最大 8 個のパスワードを含めることができます。各パスワードはスペースで区切ります。各パスワードは最大 23 文字であり、スペースまたはカンマを含むことはできません。

ログ オプション

注： このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

ca_merge コマンドには、以下のログ オプションが含まれます。

ca_merge

-logfile <filename> [summary | allactivity]

[-snmp] [-tng] [-email <email address>] [-printer <printer name>]

-logfile <filename> [summary | allactivity]

マージ ジョブ実行中のアクティビティを、filename で指定されたファイルに記録します。全アクティビティまたはアクティビティのサマリのみを記録するように指定できます。

-snmp

SNMP(Simple Network Management Protocol) アラートを有効化します。

-tng

Unicenter Network and Systems Management(NSM) アラート(旧名 TNG) を有効化します。

-email <email address>

指定された電子メールアドレスに、アクティビティ ログのコピーを送信します。

-printer <printer name>

指定されたプリンタに、アクティビティ ログのコピーを送信します。

このプリンタは環境設定ファイル ARCServe_HOME/config/caloggerd.cfg で設定しておく必要があります。

実行前/後の処理オプション

ca_merge コマンドには、以下のジョブ実行前/後の処理オプションが含まれます。

ca_merge

[-preexec <command>]

[-preexec timeout <minutes>]

[-postexec <command>]

[-prepostuser <user name>]

[-prepostpassword <user password>]

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、-prepostuser オプションも指定する必要があります。

-preexec timeout <minutes>

マージ ジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。

コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、-prepostuser オプションも指定する必要があります。

-prepostuser <user name>

このマージ ジョブをサブミットするユーザのユーザ名です。

-prepostpassword <user password>

このマージ ジョブをサブミットするユーザのパスワードです。

終了コード オプション

ca_merge コマンドには、以下の終了コード オプションが含まれます。

ca_merge

[-exitcode <exit code1>]

[-skip_delay|-skip_job]

[-skip_post]

-exitcode <exit code1>

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。

-skip_delay スイッチ、-skip_job スイッチ、および -skip_post スイッチと共に使用します。

注: Arcserve Backup [ジョブを実行]、[ジョブのスキップ]、および [処理終了後のアプリケーションの実行をスキップ] オプションは、返された終了コードが選択された条件 (Equal To(等しい)、Greater Than(より大きい)、Less Than(より小さい)、または Not Equal to(等しくない)) を満たしたことを検知した場合のみ、有効になります。

-skip_delay

指定した終了コードを受け取った場合、マージ ジョブを即実行します。

-skip_job

指定した終了コードを受け取った場合、マージ ジョブを完全にスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、実行後のコマンドをスキップします。

メディア オプション

ca_merge コマンドには、以下のメディア オプションが含まれます。

ca_merge

[-firsttapetimeout <minutes>]

[-spantapetimeout <minutes>]

-firsttapetimeout <minutes>

メディアがマージ ジョブに使用できる状態になるまでに待機する時間を、分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

-spantapetimeout <minutes>

使用可能なスパン メディアが実際にマージジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

その他のマージ オプション

ca_merge コマンドには、以下のその他のマージ オプションが含まれます。

ca_merge

[-list]

(UNIX でのみ使用)

-savescript <script name>

-list

マージ ジョブに使用可能なテープのリストを表示します。

-savescript <script name>

このジョブをジョブ キューにサブミット するのではなく、マージ ジョブをスクリプトとして保存します。保存したスクリプトは後でジョブ キューにロードできます。

注：このオプションは、UNIX でのみ使用されます。

ジョブ ステータス オプション

ca_merge コマンドには、以下のジョブ ステータス オプションが含まれます。

ca_merge

`[-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]]`

`-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]`

ca_merge コマンドは、ジョブが完了するまで待機してから終了します。その際、ジョブが正常に終了したのか、または失敗したのかを表す[リターンコード](#)が返されます。

<polling interval> 値は、ca_merge ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度 (秒数) を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

詳細情報：

[ca_merge - マージ マネージャ コマンド](#)

[ca_merge - リターン コード](#)

[ca_merge - 例](#)

ca_merge - リターンコード

ca_merge コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

リターンコード:

- 0 - コマンドは正常に実行されました。
- -1 - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

詳細情報:

[ca_merge - マージ マネージャコマンド](#)

ca_merge - 例

ca_merge コマンドの構文例は以下のとおりです。

マージされるソースがあるマシンの指定

- 以下のコマンドは、マージ用のソースマシンがデフォルトで localhost であることを指定します。

```
ca_merge -tape TAPE01
```

- 以下のコマンドは、マージ用のソースマシンが hostA であることを指定します。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01
```

ソースの範囲の限定

- 以下のコマンドは、localhost のグループに属するテープのすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -group <グループ名> -tape <テープ名> [<テープ ID>]
```

- 以下のコマンドは、hostA 上のテープ TAPE01 のすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01
```

- 以下のコマンドは、hostA 上の tapeid B5E3 を持つテープ TAPE01 のすべてのセッションをマージします。

```
ca_merge -tape TAPE01 B53E
```

- 以下のコマンドは、指定したセッション範囲をマージします。

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01 -allsessions
```

```
ca_merge -cahost hostA -tape TAPE01 -session 6
```

```
ca_merge -tape TAPE02 -session 2-8
```

マージジョブが実行される時刻の制限

- 以下のコマンドは、マージが実行される現在の日付の時刻を指定します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 at 11:20
```

- 以下のコマンドは、マージが実行される日時を指定します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -at 11:20 -on 07/03/25
```

- 以下のコマンドは、ホールド状態のマージジョブをサブミットします。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -hold
```

- 以下のコマンドは、ジョブを即時実行します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -runjobnow
```

ジョブステータスの待機

- 以下のコマンドを使用して、ジョブが終了するまで、指定したポーリング間隔 (秒数) でジョブステータスを照会します。

```
ca_merge -cahost hostB -tape TAPE03 -session 6-9 -runjobnow -waitforjobstatus  
60
```

詳細情報:

[ca_merge - マージ マネージャコマンド](#)

第11章: ca_mmo - メディア管理マネージャコマンド

メディア管理マネージャコマンド (ca_mmo) は、コマンド プロンプトから Arcserve Backup メディア管理マネージャ(MMO Admin) を使用するためのコマンド ライン インターフェイスです。このコマンドは、バックアップ処理とレポートを制御およびモニタするのに使用されます。メディア管理マネージャから使用できる多数の機能は、コマンド ラインから使用できます。

注: Arcserve Backup この機能を有効にするには、Enterprise Module がインストールされている必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_mmo - 構文	224
ca_mmo - オプション	225
ca_mmo - 例	228

ca_mmo - 構文

ca_mmo のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_mmo

[vault cycle options]

-start [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]

-startAll [-alert] [-exportAll] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]

[vault status reset options]

-reset

[mmo database options]

-init

[vaulted media options]

-checkin -tapename <Tape name>

-tapeid <Tape id #>

-seqnum <Tape seq #>

-type <Check in type>

-checkin -serialnum <Tape serial #>

-type <Check in type>

Check in types: temp | manual | manualretire

[vault assignment options]

-assign -tapename <Tape name>

-tape id <Tape id #>

-seqnum <Tape seq #>

-vaultname <Vault Name>

-assign -serialnum <Tape serial #>

-vaultname <Vault Name>

[print report options]

-printreport <Print type>

Print types: VaultSelection | Shipping | ShippingContent | Receiving | ReceivingContent
| InventoryByMedia | InventoryByVault

[vault export options]

-export

-exportAll

詳細情報:

[ca_mmo - メディア管理 マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_mmo - オプション

ca_mmo コマンドは、ボールド ポリシーを設定し、メディア リソースを管理するオプションを提供します。メディア管理 マネージャ(MM Admin) を使用すると、テープをオフサイトの保管場所に移動したり、テープが上書きされないようにテープを保護するための保存ポリシーを定義することができます。また、テープ内のファイルに安全にアクセスしたり、テープ ライブラリ リソースの包括的なインベントリを保持することもできます。

ca_mmo コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-start [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]

プライマリ サーバまたはスタンドアロン サーバ上にあるローカルテープに対してボールド サイクルを開始し、次に、指定されたボールド からこれらのローカルテープをエクスポートします。

-start コマンドのみを使用し、オフサイト ボールドに送信する必要のあるテープが出力に含まれる場合は、これらのテープをチェンジャから手動でエクスポートする必要があります。テープを手動でエクスポートしない場合は、-export コマンドを使用します。

-export コマンドを使用すると、メディア管理 マネージャによりローカルのボールドテープすべてが自動的にチェンジャのメールスロットにエクスポートされるので、これらのテープを手動でエクスポートする必要がありません。メールスロットの数よりも、エクスポートするボールド テープの数がメールスロットの数よりも多い場合、メディア管理 マネージャは管理者がメールスロットを空にするのを待って、残りのテープのエクスポートを継続します。

メールスロットを空にする必要が生じた場合に通知を受け取るには、-alert オプションを使用します。通知の送信後、メディア管理 マネージャはメールスロットが空になるのを最大で 24 時間待ちます。

-startAll [-alert] [-exportAll] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]

プライマリ サーバとメンバサーバ、またはスタンドアロン サーバ上にあるドメイン内のすべてのテープに対してボールド サイクルを開始し、次に、指定されたボールド からドメイン内のテープをすべてエクスポートします。

SAN 内でボールド サイクルを開始し、すべてのローカルテープおよび SAN 内のテープをエクスポートする場合は、-exportAll スイッチを -startAll と組み合わせて使用します。

-export

ローカルですべてのテープをエクスポートします。

このオプションは、-start または -startAll オプションと組み合わせて使用する場合を除き、通常は独立して使用します。ボールト サイクルを実行するたびにエクスポートを行いたくない場合に、このオプションを使用します。

-exportAll

すべてのローカルテープ、および、SAN 内あるいはプライマリサーバ/メンバサーバ上のすべてのテープをエクスポートします。

このオプションは、-start または -startAll オプションと組み合わせて使用する場合を除き、通常は独立して使用します。ボールト サイクルを実行するたびにエクスポートを行いたくない場合に、このオプションを使用します。

-jid

ジョブ ID を指定します。

-reset

ボールト のステータスをリセットします。

-init

メディア管理 マネージャ データベースを初期化します。

-checkin -tapename <Tape name> -tapeid <Tape id #> -seqnum <Tape seq #> -type <Check in type>

テープ名、ID、およびシーケンス番号を使用して、メディアをテープ サービスにチェック インします。

チェック インタイプには、一時チェックイン <temp>、手動チェックイン <manual>、永久 (手動およびリタイア) チェックイン <manualretire> があります。

-checkin -serialnum <Tape serial #> -type <Check in type>

シリアル番号を使用して、メディアをテープ サービスにチェック インします。

チェック インタイプには、一時チェックイン <temp>、手動チェックイン <manual>、永久 (手動およびリタイア) チェックイン <manualretire> があります。

-assign -tapename <Tape name> -tapeid <Tape id #> -seqnum <Tape seq #> -vaultname <Vault Name>

テープ名、ID、およびシーケンス番号を使用して、メディアをボールトに割り当てます。

ボールト 基準記述子 (VCD) を選択するとき、制御データセットとして [ユーザ割り当て] オプションを選択している場合、このコマンドまたは -assign -serialnum コマンドを使用して特定のテープを割り当てる必要があります。

-assign -serialnum <Tape serial #> - vaultname <Vault Name>

メディアのシリアル番号を使用して、メディアをボールドに割り当てます。

ボールド基準記述子 (VCD) を選択するときに、制御データセットとして [ユーザーによる割り当て] オプションを選択している場合、このコマンドまたは -assign -tapename コマンドを使用してテープを割り当てる必要があります。

-printreport <Print type>

レポートを出力します。

出力するレポートの種類に応じて、<Print type> に「VaultSelection」、「Shipping」、「ShippingContent」、「Receiving」、「ReceivingContent」、「InventoryByMedia」、「InventoryByVault」と入力します。

-usage

基本 ca_mmo コマンドのリストを表示します。

詳細情報:

[ca_mmo - メディア管理マネージャコマンド](#)

[ca_mmo - 例](#)

ca_mmo - 例

ca_mmo コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文は、すべてのテープをローカルでエクスポートします。

```
ca_mmo -export
```

- 以下の構文は、すべてのローカルテープおよび SAN 内のすべてのテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -exportAll
```

- 以下の構文は、ボールド サイクルを開始し、指定されたボールドのすべてのローカルテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -start | -startall [-alert] [-export] [-jid] [-vaultname <Vault Name>]
```

- 以下の構文は、SAN 内のボールド サイクルを開始し、指定されたボールドのすべてのローカルテープおよび SAN 内のテープをエクスポートします。

```
ca_mmo -startAll -exportAll [-vaultname <Vault Name>]
```

詳細情報：

[ca_mmo - メディア管理マネージャコマンド](#)

第12章: ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド

キュー マネージャ コマンド (ca_qmgr) はジョブ ステータス マネージャとのコマンド ライン インターフェースであり、Arcserve Backup のジョブ キューにサブミットされたジョブを モニタおよび制 御 できます。これらのジョブ管 理コマンドは、情 報を取 得したり、ジョブ キューの中 のジョブを操 作したりするの に使 用します。ジョブ ステータス マネージャおよびアクティビティ ログ マネージャから実 行 可 能な機 能は、す べてコマン ド ラインでも実 行 できます。

このセクションには、以 下 のトピックが含まれます。

ca_qmgr - 構文	230
ca_qmgr - 使用法	231
ca_qmgr - その他のオプション	232
ca_qmgr - ジョブ キュー コマンド	234
ca_qmgr - ジョブ固有のコマンド	236
ca_qmgr - ジョブ スクリプト コマンド	240
ca_qmgr - 例	242

ca_qmgr - 構文

ca_qmgr のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
-list [<job #> [jobid][jobtype][jobstatus][exechost][execdate][exectime][lastresult][owner]
[description]]
-listscripts
-load <job script> [<script owner>]
-addscript <job script>
-removescript <job script> [<script owner>]
-changestatus <job #> <ready|hold>
-changedate <job #> <mm/dd/yy[yy]>
-changetime <job #> <hh:mm>
-stop <job #>
-view <job #>
-delete <job #>
-waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]
-move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>> [-m_
server <member server>] [-jobnum <<job #>>] [-hold]
-changeSessionPasswd <job number> [<old password> <new password>]
-usage
-help
-examples
```

注：[-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカル ホスト上で使用する場合は、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_qmgr - 使用法

ca_qmgr コマンドを使用すると、以下のオプションおよびコマンドを設定できます。

- その他のオプション
- ジョブ キュー コマンド
- ジョブ スクリプト コマンド
- ジョブ固有のコマンド

詳細情報:

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[ca_qmgr - その他のオプション](#)

[ca_qmgr - ジョブ キュー コマンド](#)

[ca_qmgr - ジョブ固有のコマンド](#)

[ca_qmgr - ジョブ スクリプト コマンド](#)

ca_qmgr - その他のオプション

ca_qmgr コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がジョブ キューにサブミットしたジョブに使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-entiredomain

検索範囲を制限し、検索範囲をデフォルトでローカルホストにする代わりに、ドメインに含まれるジョブのみを対象にします。-entiredomain が指定されていない場合、ca_qmgr コマンドは特定のホストのすべてのジョブに検索範囲を拡大します。

-usage

基本的な ca_qmgr コマンドのリストを表示します。

-help

ca_qmgr ヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_qmgrの使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

詳細情報:

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[ca_qmgr - 例](#)

ca_qmgr - ジョブ キュー コマンド

ca_qmgr コマンドには、ジョブ キューの表示および制御を可能にするジョブ キュー コマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ キュー コマンドが含まれます。

ca_qmgr [-cahost <hostname> [-entiredomain]] -list

[<job #>

[jobid]

[jobtype]

[jobstatus]

[exechost]

[execdate]

[exectime]

[lastresult]

[owner]

[description]]

-list

現在のジョブ キューおよびジョブの実行がスケジュールされているメンバサーバが表示されます。

job #

ジョブ キューにある、指定したジョブ番号のすべてのジョブを一覧表示します。ジョブ番号を指定しないと、-list コマンドは指定したホスト上のすべてのジョブを一覧表示します。従属オプションを追加して、指定したジョブに関連するさまざまな情報を表示するように指定することもできます。

jobid

指定したジョブのジョブ ID を含めます。

jobtype

指定したジョブのジョブ タイプを含めます。

jobstatus

指定したジョブのジョブ ステータスを含めます。

exechost

指定したジョブの実行ホストを含めます。

execdate

指定したジョブの実行日を含めます。

exectime

指定したジョブの実行時刻を含めます。

lastresult

指定したジョブの最終結果を含めます。

owner

指定したジョブのオーナーを含めます。

description

指定したジョブの説明を含めます。

詳細情報:

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[ca_qmgr - 例](#)

ca_qmgr - ジョブ固有のコマンド

ca_qmgr コマンドには、個々のジョブのモニタおよび制御を可能にするジョブ固有のコマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ固有のコマンドが含まれます。

```
ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]
-changestatus <job #> <ready|hold>
-changedate <job #> <mm/dd/yy[yy]>
-changetime <job #> <hh:mm>
-stop <job #>
-view <job #>
-delete <job #>
-waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]
-move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>> [-m_
server <member server>] [-jobnum <job #>] [-hold]
-changeSessionPasswd <job #> [<old password> <new password>]changestatus <job
#> <ready|hold>
```

ジョブステータスを「レディ」に変更するか、ジョブを「ホールド」状態にします。

例:

```
ca_qmgr -changestatus 12 hold
```

-changedate <job # mm/dd/yy[yy]>

ジョブの実行日を変更します。

例:

```
ca_qmgr -changedate 12 06/04/01
```

-changetime <job # hh:mm>

ジョブの実行時刻を変更します。

例:

```
ca_qmgr -changetime 12 12:08
```

注: Arcserve Backup ジョブのすべてのスケジュール時刻は、サーバがあるタイムゾーンに基づいています。Arcserve Backup エージェントマシンが Arcserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-changeSessionPasswd <job #> [<old password> <new password>]

レディ、ホールド、または終了ステータスを持つ、指定したバックアップジョブのセッションパスワードを変更します。以下の2つの形式のいずれかを使用して、このコマンドを実行できます。

- このスイッチを使用して、新旧のセッションパスワードをすべて1行に指定できます。

```
ca_qmgr -changeSessionPasswd 5 AAA BBB
```

- このスイッチを使用し、新旧いずれのパスワードも含めないと、それぞれのパスワードを入力するように要求されます

```
ca_qmgr -changeSessionPasswd 5
```

古いパスワードを入力してください。

新しいパスワードを入力してください。

新しいパスワードを確認してください。

job #

セッションパスワードを変更するバックアップジョブのジョブ番号を指定します。

old password

バックアップジョブに対して置き換えられる古いセッションパスワードを指定します。このパラメータはオプションですが、これを含める場合は、新しいパスワードも含める必要があります。

new password

バックアップジョブに適用される新しいセッションパスワードを指定します。このパラメータはオプションですが、古いパスワードを含める場合は、これを空にできません。

Notes:

- バックアップジョブが以前のセッションパスワードを持たない場合は、新しいセッションパスワードを追加できません。
- 入力した古いパスワードと指定したジョブの元のセッションパスワードが一致しない場合、このコマンドは失敗します。
- 古いセッションパスワードのみを含め、新しいセッションパスワードを含めない場合、このコマンドは失敗します(新しいセッションパスワードは空にできません)。
- セッションパスワードの最大長は23文字です。

-stop <job #>

現在実行中のジョブを停止します。繰り返しジョブの場合、シーケンスの次のジョブがキューされます。一度だけ実行するジョブの場合、ジョブは停止し、削除されます。ジョブが「ホールド」の場合、何も起こりません。

例:

```
ca_qmgr -stop 12
```

重要: ジョブの停止前に確認は表示されません。ジョブは、本当に中止してもよいかどうかの確認なしに中止されます。

-view <job #>

ジョブ番号の詳細を表示します(ジョブサマリ)。

例:

```
ca_qmgr -view 12
```

-delete <job #>

実行中でないジョブを削除します。実行中でないジョブを削除すると、そのジョブはジョブキューから完全に削除されます。

例:

```
ca_qmgr -delete 12
```

注: 実行中のジョブを削除するには、削除する前にジョブを中止する必要があります。

-waitForJobStatus <job #> [<polling interval <secs>>]

ca_qmgr コマンドは、ジョブが完了するまで待機し、完了後にプロンプトに戻ります。オプションの <polling interval> は、内部的なジョブステータスのポーリング間隔を示します。

<polling interval> の値は、ca_qmgr ユーティリティがキューサービスに対してジョブステータスをチェックする間隔(秒数)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

注: ジョブ番号がジョブキュー内に存在しなければ、コマンドは停止します。ジョブ番号がジョブキュー内に存在することを確認してください。

-move <-s_server <source primary server>> <-d_server <dest primary server>> [-m_server <member server>] [-jobnum <job #>] [-hold]

サーバ間でジョブを移動します。このコマンドを含める場合は、ソースサーバおよびデスティネーションサーバを指定する必要があります。さらに、従属オプションを含めて移動するジョブを定義できます。従属オプションを含めないと、ソースのプライマリサーバ上のすべてのジョブがデスティネーションのプライマリサーバにデフォルトで移動します。

-s_server <source primary server>

ジョブの移動元となるソースのプライマリサーバを指定します。ソースのプライマリサーバ名を含める必要があります。

-d_server <dest primary server>

ジョブの移動先となるデスティネーションのプライマリサーバを指定します。デスティネーションのプライマリサーバ名を含める必要があります。

-m_server <member server>

移動ジョブが実行されるホストを指定します。このオプションを含める場合は、メンバサーバを指定する必要があります。

-jobnum <job #>

移動されるジョブのジョブ番号を指定します。このオプションを含める場合は、ソースのプライマリサーバ上のジョブ番号を指定する必要があります。

-hold

このオプションを含める場合、ソースのプライマリサーバ上でジョブの移動が正常終了後に、デフォルトでは削除される代わりに、ホールドのステータスに変更されるように指定します。

詳細情報:

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[ca_qmgr - 例](#)

ca_qmgr - ジョブ スクリプト コマンド

ca_qmgr コマンドには、ジョブ スクリプトの制御および使用を可能にするジョブ スクリプト コマンドが含まれます。

ca_qmgr コマンドには、以下のジョブ スクリプト コマンドが含まれます。

ca_qmgr [-cahost <hostname>] [-entiredomain]

-listscripts

-load <job script> [<script owner>]

-addscript <job script>

-removescript <job script> [<script owner>]

-listscripts

ARCServe_HOME/jobscripsts フォルダにある、使用可能なジョブ スクリプトを表示します。

ジョブ スクリプトとは保存したジョブ ファイルのことで、拡張子は.asx です。

Arcserve Backup マネージャの GUI では、どのジョブでもジョブ スクリプトとして保存できます。

例:

```
ca_qmgr -listscripts
```

-load <job script> [<script owner>]

以前に保存されたジョブ スクリプトをロードし、実行します。

スクリプトをロードするには、スクリプトが Arcserve Backup のホーム ディレクトリに存在している必要があります。

例:

```
ca_qmgr -load myscript caroot
```

注: X.asx は、プライマリサーバにのみロード可能です。ca_qmgr -load X.asx をメンバサーバで実行すると、エラーが発生します。

-addscript <job script>

ジョブ スクリプトを取り込んで登録します。

ジョブ スクリプト ファイル名とパスを指定します。ジョブ スクリプト ファイルが、指定されたパスからArcserve Backupホーム ディレクトリにコピーされます。

例:

```
ca_qmgr -addscript C:\myscript.asx
```

-removescript <job script> [<script owner>]

ジョブ スクリプトを削除して登録を取り消します。

ジョブ スクリプト ファイルは、Arcserve Backupホーム ディレクトリから削除されます。

例:

```
ca_qmgr -removescript myscript caroot
```

詳細情報:

[ca_qmgr - キュー マネージャ コマンド](#)

[ca_qmgr - 例](#)

ca_qmgr - 例

ca-qmgr コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用すると、現在のジョブキューを表示できます。
`ca_qmgr -list`
- 以下の構文を使用すると、ドメインのすべてのジョブを表示します。
`ca_qmgr -list -entiredomain`
- 現在実行中のジョブ(この例では、Job 5)を停止するには、以下の構文を使用します。
`ca_qmgr -stop 5`
- 以下の構文を使用すると、ジョブを削除できます(この例では、ジョブ 5)。
`ca_qmgr -delete 5`
- 以下の構文を使用すると、利用可能なジョブスクリプトを表示できます。
`ca_qmgr -listscripts`
- 以下の構文を使用すると、特定のパスからジョブスクリプトをインポートして登録できます。
`ca_qmgr -addscript C:\bkpjob1.asx`
- 以下の構文を使用すると、保存されたジョブスクリプトをロードして実行できます。
`ca_qmgr -load bkpjob1`

詳細情報:

[ca_qmgr - キューマネージャコマンド](#)

第13章: ca_recoverdb - データベース回復コマンド

バックアップ ジョブを実行するたびに、バックアップされたマシン、ディレクトリ、およびファイルの情報がArcserve Backupデータベースに記録されます。また、そのジョブに使用したメディアに関する情報も記録されます。これにより、ファイルをリストアする必要があるときに、簡単にそのファイルの場所を特定できます。データベース回復コマンド (ca_recoverdb) は自己プロテクト機能であり、Arcserve Backup データベースが失われた場合、そのデータベースを使用している Arcserve Backup ドメインによってバックアップされている場合にデータベースを回復できます。

注: ca_recoverdb ユーティリティは、ca_restore コマンドを起動して、データベース回復機能を実装します。ca_recoverdb ユーティリティは、Arcserve Backup データベースが SQL Server データベースか SQL Server 2005 Express Edition インスタンスかを自動的に判断し、ca_restore コマンドに適切なパラメータを提供します。

注: Arcserve Backup サーバをクラスタ対応に設定すると、すべての重要な Arcserve ベース関連のサービス(エージェント関連のサービスではない) が適切なクラスタ サービス(MSCS または NEC CLUSTERPRO) によってモニタされます。Arcserve ベース関連のサービスが失敗するか、またはシャットダウンする必要がある場合は、クラスタ サービスは自動的にその再起動を行い、それに失敗するとフェールオーバーをトリガします。このサービスを実行するには、Arcserve サービスを停止する必要があります。ただし、クラスタ対応の環境では、まずはクラスタ サービスを手動で停止して、サービスのモニタが継続されないようにし、自動再起動またはフェールオーバーが実行されないようにする必要があります。クラスタ サービスによって HA サービス モニタリングを停止する手順については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

注: Arcserve ca_recoverdb ユーティリティは、同じマシン上にある データベース (ASDB) を回復するため、またはその ASDB のバックアップが作成されたドメイン上にある Arcserve データベースを回復するためにのみ使用されます。Arcserveあるマシン上に ASDB のバックアップを作成し、(同じ Arcserveドメイン内ではない) 別のマシン上で回復した場合、このコマンドは使用できません。このような場合は、次のような 2 つの解決策があります。

解決策 1:

マシン A から DR バックアップを作成し、マシン B 上で回復します。

この解決策では、DR オプションをインストールする必要があります。

解決策 2:

1. マシン A とマシン B の両方に Arcserve Backup をインストールします。
2. マシン A で ASDB のバックアップを実行します。

-
3. テープをマシン B に移動し、マージ ジョブをサブミットして、マシン B 上の Arcserve Backup にテープの情報をマージします。
 4. マシン B で、リストア マネージャを開き([ツリー単位] オプションを使用)、 [Arcserve Backup データベース] を参照します。
 5. [Arcserve Backup データベース] を右クリックし、コンテキスト メニューから [エージェント オプション] を選択します。
 6. [エージェント リストア オプション] ダイアログ ボックスから、以下のオプションを選択します。
 - リストアで強制的に既存ファイルまたはデータベースに上書き
 - 現在の Arcserve データベースを元の場所として使用する
 - 現在の Arcserve ドメイン メンバシップを残しておく
 7. リストア ジョブをサブミットします。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca recoverdb - 構文	245
ca recoverdb - オプション	246
ca recoverdb - 例	248

ca_recoverdb - 構文

ca_recoverdb のコマンド ラインの構文 は、以下 のような形式 です。

```
ca_recoverdb [ -cahost <hostname> ]
```

```
[-i [n]]
```

```
-username <username> [-password <password>]
```

```
[-dbusername <database username> [-dbpassword <database password> ] ] [-
```

```
sessionpassword [session password] -session password [session password]...]
```

```
[-waitForjobstatus <polling interval>]
```

詳細情報:

[ca_recoverdb - データベース回復コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_recoverdb - オプション

ca_recoverdb は、消失した Arcserve Backup データベースを回復するためのさまざまなオプションを提供します。

ca_recoverdb コマンドには、以下のオプションが含まれます。

cahost <hostname>

デフォルトのホストを、バックアップ ログから cahost が指定するホストへリダイレクトします。

例:

HostA - ca_restore の中で使用される、バックアップ ログに存在するデフォルトホスト。

HostB - 指定するホスト。

この例では、cahost スイッチを指定しないと、ca_recoverdb ユーティリティによって起動された ca_restore コマンドは以下ようになります。

```
ca_restore -cahost HostA
```

パラメータ HostB を使用して cahost スイッチを指定すると、ca_recoverdb ユーティリティによって起動された ca_restore コマンドは以下ようになります。

```
ca_restore -cahost HostB
```

-i [n]

対話モードを使用するように指定します。このスイッチを含めると、ベースラインとして使用するバックアップを選択することで、Arcserve Backup のデータベース回復を実施する時点を指定できます。対話モードが起動されると、ca_recoverdb は、ログファイルを持つ Arcserve Backup シーケンスのリストを表示します。それぞれのログファイルは、まずフルデータベースバックアップで始まり、リストアするフルバックアップに依存するその他のすべてのバックアップを含みます (フルバックアップは、各セッションに対して「依存チェーン」のルートとなります)。

パラメータ *n* を使用して、選択対象の最新のバックアップログセット (依存チェーン) の数を指定します。*n* の値の範囲は、1 ~ 99 で、デフォルト値は 10 です。

フルバックアップシーケンスを選択すると、リストアポイントとして、どのセッションを使用するかを選択するように求められます。セッション選択後、ca_recoverdb ユーティリティがそのシーケンスの依存チェーンを判断し、ca_restore を使用して各セッション向けにリストアジョブをサブミットします。

-i スイッチを含めないと、ca_recoverdb ユーティリティは最新のバックアップを指定した選択として自動的に使用し、そのセッション用に依存チェーンを構築します。これは、バックアップの最新の状態に復旧する場合に便利です。ただし、最新のバックアップが消失または破損している場合、対話モードを使用して古いセッションからリストアし、テープをマージして最新の情報を再統合することができます。

-username <username> [-password <password>]

実際のリカバリジョブを実行する、データベースエージェント用の認証情報を指定します。password オプションを含めないと、デフォルトでパスワード不要に設定されます。

-dbusername <database username> [-dbpassword <database password>]

データベース用の認証情報を指定します。database username およびそれに対応する database password を含めない場合、認証用にデフォルトで「dbusername」および「dbpassword」に設定されます。

[-sessionpassword [session password] -sessionpassword [session password] ...]

セッション用の認証情報を認証パスワードに設定するように指定します。

[-waitForJobStatus <polling interval>]

ca_recoverdb がジョブの完了まで待機し終了するまでの時間間隔(秒数)を指定します。その際、ジョブが正常に終了したのか、または失敗したのかを表すコードが返されます。

<polling interval> の値は、ca_recoverdb ユーティリティがキューサービスに対してジョブステータスをチェックする間隔(秒数)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は60秒です。

詳細情報:

[ca_recoverdb - データベース回復コマンド](#)

ca_recoverdb - 例

ca-recoverdb コマンドの構文例は以下のとおりです。

- ASDB がプライマリサーバ上でホストされている場合に、ASDB を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverdb.exe -username Administrator -password win_pwd
```

- ASDB セッションが暗号化されるかパスワード保護されている場合に、ASDB を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverdb.exe -username Administrator -password win_pwd -  
sessionpassword ses_pwd
```

- 外部 ASDB サーバと SQL 認証が使用されている場合に、ASDB を回復するには以下の構文を使用します。

```
ca_recoverydb.exe -cahost machinename -username Administrator -password  
win_pwd -dbusername db_username -dbpassword db_password
```

詳細情報：

[ca_recoverdb - データベース回復コマンド](#)

第14章: ca_restore - リストア マネージャコマンド

リストア マネージャへのコマンド ライン インターフェースであるこのコマンド (ca_restore) を使用すると、リストア ジョブを作成して Arcserve Backup のジョブ キューにサブミットしたり、関連するすべてのオプションを設定したりできます。リストア マネージャから実行可能な機能はすべてコマンド ラインでも実行できます。ca_restore コマンドのオプションおよびスイッチを使用することにより、グローバルオプションとフィルタの設定およびリストア ジョブのソースとデスティネーションの選択が可能になります。またリストア ジョブをすぐに実行するためのサブミットしたり、スケジュールされた時刻に実行されるようにサブミットしたりできます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_restore - 構文	250
ca_restore - 使用法	251
ca_restore - その他のオプション	252
ca_restore - グローバルジョブ オプション	254
ca_restore - グローバルフィルタ オプション	263
ca_restore - ソース引数	266
ca_restore - デスティネーション引数	268
ca_restore - データベース オプション	270
ca_restore - ジョブ実行引数	297
ca_restore - 情報引数	299
ca_restore - リターンコード	301
ca_restore - 例	302

ca_restore - 構文

ca_restore のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

```
ca_restore [-cahost <hostname>]  
[グローバルオプション]  
[global filters]  
-source [source arguments]  
-dest [destination arguments]  
[run job arguments]  
[info arguments]
```

注： [-cahost <hostname>] スイッチはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スイッチで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブ キューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_restore - リストア マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_restore - 使用法

ca_restore コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- リストアオプション
- フィルタ引数
- ソース引数
- デスティネーション引数
- ジョブ実行引数
- 情報引数
- リターンコード

リストア処理を構築するには、ca_restore 構文の中で指定した順序に従って、オプションのカテゴリを一度に1つずつ設定する必要があります。

詳細情報:

[ca_restore - リストア マネージャコマンド](#)

[ca_restore - その他のオプション](#)

[ca_restore - グローバル フィルタ オプション](#)

[ca_restore - ソース引数](#)

[ca_restore - デスティネーション引数](#)

[ca_restore - 情報引数](#)

[ca_restore - リターンコード](#)

ca_restore - その他のオプション

ca_restore コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がリストアプロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するために使用される、その他のオプションが含まれます。

ca_restore コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

ca_restore

[-cahost <hostname>] [info args]

[-f <filename>]

[-sessionpassword <session password/encryption key>]

[-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]]

[-help]

[-examples]

[-usage]

[allusage]

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注： [-cahost <hostname>] スwitchはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スwitchで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注：「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-f <filename>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

-sessionpassword <session password/encryption key>

このデータをメディアからリストアするために必要となるセッション/暗号化パスワードを指定します。これらのセッションのいずれかからデータをリストアするには、バックアップ中にパスワードの入力が必要となります。

-waitForJobStatus [<polling interval (secs)>]

このオプションが指定された場合、ca_restore コマンドはジョブが終了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示すリターンコードを受けて終了します。

<polling interval> 値は、ca_restore ユーティリティがキューサービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度(秒単位)を定義します。デフォルトのポーリング間隔は60秒です。

-help

ca_restoreヘルプトピックを開きます。

-examples

ca_restoreの使用例が記載されたヘルプトピックを開きます。

-usage

基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべてのca_restore コマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

詳細情報:

[ca_restore - リストア マネージャ コマンド](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - グローバルジョブ オプション

ca_restore グローバルオプションを使用すると、ジョブ全体に適用される各種オプションを指定することができます。

ca_restore コマンドでは、以下のグローバルオプションが提供されます。

- メディア オプション
- デスティネーション オプション
- 操作オプション
- 実行前/後オプション
- ログ オプション

詳細情報:

[ca_restore - リストア マネージャコマンド](#)

[ca_restore リストア メディア オプション](#)

[ca_restoreのデスティネーション オプション](#)

[ca_restore 操作オプション](#)

[ca_restore のジョブ実行前/後の処理オプション](#)

[ca_restore ログ オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore リストア メディア オプション

ca_restore コマンドには、以下のグローバルメディア エクスポート オプションが含まれます。

ca_restore

[-firsttapetimeout <minutes<1-9999>>]

[-spantapetimeout <minutes<1-9999>>]

[-optimizerestoreoff]

-firsttapetimeout <minutes>

使用可能なメディアがリストアジョブで実際に利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

-spantapetimeout <minutes>

使用可能なスパンメディアが実際にリストアジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

-optimizerestoreoff

リストアの最適化オプションを無効にします。

リストア処理中に Arcserve Backup で重複するバックアップセッションが検出された場合、1つのセッションはテープメディア上にあり、もう1つのセッションはファイルシステムデバイス上にあれば、Arcserve Backup は、デフォルトでファイルシステムデバイス上のセッションからデータをリストアします。

ほとんどの場合、ファイルシステムデバイスからデータをリストアする方が、テープメディアからリストアするより高速です。ただし、テープメディアや高速リーダー機能があるライブラリを使用する場合、またはご使用のファイルシステムデバイスに関する既知の問題がある場合は、リストアの最適化オプションを無効にすることもできます。リストアの最適化オプションを無効にするには、このスイッチを ca_restore コマンドに含める必要があります。

詳細情報:

[ca_restore - 例](#)

ca_restoreのデスティネーション オプション

ca_restore コマンドには、以下 のグローバル デスティネーション オプションが含まれます。

ca_restore

[-nobase|-base|-entirepath]

[-onconflict <overwrite|rename|skip|overwriteold>]

[-createversion|-replaceversion|-restoreversion]

-nobase

デスティネーション パスにベース ディレクトリを作成せず、リストア中にソース ベース ディレクトリの下 のすべてのサブディレクトリを作成します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-base

リストア中にベース ディレクトリからデスティネーション パスを作成します。

-entirepath

デスティネーション上にソース パス全体を作成します。親ディレクトリ上のどのファイルもリストアされません。ベース ディレクトリまでのディレクトリパスのみがデスティネーション上に作成されます。

-onconflict <overwrite|rename|skip|overwriteold|confirm>

ソースからコピーするファイルと同名のファイルがデスティネーション ディスクに存在する場合に、Arcserve Backup が使用する方法を選択します。

overwrite

ファイル名の重複に関係なく、すべてのソース ファイルをデスティネーションに上書きしリストアするように指定します。デスティネーション上の既存のファイルは、ソースからのファイルによって上書きされます。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

rename

ソース ファイルの名前を変更し、ファイル名は同じで拡張子が異なるファイルをデスティネーションへコピーするようにします。名前が変更された拡張子の形式は、ターゲット パーティションにあるファイルシステムにより異なります。

skip

デスティネーションに同名のファイルが存在する場合、ソース ファイルをスキップしリストアしないように指定します。

overwriteold

より新しいファイルで上書きし、デスティネーション上の同名ファイルより修正日が新しいソースファイルだけをリストアするように指定します。デスティネーションのファイルより修正日が古いソースファイルは上書きされません。

-createversion

新しいファイルバージョンを作成するように指定します。Arcserve Backup は、すべてのファイルを元のファイルの新しいバージョンとしてリストアします。ターゲットディレクトリ内のファイルは影響を受けません。

-replaceversion

ターゲットディレクトリ内のファイルがリストアデータ内のファイルと同じ名前およびバージョン番号を持つ場合、ファイルバージョンを置き換える(上書きする)ように指定します。

-restoreversion

ファイルバージョンのリストア(上書きしない)を指定すると、ターゲットディレクトリ内のファイルがリストアデータ内のファイルと同じ名前およびバージョン番号を持つ場合、Arcserve Backup はファイルをリストアしません。その他のすべてのファイルは、元の名前およびバージョン番号でリストアされます。

詳細情報:

[ca_restore - 例](#)

ca_restore 操作オプション

ca_restore コマンドには、以下のグローバル操作オプションが含まれます。

ca_restore

[-createemptydiroff]
[-restoreregistry]
[-preservefileattroff]
[-nodbupdate [-stopdb [-restartdb]] | -partialdbupdate]
[-preserveuserspaceoff]
[-preservedirspaceoff]

-createemptydiroff

「ディレクトリの属性とセキュリティ情報をリストア」オプションをオフ(無効)にします。

空のディレクトリを作成せずに、既存のディレクトリ属性(「書き込み禁止」、「アーカイブ」および「隠しファイル」など)およびセキュリティデータをマシンにリストアするように指定します。

クライアント エージェントが Windows クライアント エージェントの場合、Arcserve Backup はディレクトリの属性とセキュリティ情報をリストアします。クライアント エージェントが UNIX クライアント エージェントの場合、Arcserve Backup は空のディレクトリを作成します。

-restoreregistry

「レジストリファイルおよびイベント ログをリストア」オプションをオン(有効)にします。

リストア用に選択されたセッションがレジストリファイルおよびイベント ログ ファイルを持つ場合は、レジストリファイルおよびイベント ログ ファイルをリストアのターゲットとなるマシンへリストアするように指定します。

-preservefileattroff

「ファイルの属性とセキュリティ情報をリストア」オプションをオフ(無効)にします。

既存のファイル属性(「書き込み禁止」、「アーカイブ」、「隠しファイル」など)の)およびセキュリティデータをリストアするように指定します。

-nodbupdate [-stopdb [-restartdb]]

データベース記録オプションをオフ(無効)にします。

Arcserve Backup データベースに、このジョブの記録を保存しないように指定します。

-stopdb

リストア前にデータベース エンジンを停止します。

-restartdb

リストア後にデータベース エンジンを再起動します。

-partialdbupdate

[ジョブ情報のみ記録]オプションをオン(有効)にします。

Arcserve Backup データベースに、このジョブの記録を保存するように指定します。

詳細情報:

[ca_restore - 例](#)

ca_restore のジョブ実行前/後の処理オプション

ca_restore コマンドには、以下の実行前/後のグローバル処理オプションが含まれます。

ca_restore

[-preexec <command>]

[-exitcode <exit code(>=0)>][-skip_delay][-skip_job][-skip_post]]

[-preexectimeout <minutes(0-32767)>]

[-postexec <command>]

[-skippostfail]

[-skippostincmp]

[-skippostcmp]

[-prepostuser <user name>]

[-prepostpassword <user password>]

-preexec <command>

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注：このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-exitcode <exit code(>=0)> [-skip_delay][-skip_job][-skip_post]

処理の前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。-skip_delay スイッチ、-skip_job スイッチ、および -skip_post スイッチと共に使用します。

-skip_delay

指定された終了コードを受け取ったらただちにリストアジョブを実行します。

-skip_job

指定された終了コードを受け取った場合に、処理後に実行されるコマンドをスキップします。

-skip_post

指定した終了コードを受け取った場合、実行後のコマンドをスキップします。

-skippostfail

ジョブが失敗した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostincmp

ジョブが未完了の場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-skippostcmp

ジョブが完了した場合に実行後コマンドを実行しないように指定します。

-preexectimeout <minutes(0-32767)>

リストアジョブが開始されるまで待機する時間を分単位で指定して、処理の前に実行したコマンドが終了するまでの時間を確保します。指定する時間範囲は、0 ～ 32767 分です。

デフォルト: 0 分

-postexec <command>

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注: このオプションを使用するには、-prepostpassword オプションも指定する必要があります。-prepostpassword オプションを指定しないと、ジョブが失敗します。

-prepostuser <username>

このリストアジョブをサブミットするユーザ名を指定します。

-prepostpassword <user password>

このリストアジョブをサブミットするユーザのパスワードを指定します。

詳細情報:

[ca_restore - 例](#)

ca_restore ログ オプション

ca_restore コマンドには、以下 のグローバル ログ オプションが含まれます。

ca_restore

`[-logfile <allactivity|summary|disabled|errorsonly>]`

-logfile <allactivity | summary | disabled | errorsonly>

リストア ジョブ実行時のアクティビティを、ジョブ ログに記録します。従属オプションから 1 つを指定し、記録される情報を制御する必要があります。

allactivity

ジョブ実行中に発生したすべてのアクティビティを記録します。

summary

ソース、デスティネーション、セッション番号、合計、およびエラーなどのサマリ情報のみを記録します。

disabled

ログが無効になり、ジョブに関する情報を記録しません。

errorsonly

ジョブの実行中に発生したエラーのみ記録します。

デフォルト: 統合なしのサマリです。

詳細情報:

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - グローバルフィルタ オプション

フィルタを使用すると、特定のファイルやディレクトリをリストアジョブに組み込んだり、ジョブから除外したりできます。フィルタを使用することで、目的のファイルを絞り込むことができます。フィルタには、ジョブ全体に適用されるグローバルフィルタ、特定のノードに適用されるノードレベルフィルタ、ボリュームレベルフィルタがあります。適用されるフィルタのレベルは、ca_restore コマンド内での -filter スイッチの位置によって決定されます。

重要: フィルタを誤って使用すると、リストア中にデータが欠落する可能性があります。フィルタを指定または適用する場合は注意してください。

注: Arcserve Backup では、包含および除外フィルタリングにワイルドカード文字アスタリスク「*」とクエスチオンマーク「?」を使用できます。アスタリスクのワイルドカードは、任意の数の文字と一致するように指示し、疑問符のワイルドカードは、任意の文字と一致するように指示します。

ca_restore コマンドには、以下のフィルタオプションが含まれます。

ca_restore [-filter

[<include|exclude> <file|dir> <pattern>]

[<include|exclude> [<attribute> [hidden] [readonly] [system] [archive]]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <onorbefore|onorafter> <mm/dd/yy[yy]>>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>]]

[<include|exclude> [<date> <modify|create|access> <within <count> <days|months|years>>]]

[<include|exclude> [<size> <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>]]

[<include|exclude> [<size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>]]

include

結果には、フィルタの条件を満たすファイルのみが含まれます。たとえば、ローカルハードディスクドライブ全体のリストアを選択して、\SYSTEM ディレクトリ内のファイルを組み込むようフィルタを設定した場合、\SYSTEM ディレクトリ内のファイルだけが Arcserve Backup によってリストアされます。それ以外のファイルはリストアされません。

exclude

除外は常に組み込みに優先します。たとえば、フィルタを追加して、拡張子が .exe のファイルを組み込み、さらにもう 1 つフィルタを追加して、\SYSTEM ディレクトリを対象から除外するよう設定すると、\SYSTEM ディレクトリに保存されている拡張子 .exe のファイルは、すべて除外されます。

file | dir <pattern>

指定したパターンに基づいて、ファイルまたはディレクトリを組み込むか除外するかを指定します。

注：ディレクトリを組み込むパターンフィルタを選択して、絶対パスを指定しなかった場合、ユーザが指定した条件に一致しないすべてのディレクトリにある空のディレクトリがリストアされます。リストア時に空のディレクトリが作成されることを防ぐには、リストアジョブを作成するときにグローバルリストアオプションの「空のディレクトリを作成する」を無効にします。

attribute

指定したファイル属性を持つファイルを組み込むか、または除外するかを指定します。

隠しファイル

ディレクトリの一覧に表示されないファイル。たとえば、IO.SYS は隠しファイルです。

読み取り専用

変更できないファイル。

システム

使用しているマシンに固有のファイル。

アーカイブファイル

アーカイブビットが設定されたファイル。

date <modify|create|access> <onorbefore|onorafter> <mm/dd/yy[yy]>

指定した日付以前/以後に更新、変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <between <mm/dd/yy[yy]> <mm/dd/yy[yy]>>

指定した 2 つの日付の間に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

date <modify|create|access> <within <count> <days|months|years>>

指定された日数、月数、または年数以内に最後に更新、状態変更、またはアクセスされたファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size <equalto|greaterthan|lessthan> <size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>

指定されたサイズ「に等しい」、「より大きい」、「より小さい」ファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

size between <<low size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>> <<high size val> <Bytes|KBytes|MBytes|GBytes>>

指定されたサイズの範囲内にあるファイルを組み込むか、除外するかを指定します。

注：グローバルフィルタオプションでは、以下のような条件があります。

- UNIX サーバの場合、Arcserve Backup は「create」コマンドをファイルの変更日を指定しているものと自動的に解釈します。
- 更新時刻は、状態変更時刻とは異なります。修正時間は、ファイルの内容が変わったことを意味します。状態変更時刻とは、ファイルのプロパティまたは属性が変更(権限や所有者情報の変更など)された時刻のことであり、内容が変更された時刻ではありません。
- ファイルシステムによっては状態変更日やアクセス日が記録されないため、これらのグローバルフィルタがジョブに使用できない場合があります。

詳細情報：

[ca_restore - リストア マネージャ コマンド](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - ソース引数

ca_restore コマンド ライン ユーティリティでは、ソース情報を表示するさまざまな方法が提供されます。どの方法を使用するかは、リストアの対象となるファイルと使用する必要のあるメディアについて把握している情報に依存します。

- ツリーの表示単位のリストア

-source [-group] [-filter]

- セッションの表示単位のリストア

-source -tape -session [-group] [-tapesession] [-filter]

- メディアの表示単位のリストア

-tape -session [-group] [-tapesessionpw] [-filter]

ca_restore コマンド ライン ユーティリティでは、以下のソース引数がサポートされています。

ca_restore

-source [<hostname> [<hostIP>]]<filelist>

-tape <tapename> [<tapeID>]

-session <session no>

-group <groupname>

-tapesessionpw <password/encryption key>

-source [<hostname> [<hostIP>]]<filelist>

リストアするファイルまたはディレクトリを指定します。

-source スイッチを、-tape および -session の指定なしで単独で使った場合、ツリーの表示単位のリストアとして処理され、リストアされるファイルのバージョンは Arcserve Backup によって決定されます。

たとえば、異なるセッションやテープに複数回バックアップされているファイルを、テープまたはセッションを指定しないでリストアすると、Arcserve Backup によって最新のバックアップが検索されてリストアされます。

例:

</myfiles> の最新のバックアップをリストアするには、以下を使用します。

```
ca_restore -source /myfiles
```

テープ MYTAPE のセッション 24 にバックアップされた /myfiles をリストアするには、以下を使用します。

```
ca_restore -source /myfiles -tape MYTAPE -session 24
```

-tape <tapename> [<tapeID>]

リストアジョブに使用するテープを指定します。テープIDは省略可能です。テープIDは、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-tape スイッチを -source スイッチと共に使用した場合、処理はセッションの表示単位のリストアとして扱われ、Arcserve Backup データベースがリストアに使用されます。Arcserve Backup はリストア用に指定されたファイルおよびテープに関するレコードがデータベースに保管されているかどうかをチェックします。保管されていない場合、指定した情報が実際にすべて正しくても、リストアジョブはサブミットされません。このテープおよびセッションは、リストアジョブがサブミットされる前に Arcserve Backup データベースにマージする必要があります。

-tape スイッチを -source スイッチと共に使用しなかった場合、処理はメディアの表示単位のリストアとして処理され、Arcserve Backup データベースは使用されません。指定したテープ名またはセッション番号が間違っている場合、リストアジョブは実行時に失敗します。

-tape スイッチは、-session スイッチと共に使用する必要があります。

-session <session no>

リストアジョブに使用するテープセッション番号を指定します。

このスイッチは -tape スイッチと共に使用する必要があります。

-group <group name>

リストアジョブに使用するテープグループを指定します。

-tapesessionpw <session password/encryption key>

テープからデータをリストアするために必要なセッションパスワードまたは暗号化キーを指定します。この作業は、バックアップジョブの実行中にセッションパスワードまたは暗号化キーが適用された場合にのみ必要になります。

詳細情報:

[ca_restore - リストアマネージャコマンド](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - デスティネーション引数

ca_restore コマンド ライン ユーティリティでは、以下のデスティネーション引数がサポートされています。

ca_restore -dest

[<hostname> <hosttype>] <path> [-username <username> -password <password>]

[<hostname>]<-orglocation>

[<hostname> <hosttype>] [-username <username> -password <password>] -database <dbase type> [dbase name] [dbase options]

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-dest [<hostname> <hosttype>] <path> [-username <username> -password <password>]

ファイルのリストア先にするデスティネーション マシンおよびディレクトリパスを指定します。ホスト名は省略可能です。省略した場合、デフォルトでローカルマシンが使用されます。

hostnameを指定した場合は、hosttypeは省略できません。使用できるホストタイプは、unix、nt、nwagent、ntagent、w95agent、および mac です。

ターゲット エージェントに接続するにはユーザ名とパスワードが必要です。また、リモートの場所にリストアできるのは、Arcserve Backup Agentがリモートマシンで実行されている場合だけです。

例:

テープ MYTAPE からローカル マシンの「/restoreDir」へセッション 2 ファイルをリストアするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_restore -tape MYTAPE -session 2 -dest "/restoreDir"
```

テープ MYTAPE からリモート マシン RMACHINE の「/restoreDir」へセッション 2 ファイルをリストアするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_restore -tape MYTAPE -session 2 -dest RMACHINE "/restoreDir"
```

-username <user name>

リストア先のデスティネーション マシンのユーザ名を指定します。ここで指定したユーザ名は、目的のマシンにログインするために使用されます。

注: ca_restore -source オプションを使用する場合、または、64 ビット マシン上で ca_restore を使用する場合は、-username を指定する必要があります。

-password <password>

デスティネーションマシンにユーザがログインする際に使用するパスワードを指定します。

注： ca_restore -source オプションを使用する場合、または、64 ビットマシン上で ca_restore を使用する場合は、-username を指定する必要があります。

-orglocation

バックアップの元の場所(元のマシンとパス)にファイルをリストアするよう指定します。

詳細情報：

[ca_restore - リストア マネージャコマンド](#)

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - データベース オプション

リストアするデータベースオブジェクトを選択する際に、一部のデータベース固有のオプションが適用されるように設定し、データベース関連の情報を表示できます。

ca_restore コマンドには、以下のデータベースオプションが含まれます。

ca_restore

[-dbusername <database username>]

[-dbpassword <database password>]

[-database <database type> [database name]]

[Oracle Database Options]

[Oracle RMAN データベース オプション]

[Exchange DOC レベル データベース オプション]

[SQLServer Database Options]

[Sybase Agent Database Options]

[INFORMIX Agent Database Options]

[VSS Agent Database Options]

[LOTUS Agent Database Options]

-dbusername <database username>

リストアするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名を指定します。

-dbpassword <database password>

リストアするデータベースにログインするためのデータベース ユーザ名に対するパスワードを指定します。

-database <dbase type> [dbase name]

リストア先のデータベース タイプおよび名前を指定します。

サポートされている有効なデータベース タイプは、以下になります。

- SQL Server (SQL)
- Exchange DOC Level (EXCHANGEDOC)
- Exchange DB Level (EXCHANGEDB)
- Sybase (SYBASE)
- Informix (INFORMIX)
- Oracle (ORACLE)
- Oracle RMAN (ORACLERMAN)
- Lotus (LOTUS)

例:

-database SQL
-database EXCHANGEDOC
-database EXCHANGEDB
-database SYBASE
-database INFORMIX
-database ORACLE
-database ORACLERMAN
-database LOTUS

注 -

:

O-
r-
a-
c-
l-
e

イ
ン
ス
タ
ン
ス
名
と
デ
ー
タ
ベ
ー
ス
名
が
異
な
る
場
合
 -
、

-

d-

a-

t-

a-

b-

a-

s-

e

オ

プ

シ-

ヨ

ン

は

「-

-

d-

a-

t-

a-

b-

a-

s-

e

O-

R-

A-

C-

L-

E-

R-

M-

A-

N

[
デ-
ー
タ
ベ-
ー
ス
名-
]-
」
の
代
わ
り
に
「-
-
d-
a-
t-
a-
b-
a-
s-
e

O-
R-
A-
C-
L-
E-
R-
M-
A-
N

[
イ

ン
ス
タ
ン
ス
名
@
デ-
ー
タ
ベ-
ー
ス
名-
]-
」
に
す
る
必
要
が
あ
り
ま
す-
。

詳細情報:

[ca_restore - Oracle データベース オプション](#)

[ca_restore - Oracle RMAN データベース オプション](#)

[ca_restore - Exchange Exchange DOC レベル データベース オプション](#)

[ca_restore - Exchange DB レベル データベース オプション](#)

[ca_restore - SQL SQL Server データベース オプション](#)

[ca_restore - Sybase エージェント データベース オプション](#)

[ca_restore - Informix エージェント データベース オプション](#)

[ca_restore - VSS エージェント データベース オプション](#)

[ca_restore - Lotus エージェント データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Oracle データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Oracle データベース オプションが含まれます。

ca_restore

[-oracle_controlfile] (UNIX Oracle エージェントのみ)

[-oracle_overwritelog] (UNIX Oracle エージェントのみ)

[-oracle_multistream] (UNIX Oracle エージェントのみ)

[-oracle_recover] (UNIX Oracle エージェントのみ)

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注: Arcserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、Arcserve Backup サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

-oracle_controlfile

制御ファイルをリストアするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_overwritelog

リストア時に既存のログを上書きするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_multistream

複数のストリームを使用して Oracle をリストアするように指定します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

-oracle_recover

データファイルのリストアされたコピーを取得し、データベースの REDO ログに記録されている変更があれば、そのデータファイルに適用するように指定します。データベース全体を回復するには、そこに含まれるデータファイルそれぞれに対して回復処理を実行します。(UNIX Oracle エージェントのみ)

例:

ca_restore ORACLE コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドは、単一の表領域 (SYSAUX) をリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] "dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:31 [40]\SYSAUX" -dest [<hostname>] <-orglocation> -
database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] "dbora7@instance\OFFLINE\2007_07_17-08:20 [44]\SYSAUX" -dest [<hostname>] <-orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、複数の表領域 (SYSAUX および USERS) をリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:31 [40]\SYSAUX" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:31 [40]\USERS" -dest [<hostname>] <-orglocation> -
database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、制御ファイルをリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\CONTROL FILE" -dest [<hostname>] <-
orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、アーカイブ ログをリストアします。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\ARCHIVE LOG" -dest [<hostname>] <-
orglocation> -database ORACLE [dbase name] [dbase options]
```

- 以下のコマンドは、データベース全体をリストアします。データベース全体をリストアするのに5つの表領域 (tbs1、tbs2、tbs3、tbs4、および tbs) があり、すべての表領域、アーカイブ ログ、および制御ファイルをリストアすると仮定します。

```
ca_restore -source [<hostname> [<hostIP>]] " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\tbs1" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\tbs2" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\tbs3" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\tbs4" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\tbs5" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\ARCHIVE LOG" " dbora7@instance\DIRECT_
ONLINE\2007_07_16-06:30 [37]\CONTROL FILE" -dest [<hostname>] <-
orglocation> -database <dbase type> [dbase name] [dbase options]
```

詳細情報:

[ca_restore - データベースオプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Oracle RMAN データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Oracle RMAN データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore -use_rmancat
[-rman_catdbname <rman_catdbname>]
[-rman_catuser <RMan Catalog User>]
[-rman_catpassword <RMan Catalog Password>]
ca_restore [-put_online]
ca_restore [-oracle_controlfile]
ca_restore [-listbakset]
ca_restore [-rman_archlogsel

al_all |
al_pattern [-rman_alpattern <Archive Log Pattern>] |
al_time [-rman_alfromtime <Archive Log From Time>] [-rman_aluntiltime <Archive Log
Until Time>] |
al_scn [-rman_alfromscn <Archive Log From SCN>] [-rman_aluntilscn <Archive Log
Until SCN>] |
al_logseq [-rman_alfromlogseq <Archive Log From Sequence>] [-rman_aluntillogseq
<Archive Log Until Sequence>] [-rman_althread <Archive Log Number of Threads>] |
al_none]
ca_restore [-rman_script <RMan Script>]
ca_restore [-rman_numberofchannels <Number of Channels>]
ca_restore [-rman_blocksize <Block Size (Bytes)>]
ca_restore [-rman_baksetnum <Validate Backup Set Number>]
ca_restore [-rman_restoremethod
rm_lastbackup |
rm_time [-rman_restoretime <Restore From Backup Made On (Date/Time)>] |
rm_tag -rman_baktag <RMan Backup Tag> ]
ca_restore [-rman_recoverytype
rec_norec |
rec_untilendoflogs |
rec_untilscn [-rman_recoveruntilscn <Until SCN>] |
rec_untillogseq [-rman_recoveruntilseq <Until Log Sequence>] [-rman_recthread
<Recovery Thread Number>] |
rec_untiltime [-rman_recoveruntiltime <Until Time>]]
```

注：ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

注：Arcserve Backup CLI (コマンドライン インターフェース) を使用する場合、名前に DBCS (2 バイト文字セット) または MBCS (マルチバイト文字セット) が使用されている Oracle オブジェクトをバックアップまたはリストアするには、Arcserve Backup

サーバとエージェント ボックスの言語設定が同じであることを確認する必要があります。

注: Oracle インスタンス名とデータベース名が異なる場合、-database オプションは「-database ORACLERMAN [データベース名]」の代わりに「-database ORACLERMAN [インスタンス名 @データベース名]」にする必要があります。

-use_rmancat

カタログを使用するように指定します(推奨)。操作にRMANカタログを使用するかどうかを指定します。常に RMAN カタログを使用することをお勧めします。カタログを使用しない場合、RMAN はデータベース制御ファイルを使用するためです。この制御ファイルが失われると、RMANがデータベースをリストアできなくなります。

-rman_catdbname <rman_catdbname>

このスイッチはリカバリカタログ データベースで Oracle RMAN ca_restore ジョブを実行しようとした場合にのみ、カタログ データベース名を含めるために使用されます。

デフォルト: 空白

-rman_catuser <rman_catuser>

RMAN カタログを所有する Oracle ユーザの名前を指定します。

-rman_catpassword <rman_catpassword>

RMAN カタログを所有するユーザのパスワードを指定します。

-put_online

リストアされた Oracle オブジェクトを回復処理実行後にオンラインにするように RMAN に指定します。

-oracle_controlfile

制御ファイルをリストアするように指定します。

-listbakset

ソースノードで選択されたオブジェクトを含むすべてのバックアップセットを表示するように指定します。

-rman_archlogsel

リストア マネージャGUIの [ソース] パネルに「アーカイブ ログ」オブジェクトが含まれている場合は、このパネルの「アーカイブ ログの選択」セクションでリストアするアーカイブ ログを選択できます。選択内容はラジオ ボタン オプションによって示されます。[すべて]は、すべてのアーカイブ ログをバックアップします。

デフォルト: すべて

-rman_alpattern <rman_alpattern>

アーカイブ ログをその名 前に基づいて選 択するための文字 列 パターン。

-rman_alfromtime <rman_alfromtime>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログがその作成時刻に基づいて選 択されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選 択する際の時刻下限を指定します。この時刻以降に作成されたアーカイブ ログのみがリストアされます。

-rman_aluntiltime <rman_aluntiltime>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログがその作成時刻に基づいて選 択されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選 択する際の時刻上限を指定します。この時刻以前に作成されたアーカイブ ログのみがリストアされます。

-rman_alfromscn <rman_alfromscn>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログの範囲が時刻ではなく SCN(システム変更番号) によって決定されるように指定されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選 択する際の SCN 下限を示します。このフィールドは、「SCN 上限」フィールドが空白でない場合に空白にできます。

-rman_aluntilscn <rman_aluntilscn>

このオプションを使用すると、リストアされるアーカイブ ログの範囲が時刻ではなく SCN(システム変更番号) によって決定されるように指定されます。このフィールドは、アーカイブ ログを選 択する際の SCN 上限を指定します。このフィールドは、ユーザが「SCN 下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_alfromlogseq <rman_alfromlogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選 択できます。このフィールドは、リストアするアーカイブ ログを決定するための最小のログ シーケンス番号に対応します。このフィールドは、「ログ シーケンスの上限」フィールドに値が入力されている場合のみ空白にできます。

-rman_aluntillogseq <rman_aluntillogseq>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログのシーケンス番号に基づいてアーカイブ ログを選 択できます。このフィールドには、選 択するアーカイブ ログのシーケンス番号の上限を指定します。このフィールドへの値の入力は、ユーザが「ログ シーケンス下限」フィールドに値を入力した場合はオプションとなります。

-rman_althread <rman_althread>

このオプションを使用すると、アーカイブ ログを生成したOracleサーバを識別するスレッド番号を指定できます。このパラメータは、以下で説明されている「時刻ベース」オプション、「SCNベース」オプション、または「ログシーケンスベース」オプションと組み合わせて使用されます。このオプションは、「すべて」オプションまたは「パターンベース」オプションが使用されている場合は無視されます。

デフォルト: 1

注: この値は OPS(Oracle Parallel Server、Oracle 8 と 8i の場合) または RAC(Real Application Cluster、Oracle 9i と 10g の場合) でのみ使用され、それ以外の場合、スレッド番号は常に 1 です。

-rman_script <rman_script>

このオプションを使用すると、RMANスクリプトのパスを入力できます。このフィールドに値を入力すると、OracleエージェントはユーザがGUIに入力したその他すべてのオプションを無視します。スクリプトはそのまま RMAN に渡され、Oracle エージェントは通常どおりリストア操作を実行します。

-rman_numberofchannels <rman_numberofchannels>

このオプションを使用すると、リストア操作を実行するために RMAN によって割り当てられるチャンネルの数を指定できます。RMANは同時に複数のジョブ(各チャンネルにつき1つ)をサブミットします。

デフォルト: 1 チャンネル

-rman_blocksize <rman_blocksize>

このオプションを使用すると、リストアの実行時に RMAN が Oracle エージェントに送るデータブロックのサイズを指定できます。このフィールドは、デフォルトで空白になります。バックアップ時にユーザが値を入力した場合は、このバックアップからリストアするときに同じブロックサイズを入力する必要があります。さもないとRMANは、バックアップでのブロックサイズとリストアでのブロックサイズが一致していないことを示すエラーメッセージを生成します。その場合、バックアップ時に使用された値がエラーメッセージに表示されます。値が入力されない場合、RMANはOracle 8または8iでは64 KBを使用し、Oracle 9iでは256 KBを使用します。

このパラメータはOracle 10gでは廃止されました。

デフォルト: 空白

-rman_baksetnum

テープ上のデータのコピーが有効で、リストア可能かを必要に応じて確認するように指定します。このコマンドによって、RMAN が実際にデータをリストアすることはありません。

必要となるバックアップセット番号は、ご使用の環境にある RMAN に接続し、「list backupset」コマンドを発行することで入手できます。バックアップセット番号は、-listbakset オプションを ca_restore コマンド内で実行した結果からも取得することができます。また、利用可能なバックアップセット情報を表示することもできます。

-rman_restoremethod

実施される方法に基づいてデータリストアを実行するように指定します。

rm_lastbackup

RMAN が最新のバックアップからデータのリストアを試行するように指定します。

rm_time [-rman_restoretime <Restore From Backup Made On (Date/Time)>]

データの取得先に RMAN が使用するセットを、指定した日時に基づいて指定します。

rm_tag -rman_baktag <RMan Backup Tag>

RMAN が指定したタグに従ってデータのリストアを試行するように指定します。実際のバックアップ時にバックアップタグを指定した場合、タグ名を使用してデータをリストアできます。

-rman_recoverytype

実施される回復のタイプに基づいてデータ回復を実行するように指定します。

rec_norec

このスイッチは、データのリストア後に RMAN が回復処理を実行しないように指定します。

rec_untillendoflogs

RMAN が、現在のログの最後まで、できる限り最新の状態にデータを回復するように指定します。

rec_untilscn [-rman_recoveruntilscn <Until SCN>]

RMAN が、指定したシステム変更番号 (SCN) の値まで回復を実行するように指定します。

rec_untillogseq [-rman_recoveruntilseq <Until Log Sequence>]

指定したアーカイブログのシーケンスが表す時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。このアーカイブログは、回復プロセスの終了時点を示します。

[-rman_recthread <Recovery Thread Number>] |

指定した回復スレッド番号が表す時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。この値は、OPS または RAC 環境でアーカイブログを生成した Oracle サーバを識別するのに使用されます。

rec_untiltime [-rman_recoveruntiltime <Until Time>]

指定した時点までデータベース全体の回復を実行するように指定します。

詳細情報:

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Exchange Exchange DOC レベル データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Exchange DOC レベル データベース オプションが含まれます。

注：このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。
Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

```
ca_restore -source <hostname> < absolute path of the exchaneg doc file> -username  
<username> -password <password>  
-database EXCHANGEDOC <dbase name> [Exchange DOC options]
```

Exchange dbase オプション

```
[-exsis_createmailbox  
[-exsis_createuser <password>  
[-exsis_overwrite|-exsis_overwritemodified |-exsis_copyrestore|-exsis_  
copyrestoremodified]]
```

注：ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exsis_createmailbox

メールボックスが存在しない場合、作成するように指定します。

-exsis_createuser <password>

ユーザが存在しない場合、作成するように指定します。このスイッチを含める場合は、このユーザ用にデフォルトのパスワードも含める必要があります。

-exsis_overwrite

リストアされるファイルを上書きするように指定します。

-exsis_overwritemodified

リストアされるファイルが変更されている場合にのみ上書きするように指定します。

-exsis_copyrestore

ファイルをコピーとしてリストアするように指定します(上書きなし)。

-exsis_copyrestoremodified

ファイルが変更されている場合にのみ、ファイルをコピーとしてリストアします。

詳細情報：

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Exchange DB レベル データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Exchange DB レベル データベース オプションが含まれます。

注: このデータベース オプションは Exchange 2003 以前のみで使用できます。
Exchange 2007 または Exchange 2010 ではサポートされていません。

```
ca_restore -source <hostname> <storage group name > -dest [<hostname>] [-  
username <username> -password <password>]  
-database EXCHANGEDB <dbase name> [Exchange DB options]
```

Exchange DB オプション

```
[-exdb_dismountdb]  
[-exdb_allow_db_overwritten -exdb_rest_orig_sg|-exdb_rest_recovery_sg [-exdb_  
rest_create_sg]]  
[-exdb_lastset]  
[-exdb_apply_logs]  
[-exdb_mount_db]  
[-exdb_wait_for_db_commit]  
[-exdb_temp_location]
```

注: ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-exdb_dismountdb

データベースをリストア前に自動的にマウント解除するように指定します。

-exdb_allow_db_overwritten

データベースがリストアによって上書き可能になるように指定します。

-exdb_rest_orig_sg

データベースを元のストレージ グループにリストアするように指定します。

-exdb_rest_recovery_sg

回復ストレージ グループが存在する場合は、データベースをそのグループにリストアするように指定します。

-exdb_rest_create_sg

回復ストレージ グループが存在しない場合は作成するように指定します。

-exdb_lastset

リストアが完了した後にデータベースをコミットするように指定します。リストアセットをリストアする場合は、セット内の最終のバックアップをリストアするときのみこのスイッチを使用します。このスイッチを含めない場合は、データベースが中間状態のまま残り、使用できるようにはなりません。ただし、後続の差分または増分リストアを実行することはできます。

-exdb_apply_logs

リストア後にコミットし、ログを適用するように指定します。

-exdb_mount_db

リストア後にコミットし、データベースをマウントするように指定します。

-exdb_wait_for_db_commit

リストア後にコミットし、データベースのコミットを待機するように指定します。

-exdb_temp_location

ログおよびパッチファイルの一時的な場所を指定します。

詳細情報:

[ca_restore - データベースオプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - SQL Server データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の SQL Server データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore -source -tape -session [-group] [-tapesessionpw]
-dest [<hostname>] [-username <username> -password <password>]
-database SQL <Instance name> [SQLServer agent options]
```

SQL Server エージェント オプション

```
[[[-sql_filegroup <filegroupname>][[-partial_restore] | [[[-sql_file <filename>]...[-sql_file
<filename>]]]] | [-autorepair_online] | [-autorepair_offline]][-force_replace_exist]
[-sql_stopat [-time <timestamp> | -at_mark <markname> [-after <timestamp>] | -before
_mark <markname> [-after <timestamp>]]]
[-sql_db_op | -sql_db_noop | -sql_db_readonly [<undo_filename>]]
[-sql_dbcc <-sql_after|-sql_before> [-physical_only] [-no_indexes]]
[-sql_restrict_access]
[-sql_keep_replication]
[-sql_move_rule [[db]][fg <filegroup name>][[-drive <drive name>]][-path <path>]]...]
[-sql_move_rule [file <filegroup name> <file name> [[[-drive <drive name>]][-path <path
name>]][-name <file name>]]...[-location <target location>]]]]
[-sql_move_rule [sql_transactionlog [[-drive <drive name>]][-path <path name>]]...]
[-sql_move_rule [sql_transactionlog <log file name> [[[-drive <drive name>]][-path
<path name>]][-name <file name>]]...[-location <target location>]]]]
[-sql_auto_off]
[-sql_forcenp]
[-sql_continue_after_checksum_failed]
```

注：ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-sql_filegroup <filegroupname>

セッション内のリストア対象のファイルグループを指定します。

-sql_file <filename>

セッション内のリストア対象のファイルを指定します。

-partial_restore

部分リストアを実行するように指定します。

-autorepair_online

データ ファイル内の破損したページを自動的に修復し、データベースをオンラインの状態になるように指定します。

注：SQL2005 のみに適用されます。

-autorepair_offline

データファイル内の破損したページを自動的に修復し、データベースをオフラインの状態になるように指定します。

注: SQL2005 のみに適用されます。

-force_replace_exist

既存ファイルの上から強制リストアを実行するように指定します。

-sql_stopat

指定したイベント時 (時刻またはマーク) のデータベースの状態にリストアするように指定します。

-time <timestamp>

指定された日時の状態までデータベースを回復するように指定します。

Microsoft SQL Server は、バックアップの開始時間と終了時間を格納する各トランザクションログの記録をリストアし、指定した時間に対してこの記録を検索します。

デフォルトでは、このオプションが選択されています。

-at_mark <markname>

指定したマークで回復を停止するように指定します。このオプションでは、指定されたログマークの状態までデータベースを回復し、さらにそのマークを伴うトランザクションも回復します。-after オプションを含めない場合、指定した名前の最初のマークで回復が停止します。-after オプションを含める場合、指定日時以後の、指定された名前の最初のマークで回復が停止します。

マーク名は、トランザクションログに特有のログマークに適用され、ファイル/ファイルグループリストアには適用されません。

-before_mark <markname>

ログマークの前でリストアを停止するように指定します。このオプションでは、指定したマークの状態までデータベースを回復しますが、そのマークを伴うトランザクションは回復しません。-after オプションを含めない場合、指定した名前の最初のマークで回復が停止します。-after オプションを含める場合、指定日時以後の、指定された名前の最初のマークで回復が停止します。

マーク名は、トランザクションログに特有のログマークに適用され、ファイル/ファイルグループリストアには適用されません。

-after <timestamp>

指定した日時 のマークより後で回復が停止するように指定します。指定した時刻ではなく、ログ マークでのタイムスタンプ時 のみで、指定されたマークでリカバリが停止されます。

-at_mark または -before_mark オプションと共にこのオプションを使用します。

-sql_db_op

データベースを使用可能な状態のままにし、追加のトランザクション ログをリストアできないように指定します。このオプションを選択すると、確定されていないトランザクションがリストア操作でロールバックされます。回復プロセス後、データベースは使用可能な状態になり、追加のリストアを実施できます。

-sql_db_noop

データベースは使用不可能な状態のままにし、追加のトランザクション ログはリストアできるようにします。このオプションを選択すると、コミットされていないトランザクションをロールバックしないようにリストアが行われます。他の差分バックアップまたはトランザクション ログを適用する場合は、このオプションまたはデータベースは読み取り専用オプションを選択する必要があります。

-sql_db_readonly [<undo_filename>]

データベースを読み取り専用モードのままにし、追加のトランザクション ログはリストアできるように指定します。

<undo_filename> は、データベースを読み取り専用の状態にしておくリストア向けのものです。

-sql_dbcc

データベースの整合性チェック(DBCC)を実行するように指定します。

sql_after

データベースのリストア後に DBCC を実行するように指定します。

sql_before

データベースのリストア前に DBCC を実行するように指定します。

-physical_only

データベース内のすべてのオブジェクトの構造上の整合性をチェックするために、データベースの物理的な整合性のみをチェックするように指定します。

-no_indexes

ユーザ定義のテーブル用インデックスをチェックせずに、データベースの整合性をチェックするように指定します。

-sql_restrict_access

新しくリストアされたデータベースへのアクセスを、db_owner、dbcreator、sysadmin の各 ロールのメンバに制限するように指定します。

-sql_keep_replication

パブリッシュされたデータベースを、それが作成された場所ではないサーバにリストアする際に、レプリケーション設定を維持するように指定します。

-sql_move_rule

データベースを移動するように指定します。

sql_move_rule [db]

移動ルールがデータベース全体に適用されるように指定します。

-sql_move_rule [fg <filegroupname>]

移動ルールが指定したファイルグループに含まれるファイルに適用されるように指定します。

-sql_move_rule [file <filegroupname> <filename>]

移動ルールが指定したファイルに適用されるように指定します。

-sql_transactionlog [<log_filename>]

移動ルールがトランザクション ログのファイルグループに適用されるように指定します。<log_filename> が指定されている場合、移動ルールは指定したログ ファイルに適用されるように指定します。

-drive <drive_name>

移動ファイルのターゲット ドライブを指定します。

-path <path_name>

以下のように、移動ファイルのターゲット パスを指定します。

sqlserver\restoreddata

-name <file_name>

指定した移動ファイル用にターゲット ファイル名を指定します。

-location <target location>

指定した移動ファイル用の場所を指定します。以下のように、<target location> パラメータの値には、ドライブ名、パス名、およびファイル名を含める必要があります。

c:\sqlserver\restoreddata\log.ldf

-sql_auto_off

セッション依存関係の自動選択をオフにし、リストアオプションを手動で選択できるように指定します。

自動選択オプションは、自動的に以下を選択します。

- ◆ リストアジョブが正常に終了するために、そのジョブと共にリストアする必要があるその他のセッション。
- ◆ リストアジョブに適切なオプション

すべてのリストアジョブでは、自動選択オプションがデフォルトです。

-sql_forcenp

名前付きパイププロトコルを使用するように指定します。

注：SQL2000 以前のバージョンのみに適用されます。

-sql_continue_after_checksum_failed

チェックサムエラーの後でリストアジョブを続行するよう指定します。

注：SQL2005 のみに適用されます。

詳細情報：

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Sybase エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Sybase エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database SYBASE -dbusername <dbusername> -dbpassword  
<dbpassword>]
```

Sybase エージェントには、リストア用のデータベース オプションは特に存在しません。

詳細情報:

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Informix エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Informix エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database INFORMIX <instance> [-ifmx_method <both|physical|logical>]]
```

```
ca_restore [-database INFORMIX <instance> [-ifmx_lastlog <number (0-16959)> | -  
ifmx_time <time [MM/dd/yyyy,HH:mm:ss | yyyy-MM-dd,HH:mm:ss]>]]
```

注：ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-ifmx_method <both|physical|logical>

リストア方法を指定します。

both

物理方式および論理方式の両方を使用し、dbspaces、blobspaces、および論理ログすべてをリストアします。

physical

物理リストア方式のみを使用し、dbspaces および blobspaces をすべてリストアするように指定します。

logical

論理リストア方式のみを使用し、ログのみをリストアするように指定します。

-ifmx_lastlog <number (0-16959)>

リストアするログの最終番号を指定します。この番号よりも後のログが存在する場合はリストアされません。

-ifmx_time <time [MM/dd/yyyy,HH:mm:ss | yyyy-MM-dd,HH:mm:ss]>

リストアを停止する時刻を指定します。

詳細情報：

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - VSS エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の VSS エージェント データベース オプションが含まれます。

ca_restore -source <vss_path>

-dest [-vss [-vss_auth]]

-vss

VSS バックアップからデータをリストアするように指定します。

-vss_auth

VSS リストアでは、このオプションはリストアされたコピーが「権限付き」バージョンになるように強制します。つまり、リストアされたレプリカ セットが現在のレプリカより古い場合でも、古いデータがすべてのレプリケーション パートナーにレプリケートされます。権限付きのリストアは、通常、以前の既知の状態にシステムをリストアするために使用されるか、または管理者が間違っておブジェクトを削除し、その変更がすべてのドメインコントローラにレプリケートされてしまった場合に使用されます。管理者がこれらのオブジェクトを簡単に再作成できる場合は、権限付きリストアよりもこちらを選択する必要があります。権限付きリストアは、バックアップ取得後に作成された新規オブジェクトを上書きしません。

このオプションは、VSS ライタが DFS(分散ファイルシステム) レプリケーション サービス ライタのような権限付きリストアをサポートする場合にのみ適用されます。ライタが権限付きリストアをサポートしない場合、このオプションには効果がありません。

デフォルトでは、Arcserve Backup は権限のない方式を使用します。

詳細情報:

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - Lotus エージェント データベース オプション

ca_restore コマンドには、以下の Lotus エージェント データベース オプションが含まれます。

```
ca_restore [-database LOTUS <instance> [-lotus_recovery [-lotus_pointintime  
<mm/dd/yyyy> <hh:mm:ss>]] -dbusername <dbusername> -dbpassword  
<dbpassword>]
```

注：ca_restore データベース オプションは「データベース オプション」というタイトルの別のトピックに説明されていて、コマンド ca_restore allusage を入力することにより、実際の CLI から表示できます。

-lotus_recovery

データベースを現在の日時 (最新) まで回復します。

-lotus_pointintime <mm/dd/yyyy> <hh:mm:ss>

指定した時点 (日付と時刻) までデータベースを回復します。回復は、データベースがバックアップされた後に発生したデータベースの変更を適用する処理です。回復を行うと、データベースが最近の状態に戻ります。[Point-In-Time 回復]を選択すると、データベースの状態を特定の時点まで戻すことができるため、より柔軟にデータベースを回復できます。

詳細情報：

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - ジョブ実行引数

ca_restore コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してリストアジョブにジョブ実行の方法を指定できます。ca_restore のジョブ実行オプションを使用すると、リストアジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時に実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、リストアジョブを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュールされた時刻に開始されるようにするため、メンバーサーバのシステム時刻を、対応するプライマリサーバのシステム時刻に同期する必要があります。Windows Time Service を使用して、ドメイン内のすべての Arcserve サーバ上の時刻を同期します。ca_restore コマンドラインユーティリティは、以下のジョブ実行引数をサポートします。

ca_restore

[-at <hh:mm>]

[-on <mm/dd/yy[yy]>]

[-hold|-runjobnow]

[-description <description string>]

-at <hh:mm>

リストアジョブの実行時刻を指定します。

注: Arcserve Backup ジョブのすべてのスケジュール時刻は、サーバがあるタイムゾーンに基づいています。Arcserve Backup エージェントマシンが Arcserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

リストアジョブの実行日を指定します。

-hold

リストアジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow との併用はできません。

-runjobnow

リストアジョブを即座にサブミットし、実行します。

-hold との併用はできません。

-description <description string>

ジョブのコメントを追加します。文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符 (") で囲む必要があります。

詳細情報:

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - 情報引数

ca_restore コマンド ライン ユーティリティでは、以下の情報引数がサポートされています。

ca_restore

[-listgroups]

[-listtapes]

[-listsessions <tapename> [<tapeID>]]

[-version [<hostname>] <path>]

[-findfile <filename> <ignorecase|casesensitive> <<hostname>|any> <search path>
<inclsubdir|noinclsubdir> <<mm/dd/yy[yy]>|today> <within #> <days|months|years>]

-listgroups

リストアジョブで使用可能なグループの一覧を表示するように指定します。

-listtapes

リストアジョブで使用可能なテープの一覧を表示するように指定します。

-listsessions <tapename> [<tapeID>]

指定されたテープにバックアップされている、リストアに使用可能なテープセッションの一覧を表示するように指定します。

-version [<hostname>] <path>

指定されたバックアップ済みファイル/ディレクトリのバージョン(復旧ポイント)のリストを表示するように指定します。ホスト名は省略可能です。省略した場合、デフォルトでローカルマシンが使用されます。

-findfile <filename> <ignorecase|casesensitive> <<hostname>|any> <search path> <inclsubdir|noinclsubdir> <<mm/dd/yy[yy]>|today> <<within #> <days|months|years>>

Recover Management Backup データベースを検索して、ファイルがすでにバックアップされているかどうかを確認します。

ファイル名、名前の大文字と小文字が区別されるかどうか、ホスト名(またはホスト名に該当する何らかの名前)、ファイル検索に使用するパス(最上位レベルで検索する場合は「/」を使用)、検索にサブディレクトリを含めるかどうかを指定する必要があります。

検索するファイルに対して、時間間隔を指定する必要もあります。この時間間隔は、開始時点および終了時点に基づいています。終了時点とは、ファイルが作成された日付(バックアップの日付ではない)で、<<mm/dd/yy[yy]>|today> という形式で表現されます。開始時点とは、終了時点から遡っ

て検索を始める時点までの日数、月数、年数のことで、<<within #>
<days/months/years>> という形式で表現されます。

例：

- 03/11/2007 ～ 03/15/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「03/15/2007 within 4 days」です。

- 03/11/2007 ～ 04/11/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「04/11/2007 within 31 days」または「04/11/2007 within 1months」です。

- 03/11/2006 ～ 03/11/2007 に作成されたバックアップ ファイルをすべて検索するには、次のように表現します。

形式は「03/11/2007 within 365 days」、「03/11/2007 within 12 months」、または「03/11/2007 within 1 years」のいずれかです。

詳細情報：

[ca_restore - データベース オプション](#)

[ca_restore - 例](#)

ca_restore - リターンコード

ca_restore コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

-waitForJobStatus オプションが指定されていない場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - コマンドは正常に実行されました。
(allusage、-usage、または -list などのように、ジョブをサブミットしないコマンド向け)
- **N (正の整数)** - コマンドが正常にジョブをサブミットしました。
(ジョブをサブミットするコマンド向け。実際の戻り値はジョブ番号)
- **-1** - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

-waitForJobStatus オプションが指定されている場合は以下のとおりです。

リターンコード:

- **0** - ジョブは正常に終了しました。
- **1** - ジョブは失敗しました。
- **2** - ジョブは完了していません。
- **3** - ジョブはキャンセルされました。
- **4** - ジョブのステータスが不明です。

注: -waitForjobstatus を allusage、-usage、または -list などのスイッチと合わせると、-waitForjobstatus スイッチは無視され、-waitForjobstatus なしのリターンコードのルールが有効になります。

詳細情報:

[ca_restore - リストアマネージャコマンド](#)

ca_restore - 例

ca_restore コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用して、ディレクトリをツリー単位で元の場所にリストアできます。

```
ca_restore -source machine1 c:\DIR1 -dest machine1 c:\DIR1 -username  
Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリを別の場所にリストアできます。

```
ca_restore -source machine1 c:\DIR1 -dest machine1 c:\ALTDIR -username  
Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリをセッション単位で元の場所にリストアできます。

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 3 -dest machine1 c:\DIR1 -username  
Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、ディレクトリを別の場所にリストアできます。

```
ca_restore -tape TAPE1 -session 3 -dest machine1 c:\DIR1 -username  
Administrator -password abc  
ca_restore -tape TAPE1 -session 7 -dest machine1 c:\temp2 -username  
Administrator -password abc  
ca_restore -source machine2 c:\ca_lic\Lic98.dll -dest machine1 D:\temp -username  
Administrator -password abc  
ca_restore -source c:\ca_lic -dest machine1 ntagent c:\DIR1 -username  
Administrator -password abc
```

- 以下の構文を使用して、データベースのすべてのテープを表示します。

```
ca_restore -listtapes
```

- 以下の構文を使用して、TAPE1 の全セッションを表示します。

```
ca_restore -listsessions TAPE1
```

- 以下の構文を使用して、Arcserve Backup を検索し、指定したファイルがバックアップされたかどうかを確認します。

```
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase bluejays C:\ca_lic inclsubdir within 1 months  
ca_restore -findfile * ignorecase any c:\ noinclsubdir within 1 days  
ca_restore -findfile * ignorecase any c:\ inclsubdir within 1 months  
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any C:\ inclsubdir within 1 months  
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any c:\ca_lic inclsubdir today 1 day  
ca_restore -findfile lic98.dll ignorecase any c:\ca_lic inclsubdir today 1 months
```

詳細情報:

[ca_restore - リストア マネージャ コマンド](#)

第15章: ca_scan - スキャン マネージャコマンド

スキャン マネージャコマンド (ca_scan) は、コマンド ライン インターフェースで、スキャン ジョブを作成して、ジョブ キューにサブミットすることができます。スキャン マネージャから実行可能な機能の多くは、コマンド ラインから実行できます。ca_scan コマンドは、メディア上の1つまたは複数のバックアップ セッションについての情報のレポートも行います。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_scan - 構文	304
ca_scan - 使用法	305
ca_scan - その他のオプション	306
ca_scan - ソース引数	308
ca_scan - ジョブ実行引数	310
ca_scan - スキャン オプション	312
ca_scan - リターン コード	320
ca_scan コマンドの例	321

ca_scan - 構文

ca_scan のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_scan

[**-cahost** <hostname>] <source arguments> <run job arguments> <options>

注：「Arcserve Manager (コンソール) 」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカル マシンから **-cahost** スイッチを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソール インストール モードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカル マシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバ サーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には **-cahost** を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

詳細情報：

[ca_scan - スキャン マネージャ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_scan - 使用法

ca_scan コマンドを使用すると、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- その他のオプション
- ソース引数
- ジョブ実行引数
- スキャン オプション

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャコマンド](#)

[ca_scan - その他のオプション](#)

[ca_scan - ソース引数](#)

[ca_scan - ジョブ実行引数](#)

[ca_scan - スキャン オプション](#)

ca_scan - その他のオプション

ca_scan コマンドには、関連するすべてのオプションを表示したり、Arcserve Backup がスキャン プロセス中に使用する基本ポリシーおよびパラメータを定義するのに使用されるその他のオプションが含まれます。

ca_scan コマンドには、以下のその他のオプションが含まれます。

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スwitchはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合は、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スwitchで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートでサブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

-f <filename>

コマンドのスイッチおよびパラメータを含むファイル名を指定するのに使用します。

このスイッチにより、シェルによるコマンドラインからの入力文字数制限(1024文字)を克服できます。また、このスイッチを使用して、ファイルにパスワードを保存することにより、これらのパスワードを隠すこともできます。

usage

基本コマンドのリストを表示します。

allusage

すべてのコマンドとそのスイッチの一覧を表示します。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャコマンド](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - ソース引数

ca_scan コマンド ソース引数を使用すると、スキャンするデータを指定できます。これらの引数を使用して、スキャン処理に使用するグループ、テープ、およびセッションを識別できます。すべてのグループのメディアをスキャンするには、ワイルドカード文字「*」を使用できます

ca_scan コマンドには、以下のソース引数が含まれます。

ca_scan

[-group <group name>]

[-tape <tape name> [<tape ID>]]

[-currenttapeseq]

Windows での使用法は以下のとおりです。

[-allsessions | -session <session # | session range>]

UNIX での使用法は以下のとおりです。

[-allsessions | -session <session range>]

-group <group name>

スキャンジョブに使用するテープグループ名を指定します。

グループの名前がわからない場合は、「Group *」のようにワイルドカード文字「*」を使用することができます。

ただし、ワイルドカード文字を使用する場合は、グループのリストで最初に利用可能なテープグループに該当するメディアのみをスキャンします。この例では、「Group0」のみがスキャンされます。

-tape <tape name> [<tape ID>]

スキャンジョブに使用するテープを指定します。テープIDは省略可能です。テープIDは、同じ名前のテープが複数存在するときに使用します。

-currenttapeseq

スキャンジョブで、現在のテープシーケンスを使用するよう指定します。

-allsessions

スキャンジョブで、テープのすべてのセッションをスキャンするよう指定します。

-session <session # | session range>

テープの単一セッションまたは複数セッションをスキャンするよう指定します。

複数セッションをスキャンするには、セッション範囲を指定します。

例:

「MYTAPE」というテープのセッション 27 をスキャンするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_scan -tape MYTAPE -session 27
```

「MYTAPE」というテープのセッション 9 ～ 24 をスキャンするには、以下のコマンドを使用します。

```
ca_scan -tape MYTAPE -session 9-24
```

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャ コマンド](#)

[ca_scan コマンド の例](#)

ca_scan - ジョブ実行引数

ca_scan コマンドは、ジョブ実行引数を提供しており、これを使用してスキャンジョブにジョブ実行の方法を指定できます。ca_scan のジョブ実行オプションを使用すると、スキャンジョブをサブミットして即座に実行したり、ホールド状態のジョブをサブミットしたり、または後の日時で実行するようにジョブをスケジュールすることができます。選択した方式によって、スキャンジョブを実行する日時が決まります。

重要: すべてのジョブがスケジュールされた時刻に開始されるようにするため、メンバーサーバのシステム時刻を、対応するプライマリサーバのシステム時刻に同期する必要があります。Windows Time Service を使用して、ドメイン内のすべての Arcserve サーバ上の時刻を同期します。ca_scan コマンドには、以下のジョブ実行引数が含まれます。

```
ca_scan
[-at <hh:mm>]
[-on <mm/dd/yy[yy]>]
[-hold | -runjobnow]
[-description <description string>]
```

-at <hh:mm>

スキャンジョブの実行時刻を指定します。

注: Arcserve Backup ジョブのすべてのスケジュール時刻は、サーバがあるタイムゾーンに基づいています。Arcserve Backup エージェントマシンが Arcserve Backup サーバとは異なるタイムゾーンにある場合、ジョブを実行する現地時間を計算する必要があります。

-on <mm/dd/yy[yy]>

スキャンジョブの実行日を指定します。

-hold

スキャンジョブをホールド状態でサブミットします。

-runjobnow との併用はできません。

-runjobnow

スキャンジョブを即座にサブミットし、実行します。

-hold との併用はできません。

-description <description string>

スキャンジョブにコメントを追加します。

注: 文字列に空白文字が含まれる場合は、文字列を二重引用符 ("") で囲む必要があります。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャコマンド](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - スキャン オプション

ca_scan コマンドを使用して、ジョブに適用されるさまざまなスキャン オプションを指定できます。

ca_scan コマンドには、以下のスキャン オプションがあります。

ca_scan

- [パスワード暗号化リスト オプション]
- [ログオプション](UNIX および Linux のみ)
- [ジョブ実行前/後の処理オプション]
- [終了コード オプション]
- [メディア オプション]
- [各種スキャン オプション]
- [ジョブステータス オプション]

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャ コマンド](#)

[ca_scan - パスワード復号化リスト オプション](#)

[ca_scan - ログ オプション](#)

[ca_scan - ジョブ実行前/後の処理オプション](#)

[ca_scan - 終了コード オプション](#)

[ca_scan - メディア オプション](#)

[ca_scan - 各種スキャン オプション](#)

[ca_scan - ジョブステータス オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - パスワード復号化リスト オプション

ca_scan コマンドには、以下のパスワード復号化リスト オプションがあります。

ca_scan

`[-decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]`

`[decryptionpwdlist <password 1> [<password 2>] [<password 3>] ... [<password 8>]`

セッションが暗号化されている場合に使用される、復号化パスワードのリストが提供されます。異なるパスワードを持つ複数のセッションが1つのスキャンジョブに含まれる場合に、Arcserve Backup がセッションごとに停止して、パスワードを要求しません。代わりに、指定された復号化パスワードが組み合わせリストとしてパッケージ化され、各暗号化セッションのスキャン時にこのリストが自動的にチェックされます。

必要なパスワードが復号化パスワード リストに含まれていた場合、ジョブは、さらにユーザ入力を求めることなく続行されます。必要なセッションパスワードが復号化リストに含まれていなかった場合は、その暗号化セッションの続行を許可する前に、セッションパスワードを入力するようメッセージが表示されます。

復号化パスワード リストには、最大 8 個のパスワードを含めることができます。各パスワードはスペースで区切ります。各パスワードは最大 23 文字であり、スペースまたはカンマを含むことはできません。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - ログ オプション

ca_scan コマンドには、以下のログ オプションがあります。

注： UNIX および Linux プラットフォームの場合のみです。

ca_scan

`[-logfile <filename> [summary | allactivity]]`

`[-snmp] [-tng] [-email <email address>] [-printer <printer name>]`

-logfile <filename> [summary | allactivity]

スキャン ジョブ実行中のアクティビティを、filename で指定されたファイルに記録します。すべてのアクティビティを記録するか、アクティビティのサマリを記録するかを指定します。

-snmp

SNMP (Simple Network Management Protocol) アラートを有効にします。

-tng

Unicenter Network and Systems Management(NSM) アラート(旧名 TNG) を有効化します。

-email <email address>

指定された電子メールアドレスに、アクティビティ ログのコピーを送信します。

-printer <printer name>

指定されたプリンタに、アクティビティ ログのコピーを送信します。

このプリンタは環境設定ファイル ARCServe_HOME/config/caloggerd.cfg で設定しておく必要があります。

詳細情報：

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - ジョブ実行前/後の処理オプション

ca_scan コマンドには、以下のジョブ実行前/後の処理 オプションがあります。

ca_scan

[-preexec <command>]

[-preexectimeout <minutes>]

[-postexec <command>]

[-prepostuser <user name>]

[-prepostpassword <user password>]

-preexec <command>

ジョブの開始前に、指定されたコマンドを実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

-preexectimeout <minutes>

スキャンジョブが開始されるまでに待機する時間を分単位で指定し、ジョブの開始前に実行されるコマンドが完了する時間を確保します。

-postexec <command>

ジョブの終了後に、指定されたコマンドを実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

注：このオプションを使用するには、-prepostuser オプションも指定する必要があります。

-prepostuser <user name>

このスキャンジョブをサブミットするユーザの名前です。

-prepostpassword <user password>

このスキャンジョブをサブミットするユーザのパスワードです。

詳細情報：

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - 終了コード オプション

ca_scan コマンドには、以下の終了コード オプションがあります。

ca_scan

[-exitcode <exit code>]

[-skip_delay|-skip_job]

[-skip_post]

-exitcode <exit code>

ジョブの開始前に実行されるコマンドの終了コードを指定します。

-skip_delay スイッチ、-skip_job スイッチ、および -skip_post スイッチと共に使用します。

注： Arcserve Backup [ジョブを実行]、[ジョブのスキップ]、および [処理終了後のアプリケーションの実行をスキップ] オプションは、返された終了コードが選択された条件 (Equal To(等しい)、Greater Than(より大きい)、Less Than(より小さい)、または Not Equal to(等しくない)) を満たしたことを検知した場合のみ、有効になります。

-skip_delay

指定された終了コードを受け取ると同時に、スキャン ジョブを実行します。

-skip_job

指定された終了コードを受け取った場合、スキャン ジョブを完全にスキップします。

-skip_post

指定された終了コードを受け取った場合、ジョブの終了後に実行するコマンドをスキップします。

詳細情報：

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンド の例](#)

ca_scan - メディア オプション

ca_scan コマンドには、以下のメディア オプションがあります。

ca_scan

[-firsttapetimeout <minutes>]

[-spantapetimeout <minutes>]

-firsttapetimeout <minutes>

使用可能なメディアがスキャン ジョブで実際に利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアが使用可能にならない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

デフォルト: 5 分

-spantapetimeout <minutes>

使用可能なスパン メディアが実際にスキャン ジョブで利用可能になるまで待機する時間を分単位で指定します。したがって、ここで指定された時間内にメディアがロードされない場合、ジョブはタイムアウトして失敗します。

無制限を指定した場合は、使用可能なメディアがロードされるか、ユーザによってキャンセルされるまで、ジョブは待機してプロンプトを表示し続けます。

デフォルト: 無制限

詳細情報:

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンド の例](#)

ca_scan - 各種スキャン オプション

ca_scan コマンドには、以下の各種スキャン オプションがあります。

ca_scan

[-list]

UNIX のみです。

-savescript <script name>

-list

スキャン ジョブで使用可能なテープのリストが表示されます。

-savescript <script name>

このジョブをジョブ キューにサブミットする代わりに、後でジョブ キューにロードできるスクリプトとしてスキャン ジョブが保存されます。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - ジョブ ステータス オプション

ca_scan コマンドには、以下のジョブ ステータス オプションがあります。

ca_scan

-waitForJobStatus <polling interval <secs>>

-waitForJobStatus <polling interval <secs>>

このオプションが指定された場合、ca_scan コマンドはジョブが完了するまで待機し、ジョブの結果である成功または失敗を示すリターンコードで終了します。

<polling interval> 値は、ca_scan ユーティリティがキュー サービスを使用してジョブのステータスをチェックする頻度 (秒数) を定義します。デフォルトのポーリング間隔は 60 秒です。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン オプション](#)

[ca_scan コマンドの例](#)

ca_scan - リターンコード

ca_scan コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

リターンコード:

- 0 - コマンドは正常に実行されました。
- -1 - コマンドの実行中にエラーが発生しました。

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャコマンド](#)

ca_scan コマンドの例

ca_scan コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用して、ホスト サーバで使用可能なグループとテープ名のリストを表示できます。

```
ca_scan -cahost machine1 -list
```

- 以下の構文を使用して、テープをスキャンする全セッションを指定します。

```
ca_scan -tape TAPE1 -allsessions
```

- 以下の構文を使用して、テープをスキャンするセッションを指定できます。

```
ca_scan -tape Tape1 -session 2
```

詳細情報:

[ca_scan - スキャン マネージャコマンド](#)

第16章: ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド

VMware VCB ユーティリティ コマンド (ca_vcbpopulatedb) はデータ収集 ツールで、バックアップ環境内の VMware ベースの VM に関する情報を Arcserve Backup データベースに入力することができます。このユーティリティはバックアップ プロキシ システム上で実行する必要があります。ユーティリティは、VMware ESX ホスト システム内および VMware vCenter Server システム内のすべての VM に関する情報を取得し、データベースにこの情報を追加します。

ca_vcbpopulatedb ユーティリティによって、以下のような情報が Arcserve Backup データベースに入力されます。

- VCB バックアップ プロキシ システム名
- VMware ESX/ESXi ホスト 名 および VMware vCenter Server 名
- VM ホスト 名
- Windows システムの VM 内に含まれているボリューム名

このユーティリティを定期的 to 実行して、Arcserve Backup データベースに格納されている ESX Host システムの VM およびボリュームの情報を最新に保つことができます。プロキシ マシンに(プライマリ/メンバの) Arcserve Backup サーバがインストールされている場合は、一般ジョブ スケジューラを使用してこのユーティリティを定期的 to 実行できます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_vcbpopulatedb - 構文	324
ca_vcbpopulatedb - 使用法	325
ca_vcbpopulatedb 設定ファイルの作成	328
ca_vcbpopulatedb - ユーティリティ リターン コード	329
ca_vcbpopulatedb - 例	330

ca_vcbpopulatedb - 構文

ca_vcbpopulatedb コマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_vcbpopulatedb

```
-Primary <PrimaryServerName>
[-vcb <VCBMachineName>]
-esxserver <ESXServerName>
-esxUser <ESXAdmin>
-esxUserPass <ESXAdminPassword>
[-proto <https/http>]
[-VCBMountableVM]
[-DelProxydb]
[-retainVMinDB]
[-silent]
[-debug]
-insertvm <VMname>
-deleteVM <VMname>
[-stopAutoPopulate]
-config <config_file_name>
```

詳細情報:

[ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ca_vcbpopulatedb - 使用法

ca_vcbpopulatedb コマンドには、Arcserve Backup データベースへの VM 情報の入力時に実行されるアクションを定義するために使用される引数およびオプションがあります。

ca_vcbpopulatedb コマンドには、以下の引数およびオプションがあります。

-Primary <PrimaryServerName>

プライマリ Arcserve Backup システムのホスト名を指定します。

-carootUser <Arcserve caroot User>

caroot アクセス権を持つ、プライマリ Arcserve Backup システムのユーザ名を指定します。

-carootPass <Arcserve caroot password>

root ユーザのパスワードを指定します。

-vcb <VCBMachineName>

VCB プロキシ マシンの名前を指定します。

注：これは、任意の引数です。この引数を省略した場合は、現在のマシン名を VCB マシン名として使用するとみなされます。

-esxserver <ESXServerName>

iSCSI/SAN LUN 上に存在する、VM を含む VMware ESX ホスト システムまたは VMware vCenter Server システムの名前を示します。

-esxUser <ESXAdmin>

管理者権限を持つ、VMware ESX ホスト システム ユーザの名前を指定します。

-esxUserPass <ESXAdminPassword>

VMware ESX ホスト システムの管理者ユーザ用パスワードを指定します。

-proto <https/http>

バックアップ プロキシ システムと、VMware ESX ホスト システムまたは VMware vCenter Server システムの間の通信プロトコルを指定します。

注：これは、任意の引数です。この引数を省略した場合は、通信プロトコルとして https を使用するとみなされます。

-VCBMountableVM

パラメータとしてこのスイッチを指定すると、iSCSI/SAN LUN ストレージ デバイスに配置されている、稼働中の VM の情報のみがデータベースに入力されます。

このスイッチを指定した場合、iSCSI/SAN LUN 以外のストレージメディアに配置された VMware ESX ホスト システムにある VM はスキップされます。

ESX ホスト システムのローカル ディスク、SAN LUN、NAS/NFS、または iSCSI のストレージ デバイスなど、複数のストレージメディアに配置された VMware ESX ホスト システムに VM が存在する場合は、このスイッチを指定して ca_vcbpopulatedb コマンド ライン ユーティリティを実行する必要があります。

このスイッチを含めると、ユーティリティは、iSCSI/SAN LUN ストレージ デバイスに配置された稼働中 VM の情報のみを Arcserve Backup プライマリ サーバ データベースに入力します。

Notes:

このスイッチを指定して ca_vcbpopulatedb コマンド ライン ユーティリティを実行する場合は、VCB プロキシ システムで実行する必要があります。

VCBMountableVM スwitchを指定してこのユーティリティを実行すると、SAN LUN ストレージ デバイスに配置された稼働中 VM ごとにマウント操作およびマウント解除操作が実行されるため、実行時間が長くなることがあります。

-DelProxydb

指定されたバックアップ プロキシ システムにある、指定された VMware ESX ホスト システムまたは VMware vCenter Server システムのデータベース内で使用可能なすべての VM を削除します。

-retainVMInDB

このコマンドの実行時に、使用不可能な VM に関するデータ(バックアップ情報)を保持します。

デフォルトでは、このユーティリティの実行時には、使用可能な VM のバックアップ情報のみが取得されます。VM を使用できない場合 (VM の電源が入っていない、環境から削除されているなど) は、Arcserve Backupによって Arcserve Backup データベースからこの VM に関する情報が削除されます。このオプションを有効にしておけば、Arcserve Backup によって使用可能な VM の情報が取得され、使用不可能な VM のバックアップ情報は保持されます。

-silent

ユーティリティによりコマンド ライン コンソールにメッセージが表示されないようにする場合に指定します。

-debug

詳細なデバッグ ログを書き込むようユーティリティに指示します。ログは、現在の作業ディレクトリに作成されます。

注: ログ ファイルの名前は ca_vcbpopulatedb.log です。

-insertVM

VM ホスト システムにある特定の VM に関する情報を Arcserve Backup データベースに追加します。

注： ca_vcbpopulateDB を使用する際に、この引数をほかの引数と組み合わせることはできません。

-deleteVM

Arcserve Backup データベースから特定の VM に関する情報を削除します。

注： ca_vcbpopulateDB を使用する際に、この引数をほかの引数と組み合わせることはできません。

-stopAutoPopulate

指定したバックアップ プロキシ システムの自動保存プロセスを無効にします。

-config <config_file_name>

ca_vcbpopulatedb 環境設定ファイルの名前を指定します。

ca_vcbpopulatedb ユーティリティは環境設定ファイルに指定された情報を使用して、Arcserve Backup データベースに入力します。

この環境設定ファイルには、プライマリ サーバ マシン、プライマリ ユーザ、プライマリ ユーザのパスワード、VCB システム名、VMware ESX ホスト名、および VMware ESX ホスト システム ユーザ認証の詳細情報が含まれます。

環境設定ファイルに持つことのできるエントリは 1 つのみです。

注： このユーティリティを使用するには、環境設定ファイルを作成する必要があります。

詳細情報：

[ca_vcbpopulatedb 設定ファイルの作成](#)

[ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド](#)

[ca_vcbpopulatedb - ユーティリティ リターン コード](#)

ca_vcbpopulatedb 設定ファイルの作成

Arcserve Backup プライマリ サーバマシン、Arcserve Backup プライマリ ユーザ名などの詳細が記録された設定ファイルを作成します。ca_vcbpopulatedb ユーティリティは環境設定ファイルに指定された情報を使用して、Arcserve Backup データベースに入力します。

ca_vcbpopulatedb 設定ファイルを作成する方法

1. メモ帳などのテキスト エディタを開きます。ca_vcbpopulatedb ユーティリティと同じディレクトリに .cfg ファイル拡張子の付いた環境設定ファイルを保存します。
2. 以下の構文で引数を入力します。

注: このコマンドの使用方法的詳細については「[ca_vcbpopulatedb の使用方法](#)」を参照してください。

3. 設定ファイルを閉じて保存します。

ca_vcbpopulatedb - ユーティリティ リターンコード

ca_vcbpopulatedb コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

ジョブステータス リターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 1 - 無効な引数が指定されました。
- 2 - Arcserve Backup ドメイン ユーザの認証エラーが発生しました。
- 3 - VMware ESX ホスト システムでユーザ認証が失敗しました。
- 4 - VMware ESX ホスト システムの接続で障害が発生しました。
- 5 - データベース操作で障害が発生しました。
- 6 - XML 作成で障害が発生しました。
- 7 - Microsoft .NET バージョン 2.0 以降が使用環境にみつかりません。
- 8 - ca_vcbpopulatedb のインスタンスが複数実行されています。
- 9 - 不明なエラーが発生しました。

詳細情報:

[ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド](#)

[ca_vcbpopulatedb - 使用法](#)

ca_vcbpopulatedb - 例

ca_vcbpopulatedb コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホストシステムの VM の詳細を、デバッグフラグをセットした状態で、http プロトコルを使用して、VCB プロキシマシン「VCBProxy1」の下にある Arcserve サーバの「Arcserver1」データベースに入力します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary Arcserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd  
-proto http -debug
```

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホストシステムの VM の詳細すべてを、デバッグフラグを解除した状態で VCB プロキシマシン「VCBProxy1」の下にある Arcserve サーバの「Arcserver1」データベースから削除します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary Arcserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd  
-delProxydb
```

- 以下のコマンドを使用して、ホスト名「ESXServer1」を持つ VMware ESX ホストシステムの VM の詳細を、VCB プロキシマシン「VCBProxy1」の内部で VM のみマウント可能な状態で、デバッグフラグをセットして、Arcserve サーバの「Arcserver1」データベースに入力します。

```
ca_vcbpopulatedb.exe -Primary Arcserver1 -carootUser caroot -carootPass ca123  
-vcb VCBProxy1 -esxServer ESXServer1 -esxUser root -esxUserPass rootpasswd  
-vcbMountableVM -debug
```

- 以下のコマンドを使用して Arcserve Backup データベースの自動入力を停止します。

- サーバ名が Myvirtualserver で、サーバが VMware vCenter Server システムにある場合

```
ca_vcbpopulatedb.exe -stopAutoPopulate Myvirtualserver
```

- サーバ名が MyEsxserver で、サーバが VMware ESX ホストシステムにある場合

```
ca_vcbpopulatedb.exe -stopAutoPopulate MyEsxserver
```

詳細情報:

[ca_vcbpopulatedb - VMware VCB ユーティリティ コマンド](#)

第17章: ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティコマンド

Arcserve Hyper-V 環境設定ツールのユーティリティコマンド (ca_msvmpopulatedb) は、ご使用の Hyper-V システム上の仮想マシン (VM) に関する情報を Arcserve Backup データベースに入力するデータ収集ツールです。このユーティリティは Hyper-V ホスト システム上で実行する必要があります。実行すると、Hyper-V ホスト システム内のすべての VM に関連するすべての情報を取得し、それをデータベースに追加します。

ca_msvmpopulatedb ユーティリティによって、以下のような情報が Arcserve Backup データベースに入力されます。

- Hyper-V ホスト名
- VM ホスト名
- Windows システムの VM 内に含まれているボリューム名

このユーティリティを定期的に行って、Arcserve Backup データベースに格納されている Hyper-V ホストの VM とボリュームの情報が最新になるようにしてください。Hyper-V ホストに (プライマリ/メンバの) Arcserve Backup サーバがインストールされている場合は、一般ジョブスケジューラを使用してこのユーティリティを定期的に行うことができます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ca_msvmpopulatedb - 構文	332
ca_msvmpopulatedb - 使用法	333
ca_msvmpopulatedb - ユーティリティリターンコード	335
ca_msvmpopulatedb - 例	336

ca_msvmpopulatedb - 構文

ca_msvmpopulatedb のコマンド ラインの構文は、以下のような形式です。

ca_msvmpopulatedb

-Primary <PrimaryServerName>

[-Debug <Debug Level>]

[-retainVMinDB]

[-DelVMinDB]

詳細情報:

[ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティ コマンド](#)

[ca_msvmpopulatedb - 使用法](#)

ca_msvmpopulatedb - 使用法

ca_msvmpopulatedb コマンドには、Arcserve Backup データベースへの VM 情報の入力時に実行されるアクションを定義するために使用される引数およびオプションがあります。

ca_msvmpopulatedb コマンドには、以下の引数およびオプションがあります。

-Primary <PrimaryServerName>

プライマリ Arcserve Backup システムのホスト名を指定します。

-debug

詳細なデバッグログを書き込むようユーティリティに指示します。ログは、現在の作業ディレクトリに作成されます。

注：ログファイルの名前は ca_msvmpopulatedb.log です。

デバッグレベル

デバッグログ(ca_mshvpopulatedb.log)に必要な情報の詳細レベルを指定します。デバッグレベルの値が高くなるほど、デバッグログに記載される情報もより詳細になります。

デフォルト：2

範囲：1 ～ 6

-retainVMinDB

このコマンドの実行時に、使用不可能な VM に関するデータ(バックアップ情報)を保持します。

デフォルトでは、このユーティリティの実行時には、使用可能な VM のバックアップ情報のみが取得されます。VM を使用できない場合(VM の電源が入っていない、環境から削除されているなど)は、Arcserve Backupによって Arcserve Backup データベースからこの VM に関する情報が削除されます。このオプションを有効にしておけば、Arcserve Backup によって使用可能な VM の情報が取得され、使用不可能な VM のバックアップ情報は保持されます。

-DelVMinDB

指定した Hyper-V Server 用の Arcserve Backup データベースの中で利用可能な VM を削除し、最新の VM データを Arcserve Backup データベースに入力します。

詳細情報：

[ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティ コマンド](#)

[ca_msvmpopulatedb - 構文](#)

ca_msvmpopulatedb - ユーティリティ リターンコード

ca_msvmpopulatedb コマンドからのリターンコードは以下のとおりです。

ジョブステータス リターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 2 - Arcserve Backup ドメイン ユーザの認証エラーが発生しました。
- 5 - データベース操作で障害が発生しました。
- 6 - XML 作成で障害が発生しました。
- 8 - ca_msvmpopulatedb のインスタンスが複数実行されています。
- 9 - 不明なエラーが発生しました。

詳細情報:

[ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティ コマンド](#)

[ca_msvmpopulatedb - 使用法](#)

ca_msvmpopulatedb - 例

ca_msvmpopulatedb コマンドの構文例は以下のとおりです。

- Arcserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン) サーバ「CASrvr1」に VM を追加するには以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1
```

- Arcserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン) サーバ「CASrvr1」に VM を追加し、その時点でアクセスできないか電源がオフになっていた既存の VM を削除しない場合には、以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1 -retainVMinDB
```

- この Hyper-V ホスト用に、Arcserve Backup プライマリ(またはスタンドアロン) サーバ「CASrvr1」に登録された VM を削除するには以下のコマンドを使用します。

```
ca_msvmpopulatedb -P CASrvr1 -DelVMinDB
```

詳細情報:

[ca_msvmpopulatedb - Hyper-V VM ユーティリティ コマンド](#)

第18章: cabatch - バッチ コマンド

バッチ コマンド (cabatch) では、外 部スクリプト ファイルを使用して、ジョブをローカル またはリモート の Arcserve Backup ジョブ キューにサブミットしたり、ジョブ キューから ジョブを削 除したり、ジョブ キューに含まれる全 ジョブの実 行日 時を 変 更したりで きます。cabatch ユーティリティがジョブを Arcserve Backup ジョブ キューにサブミット す るために、バックアップ マネージャが実 行さ れてい る必要 はあ りま せんが、す べての Arcserve Backup エンジンが起 動して いる必要 があります。

注: ジョブをリモート サーバの Arcserve Backup ジョブ キューにサブミットするには、そ のサーバに 対する 適切なア クセス権 を持 っている必要 があります。

cabatch ユーティリティを 使用してジョブをサブミットするには、バックアップ マネージャ を使用してジョブ スクリプトを 作成し保 存するか、cabatch ジョブ情 報テンプレート を使用してジョブの 説明を記 入したテキ スト ファイルを 準備する 必要 があります。このテンプレートが 完 成したら、cabatch はこのジョブの 説明ファイルを読み 込み、ジョブを Arcserve Backup ジョブ キューにサブミットして実 行します。cabatch ジョブ 情 報テンプレート (Template.txt) は、Arcserve Backup のホーム ディレクトリに保 存 されています。

このコマンドは、Unicenter NSM (旧 名 TNG) のジョブ管 理オプシ ョンで、/J (ジョブ リ ターンコードを返す) や /W (ジョブの完 了まで待 機する) スイッチを 使用して自 動 化で きます。このコマンドを 使用した Unicenter NSM との統 合の 詳 細につい ては、「Unicenter NSM - ジョブ管 理オプシ ョンの統 合」を参 照して ください。

注 -

:

U-
n-
i-
c-
e-
n-
t-
e-
r

N-
S-
M

r-
1-
1

より
前の
リ
リ-
ー
ス
で
は-
、
ジ-
ヨ
ブ
管
理
オ
プ
シ-
ョ
ン
は
ワ-
ー
ク
ロ-
ー
ド
管
理
と
呼
ば
れ
て
い

ま
し
た
。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

cabatch - ジョブの送信	340
cabatch - ジョブの削除	343
cabatch - ジョブの修正	344
cabatch - 例	345

cabatch - ジョブの送信

以下の構文を使用すると、スクリプト ファイルを使用してジョブをサブミットできます。

CABATCH /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName

例:

CABATCH /H=QANT /S=C:\BACKUP.ASX /W

リターンコード:

- 0 - ジョブは正常に終了しました。
- 1 - ジョブは完了していません。
- 2 - ジョブはキャンセルされました。
- 3 - ジョブは失敗しました。
- 4 - ジョブはクラッシュしました。
- 5 - ジョブはシステム エラーでした。
- 6 - パラメータ エラーが発生しました。
- 7 - メモリの不具合が発生しました。メモリを使用していると思われるアプリケーションのうち、重要ではないものを閉じてから、ジョブを再試行してください。
- 8 - 一般エラーが発生しました。

モード:

サブミット(S)

ジョブを即座に実行するよう指定します。ジョブはスクリプト ファイルに従ってジョブ キューに追加されます。次に、carunjob がジョブ キューから番号でこのジョブを取得して起動します。

実行(E)

(即座ではなく) 指定されたスケジュール時刻に基づいてジョブを実行するよう指定します。ジョブはジョブ キューに追加されません。carunjob は、スクリプト ファイルからこのジョブを直接起動します。

オプション:

/H [server name]

ジョブのサブミット 先となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch により、Arcserve Backup ドメイン サーバ名としてローカルコンピュータ名が検索されて使用されます。

/S [script name]

バイナリスクリプト、または cabatch のジョブ情報テンプレート(Template.txt) を使用して準備したジョブの説明ファイルを指定します。

/RS [Computer Name]

スクリプト内のソースコンピュータ名を Computer Name で置換するよう指定します。

注: コンピュータ名を指定しない場合は、ホスト名が使用されます。

/RD [Computer Name]

スクリプト内のデスティネーションコンピュータ名を Computer Name で置換するよう指定します。

注: コンピュータ名を指定しない場合は、ホスト名が使用されます。

/D [MM/DD/YY]

ジョブを実行する日付を指定します。

/T [HH:MM]

ジョブを実行する時刻を指定します。

/G [device group]

デバイスグループ名を指定します。

/TP [media name]

メディア名を指定します。

/TID [media id]

メディアIDを指定します。

/TSN[media sequence number]

メディアシーケンス番号を指定します。

/POST [command]

指定したコマンドをジョブの完了後に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

/PRE [command]

指定したコマンドをジョブの開始前に実行します。コマンドはフルパスで指定してください。

/PREPOSTUSER=user

ジョブの実行前/後のコマンドを実行するユーザの認証情報を指定します。

/PREPOSTPWD=password

ジョブの実行前/後のコマンドを実行するユーザのパスワードを指定します。

/SSN[session number]

リストア ジョブのセッション番号を指定します。

/RSessPW

スクリプト内のセッションパスワードを置換する場合に指定します。

/J

Arcserve Backup ジョブ ステータスをリターンコードとして使用する場合に指定します。

/W

ジョブの完了を待機する場合に指定します。

詳細情報:

[cabatch - ジョブの送信](#)

[cabatch - ジョブの削除](#)

[cabatch - ジョブの修正](#)

[cabatch - 例](#)

cabatch - ジョブの削除

以下の構文を使用すると、ジョブ キューからすべてまたは指定したジョブを削除できます。

CABATCH/E=AL|BK|RS|CP|CT/H=ServerName

オプション

/H [server name]

ジョブの削除元となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch により、Arcserve Backup ドメイン サーバ名としてローカルコンピュータ名が検索されて使用されます。

AL

すべてのジョブを削除する場合に指定します。

BK

バックアップ ジョブを削除する場合に指定します。

RS

リストア ジョブを削除する場合に指定します。

CP

コピー ジョブを削除する場合に指定します。

CT

カウント ジョブを削除する場合に指定します。

詳細情報:

[cabatch - バッチ コマンド](#)

[cabatch - ジョブの送信](#)

[cabatch - ジョブの修正](#)

[cabatch - 例](#)

cabatch - ジョブの修正

以下の構文を使用すると、ジョブ キューにあるすべてのジョブの実行時刻を変更できます。

CABATCH /H=ServerName /MT=nnn

オプション

/H [server name]

ジョブの修正元となるジョブ キューのあるサーバ名を指定します。「*」を入力すると、cabatch により、Arcserve Backup ドメイン サーバ名としてローカルコンピュータ名が検索されて使用されます。

/MT [nnn]

分数を入力して、ジョブの実行時刻を変更します。

- 正の数の場合は、その数値のみを入力します。
- 負の数の場合は、数値の前に「-」(マイナス記号) を入力します。たとえば、「30」または「-30」と入力します。

詳細情報:

[cabatch - バッチ コマンド](#)

[cabatch - ジョブの送信](#)

[cabatch - ジョブの削除](#)

[cabatch - 例](#)

cabatch - 例

cabatch コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下の構文を使用すると、スクリプト ファイルを使用してジョブをサブミットできます。

```
cabatch /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName
```

- 以下の構文を使用すると、スクリプト ファイルを使用し、/W スイッチを指定してジョブをサブミットできます。

注：/W スイッチを含めた場合、cabatch コマンドはすぐに復帰せず、ジョブの完了を待機します。

```
cabatch /MODE=Execute|Submit /H=ServerName /S=<path>ScriptName /W
```

- ジョブ キューからすべてのジョブ(AL) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=AL /H=ServerName
```

- ジョブ キューからバックアップ ジョブ(BK) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=BK /H=ServerName
```

- ジョブ キューからリストア ジョブ(RS) を削除する場合は、以下の構文を使用します。

```
cabatch /E=RS /H=ServerName
```

- ジョブ キュー内の全ジョブの実行時間を変更して、30 分後に実行されるようジョブを起動するには、以下の構文を使用します。

```
cabatch /H=ServerName /MT=30
```

詳細情報：

[cabatch - バッチ コマンド](#)

第19章: careports - レポート ライタ コマンド

レポート ライタ コマンド (CAreports) を使用すると、[Arcserve Backup レポート ライタ ユーティリティ] ダイアログ ボックスにアクセスして、カスタム(定義済み、ユーザ作成) レポートを作成できます。[レポート ライタ] ダイアログ ボックスには、Arcserve Backup ホーム画面の [ユーティリティ] メニュー(または [ユーティリティ] セクション) からアクセスできます。

CAreports コマンドには、サイレント モードでレポートを実行したり、Arcserve Backup Alert マネージャを使用して Alert を送信するためのオプションが用意されています。レポート ライタを使って作成したレポートは、レポート マネージャでプレビュー、印刷、またはスケジューリングできます。

CAreports 構文の説明をすべて表示するには、以下のコマンドを入力します。

CAreports /?

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

careports - 構文	348
careports - オプション	349
careports - 例	351

careports - 構文

careports コマンド ライン構文 のフォーマット は以 下 のとおりです。

careports

[m <machine_name>]

[-r <report_name>]

[-s]

[-o <output_filename>]

[-alert]

[-f <format_type>]

[?]

詳細情報:

[careports - レポート ライタ コマンド](#)

[コマンド ライン構文 の文字](#)

careports - オプション

careports は、レポートの生成と Arcserve Backup Alert マネージャを使用したアラートの送信に関する多数のオプションを提供します。

careports コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-a

ファイルを自動的に出力します。-o オプション(出力ファイル名)と組み合わせると、特定のディレクトリに新しい出力ファイルを作成できます。出力ファイル名は、レポートテンプレートの命名規則に従います。-o オプションを追加で使用する、既存のファイルが上書きされないように指定できます。

-s

レポートをサイレントモードで生成します(ダイアログボックスまたはメッセージボックスは表示されません)。

-s オプションは、-r オプション(レポートテンプレート)と組み合わせて使用され、レポートがジョブスケジューラウィザードツールを使用してスケジュールされている場合に使用する必要があります。

-r <report_name>

レポートに使用するレポートテンプレートの名前を指定します。-r オプションが指定されない場合、他のオプション(-s、-o、-alert)は無視されます。

-o <output_filename>

レポートを実行して生成された結果が保存される出力ファイル名を指定します。指定されたファイルが存在する場合は、.bak 拡張子で名前が変更されます。たとえば、c:\temp\report.xml は c:\temp\report.bak.xml に変更されます。

-m <machine_name>

レポートをリモートコンピュータ上で生成する場合のコンピュータの名前を指定します。

-f <format_type>

出力ファイルの形式を指定します。

- XML (*.xml) (デフォルト)
- CSV (*.csv) (カンマ区切り形式)。

-alert

レポート完了時にアラートメッセージが送信されます。アラートメッセージは、Alert マネージャで "Arcserve" 環境設定の下に設定する必要があります。

-append

新しく作成されたレポートを既存ファイルに追加します。

注：新規作成されるレポート ファイルと既存のレポート ファイルの両方が CSV 形式である必要があります。

?

Arcserve Backup クエリレポート画面を表示します。ここで、レポートに含める情報を指定することができます。

詳細情報：

[careports - レポート ライタ コマンド](#)

[careports - 例](#)

careports - 例

careports コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、レポート テンプレートを開き、<machine name> についてのxml 出力をサイレント モードで作成します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -m <machine name>
```

- 以下のコマンドを使用して、出力を Alert マネージャ(alert) に送信します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -alert -m <machine name>
```

- 以下のコマンドを使用して、レポート テンプレートを開き、<machine name> についてのCSV 出力(デフォルト値ではXML) をサイレント モードで作成します。

```
careports -s -r <report name> -o <output name> -f CSV -m <machine name>
```

詳細情報:

[careports - レポート ライタ コマンド](#)

第20章: caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド

詳細レポート ジェネレータ コマンド (caadvreports) は、さまざまなレポートを生成できるユーティリティです。これにより、現在のデータ保護ステータスの概要を知ることができます。caadvreports ユーティリティでは、すべてのログ メッセージを、ARCServe_HOME\logs フォルダの CAAdvReports.Log ファイルに書き込みます。このファイルは、レポートの生成時に caadvreports が実行したアクションについての詳細情報を提供します。このログ ファイルは、レポートに関するあらゆる問題をデバッグするときの出発点として使用できます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

caadvreports - 構文	354
caadvreports - レポート	355
caadvreports - オプション	359
caadvreports - 例	362

caadvreports - 構文

caadvreports コマンド ライン構文 のフォーマット は以 下 のとおりです。

```
caadvreports
-ReportType <report_ID>
-OutFile <output file name>
-StartDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]
-EndDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]
-Server <remote server name>
-JobDesc <string text>
[-XML][[-CSV]
-Percent <percent value>
-Top <n>
-Serial <serial>
-PastDays <n>
-AutoName
-Alert
-VaultCycle
```

詳細情報:

[caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド](#)

[コマンド ライン構文 の文字](#)

caadvreports - レポート

caadvreports コマンドには、詳細レポートを生成するためのさまざまなオプションがあります。caadvreports コマンドでは、さまざまなレポート パラメータを受け入れ、解析できます。ただしすべてのレポートにすべてのパラメータが必要であるわけではありません。生成中のレポートのタイプに基づいて、指定されたレポートに必要なパラメータとサポートされるパラメータのみが使用されます。不要なパラメータは、そのまま無視されます。

詳細レポートを実行するには、少なくともレポート タイプと生成されたレポート ファイルの保存先パスを指定する必要があります。そのレポートにおけるいずれかの必須パラメータを指定しなかった場合は、ユーティリティが失敗して、失敗の原因がログファイルに書き込まれます。

caadvreports コマンドを使用して生成できるレポートのタイプを、サポートされるフィルタパラメータを含めて、以下に示します。

バックアップ試行成功率：サマリ

このレポートは、成功したバックアップ試行の比率を示します。未完了および失敗のバックアップ試行の比率も示します。

サポートされるフィルタパラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

バックアップ試行成功率

このレポートは、成功したバックアップ試行の比率に関する情報をノード単位で示します。

サポートされるフィルタパラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Percent (失敗率が、指定した比率より高いノードのみを含めるよう出力を制限)

リストア試行成功率

このレポートは、全リストア試行での成功率を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下 のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細 の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

ドライブ スループット

このレポートは、各ドライブで観 察された、平均 スループットに関する情報 を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下 のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- Serial (フィルタが一致するシリアル番号を持つドライブのみを含めるよう出力を制限)

バックアップ エラー

このレポートは、レポート 期間中にバックアップ ジョブに関連して発生した、各バックアップ パスでのエラーおよび警告 の件数 を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下 のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細 の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

失敗したバックアップ試行

このレポートは、レポート 期間中にバックアップ試行 が多く失敗したクライアント を示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下 のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細 の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Top (最初の「n」クライアント のみに出力を制限)

連続して失敗したバックアップ試行

このレポートは、レポート期間中にバックアップ試行が連続して多く失敗したクライアントを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays

部分バックアップ

このレポートは、部分バックアップ回数の多いクライアントを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)
- Top (最初の「n」クライアントのみに出力を制限)

フルバックアップ期間

このレポートは、レポート期間でのすべてのバックアップパスについて、フルバックアップの平均バックアップ時間、平均バックアップデータ量、平均スループットを示します。

サポートされるフィルタ パラメータは以下のとおりです。

- StartDate
- EndDate
- PastDays
- JobDesc (詳細の一致するジョブのみを含めるよう出力を限定)

前回のバックアップステータスレポート

このレポートは、キューにある全バックアップジョブの前回の実行ステータスを示します。ジョブがまだアクティブである場合は、実行中ジョブの現在のステータスが示されます。このレポートは、レポート生成時におけるキュー内のジョブのステータスのみを示します。

サポートされるフィルタ

なし

ボールド レポート

このレポートは、レポート日にボールドに入るまたはボールドから外れるテープのリストを示します。-VaultCycle コマンドを使用して、レポートの生成前にボールド サイクルを実行できます。

サポートされるフィルタ

なし

詳細情報:

[caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド](#)

[caadvreports - オプション](#)

[caadvreports - 例](#)

caadvreports - オプション

caadvreports コマンドには、詳細レポートの生成と Arcserve Backup Alert マネージャを使用したアラートの送信に関する多数のオプションが用意されています。

caadvreports コマンドでは、以下のオプションがサポートされています。

-ReportType <n>

生成するレポートのタイプを指定します。このパラメータはすべてのレポートで必要です。

値 <n> によって、生成されるレポートのタイプが決まります。

以下のリストに、値 <n> と生成されるレポートの対応を示します。

<n>	レポート名
1	バックアップ試行成功率：サマリ
2	バックアップ試行成功率
3	リストア試行成功率
4	ドライブスループット
5	バックアップエラー
6	失敗したバックアップ試行
7	連続して失敗したバックアップ試行
8	部分バックアップ
9	フルバックアップ期間
10	前回のバックアップステータスレポート
11	ポールトレポート

注：各レポートの詳細については、「[caadvreports - レポート](#)」を参照してください。

-OutFile <filename>

生成されるレポートの保存先ファイルのフルパスを指定します。これは、すべてのレポートに必要なパラメータです。

「-AutoName」を使用した場合は、このスイッチは不要です。

-StartDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]

レポート期間の開始日時を指定します。時刻パラメータ「hh:mm:ss」はオプションです。時刻を指定しなかった場合は、「00:00:00」(12:00 AM) であるとみなされます。時刻を指定する場合は、24 時間形式で指定する必要があります。

注：「-PastDays <n>」スイッチを含める場合、このスイッチは不要です。

-EndDate <mm/dd/yyyy> [hh:mm:ss]

レポート期間の終了日時を指定します。時刻パラメータ「hh:mm:ss」はオプションです。時刻を指定しなかった場合は、「11:59:00」(11:59 PM)であるとみなされます。時刻を指定する場合は、24 時間形式で指定する必要があります。

注: 「-PastDays <n>」スイッチを含める場合、このスイッチは不要です。

-Server <remote server>

レポートを実行するリモート サーバを指定します。通常、レポートは、プライマリサーバで実行されます。このスイッチは、リモート メンバサーバでレポートを実行する場合に含めます。

-JobDesc <string text> [-XML | -CSV]

ジョブ詳細の文字列テキストを指定します。ジョブ詳細が文字列テキストに一致する特定のジョブのみを含めるよう出力を制限するために、いくつかのレポートで使用します。

-XML

レポートを XML 形式で生成する場合に指定します。生成された XML レポートは、提供された .xsl レスpons ファイルと組み合わせて、HTML レポートの生成に使用できます。

これは、このオプションを上書きする他のオプションを指定しなかった場合のデフォルト オプションであり、-CSV パラメータと組み合わせることはできません。

-CSV

CSV 形式でレポートを生成する場合に指定します。

-Percent <percent value>

レポートのフィルタリングに使用されるパーセント値を指定します。

-Top <n>

レポート出力を先頭の「n」個のみに制限する場合に指定します。

-Serial <serial>

シリアル番号が指定したシリアル文字列パターンと一致するドライブのみに、レポート出力を制限する場合に指定します。シリアル番号は、ドライブスループット レポートでデバイスシリアル番号と比較されます。

-PastDays <n>

レポートを生成対象期間として、現在時刻までの日数を指定します。このスイッチは、固定期間のレポートを生成するために -StartDate および -EndDate スイッチの代わりに使用できます。

たとえば、週次レポートを生成する場合は、「n」の値に7を設定します。これにより、過去7日間のレポートが生成されます。

-AutoName

出力レポート名を自動生成する場合に指定します。自動生成されるファイル名は、レポート名と実行日時を組み合わせることにより作成されます。

-Alert

レポート完了時にアラートメッセージが送信されます。アラートメッセージは、Alert マネージャで "Arcserve" 環境設定の下に設定する必要があります。

-VaultCycle

ボールド レポートでを使用して、レポートの生成前にボールド サイクルが自動実行されるようにします。

重要: このスイッチを使用する場合は、このレポートが生成される日のレポート前後に、ボールド サイクルを手動で実行しないでください。

詳細情報:

[caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド](#)

[caadvreports - レポート](#)

[caadvreports - 例](#)

caadvreports - 例

caadvreports コマンドの構文例は以下のとおりです。

- 以下のコマンドを使用して、最近 7 日間の「ドライブスループット」レポート(レポート タイプ 4) を生成し、自動生成したファイル名のファイルに結果を格納します。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 4 -pastdays 7 -autoname
```

- 以下のコマンドを使用して、1/1/2007 から 3/30/2007 までに実行された全ジョブの「フルバックアップ期間」レポート(レポート タイプ 9) を生成し、「full_backup_report.xml」という名前のファイルに送ります。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 9 -startdate 01/01/2007 -enddate 03/30/2007 -  
outfile full_backup_report.xml
```

- 以下のコマンドを使用して、1/1/2007 から 3/30/2007 までに実行された全ジョブの「フルバックアップ期間」レポート(レポート タイプ 9) を生成し、「full_backup_report.csv」という名前の CSV ファイルに送ります。ジョブ詳細に「ACCT」を含むジョブのみに出力を制限します。

```
CAAdvReports.exe -reporttype 9 -startdate 01/01/2007 -enddate 03/30/2007 -  
outfile full_backup_report.csv -CSV -JobDesc 'ACCT'
```

詳細情報:

[caadvreports - 詳細レポート ジェネレータ コマンド](#)

第21章: pfc - プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド

プレフライト チェックリスト ユーティリティ コマンド (pfc) により、Arcserve Backup サーバおよびエージェントに対してバイタルチェックを実行して、バックアップ ジョブの失敗の原因となる可能性のある条件を検出できます。このコマンドは、Arcserve Backup の稼働中に実行することを想定されています。

pfc によって実行されるチェックは、以下のように、システム チェック、Arcserve チェック、エージェント チェック、メディア チェックの 4 つのカテゴリに分類されます。

システム チェック

サーバのシステム要件、データベースの空きディスク容量、および RPC(Remote Procedure Calls) サービス登録のチェックが含まれます。

Arcserve チェック

Arcserve システム アカウントと権限、Arcserve Backup エンジンのステータス、SAN サーバとの接続状況 (SAN Option がインストールされている場合)、およびサーバに接続されているテープ デバイスの状態などがチェックされます。

エージェント チェック

ジョブに必要なすべてのクライアントおよびデータベース エージェントに関する、接続とクレデンシャルのチェックが含まれます。

メディア チェック

再利用セット内のメディアの使用可能性 (ジョブにメディアプールが指定されている場合)、メディアの有効期限、ファイルシステム デバイスでのソースとデスティネーションの競合のチェックが含まれます。

pfc ユーティリティを使用するたびに、以下のログが作成されます。

PFC_SERVERNAME_#####.LOG

このログには、pfc の実行時にコマンド プロンプト ウィンドウに出力された情報と同じ情報が書き込まれ、Arcserve Backup ログ ディレクトリ(ARCserve Home Directory/logs/pfclogs) に配置されます。このディレクトリは、-logpath オプションを使用して変更できます。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

pfc - 構文	364
pfc - 使用法	365
pfc - プレフライト チェック	366
pfc - 例	370

pfc - 構文

pfc コマンド ライン構文 のフォーマット は以下 のとおりです。

pfc [-cahost <hostname>] [options] [filename(s)]

詳細情報:

[コマンド ライン構文 の文字](#)

pfc - 使用法

pfc コマンドでは、以下 のチェックを設定 できます。

- システム チェック
- Arcserve チェック
- エージェント チェック
- メディア チェック

詳細情報:

[pfc - プレフライト チェック](#)

[pfc - 例](#)

pfc - プレフライト チェック

pfc システムのプレフライト チェックには、サーバのシステム要件の確認、Arcserve Backup システム アカウントの確認、ジョブに必要とされるクライアントおよびデータベースエージェントの確認、再利用セット内のメディアの可用性の確認(該当する場合)が含まれます。

pfc コマンドには、以下のオプションが含まれます。

pfc [-cahost <hostname>] [options] [filename(s)]

- allchecks
- syschecks
- bchecks
- agentchecks
- mediachecks
- a
- n
- s
- v
- logpath <path>
- alert

-cahost <hostname>

処理をホストするシステムの名前を識別します。

処理をリモートシステムで実行する場合は、コマンドにこのスイッチを含める必要があります。

この処理をローカルシステムで実行する場合は、このスイッチは必要なく、コマンドに含める必要はありません。

注: [-cahost <hostname>] スwitchはオプションです。このコマンドをローカルホスト上で使用する場合、このスイッチは必要ありません。ただし、リモートで実行する場合は、hostname を指定する必要があります。-cahost スwitchで指定されたホストは、メンバサーバまたはプライマリサーバとなります。ただし、Arcserve Backup は常にプライマリサーバのジョブキューにジョブを追加し、その後、プライマリサーバが、ジョブが処理される際にこのスイッチに従ってジョブを適切なサーバ(プライマリ/メンバ)へ送信します。

注: 「Arcserve Manager (コンソール)」モードを使用して Arcserve Backup をインストールした場合、ローカルマシンから -cahost スwitchを含めてこのコマンドを実行する必要があります。このコンソールインストールモードでは実際にすべての Arcserve Backup 機能をローカルマシンにインストールしないため、Arcserve Backup を含むプライマリまたはメンバサーバにこのコマンドをリモートで

サブミットする場合には -cahost を含める必要があります。そうしないと、コマンドは失敗します。

filename

特定のジョブについてチェックを実行する場合は、ジョブ スクリプトのファイル名を指定します。たとえば、00000005.job とします。これらのファイルは、Arcserve Backupのインストールディレクトリ直下の00000001.qsdディレクトリに保管されています。

-allchecks

システム チェック、Arcserve チェック、エージェント チェック、およびメディア チェックなど、Arcserve Backup パラメータの全チェックが実行されます。これらのチェックは、ジョブ キュー内のすべての準備完了ジョブに対して非対話モードで実行されます。このスイッチを使用する場合、ファイル名を指定することはできません。

-syschecks

ディスク容量、RPC (リモート プロシージャコール) 通信、システムのリソースなど、システム関連のチェックを実行します。

-bchecks

プロセスおよびリソース関連のチェックを実行します。これには、Arcserve Backup デーモンのステータス、データベース チェック、テープ チェンジャ チェックなどが含まれます。

-agentchecks <filenames>

指定されたバックアップ ジョブで必要とされるエージェント リソースのチェックを実行します。これを使用する場合は、1 つまたは複数のジョブ スクリプト ファイル名を指定する必要があります。ジョブ スクリプト ファイルは、Arcserve Backup のインストールディレクトリの下にある 00000001.qsd ディレクトリに保存されています。

このコマンドでは、\$ARCSERVE_HOME\00000001.qsd ディレクトリ下のジョブ ファイルを最終パラメータとして指定する必要があります。

たとえば、ジョブ番号が3のジョブに対してエージェント チェックを実行する場合、ジョブ ファイル "00000003.job" が \$ARCSERVE_HOME\00000001.qsd ディレクトリに存在する必要があり、このチェックの pfc コマンドは以下ようになります。

```
pfc -agentchecks 00000003.job
```

注: また、このオプションと -a スイッチを組み合わせで使用し、キューに含まれるすべてのジョブに対して、エージェント チェックを実行することもできます。

注：マスタ サーバの認証情報は、PFC (Preflight Checklist、プレフライト チェックリスト) ユーティリティでは確認できません。

-mediachecks <filenames>

メディアチェックを実行します。これを使用する場合は、1 つまたは複数のジョブスクリプト ファイル名を指定する必要があります。ジョブスクリプト ファイルは、Arcserve Backup のインストール ディレクトリの下にある 00000001.qsd ディレクトリに保存されています。たとえば、pfc -mediachecks job105 と指定します。

このコマンドでは、\$ARCSERVE_HOME\00000001.qsd ディレクトリ下のジョブ ファイルを最終パラメータとして指定する必要があります。

たとえば、ジョブ番号が 3 のジョブに対してメディアチェックを実行するには、"00000003.job" ジョブ ファイルが \$ARCSERVE_HOME\00000001.qsd ディレクトリに存在する必要があり、このチェックの pfc コマンドは以下ようになります。

```
pfc -mediachecks 00000003.job
```

注：また、このオプションと -a スイッチを組み合わせ使用し、キューに含まれるすべてのジョブに対して、メディアチェックを実行することもできます。

-a

ジョブ キュー内の準備完了ジョブをすべて指定します。このスイッチを使用する場合、ファイル名を指定することはできません。

-n

非対話モードで実行します。これを使用する場合、入力を要求するプロンプトの実行中に pfc が停止しません。

-s

実行されていないArcserve Backupエンジンすべての起動を試行します。-bchecks オプションも使用する必要があります。そうしないと -s の効果はありません。

-v

詳細 (verbose) モードで実行します。このオプションを使用する場合、pfc は、コマンド プロンプト ウィンドウへの出力および実行されているチェックに関するログに詳細情報を提供します。これには、API コールが失敗した場合に返されるエラーコード、失敗した関数の名前など、デバッグに使用される情報が含まれます。

-logpath <path>

ログファイルのパスを設定します。デフォルトのパスは Arcserve Backup LOG ディレクトリ(ARCServe_HOME/logs/pfclogs) です。-logpath オプションのパスを指定することにより、この場所を変更できます。

-alert

Alert 機能を設定した場合、このコマンドでアラートを送信できます。たとえば、Alert が電子メールを送信し、-alert コマンドを使用するように設定された場合、PFC ログは電子メールの添付ファイルとして送信されます。

Alert の設定の詳細については、「[管理者ガイド](#)」を参照してください。

詳細情報:

[pfc - 例](#)

pfc - 例

pfc コマンドの構文例は以下のとおりです。

- ジョブキュー内のすべての準備完了ジョブに全チェックを非対話モードで実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -allchecks
```

- システムチェックを詳細モードおよび非対話モードで実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -syschecks -v -n
```

- 以下の構文は Arcserve チェックを実行し、稼働していない Arcserve Backup エンジンすべてを起動します。

```
pfc -bchecks -s
```

- キュー内のすべての準備完了ジョブに対してエージェントチェックを実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -agentchecks -a
```

- ジョブ 9 に対してエージェントチェックを実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -agentchecks 00000009.job
```

- ジョブ 8 および 9 に対してメディアチェックを実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -mediachecks 00000008.job 00000009.job
```

- ジョブ 9 に対してメディアチェックを実行し、出力をコンソールに表示し、さらに出力を /tmp ディレクトリ内のファイルにも格納するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -mediachecks -logpath /tmp/ 00000009.job
```

- ホールド状態にあるジョブに対してエージェントチェックを実行するには、以下の構文を使用します。

```
pfc -agentchecks 00000009.job
```

第22章: tapecomp - テープ比較ユーティリティ

テープ比較コマンド (tapecomp) は、メディアを比較することができるコマンド ライン インターフェース ユーティリティです。このユーティリティは、Arcserve Backup で生成されたメディアでのみ使用でき、Arcserve Backup ホーム ディレクトリで使用する必要があります。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

tapecomp - 構文	372
tapecomp - オプション	373
tapecomp - 例	375

tapecomp - 構文

tapecomp コマンド ライン構文 のフォーマットは以下 のとおりです。

tapecomp [options]

-s<SourceGroup>

-d<DestGroup>

-r<Source TapeName>

-t<Dest TapeName>

-n#

-x#

詳細情報:

[tapecomp - テープ比較ユーティリティ](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

tapecomp - オプション

tapecomp ユーティリティは、Arcserve Backup のメディアを比較するためのさまざまなオプションを提供します。

tapecomp ユーティリティには、以下のオプションがあります。

-s <source group name>

テープが存在するソースグループの名前を指定します。

-d <destination group name>

デスティネーショングループの名前を指定します。このスイッチは必ず使用する必要があります。

-r <source tape name>

比較するテープのソーステープの名前を指定します。

-t <dest tape name>

比較するテープのデスティネーションテープの名前を指定します。

-n#

先頭のソースセッション番号を指定します。

デフォルトは1です。

-x#

先頭のターゲットセッション番号を指定します。

デフォルトは1です。

Notes:

- このユーティリティはArcserve Backup認定テープデバイスをすべてサポートしています。ソースとターゲットのテープドライブが、それぞれ異なるモデルであってもかまいません。
- ログファイルはコピー処理のたびに生成されます。
- テープ比較ユーティリティでは、特定のセッションから最後のセッションまで、またはメディアセット全体を比較できます。
- ソースとターゲットでは複数のメディアを使用できます。このユーティリティの使用中に最後のメディアに達すると、次のシーケンスメディアを指定するように求めるメッセージが表示されます。
- ユーティリティの進行状況はArcserve Backupデバイス管理マネージャでモニタできます。

- テープ比較ユーティリティは、マルチプレキシングまたは暗号化を使用して作成されたテープの比較をサポートしません。
- テープ比較ユーティリティは、同じグループ内で同じ名前を持つ2つのテープの比較をサポートしません。

詳細情報:

[tapecomp - テープ比較ユーティリティ](#)

[tapecomp - 例](#)

tapecomp - 例

tapecomp コマンドの構文例は以下のとおりです。

- ソースの GROUP0 に属する Tape1 の全セッションを、デスティネーショングループ 1 に属する Tape2 と比較するには、以下のコマンドを使用します。

```
tapecomp -sGROUP0 -rTAPE1 -dGROUP1 -tTAPE2
```

- ソースの GROUP0 に属する TAPE1 TEST のセッション 3 の全セッションを、デスティネーショングループ 1 に属するターゲット TAPE2 TEST のセッション 4 の全セッションと比較するには、以下のコマンドを使用します。

```
tapecomp -sGROUP0 -r"TAPE1 TEST" -n3 -dGROUP1 -t"TAPE2 TEST" -x4
```

詳細情報:

[tapecomp - テープ比較ユーティリティ](#)

第23章: tapecopy - テープコピー ツールコマンド

テープコピーコマンド (tapecopy) は、テープコピー ツールユーティリティで使用するコマンド ライン インターフェースです。メディア間で素早くデータをコピーできます。これらのメディアは同様の種類である必要はありません。テープ全体またはセッション全体をコピーできます。コピーするソースを指定するか、Arcserve Backup データベースに格納されているセッションに対して検索条件を指定して、この処理を実行できます。

tapecopy によりテープコピー機能が実行されると、処理のステータスを示す終了リターンコードが生成されます。

注 -

:

t-

a-

p-

e-

c-

o-

p-

y

を
使用
して-

、

デ-
ー
タ
を

V-

M-

:-

T-

a-

p-

e

メ
デ
ィ
ア
へ
コ
ピ
ー
す
る
こ
と
は
で
き
ま
せ
ん
。

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

tapecopy - 構文	379
tapecopy - 使用法	380
tapecopy - データベース照会オプション	381
tapecopy - デスティネーション引数	385
tapecopy - ソース引数	390
tapecopy - 例	393

tapecopy - 構文

tapecopy コマンド ライン構文 のフォーマット は以下 のとおりです。

テープ コピー ジョブ(ユーザ指 定 ソース)

```
<Base Install Path>/tapecopy -s[source group] -d[destination group] -t[source tape  
name] {[source options] [destination options]}
```

テープ統 合 ジョブ(データベース指 定 ソース)

```
<Base Install Path>/tapecopy -d[destination group] [query options]{-c[destination tape  
name] [destination options]}
```

詳細情報:

[tapecopy - テープ コピー ツール コマンド](#)

[コマンド ライン構文 の文字](#)

tapecopy - 使用法

tapecopy コマンドには、以下のオプションおよび引数を設定できます。

- データベース照会オプション
- ソース引数
- デスティネーション引数

詳細情報:

[tapecopy - テープコピーツールコマンド](#)

[tapecopy - データベース照会オプション](#)

[tapecopy - ソース引数](#)

[tapecopy - デスティネーション引数](#)

tapecopy - データベース照会オプション

データベース照会オプションを使用すると、特定の属性に基づいてソースセッションを選択できます。データベースオプションを指定すると、データベースへの照会が行われ、検索基準と一致するすべてのセッションが tapecopy のソースセッションとなります。以下のスイッチを1つ以上指定して、複雑な照会条件を指定できます。

デフォルトでは、照会により検索された全セッションが、デスティネーショングループ内の1本のテープにコピーされます。tapecopy コマンドは、デスティネーショングループでブランクテープを検出し、これをフォーマットして、mm/dd/yyyy-hh:mm の形式でテープに名前を付けます。

tapecopy コマンドには以下の照会オプションがあります。

tapecopy

```
[ -qType <Backup Session Type>]
[ -qMethod <Backup Session Method>]
[ -qNode <Backup Session Node>]
[ -qOnOrBefore <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]]
[ -qOnOrAfter <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]]
[ -qMID <Master Job Number>]
[ -qJobNo <Job No Query>]
[ -qMediaPool <Media Pool Name>]
[ -qPreview (View Query Details)]
[ -qIgnoreRep (Ignore Replication Flag)]
[ -qExclude <Exclude List File Name>]
[ -qPastTime <Number of Days>]
[ -qCA_RHAType <Type of CA RHA Session>] ( -qType CA_RHA と組み合わせてのみ使用)
```

-qType <Backup Session Type>

選択されたタイプのセッションのみをコピーに含めるよう Arcserve Backup データベースを照会します。

セッションの種類をカンマで区切って指定することにより、複数のセッションの種類を同時に照会できます。

例：

```
tapecopy -d PGROUP0 -qType SQL,WindowsNT
```

以下のセッションタイプを使用できます。

MSNetDrive、UNIX、BABDatabase、OracleLog、DBAGENT、SYBASE、LotusNotes、Informix、TAR、CPIO、UNIXImage、WindowsNT(WinNT/2000/XP を含む)、Windows98(Win95/98/ME を含む)、NTSAP、UNIXSAP、ORACLE、

ORACLE8、ORACLE9I、NTOracle、UNIXRAW、UNIXSYBASE、
UNIXORACLERMAN。WINORACLERMAN、DRTAR、CA_RHA、DBAEXDB、
DBAEXDBVSS、DBAEXSIS、SQL、ASDBSQL、SQLDR、ASDBSQL、SPA2007、およ
び REFS。

-qMethod <Backup Session Method>

指定したバックアップ方式によってバックアップされたセッションのみを含めるよう
Arcserve Backup データベースを照会します。

以下のセッション方式を使用できます。

FULL、DIFF、INCR

(FULL = フルバックアップ、DIFF = 差分バックアップ、INCR = 増分バックアップ)

-qNode <Backup Session Node>

指定したノードからのセッション バックアップのみを含めるよう Arcserve Backup
データベースを照会します。

-qOnOrBefore <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]

指定した日時以前にバックアップされたセッションを含めるよう Arcserve Backup
データベースを照会します。時刻の指定はオプションです。日付と時刻は、ス
ペースで区切る必要があります。

-qOnOrAfter <MM/DD/YYYY> [<hh:mm>]

指定した日時以降にバックアップされたセッションを含めるよう Arcserve Backup
データベースを照会します。時刻の指定はオプションです。日付と時刻は、ス
ペースで区切る必要があります。

-qMID <Master Job Number>

Master Job Number に従属するすべてのセッションを含めるよう Arcserve
Backup データベースを照会します。

このオプションは、マルチ ストリーミング セッションを統合 する際に使用します。
このオプションは、マルチ ストリーミング ジョブのマスタ ジョブ番号に従属するす
べてのセッションについて Arcserve Backup データベースを照会します。マスタ
ジョブ番号は、親 マルチ ストリーミング ジョブのジョブ番号を表します。

-qJobNo <Job No Query>

指定したジョブ番号に従属するすべてのセッションを含めるよう Arcserve
Backup データベースを照会します。このオプションでは、指定したジョブ番号に
属するセッションが検索されて、デスティネーション メディアにコピーされます。
ローテーション ジョブの場合、このコマンドは、指定したジョブ番号の各ジョブ
ID に関連する全セッションをデータベースに照会して、すべてのセッションをデス
ティネーション メディアにコピーします。

このスイッチを他の照会スイッチと一緒に使用して、コピーするセッションをさらに限定することもできます。

-qMediaPool <Media Pool Name>

指定したメディアプールに属するテープを含めるよう Arcserve Backup データベースを照会します。* および ? のようなワイルドカード文字を使用して検索を実行できます。

-qPreview (View Query Details)

tapecopy が、照会条件を満たすセッションのリストのみを表示するよう、tapecopy をプレビューモードに切り替えます。実際のテープコピー操作は実行されません。

このオプションを使用すると、クエリ結果セットをより詳細に表示できます。コピールーチンを実行したくない場合に、このオプションとデータベースクエリオプションを組み合わせて使用します。これにより、照会の詳細な結果セットが表示されます。

-qIgnoreRep (Ignore Replication Flag)

レプリケーションフラグを無視して、tapecopy コマンドによってすでにコピーされているセッションを含めます。レプリケーションフラグを無視すると、tapecopy コマンドは、すでにコピーされているセッションを無視します。

-qExclude <Exclude List File Name>

ファイルに格納されたリストで指定されたファイルホスト名を除外するよう Arcserve Backup データベースを照会します。このファイルは、Arcserve Backup ホームディレクトリの環境設定ディレクトリにあります。

-qPastTime <Number of Days>

指定した日数以内にバックアップされたセッションを含めるよう Arcserve Backup データベースを照会します。tapecopy 操作の実行時を基点として、24 時間間隔で日数がカウントされます。各月の日数の違いも考慮されます。

qOnOrBefore または -qOnOrAfter オプションと併用することはできません。

-qCA_RHAType <CA RHA セッションのタイプ>

注: -qType CA_RHA と組み合わせてのみ使用できます。

Arcserve Backup データベースを照会して、指定した CA_RHA タイプのセッションのみをコピーに含めます。利用できる CA_RHA セッションは、FileSystem、MSSQL、および Exchange です。

照会する CA_RHA セッションのタイプを指定しなかった場合は、デフォルトですべての CA_RHA セッションが含まれます。

詳細情報:

[tapecopy - テープ コピー ツール コマンド](#)

[tapecopy - 例](#)

tapecopy - デスティネーション引数

tapecopy コマンドのデスティネーション引数では、選択したメディアのコピー先を指定できます。コピーするメディアを選択してから、tapecopy ジョブのデスティネーションおよびデスティネーション オプションを選択できます。

注：ソースまたはターゲットがデデュプリケーション デバイスの場合、tapecopy は、ソース テープとまったく同じターゲット テープを作成できません。まったく同じであるとは、ソース テープとターゲット テープに対して、テープ名、シーケンス番号、およびランダム ID の3つの項目が同じであることを意味します。このような事態を避けるために、-c または -idr スイッチを使用して、デスティネーション デデュプリケーション デバイスをソース テープと異なるテープにする必要があります。

tapecopy コマンド ライン ユーティリティは、以下のデスティネーション引数をサポートします。

tapecopy

```
[-rd <remote server name>]
[-zd <destination sequence no.>]
[-d <destination group name>]
[-c <destination tape name>]
[-v <vault name>]
[-k ( 未完了コピーの強制ボールド )]
[-m <Assign Media Pool Name>]
[-max <# of days>]
[-idd <Destination Random ID>]
[-idr ( ランダム ID の自動生成 )]
[-o ( 上書き )]
[-off ( オフライン )]
[-ex ( エクスポート )]
[-wd <Wait On Destination Tape in Minutes>]
[-g]
[-forceMerge ( 詳細 マージ オン )]
[-jid <Job ID>]
[-wormDst]
[-fDstMux]
[-eject <Eject Media>]
[-dIgnoreFSDGroup]
[-dpp <weeks:days:hours:minutes>]
[-mdt <Media Pool Name>]
```

-rd <remote server name>

コピー先 リモート デスティネーション サーバの名前を指定します。このオプションは、リモート ホスト ヘデータを送信するときに使用します。

-rd スイッチを使用する場合、以下の制限事項が適用されます。

- デスティネーションがリモートのデデュプリケーション デバイスまたは FSD の場合は、-rd スイッチは使用できません。
- -rd スイッチは Arcserve Backup サーバ間でのみ使用します。

-zd <destination sequence no.>

コピー先 デスティネーション シーケンス番号を指定します。このオプションを使用すると、-c オプションを使用する際にシーケンス番号を区別することができます。

-d <destination group name>

コピー先のグループ名を指定します。このオプションを省略すると、任意の使用可能なグループが使用されます。-d スイッチを省略すると、テープコピー操作で利用できる最善のデスティネーション グループが、テープコピー プログラムによって決定されます。

-c <destination tape name>

コピー先のターゲット テープ名を指定します。このオプションは、ブランクテープのフォーマット名を指定するときに使用します。ターゲット テープが、指定したテープ キーの一部 (一意の名前を持つターゲット テープ) である場合は、このオプションを使用して、検索して追加または上書きするテープの名前を指定します。

-v <vault name>

新たに作成されるテープの追加先 ボールト 名を指定します。コマンド ラインから、ボールトするテープを指定できるようにメディア管理機能を設定しておく必要があります。

-k (未完了コピーの強制ボールト)

-v オプションと組み合わせてのみ使用します。このオプションを使用すると、デスティネーション テープは未完了の tapecopy でもボールト済みとしてマークされます。

-m <Assign Media Pool Name>

メディア プールへのテープ割り当てオプション。このオプションは、新たに連結したテープをメディア プールに割り当てるときに使用します。

このスイッチは、スケジューリングされたアンアテンド tapecopy ジョブの自動化に役立ちます。このオプションを使用すると、tapecopyジョブにより、指定したメディア プールから、追加先ターゲット 保存セット テープが検索されます。保存セット テープが存在しない場合は再利用テープが検索され、ターゲットテープとしてフォーマットして使用されます。保存または再利用テープが存在しない

場合は、ブランクテープに接続し、ターゲットテープとしてフォーマットを試行します。

-max <# of days>

このオプションを -m オプションと一緒に使用して、指定したメディアプール内のターゲット保存セットテープに追加できる最大日数を指定します。

前回フォーマット時刻から現在までの日数が、指定した最大日数を超える場合、tapecopy は、このメディアをデスティネーションメディアとして使用しません。

エンドユーザがこのオプションを指定しなかった場合の最大日数のデフォルトは、2000 日です。

-idd <Destination Random ID>

デスティネーションテープのランダムIDを指定します。

-idr (ランダムIDの自動生成)

デスティネーションランダムIDオプション。このオプションは、自動生成されるランダムIDを使用してテープをコピーするときに使用します。

-o (上書き)

上書きオプション。このオプションは、ターゲットテープキー(テープ名、ランダムID、およびシーケンス番号)を指定するときに使用します。このオプションを使用する場合は、-c、-zd、および -idd も使用する必要があります。

-off (オフライン)

オフラインオプション。コピー操作の終わりにターゲットテープをオフラインにします。このスイッチは、チェンジャの場合にのみ有効です。

-ex (エクスポート)

コピー操作の終わりにターゲットテープをエクスポートします。このスイッチは、チェンジャの場合にのみ有効です。

-wd <Wait On Destination Tape in Minutes>

デスティネーションテープに接続する場合のタイムアウト時間を、分単位で指定します。

デフォルト値: 60 分

最大値: 71582 分

-g

呼び出した場合に、tapecopy 操作の完了後、tapecopy コマンドがテープをデータベースに自動マージしないことが、通知されます。その代わりに、tapecopy コマンドは、tapecopy 操作の間に、コピーしたセッションをデータベース内のソー

セッションにリンクします。それでも tapecopy の後でセッションをマージする必要がある場合は、-forceMerge スイッチを使用します。

セッションをリンクするのみの場合は、このスイッチをコマンドラインに含める必要はありません。スイッチを指定しなくても、tapecopy によりセッションがリンクされます。

-forceMerge

tapecopy 操作の完了後に、tapecopy コマンドにマージプロセスを実行させる場合に指定します。tapecopy コマンドでは、tapecopy 操作の間に、コピーしたセッションをデータベース内のソースセッションに自動リンクするため、通常は、このスイッチを使用する必要はありません。ただし、情報がパーージされたことや、ソーステープが他の場所に移動されたことなど、何らかの原因でソースセッションがデータベースに存在しない場合は、このリンクが作成されません。これらの場合にこのスイッチを使用すると、コピーされたセッションとソースセッションを強制的にマージできます。

-jid <Job ID>

ジョブ ID を指定します。

Tapecopy は、このパラメータで指定したジョブに属するアクティビティログにアクティビティログ情報を書き込みます。

- このパラメータを使用していて、ジョブ ID が存在する場合、すべての tapecopy アクティビティログ情報は指定したジョブのアクティビティログに含まれます。
- このパラメータを使用していて、ジョブ ID が存在しない場合、すべての tapecopy アクティビティログ情報は無視されます。
- このパラメータを使用しない場合、すべての tapecopy アクティビティログ情報は一般的なログに含まれます。

-wormDst

WORM 対応メディアのみが選択されるデスティネーションメディアに含まれるように、デスティネーションメディアをフィルタします。このオプションを使うと、WORM メディアを確実にコピーできます。

-fDstMux

ソースセッションをマルチプレキシング (MUX) 形式でデスティネーションメディアにコピーする場合に使用します。デスティネーションメディアがブランクの場合は、マルチプレキシングメディアとしてフォーマットされます。

注:

- マルチプレキシング セッションを非 マルチプレキシング形式のメディアに追加することはできません。
- tapecopy は、暗号化されたデータの MUX から MUX へのコピーはサポートしません。

-eject <Eject Media>

イジェクト オプションです。ターゲット メディアのイジェクトに使用します。

-dIgnoreFSDGroup

FSD グループをターゲット グループとして使用することを無視するか許可しない場合に指定します。

-dpp <weeks:days:hours:minutes>

デスティネーション セッションのパージ ポリシー時刻を指定します。

Arcserve Backup は、指定したパージ ポリシー時刻を経過した後にデスティネーション セッションをパージします。このオプションは、デスティネーション テープがデデュプリケーション デバイスである場合にのみ使用できます。

このオプションは、4 つの時刻フィールド、週、日、時間、および分に分かれており、不要なフィールドには 0 を設定する必要があります。デフォルトでは、パージ ポリシー時刻は 4 週間に設定されています。

- このオプションを設定して、デスティネーションがデデュプリケーション デバイスでない場合、tapecopy は、このオプションはデデュプリケーション ターゲットの場合のみ使用でき、指定したパージは無視されることを通知するプロンプトを表示します。
- このオプションを設定して、デスティネーションがデデュプリケーション テープの場合、tapecopy は、ターゲット セッションが、XX 週、XX 日、XX 時間、XX 分後にパージされることを通知するプロンプトを表示します。
- このオプションを設定せず、デスティネーションがデデュプリケーション デバイスである場合、tapecopy は、デフォルトの 4 週間のパージ ポリシーが使用されることを通知するプロンプトを表示します。

[-mdt <Media Pool Name>]

デスティネーション テープのメディア プール名を指定します。

詳細情報:

[tapecopy - テープコピー ツールコマンド](#)

[tapecopy - 例](#)

tapecopy - ソース引数

tapecopy コマンドのソース引数を使用して、コピーするデータを指定できます。これらの引数を使用して、テープコピー操作に使用するグループ、テープ、およびセッションを特定できます。

tapecopy コマンドには、以下のソース引数があります。

tapecopy

`[-n <beginning session number to be copied>]`
`[-ntotal <number of sessions>]`
`[-rs <Remote Server Name>]`
`[-entire_s (copy all non-blank in group)]`
`[-t <source tape name>]`
`[-zs <source sequence no.>]`
`[-s <source group name>]`
`[-ids <source random ID>]`
`[-ws <wait on source in minutes>]`
`[-wormSrc]`
`[-srcPassList [< source password list file name>]]`
`[-purgeSourceSessionsNow]`

-n <beginning session number to be copied>

ソーステープにあるコピー元の開始セッション番号を指定しますこのオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-ntotal <number of sessions>

このオプションは -n オプションとともに使用します。最初に -n 値を入力してから、コピー対象のセッションの総数を指定できます。このオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-rs <Remote Server Name>

リモートソースサーバ名。このオプションは、リモートホストからデータを受信するときに使用します。

-entire_s (copy all non-blank in group)

グループコピーオプション。このオプションは、あるグループにあるすべてのテープを別のグループにコピーするときに使用します。このスイッチはチェンジャ内でのみ有効です。

-t <source tape name>

ソーステープの名前です。これを使用して、コピーするテープの名前を指定できます。照会スイッチと共に使用することはできません。

-zs <source sequence no.>

ソースシーケンス番号。このオプションは、-t オプションを使用する際にシーケンス番号を区別するために使用します。このオプションは、照会スイッチと併用することはできません。

-s <source group name>

ソースグループ名。このオプションは、テープの場所を表すソースグループ名を指定するときに使用します。このオプションは照会スイッチと併用することはできません。

-ids <source random ID>

ソースランダムID オプション。このオプションは、特定のランダムIDを使用してテープをコピーするときに使用します。

-ws <wait on source in minutes>

セッション使用のタイムアウト制限を指定します。セッションは、通常は現在使用中のテープ上のセッションです。

デフォルト値: 60 分

最大値: 71582 分

-srcPassList [<source password list file name>]

暗号化されたソースセッション(サーバ側の暗号化セッションのみ)を復号化するためのパスワードリストを取得するように指定します。

パスワードリストを初期化するには、自動モードと対話モードの2つのモードがあります。

自動モードでは、「-srcPassList < passwords.txt >」などのコマンドを使用して、パスワードリストファイルを提供できます。

このモードでは、指定されたパスワードリストファイルで必要なすべてのセッションパスワードが検索され、それ以上のユーザ入力なしで、コピープロセスが続行されます。パスワードリストファイルを指定しない場合は、対話モードでパスワードを提供するように求められます。

例:

```
ソースパスワードを入力してください [入力したら Enter を押します]: ****
ソースパスワードを入力してください [入力したら Enter を押します]: ****
ソースパスワードを入力してください [入力したら Enter を押します]: <enter>
ソースのパスワードを2個受け取りました。
```

それぞれのパスワードは、パスワードリストファイルで別々の行に記載する必要があります。

このオプションを指定すると、tapecopy は、入力されたソースパスワードに一致する、暗号化されたセッションパスワードを検索しようとします。一致するパス

ワードが見つからない場合は、Arcserve Backup データベースに格納されているセッションパスワードを照会します。それでもまだセッションパスワードが見つからない場合、この暗号化セッションはコピープロセスをスキップされます。さらに、エージェント側の暗号化は、tapecopy の暗号化セッションとして処理されません。そのため、このタイプのセッションは通常セッションとして処理され、tapecopy はパスワードチェックを実行しません。

コピーされるセッションのすべてのパスワードが Arcserve Backup データベースに保存されている場合、このオプションを指定する必要はありません。その後、すべてのセッションパスワードはパスワード管理ユーティリティを使用して、Arcserve Backup データベースで照会されます。ただし、コピーされるセッションのパスワードで Arcserve Backup データベースに保存されていないものがある場合は、このオプションを指定してセッションパスワードを入力する必要があります。

注: tapecopy では一度に 8 個までのパスワードを受け取ることができます。各パスワードは最大 24 文字です。

-purgeSourceSessionsNow

ソースデバイス上のコピーされたセッションを即座にパージして、デバイス上のディスク容量を解放します。このスイッチでは、ソースグループ名およびソーステープ名を指定する必要があります。ソーステープは、データデデュプリケーションデバイスまたはステージングデバイスである必要があります。このスイッチは、データベースクエリオプションと共に使用できます。

詳細情報:

[tapecopy - テープコピーツールコマンド](#)

[tapecopy - 例](#)

tapecopy - 例

tapecopy コマンドの構文例は以下のとおりです。

注: 各 tapecopy コマンドでは、スイッチとスイッチに続く構文の間に空白を1つ入れる必要があります。

- 以下のコマンドを使用して、AL2000 という名前のノードから、2006 年 9 月 25 日正午より前の全セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode AL2000 -qOnOrBefore (9/25/2006,12:00)
```

- 以下のコマンドを使用して、2006 年 9 月 25 日正午以後の全増分セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qMethod INCR -qOnOrAfter (9/25/2006,12:00)
```

- 以下のコマンドを使用して、指定のマスタジョブ ID からすべてのマルチストリーミングセッションを、「Everything」というテープに追加します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qMID 232 -c Everything -idd F56 -zd 1
```

- 以下のコマンドを使用して、除外リストに含まれていないすべてのホストからすべてのセッションをコピーします。そして、ソースメディアへの接続タイムアウトを10分間に設定し、ターゲットメディアへの接続タイムアウトを2時間に設定します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode * -qExclude AcctExcludes.txt -ws 10 -wd 120
```

- 以下のコマンドを使用して、AL2000 という名前のノードから、過去 24 時間に行われた全セッションをコピーし、「MyPool」というメディアプールに追加します。

注: -m スイッチにより、tapecopy ジョブは、指定されたメディアプール内のターゲット保存、再利用、またはブランクテープを検索します。保存セットテープが存在しない場合、Arcserve Backup は、再利用/ブランクテープを検索し、ターゲットテープとしてフォーマットして使用します。

```
tapecopy -d GROUP1 -qNode AL2000 -qPastTime 1 -m "MyPool"
```

- 以下のコマンドを使用して、このジョブ番号の2006年9月25日の正午から2006年9月26日までの全セッションをコピーします。

```
tapecopy -d GROUP1 -qOnOrAfter (9/25/2006,12:00) -qOnOrBefore "(9/26/2006,12:00)" -qJobNo 21x
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープ名「TAPE 1」からターゲット名「TAPE 2」にすべてのセッションを追加します。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t "TAPE 1" -c "TAPE 2" -idd C86 -zd 1
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープ名「TAPE 1」からすべてのセッションをコピーし、ブランクのターゲットテープを「TAPE 2」という名前 でフォーマットします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t "TAPE 1" -c "TAPE 2"
```

- 以下のコマンドを使用して、ローカルソーステープからリモート ブランク テープにコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -rd SERVERNAME
```

- 以下のコマンドを使用して、リモート ソース テープからローカル ブランク テープにコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -rs SERVERNAME
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッションをすべてコピーし、ターゲットテープをエクスポートします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -ex
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッションをすべてコピーし、ターゲットテープをオフラインにします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -off
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッション 3 から始まるセッションをすべてコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -n 3
```

- 以下のコマンドを使用して、ソースグループにあるブランクテープ以外のテープをすべてコピーして、ターゲットテープをエクスポートします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -entire_s -ex
```

- 以下のコマンドを使用して、ソーステープのセッション 6 から始まる、セッション 6 以降の 3 セッションをコピーします。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -n 6 -ntotal 3
```

- 以下のコマンドを使用して、サーバ側でセッションが暗号化済みである場合に、ソーステープからデスティネーションテープにコピーします(対話モード)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -srcPassList
```

- 以下のコマンドを使用して、サーバ側でセッションが暗号化済みである場合に、ソーステープからデスティネーションテープにコピーします(自動モード)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -srcPassList < passwords.txt
```

- 以下のコマンドを使用して、過去 1 日の間に作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内のブランクテープにコピーします。コピーの間に、ソースセッションとデスティネーションセッションがリンクされます。

```
tapecopy -q PastTime 1 -d pgroup0 -g
```

- 以下のコマンドを使用して、過去 1 日の間に作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内のブランクテープにコピーします。このコマンドは、コピー操作の完了後に、コピーした全セッションをターゲット テープからデータベースにマージするマージ ジョブをサブミットします。

```
tapecopy -q PastTime 1 -d pgroup0 -forceMerge
```

- 以下のコマンドを使用して、ジョブ番号 100 (-qJobNo 100) によって作成された全セッションを、グループ PGROUP0 内 (-d pgroup0) のブランクテープにコピーします。

```
tapecopy -qJobNo 100 -d pgroup0
```

- 以下のコマンドを使用して、ジョブ番号 100 (-qJobNo 100) により過去 1 日 (-qPastTime 1) に作成された全セッションを、グループ PRGROUP0 内 (-d pgroup0) のブランクテープにコピーします。

```
tapecopy -qJobNo 100 -qPastTime 1 -d pgroup0
```

- 以下のコマンドを使用して、1 分のパージ ポリシーをデデュプリケーション デバイスのターゲット セッションに設定します(-c スイッチを使用してターゲット テープ名を指定する必要があります)。

```
tapecopy -s GROUP0 -d GROUP1 -t TAPE1 -c TAPE2 -dpp 0:0:0:1
```

- 以下のコマンドを使用して、グループ <src_group> 内のソース テープ <src_media> からコピーし、デスティネーション グループ <dest_group> 内のメディア プール <my_pool> の保存セット内の任意のテープに追加します。

```
tapecopy -s <src_group> -t <src_media> -d <dest_grp> -mdt <my_pool>
```

詳細情報:

[tapecopy - テープコピー ツールコマンド](#)

第24章：その他のユーティリティ コマンド

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

ARCserveCfg.exe - サーバ再設定ユーティリティ	398
DumpDB ユーティリティ	408
IsSafe.bat ユーティリティ	412
Mergecat ユーティリティ	413
MergeOLF ユーティリティ	414

ARCserveCfg.exe - サーバ再設定ユーティリティ

サーバ再設定コマンド (ARCserveCfg.exe) は、Arcserve Backup サーバの環境設定の更新を可能にするコマンドラインインターフェースユーティリティです。このユーティリティは、サーバ名の変更または Arcserve Backup システムアカウント認証情報の変更が行われた後もサーバが正しく動作することを保証します。

ARCserveCfg.exe を使用するためには以下の前提条件を満たす必要があります。

1. Arcserve Backup r17.
2. プライマリサーバ/スタンドアロンサーバがインストールされている。
3. SQL Express 2014 を使用して Arcserve Backup データベースをホストしている。
4. Arcserve Backup サーバがクラスタ対応としてインストールされていない。
5. サーバホスト名が変更され、サーバが再起動されている(つまり、新しいホスト名が機能している)。
6. このユーティリティを実行する Windows ユーザ、および -username オプションによって提供された Windows ユーザに、ローカル管理者権限がある。
7. CAROOT アカウントのパスワードが空でない場合、または caroot でない場合、正しいパスワードを提供できる。
8. 以下の2つのパッチファイルが Arcserve Backup サーバインストールディレクトリにコピーされている。
 - a. ARCserveCfg.exe (古いファイルを置換)
 - b. Recfgsvr.dll

ARCserveCfg.exe は以下の環境設定を更新します。

1. Arcserve Backup ドメイン名 .-arcserverdomain が指定された場合、ドメイン名は指定された名前に更新されます。
2. Arcserve Backup Server name. このユーティリティはサーバ名を自動検出するため、指定する必要はありません。
3. Arcserve Backup システムアカウント .Arcserve Backup システムアカウントは、-username コマンドラインオプションによって提供される Windows ユーザに更新されます。この Windows ユーザは CAROOT の同等のものとして追加されます。
4. CAROOT アカウントのパスワードは変更されません。

重要: パスワードがブランクであるか、caroot が CAROOT パスワードとして使用されている場合は、より安全なものに変更してください。

5. Arcserve Backup サーバがデータベースに正しく接続できるように、ODBC システム データ ソース名 (DSN) が更新されます。
6. Arcserve Backup データベースは新しいサーバ/ドメイン名で更新されます。
7. 古い「ASDB 保護」ジョブおよび「データベース廃棄」ジョブは削除され、新しいサーバ名を使用して新規ジョブが作成されます。

詳細情報:

[ARCserveCfg.exe - 構文](#)

[ARCserveCfg.exe - 使用方法](#)

[ARCserveCfg.exe - 例](#)

[ARCserveCfg.exe - トラブルシューティング](#)

[ARCserveCfg - リターン コード](#)

[ARCserveCfg.exe - 既知の問題](#)

ARCserveCfg.exe - 構文

ARCserveCfg.exe コマンド ライン構文は以下の形式になります。

ARCserveCfg.exe

-reconfig

[-arcservedomain <NewARCserveDomainName>]

-username <WindowsUserName>

-password <WindowsUserPassword>

[-carootpassword <CarootPassword>]

詳細情報：

[ARCserveCfg.exe - 使用方法](#)

[ARCserveCfg.exe - 例](#)

[コマンド ライン構文の文字](#)

ARCserveCfg.exe - 使用方法

ARCserveCfg.exe コマンドには、Arcserve Backup サーバの環境設定の更新に必要なアクションを定義するために使用されるオプションが含まれます。

ARCserveCfg.exe コマンドには、以下のオプションが含まれます。

-reconfig

必須フィールドです。このフィールドは、Arcserve Backup サーバの再設定操作を示します。-reconfig のみを指定すると、このユーティリティの使用方法が別のコンソールに表示されます。

[-arcserveDomain <NewARCserveDomainName>]

任意のフィールドです。このフィールドは、新しい Arcserve Backup ドメイン名を指定します。このユーティリティを実行した後、現在のドメイン名は指定された新しい Arcserve Backup ドメイン名に変更されます。このオプションが指定されない場合、ドメイン名は変わりません。

-username <WindowsUserName>

必須フィールドです。このフィールドは Arcserve Backup システム アカウント名です。ユーザ名は Microsoft Windows ドメイン ユーザ アカウントまたはローカル ユーザ アカウントである必要があります、ローカル管理者権限が必要です。このオプションは「ドメイン\ユーザ」の形式で指定されます。ドメインが指定されない場合、現在のサーバ名が Windows ドメイン名として使用されます。

-password <WindowsUserPassword>

必須フィールドです。このフィールドは、Microsoft Windows ユーザ アカウントのパスワードを指定します。

[-carootpassword <CarootPassword>]

任意のフィールドです。このフィールドは、Arcserve Backup caroot アカウントのパスワードを指定します。このフィールドが指定されない場合、空のパスワードまたはパスワード caroot が使用されます。

詳細情報:

[ARCserveCfg.exe - 構文](#)

[ARCserveCfg.exe - 例](#)

ARCserveCfg.exe - 例

ARCserveCfg.exe コマンドの構文例は以下のとおりです。

- Arcserve Backup ドメイン名を更新するには以下のコマンドを使用します。

```
ARCserveCfg.exe -reconfig -arcserveDomain <NewARCserveDomainName> -  
username <WindowsUserName> -password <WindowsUserPassword> -  
carootpassword <CarootPassword>
```

- プライマリサーバ名を更新するには以下のコマンドを使用します。

```
ARCserveCfg.exe -reconfig -username <WindowsUserName> -password  
<WindowsUserPassword> [-carootpassword <CarootPassword>]
```

詳細情報:

[ARCserveCfg.exe - 構文](#)

[ARCserveCfg.exe - 使用方法](#)

ARCserveCfg.exe - トラブルシューティング

ARCserveCfg.exe が設定を更新するのを妨げるエラーが発生した場合、正の数字がエラーとして返されます。再設定の後に注意を必要とする状態が発生した場合、負の数字が警告として返されます。エラーも警告もない場合、リターンコードは0になります。

リターンコード	説明
0	再設定はエラーまたは警告なしで成功しました。
>0	再設定はエラーで完了しました。リターンコードのリストおよび説明については、「 ARCserveCfg.exe - リターンコード 」を参照してください。
<0	再設定は警告で完了しました。リターンコードのリストおよび説明については、「 ARCserveCfg.exe - リターンコード 」を参照してください。

以下の状態は警告を生成しますが、再設定プロセスは続行します。

1. 「データベース廃棄」ジョブおよび「ASDB 保護」ジョブ以外のジョブが存在する場合。
2. メンバサーバがドメインに追加され、そこにプライマリサーバが属している場合。

サーバの再設定プロセス中は、recfgsvr.log という名前のログファイルにメッセージが出力されます。このログは ARCserve_HOME\Log ディレクトリの下にあります。パスは通常以下になります。

C:\Program Files\CA\ARCserve Backup\LOG\recfgsvr.log

ARCserveCfg.exe は Windows GUI プログラムであるため、ARCserveCfg.exe をコマンド コンソールから直接起動すると、リターンコードは表示されません。Windows バッチファイルを使用してリターンコードを取得できます。たとえば、以下の内容を含むバッチファイルを作成できます。

```
Pushd "C:\Program Files\CA\ARCserve Backup"
ARCserveCfg.exe -reconfig -arcserveDomain mydomain -username administrator -
password mypassword -carootpassword mycarootpassword
Echo %errorlevel%
Popd
```

このバッチ ファイルをコマンド コンソールから起動すると、このユーティリティからリターンコードを参照できます。リターンコードのリストおよび説明については、「[ARCserveCfg.exe - リターンコード](#)」を参照してください。

詳細情報:

[ARCserveCfg - リターンコード](#)

[ARCserveCfg.exe - 既知の問題](#)

ARCserveCfg - リターンコード

ARCserveCfg.exe コマンドは以下のコードを返します。

リ タ ー ン コ ー ド	説 明
0	再設定はエラーまたは警告なしで成功しました。
1	recfgsvr.dll をロードできません。DLL が Arcserve Backup インストールディレクトリ内に存在することを確認します。
2	必要なプロシージャアドレスをrecfgsvr.dll で特定できません。DLL が破損していないことを確認します。
3	Arcserve Backup マネージャが実行されている間、このユーティリティを起動できません。Arcserve Backup マネージャを閉じて、再度ユーティリティを起動します。
4	別のインスタンスがすでに実行されています。ユーティリティの1つのインスタンスのみが同時に実行できます。
11	-username オプションが指定されていません。このオプションは必須フィールドなので、提供する必要があります。
12	無効なパラメータがコマンドライン文字列に見つかりました。
15	現在の Windows ユーザにローカル管理者権限がありません。
16	Windows ユーザ名またはパスワードが無効です。
17	-username オプションに指定された Windows ユーザにローカル管理者権限がありません。
18	Windows ユーザパスワードは空にはできません。指定された Windows ユーザに対して安全なパスワードを設定します。
20	Arcserve Backup サーバのクラスタ対応インストールはサポートされていません。
21	現在のサーバがスタンドアロン/プライマリサーバではありません。このユーティリティは、スタンドアロン/プライマリサーバ上で実行される必要があります。
22	Arcserve Backup サーバデータベースとして SQL Server を使用することはサポートされていません。Arcserve Backup バックアップ サーバデータベースとしての使用がサポートされているのは SQL Express のみです。
30 45	別の DLL によってエクスポートされた関数を呼び出す際にエラーが発生しました。リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
61	Arcserve Backup レジストリキーの操作に失敗しました。リターンコードを記

～ 64	録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
69	ca_auth.exe を起動できませんでした。ca_auth.exe が Arcserve Backup インストールディレクトリ内に存在するかどうかを確認します。
70	提供された Windows ユーザに対して同等の権限を追加できませんでした。
71 ～ 74	新規ドメインに対して CAROOT パスワードを設定できませんでした。リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
75 ～ 77	データベース内のデータを更新できませんでした。リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
80	環境設定ファイルでドメイン名、プライマリサーバ名、またはその両方を更新できませんでした。リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
85 ～ 86	一時ファイルを操作できませんでした。リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
87	-carootpassword オプションに指定された CAROOT パスワードが無効です。
200	cstart.bat/cstop.bat を実行できませんでした。ファイルが Arcserve Backup インストールディレクトリ内に存在することを確認します。
-10	「ASDB 保護」および「データベース廃棄」以外のジョブがジョブキューに存在します。これらのジョブは、サーバ再設定の後に無効になる可能性があります。
-11 ～ 13	SQL データベースの確認中にエラーが発生しました。このエラーはクリティカルな問題ではありません。引き続き Arcserve Backup サーバを使用することができます。さらに詳しい情報については、リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
-14	少なくとも 1 つのメンバが現在の Arcserve Backup ドメインに関連付けられています。サーバの再設定の後に、このメンバサーバを手動で設定して現在のドメインに追加します。
-15	既存の「ASDB 保護」/「データベース廃棄」ジョブがジョブキュー内に見つかりません。サーバ管理を使用して、これらのジョブを手動で作成できます。
-16 ～ 17	以前のアクティビティ ログメッセージをクリアできませんでした。ca_log.exe が Arcserve Backup インストールディレクトリ内に存在するかどうかを確認します。このエラーはクリティカルな問題ではありません。引き続き Arcserve Backup サーバを使用することができます。さらに詳しい情報については、リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。
-46 ～ 57	別の DLL によってエクスポートされた関数を呼び出す際にエラーが発生しました。さらに詳しい情報については、リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。

-63	Arcserve Backup データベースの SQL Agent が検出されません。エージェントがインストールされ、正しく設定されていることを確認します。Arcserve Backup データベース SQL Agent なしでは、Arcserve Backup データベースを保護できません。
-76 ～ 77	メンバサーバの存在を確認中にエラーが発生しました。このエラーはクリティカルな問題ではありません。引き続き Arcserve Backup サーバを使用することができます。さらに詳しい情報については、リターンコードを記録し、ログファイルを収集して、サポートにお問い合わせください。

詳細情報:

[ARCserveCfg - トラブルシューティング](#)

[ARCserveCfg.exe - 既知の問題](#)

ARCserveCfg.exe - 既知の問題

以下は、ARCserveCfg.exe ユーティリティに関する既知の問題です。

1. イベントビューアに、Arcserve Backup からのエラーおよび警告が表示されます。新しいサーバ名で Windows を再設定し、管理者認証情報を変更し、サーバを再起動した後、イベントがログに記録されます。再起動中に、Arcserve Backup サービスは開始されますが、古いシステムアカウント認証情報は複製されません。そのためエラーがイベントビューアに報告されます。再起動後にログインし、ARCserveCfg.exe が呼び出されると、Arcserve Backup インストールは新しいサーバ名および管理者認証情報を使用するように修正されます。しかし、イベントビューアのエントリはそのままになります。
 2. Arcserve Backup システムアカウントを空のパスワードに設定できない場合があります。これは、管理ツールのローカルセキュリティポリシーのセキュリティオプションに制限があることが原因です。要件に基づいてポリシーを変更できます。
 3. Arcserve Backup は、Windows Administrators または Backup Operators グループに属するユーザに対してのみ設定およびサポートされています。
- 重要:**これらの権限は、サーバ再設定ユーティリティを呼び出すために必要です。
4. このユーティリティを実行した後、Arcserve Backup データベース保護ジョブ用の設定はデフォルトの設定にリセットされます。

例:

ARCserveCfg.exe を実行した後、デバイスが指定され、カスタムスケジュールが設定された場合、Arcserve Backup データベース保護ジョブに対して設定を手動で再設定する必要があります。

詳細情報:

[ARCserveCfg - トラブルシューティング](#)

[ARCserveCfg - リターンコード](#)

DumpDB ユーティリティ

DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードを Arcserve Backup データベースにインポートまたはデータベースからエクスポートするために使用します。DumpDB ユーティリティは、セッション パスワードのみをダンプし、セッションに関する他の情報はエクスポートしません。DumpDB ユーティリティを定期的に行うと、セッション パスワード情報をデータベースにインポートできます。

重要: データベースがパージまたは廃棄された後にこのユーティリティを実行した場合、セッション パスワードはエクスポートされません。そのため、このユーティリティはデータベースをパージまたは廃棄する前に実行してください。

構文

```
DumpDB.exe -ExportTo <filename> [-from startTime] [-to endTime] [-password <password>]
```

```
DumpDB.exe -ImportFrom <filename> [-password <password>]
```

```
DumpDB.exe -as [[-domain\]primary] -exportTo [filename] [-from startTime] [-to endTime] [-password <password>]]
```

```
DumpDB.exe -as [[-domain\]primary] -importFrom [filename] [-password <password>]]
```

-as

Arcserve Backup データベースにある、ローカル Arcserve Backup サーバによって使用されるドメインを一覧を表示して閉じます。

重要: DumpDB -as 引数を指定すると、ユーティリティを実行する Arcserve Backup サーバに関連付けられている Arcserve Backup データベースのみを分析できます。それ以外の Arcserve Backup データベースのデータは分析されません。

-as primary

プライマリサーバ名を指定した場合、DumpDB は Arcserve Backup データベースを検索して以下のとおり応答します。

- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名を検出しなかった場合、DumpDB は閉じます。
- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名のレコードを1つ検出した場合、DumpDB は実行を完了します。
- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名のレコードを複数検出した場合、DumpDB は警告を表示して閉じます。

注: この引数は -exportTo および -importFrom と一緒に使用する必要があります。

-as domain\primary

プライマリサーバ名とドメイン名を指定した場合、DumpDB は Arcserve Backup データベースを検索し、以下のとおり応答します。

- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名 およびドメイン名を検出しなかった場合、DumpDB は閉じます。
- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名 およびドメイン名のレコードを 1 つ検出した場合、DumpDB は実行を完了します。
- ◆ DumpDB が Arcserve Backup データベース内でサーバ名 およびドメイン名のレコードを複数検出した場合、DumpDB は警告を表示して閉じます。

注：この引数は -exportTo および -importFrom と一緒に使用する必要があります。

-ExportTo

データベースに格納されているセッションパスワードを指定されたターゲットファイルにエクスポートします。

-password

このスイッチを指定し、エクスポート中にパスワードを指定した場合、出力ファイルはこのパスワードによって暗号化されます。

-ImportFrom

指定されたファイルに保存されているセッションパスワードをデータベースにインポートします。

-password

エクスポート中にパスワードを指定した場合、インポート中にそのパスワードを入力する必要があります。そのようにしない場合、インポート処理は失敗します。

日時の形式

DumpDB ユーティリティの実行スケジュールを指定するための日時形式は、カレンダー期間または過去の日数として指定できます。

- カレンダーの日付を指定するには、以下の形式を使用します。

YYYYMMDD[hh[mm[ss]]]

注：年、月、および日が必要です。時間、分、および秒はオプションです。

- 過去の日数を指定するには、以下の形式を使用します。

nnnn (0 <= nnnn <= 9999)

注：日数のパラメータ範囲は、0 から 9999 です。

例；構文

以下に、DumpDB ユーティリティの構文の例を示します。

- 以下の例では、過去 100 日間のセッション パスワードをエクスポートします。
DumpDB.exe -exportto "c:\sesspwd.dump.out" -from 100
- 以下の例では、2008 年 1 月 1 日からのすべての日のセッション パスワードをエクスポートします。
DumpDB.exe -exportto "c:\sesspwd.dump.out" -from 20080101
- 以下の例では、セッション パスワードをデータベースにインポートします。
DumpDB.exe -importfrom "c:\sesspwd.dump.out"
注：Arcserve インポートされたセッション パスワードにアクセスできるのは、現在のドメインのみです。
- 以下の例では、Arcserve Backup データベースにある、ローカル Arcserve Backup サーバによって使用されるすべてのドメインを一覧を表示します。
DumpDB.exe -as
- 以下の例では、指定されたプライマリ用のセッション パスワードをエクスポートします。
DumpDB.exe -as primaryname -exportto "c:\sesspwd.dump.out"
- 以下の例では、指定されたプライマリのデータベースにセッション パスワードをインポートします。
DumpDB.exe -as primaryname -importfrom "c:\sesspwd.dump.out"
注：インポートされたセッション パスワードにアクセスできるのは、指定されたプライマリサーバに関係のある Arcserve Backup ドメインのみです。
- 以下の例では、セッション パスワードをドメイン「GREEN」のプライマリサーバ「APPLE」からエクスポートして、ドメイン「PURPLE」のプライマリサーバ「GRAPE」にインポートします。
DumpDB.exe -as green\apple -exportto "c:\sesspwd.green.out"
DumpDB.exe -as purple\grape -importfrom "c:\sesspwd.green.out"
- 以下の例では、セッション パスワードをドメイン「GREEN」のプライマリサーバ「APPLE」とドメイン「RED」のプライマリサーバ「GRAPE」からエクスポートし、ドメイン「PURPLE」のプライマリサーバ「PLUM」とドメイン「ORANGE」のプライマリサーバ「MANGO」にインポートします。ドメイン「GREEN」および「RED」は、[Arcserve ドメイン メンバシップを残しておく]オプションを使用して、ドメイン「PURPLE」および「ORANGE」で使用されている Arcserve データベースの上にリストアされた Arcserve データベースのドメインです。

```
DumpDB.exe -as green$\apple$ -exportto "c:\sesspwd.green.out"
```

```
DumpDB.exe -as red$\grape$ -exportto "c:\sesspwd2.red.out"
```

```
DumpDB.exe -as purple\plum -importfrom "c:\sesspwd.green.out"
```

```
DumpDB.exe -as orange\mango -importfrom "c:\sesspwd2.red.out"
```

IsSafe.bat ユーティリティ

IsSafe.bat ユーティリティは、アクティブな Arcserve Backup プロセスがないか OS をチェックし、システムが安全にシャットダウンできるかを判断します。

- ユーティリティが、Arcserve Backup プロセスがアクティブで、バックアップの段階にあることを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできないことが通知されます。

システムでは現在バックアップジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

- ユーティリティが、Arcserve Backup プロセスがアクティブで、それがマージの段階にあることを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできないことが通知されます。

システムでは現在マージジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

- ユーティリティが、アクティブな Arcserve Backup プロセスがないことを検出した場合、OS を安全にシャットダウンできることが通知されます。

ご使用のシステムを安全にシャットダウンできる状態になりました。

- ユーティリティが、現在使用されている OS が Windows XP SP2 よりも古いことを検出した場合、以下のメッセージを通知します。

IsSafe.bat では、ご使用のオペレーティングシステムバージョンはサポートされていません。

次のコードが IsSafe.bat ユーティリティから返されます。

リターンコード:

0: ご使用のシステムを安全にシャットダウンできる状態になりました。

1: システムでは現在バックアップジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

2: システムでは現在マージジョブが実行されています。安全にシャットダウンできる状態ではありません。

3: IsSafe.bat では、ご使用のオペレーティングシステムバージョンはサポートされていません。

Mergecat ユーティリティ

マージ カタログ ユーティリティ(Mergecat.exe) を使用して、Arcserve Backup\temp ディレクトリに残っているすべての .cat ファイルに対して手動でマージを行うことができます。

バックアップの際、データベース情報は .tmp ファイルに書き込まれます。バックアップセッションの最後には、.tmp が .cat ファイルに変更され、そのセッションの最後のファイルとしてテープに書き込まれます。さらに、バックアップの最後に mergecat.exe ユーティリティが起動し、すべての *.cat ファイルを、元のジョブが何であるかに関わらずデータベースにマージします。

Mergecat ユーティリティを実行すると、Arcserve Backup は Arcserve Backup\catalog.db ディレクトリからすべての .cat ファイルを取得し、データベースにマージします。

注： mergecat.exe ユーティリティは、テープから cat ファイルを手動でマージするために使用することはできません。代わりに、Arcserve Backup\catalog.db ディレクトリに残された .cat ファイルをマージするために使用します。

mergecat ユーティリティは、以下のディレクトリにあります。

C:\Program Files\CA\ARCserve Backup>mergecat.exe

使用法：

MERGECAT.EXE /F:00000000.CAT /D:[0/1]

/F:CATALOG.CAT - デフォルトではすべてのカタログをマージします

/D:1 - デフォルトではマージ後にカタログファイルを削除します

.cat ファイルが最初に書き込まれると、そのファイルの読み取り属性が無効になります。.cat ファイルが mergecat ユーティリティによって処理されると、デフォルトで読み取り専用属性が自動的に適用されます。読み取り専用属性が適用された .cat ファイルを SQL データベースにマージする必要がある場合は、以下のコマンドを実行します。

mergecat /F:"<fullpath>.cat" /R

これにより、読み取り専用属性が適用されている場合でもこのカタログファイルが SQL データベースにマージされます。

MergeOLF ユーティリティ

MergeOLF ユーティリティを使用すると、ライセンスを 1 つの Arcserve システムから別の Arcserve システムに移動できます。

このユーティリティでは、既存のライセンスが存在する Arcserve システムに新しいライセンスをインストールすることができます。複数のライセンス ファイルは 1 つのファイルにマージされます。このユーティリティは、ステータスに関するメッセージをコンソールに表示し、指定したファイルに出力を生成します。コマンドはコマンドラインから実行します。

構文:

```
MERGEOLF <new_olf> [-c <current_olf>] [-o <output_olf>] [-b <backup_olf>] [-d  
<debug_log>]
```

-n <new_olf>

マージする新しい OLF ファイルの名前を指定します。

-c <current_olf>

マージする現在の OLF ファイルの名前とパスを指定します。

デフォルト: ca.olf

-o <output_olf>

作成する新しい OLF ファイルの名前とパスを指定します。

デフォルト: ca.olf

-b <backup_olf>

現在の OLF ファイルのバックアップの名前とパスを指定します。

デフォルト: ca.old

-d <debug_log>

デバッグを有効にし、情報を mergeolf.log ファイルに記録します。

例: 新しいライセンスを古いライセンス ファイルにマージ

以下の例では、ca.nol に名前が変更された新しい olf ファイルを既存の ca.olf ファイルにマージします。

```
MERGEOLF -n ca.nol -c c:\program files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.olf -o  
c:\program files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.olf -b c:\program  
files\ca\SharedComponents\ca_lic\ca.old
```

第25章: 用語集

このセクションには、以下のトピックが含まれます。

山型かっこ	416
引数	417
省略記号	418
斜体	419
オプション	420
パイプ	421
角かっこ	422

山型カッコ

山型カッコ(< >) は、それで囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報) が入力必須であることを示します。

引数

コマンドへの入力値としてコマンドに提供される、ファイル名または他のデータのことです。引数は、コマンドへの命令および結果の送信先を指示する情報の集まりです。

省略記号

3つのピリオド(...) の省略記号は、「～など」という意味で、先行するエレメント(パラメータ、値、または情報) がコマンドライン内で数回繰り返されることを示します。

斜体

斜体のテキストは、適切な値を入力する必要がある情報を示します。これは、値によって置き換えられるオプションまたはパラメータです。

オプション

コマンドの動作を変更する性質を持つ引数のことです。コマンドの動作を、既定の方法で変更する、1文字または単語のことです。

パイプ

パイプ記号(垂直の線) は、「または」を意味し、エレメント内の選択を示します。

角かっこ

角かっこ(`[]`) は、囲まれたエレメント(パラメータ、値、または情報) がオプションであることを示します。